

文京遺跡第10次調査

—文京遺跡における弥生時代遺跡の調査—



1991

愛媛大学埋蔵文化財調査室



1 出土青銅鏡



2 円形周溝状造構 S×14 (東から)

文京遺跡第10次調査

——文京遺跡における弥生時代遺跡の調査——

1991

愛媛大学埋蔵文化財調査室

序

文京遺跡第10次調査は、工学部情報工学科棟建設に伴う、事前調査としておこなわれた。その位置は、愛媛大学城北キャンパスの西南で、東隣は工学部資源化学科棟になっている。東隣のこの棟は、かつて松山市教育委員会によって調査され、多数の弥生時代中期の堅穴式住居、掘立柱建物を検出した。

今次の調査成果は多々あるが、その1つは弥生中期末～後期前半の土器編年の大綱が作製できたことにある。これまで愛媛県中予地域は、ことに後期初頭～後期前半の良好な土器一括資料を欠いており、SK15・11、SX14出土の土器はその欠を補い、当地方のこの期の土器編年の指標となるであろう。

第2に道後城北キャンパス南部集落群の西限を押さえることができたことがある。道後に発し、西にのびる旧右手川扇状地上にのる文京遺跡は、法文学部・工学部資源化学科付近で、濃厚な住居址群の密集をみせるが、本次調査はそれに西続した位置にある。しかし、今次出土の住居址は減少傾向にあり、構内南部集落群の西限の観を示している。そして、それに代って円形周溝をもつ祭祀関連と考えられる円形特殊遺構が出土している。

このようにして、構内南部地区の集落実体が、序々に明らかになりつつある。これが完成にいたるには、従来成果の十二分な知悉の上でのマクロの視野と局地調査のミクロな分野を合わせてもち、今後も懈怠なく研究邁進することが必要であろう。

開発に基づく発掘であり十二分に学術的ではないにしろ、たとえそうであったにしても破壊は破壊であるから、発掘成果の質を高め、それを広く刊行、還元することによって、遺跡に対しても地域住民や国民に対しても、はじめていささかの責を任じたことになるであろう。

1991年1月

愛媛大学埋蔵文化財調査室長

下條信行

例　　言

- 1 本報告書は、愛媛大学埋蔵文化財調査室が昭和63年度に実施した松山市文京町愛媛大学工学部情報工学科校舎新営予定地の文京遺跡第10次調査の発掘報告書であり、愛媛大学埋蔵文化財調査報告Ⅲにあたる。
- 2 城北キャンパスは、国土座標第4座標系（X = 93,000、Y = -66,000）が（X = 0、Y = 0）となるように構内座標を設定した。
- 3 遺構の略号は、奈良国立文化財研究所の方式にしたがって、井戸：S E、上坑：S Kのように表示し通し番号を1から付した。
- 4 遺物には、土器と石器そのほかをわけて通し番号を1から付した。
この遺物番号は、本文、実測図、写真を通して表示を統一した。
- 5 原則として、遺物の実測図は縮尺1/4、遺物の写真は約1/4に統一した。他の縮尺のものは、それぞれに縮尺を明記した。
- 6 注は各章ごとにまとめて章末に記載した。
- 7 遺構・遺物の実測と製図は、宮本一夫、宮崎直栄、倉員伸明、住本 一、後藤智博、越智真由美、山田由美子、山本昌弘、西岡早苗、檜垣芳江がおこなった。遺物の撮影は宮本一夫が担当した。
- 8 本文は宮本一夫と倉員伸明（現、県市市役所）が執筆し、附編は清水欣吾（株式会社日立金属安来工場冶金研究所長）と刈谷道郎（株式会社ニコン）が分担執筆した。執筆者名は日次に記した。また、原稿の浄書は佐伯美幸がおこなった。
- 9 編集は、下條信行の指導のもとに、宮本一夫がおこなった。

目 次

第1章 調査概要	宮本一夫	1
1 調査の経過と組織		1
2 遺跡の立地と歴史的環境		3
第2章 層位	宮本一夫	7
第3章 遺構と遺物	宮本一夫	11
1 古墳時代～中世		11
2 弥生時代		14
(1) 遺構の概観		14
(2) 円形竪穴式住居址		18
(3) 方形竪穴住居址		28
(4) 捜立柱建物跡		31
(5) 土坑		36
(6) 円形周溝状遺構		47
(7) 溝		57
(8) 柱穴		65
(9) 遺物集中地点		69
(10) 暗茶褐色土出土遺物		95
第4章 文京遺跡出土弥生土器の編年	宮本一夫	126
1 はじめに		126
2 一括遺物の検討		126
3 時期区分と他地域との関係		135
4 地域的展開の様態		139
5 まとめ		142

第5章	道後平野の石包丁の展開	倉員伸明	144
1	はじめに		144
2	形態分類		144
3	道後平野での分類		147
4	まとめ		151
第6章	文京遺跡の集落立地について	宮本一夫	155
1	はじめに		155
2	第10次調査の造構の変遷		155
3	文京遺跡における集落の変遷		158
4	まとめ		164
第7章	文京遺跡第10次調査の成果と意義	宮本一夫	168
附編	自然科学的分析		
1	文京遺跡第10次調査出土板状鉄製品	清水欣吾	171
2	文京遺跡第10次調査出土ガラス塊	莉谷道郎	175
英文抄訳			177

図版目次

卷首図版 1 出土青銅鏡	3 堪穴住居 S B 1 遺物出土状況 (西から)
2 円形周溝状遺構 S X14 (東から)	図版10 1 堪穴住居 S B 1 (西から) 2 堪穴住居 S B 1 (北から)
図版 1 1 調査位置遠景 (北東から)	図版11 1 堪穴住居 S B 3 遺物出土状況 (東から)
2 調査前の風景 (東から)	2 堪穴住居 S B 3 (東から)
図版 2 1 調査区南壁の層位 (北から)	図版12 1 堪穴住居 S B 2 遺物出土状況 (西から)
2 調査区北壁の層位 (南東から)	2 堪穴住居 S B 2 (西から)
図版 3 1 表土掘削後全景 (南から)	図版13 1 堪穴住居 S B 4 (東から) 2 掘立柱建物跡 S B 5 (北西から)
2 暗茶褐色土上面の遺構 (東から)	図版14 1 掘立柱建物跡 S B 6 , S P107 遺物出土状況 (東から) 2 掘立柱建物跡 S B 6 , S P114 遺物出土状況 (東から)
図版 4 1 溝 S D 1 (西から)	図版15 1 掘立柱建物跡 S B 6 (南から) 2 柱穴 S P117 (西から)
2 溝 S D 2 , 3 (西から)	図版16 1 柱穴 S P101 遺物出土状況 (北から)
3 掘立柱建物跡 S B 7 (西から)	2 溝 S D 7 (南から) 3 溝 S D 7 (東から)
図版 5 1 遺物集中地点 S X 1 (北から)	図版17 1 溝 S D 4 (東から) 2 溝 S D 4 (北から)
2 遺物集中地点 S X 2 (西から)	図版18 1 土坑 S K15 遺物出土状況 (南から)
3 遺物集中地点 S X 3 (東から)	2 土坑 S K15 断面 (西から)
図版 6 1 遺物集中地点 S X 3 ~ S X 5 (北西から)	
2 遺物集中地点 S X11 (北から)	
図版 7 1 遺物集中地点 S X12 (北から)	
2 遺物集中地点 S X13 (東から)	
図版 8 1 破鏡出土状況 (東から)	
2 管玉出土状況 (東から)	
3 土錐出土状況 (東から)	
4 上偶状土製品出土状況 (東から)	
図版 9 1 板状鉄製品出土状況 (西から)	
2 鉄鎌出土状況 (北から)	

図版19	1 土坑SK15（南から） 2 土坑SK4検出状況 （南東から）	図版29	S K 4 出土遺物（弥生土器） S K 6 出土遺物（石包丁） S K13出土遺物（砥石）
図版20	1 土坑SK11検出状況（南から） 2 土坑SK11遺物出土状況 （南から）	図版30	S D 7 出土遺物（弥生土器） S D13出土遺物（砥石、剝片） S K15・SK11出土遺物
図版21	1 土坑SK11（南から） 2 円形周溝状遺構SX14 検出状況（東から）	図版31	S X14出土遺物（弥生土器） S X14出土遺物（弥生土器）
図版22	1 円形周溝状遺構SX14南東部 （南東から） 2 円形周溝状遺構SX14 遺物出土状況（西から）	図版32	S X14出土遺物 （弥生土器、石包丁） S X14出土遺物（剝片、 土製紡錘車、砥石、鉄製品）
図版23	1 円形周溝状遺構SX14 遺物出土状況（北から） 2 円形周溝状遺構SX14 遺物出土状況（東から）	図版33	S P107出土遺物（弥生土器） S P101出土遺物（弥生土器） S P117出土遺物 （不明石製品）
図版24	1 円形周溝状遺構SX14北西部 （東から） 2 円形周溝状遺構SX14断面 （東から）	図版34	S P174出土遺物（鉄製品） S D 4 出土遺物（鉄製品） S X 1 出土遺物（弥生土器） S X 3 出土遺物（弥生土器）
図版25	1 円形周溝状遺構SX14 （東から） 2 弥生時代の遺構（西から）	図版35	S X 3 出土遺物（弥生土器） S X 3・SX8・SX11 出土遺物（弥生土器）
図版26	弥生時代の遺構（東から）	図版36	
図版27	S B 1 出土遺物 (柱状片刃石斧、石製紡錘車、 砥石、打製石器、鉄製品)	図版37	
図版28	S B 3 出土遺物（弥生土器、 剝片、砥石、鉄製品）	図版38	1 暗茶褐色土出土縄文土器 2 暗茶褐色土出土縄文土器内面 暗茶褐色土出土土製品 (土偶状土製品、土鍾、 土製紡錘車、舟形土製品) 暗茶褐色土出土金属器

	(破鏡、板状鉄製品、鉄鎌)	
	暗茶褐色土出土管玉	暗茶褐色土出土剥片
図版40	暗茶褐色土出土石包丁	2 暗茶褐色土出土石鎌
図版41	暗茶褐色土出土石包丁	暗茶褐色土出土石製紡錘車
	暗茶褐色土出土石斧	暗茶褐色土出土不明石器
図版42	暗茶褐色土出土石斧	暗茶褐色土出土石匙
	暗茶褐色土出土砥石	暗茶褐色土出土石槍
図版43	暗茶褐色土出土砥石	暗茶褐色土出土不定形な石器
	暗茶褐色土出土ガラス塊	暗茶褐色土出土剥片 裏面
図版44 1	暗茶褐色土出土石鎌	3 板状鉄製品の外概
	暗茶褐色土出土石製紡錘車	金属質部分
	暗茶褐色土出土不明石器	2 金属質部分の光学顕微鏡組織
	暗茶褐色土出土石匙	3 資料断面の光学顕微鏡組織
	暗茶褐色土出土石槍	4 金属部分の走査電子
	暗茶褐色土出土不定形な石器	顕微鏡組織

挿 図 目 次

図1 爰媛大学城北キャンパスの 地区割と調査地点	1	図27 S K 6 出土遺物	37
図2 文京遺跡周辺の主要遺跡分布図	3	図28 S K13出土遺物	38
図3 松山平野の主な弥生遺跡	4	図29 土坑 S K15	39
図4 調査区の地区割	7	図30 S K15出土遺物	40
図5 東西畦南壁の層位	8	図31 S K15出土遺物	41
図6 南北畦東壁の層位	8・9	図32 土坑 S K11	43
図7 調査区西壁の層位	10	図33 S K11出土遺物	44
図8 古墳時代～中世の遺構	11	図34 S K11出土遺物	45
図9 S B7・S B8・S P42・S K1・ SK2・SK3・SD1出土遺物	12	図35 円形周溝状遺構 S X14	47
図10 赤褐色土出土遺物	13	図36 S X14出土遺物	48
図11 弥生時代の遺構	15	図37 S X14出土遺物	49
図12 円形堅穴住居 S B 1	19	図38 S X14出土遺物	50
図13 S B 1出土遺物	21	図39 S X14出土遺物	51
図14 S B 1出土遺物	22	図40 S X14出土遺物	52
図15 円形堅穴住居 S B 3	24	図41 S X14出土遺物	53
図16 S B 3出土遺物	25	図42 S X14出土遺物	54
図17 S B 3出土遺物	26	図43 S X14出土遺物	55
図18 S B 3出土遺物	27	図44 溝 S D 7	58
図19 方形堅穴住居 S B 2	28	図45 S D 7出土遺物	59
図20 S B 2出土遺物	29	図46 溝 S D 8・溝 S D13出土遺物	61
図21 方形堅穴住居 S B 4	30	図47 溝 S D 5・溝 S D 6出土遺物	62
図22 掘立柱建物跡 S B 5	32	図48 溝 S D 6の層位	63
図23 掘立柱建物跡 S B 6	33	図49 溝 S D 4出土遺物	64
図24 S P107・S P114出土遺物	34	図50 弥生時代の柱穴	66
図25 S P164・S P163出土遺物	35	図51 S P104・S P106・S P181・ S P168出土遺物	67
図26 土坑 S K 4・SK 4出土遺物	36	図52 S P117・S P161・S P179・ S P129・S P109・S P101・	

S P135出土遺物	68	図81 暗茶褐色土出土弥生土器	98
図53 S P117・S P174出土遺物	69	図82 暗茶褐色土出土弥生土器	99
図54 遺物集中地点S X 1～S X 5・ S X 7～S X12	71	図83 暗茶褐色土出土弥生土器	100
図55 暗茶褐色土上層の遺物集中地点	72	図84 暗茶褐色土出土弥生土器	102
図56 暗茶褐色土中層の遺物集中地点	72	図85 暗茶褐色土出土弥生土器	103
図57 暗茶褐色土下層の遺物集中地点	73	図86 暗茶褐色土出土弥生土器	104
図58 S X 1出土遺物	75	図87 暗茶褐色土出土土製品	105
図59 S X 1出土遺物	76	図88 繩文土器	107
図60 S X 1出土遺物	77	図89 暗茶褐色土出土石包丁	110
図61 S X 1出土遺物	78	図90 暗茶褐色土出土石包丁	111
図62 S X 1出土遺物	79	図91 暗茶褐色土出土石包丁	112
図63 S X 1出土遺物	80	図92 暗茶褐色土出土石包丁未製品	113
図64 S X 3出土遺物	82	図93 暗茶褐色土出土磨製石斧	115
図65 S X 3出土遺物	83	図94 暗茶褐色土出土石鎌	116
図66 S X 3出土遺物	84	図95 暗茶褐色土出土石鎌	117
図67 S X 3出土遺物	85	図96 打製石鎌の法量	118
図68 S X 3出土遺物	86	図97 暗茶褐色土出土砥石	119
図69 S X 3出土遺物	87	図98 暗茶褐色土出土石製品	120
図70 S X 3出土遺物	88	図99 暗茶褐色土出土不定形な 石器・剝片	121
図71 S X 4出土遺物	89	図100 暗茶褐色土出土破鏡・管玉	122
図72 S X 5出土遺物	89	図101 暗茶褐色土出土鉄器	122
図73 S X 7出土遺物	90	図102 S B 3・S B 6土器組成	127
図74 S X 8・S X 9・S X10出土遺物	91	図103 S X 1・S X 3土器組成	129
図75 S X11出土遺物	92	図104 S K15・S K11土器組成	131
図76 S X11出土遺物	93	図105 S X14土器組成	133
図77 S X11出土遺物	94	図106 S D 6・S X11土器組成	134
図78 S X12出土遺物	96	図107 文京遺跡弥生土器変遷図	136
図79 S X12出土遺物	97	図108 土器組成比変遷図	141
図80 特殊遺物出土地点	97	図109 石包丁の名部名称	145

図110 道後平野のA形態の石包丁	146	図117 第10次調査地の遺構の変遷	156
図111 道後平野のB形態の石包丁	147	図118 第1・2・10次調査の 遺構の配置	159
図112 道後平野のC形態の石包丁	148	図119 第1・2・10次調査地の 遺構の変遷	162
図113 道後平野のD形態の石包丁	149	図120 第1・2・3・5・6・7・ 10・11次調査地の遺構の配置	165
図114 道後平野の形態組成比率	150	図121 資料の分析方法	171
図115 道後平野の法量図	151		
図116 道後平野における 石包丁編年図	153		

表 目 次

表1 主要弥生遺跡一覧表	5
表2 暗茶褐色土出土土器一覧表	108
表3 土製品出土一覧表	108
表4 出土石器一覧表	123
表5 出土金属器一覧表	125
表6 土器組成比	140
表7 道後平野の各遺跡の石包丁出土数	152
表8 試料の科学組成	172
表9 金属→黒鏽→赤鏽に従う各元素の含有量変化の挙動	173
表10 祝谷遺跡鉄斧と本資料の科学組成の比較	174

第1章 調査概要

1 調査の経過と組織

文京遺跡第10次調査地は、愛媛大学城北キャンパスの南西隅部分、工学部資源化学教棟西側、工学部5階教棟北側に位置する（図1）。昭和63年度（1988年度）、ここに工学部情報工学科校舎の新設が予定されたため、新設予定地の発掘調査を実施することになった。第10次調査地の西隣である資源工学科教棟は、第2次調査地にあたる。ここからは、弥生時代中・後期の円形住居址（直径4～6m）2棟、隅丸方形住居址3棟、方形竪穴状遺構（約1.7×2.3m）、堀立柱建物跡約10棟、土坑などが発見されている。一方、第10次調査地に

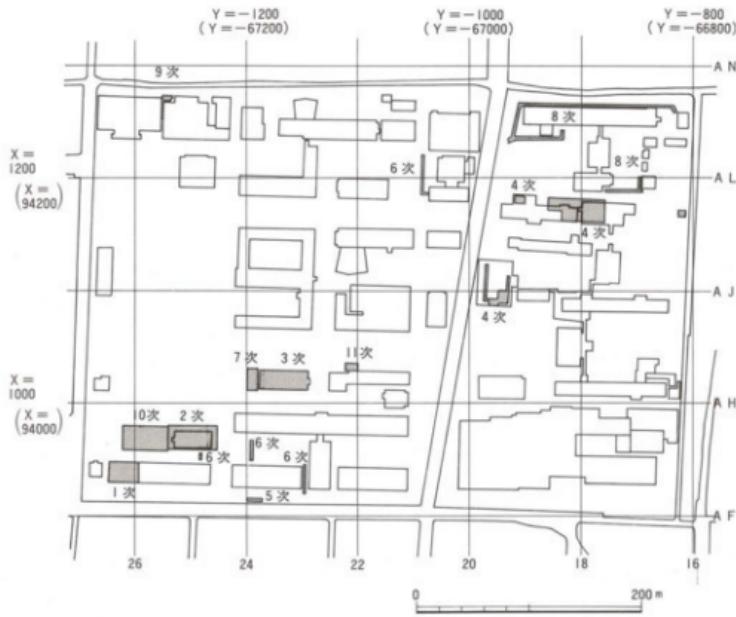


図1 愛媛大学城北キャンパスの地区割と調査地点 比例尺1/5000

調査概要

南接する工学部5階教棟部分は、第1次調査地にあたる。第1次調査では、弥生時代中・後期の円形住居址（直径4.5～8m）3棟、橢円形住居址2棟、隅丸方形住居址3棟、形状不明住居址2棟が検出された。このように、第10次調査地周辺では、弥生時代中期から後期にかけての集落跡が発見されており、当該調査地もその集落の広がりを明らかにするとともに、弥生集落の実態解明に寄与するものと期待された。発掘調査にあたって組織した調査委員会および調査班の構成は以下の通りである。なお、職名は当時のものを用い、敬称と愛媛大学関係者の大学名を省略した。

文京遺跡第10次発掘調査組織

調査地点	松山市文京町3番 愛媛大学工学部情報工学科新館予定地
発掘期間	昭和63（1988）年9月19日～平成元（1989）年3月3日
発掘面積	約1,075m ²
発掘主体	愛媛大学埋蔵文化財調査室
調査室長	下條信行（法文学部教授）
調査委員	浅田泰次（学長）、美山 靖（法文学部長）、下條信行（法文学部教授）、河濱計明（教育学部長）、石川勝二（教育学部教授）、仙波 敏（理学部長）、福西 亮（医学部長）、二神浩三（工学部長）、佐藤光一（農学部長）、森田勝美（教養部長）、松原弘宣（教養部助教授）、一宮正明（事務局長）、藤本誠造（庶務部長）、大久保輝男（経理部長）、湯本 巍（施設部長）
調査員	宮本一夫（法文学部助教授）
専門員	平井幸弘（教育学部助教授）、松原弘宣（教養部助教授）
調査補助員	宮崎直栄（施設部事務補佐員）、倉員伸明・住本 一・後藤智博・越智真由美・山田由美子・山本昌弘・西岡早苗（以上法文学部学生）、ヴェルナー・シェタインハウス（フライブルグ大学）
作業員	13名

なお遺物の整理作業には以下の人々があたった。宮本一夫、宮崎直栄、佐伯美幸、金子勝美、加藤鶴代、松原柱子、西岡早苗、檜垣芳江。その他、東京国立文化財研究所三浦定俊、株式会社ニコン苅谷道郎、株式会社日立金属安来工場冶金研究所清水欣吾、松山市立埋蔵文化財センターの諸機関・諸氏から御協力を賜った。また石材の鑑定にあたっては、愛媛大学教養部鹿島愛彦教授に御教示頂いた。

遺跡の立地と歴史的環境

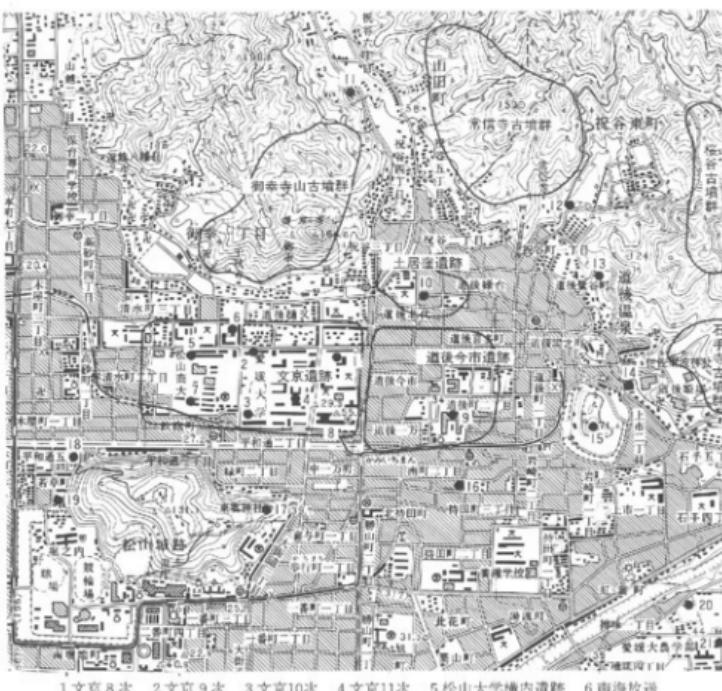


図2 文京遺跡周辺の主要遺跡分布図 縮尺1/25000

2 遺跡の立地と歴史的環境

文京遺跡周辺の歴史的環境については、すでに『文京遺跡第8・9・11次調査－文京遺跡における縄文時代遺跡の調査－』(愛媛大学埋蔵文化財調査報告Ⅱ)の第1章で詳述している。⁽¹⁾ここでは、狭義の「文京遺跡」を含めた広義の「道後城北遺跡」について、道後平野内での位置づけを簡単におこなってみたい。なお、道後城北遺跡群の主要な弥生遺跡は、図2にみられるように、文京遺跡、松山大学構内遺跡、道後今市遺跡、土居窪遺跡、祝谷六丁場遺跡、道後鷺谷遺跡、道後姫塚遺跡、持田遺跡、東雲遺跡、若草町遺跡、カキ

調査概要

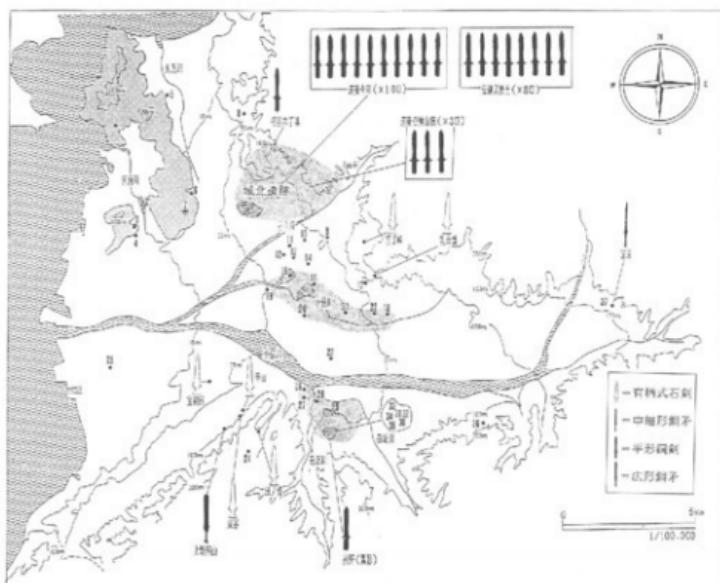


図3 松山平野の主な弥生遺跡

ツバタ遺跡などがあげられる。

道後城北遺跡を除いた道後平野内の主要な弥生遺跡は、図3と表1に示される。これは、古代学協会四国支部が1988年に催したシンポジウム『松山道後城北遺跡をめぐって』⁽²⁾で、柴田昌児氏が発表した「松山平野と弥生遺跡」内で使用したものである。柴田氏は、道後平野の弥生遺跡を7つの遺跡群に分けて説明した。道後城北遺跡を除く6つの遺跡群は以下の通りである。宮前川流域の太山寺南西群(図3-1~4)、堀江地溝帯に位置する太山寺南東群(同5~8)、小野川水系群(同15~18・20~22)、砥部・御坂川水系群(同26~35)、松山平野南西部群(同24・25)、重信川東岸群(同36~37)。これらのうち、今のところ比較的の遺跡が集中し拠点的な集落が営まれていた可能性があるものは、道後城北遺跡群、小野川水系群、砥部・御坂川水系群の3つの遺跡群があたろう。これらは表2の遺跡存続時期でも示されるように、遺跡群内ではほぼ弥生前期から後期まで遺跡が存続して

遺跡の立地と歴史的環境

No.	遺跡名	晩期		前期		中期		後期		圏内	備考
		災害文版	I	II	III	IV	V	VI	VII		
1	鷺が峰										
2	宮廣川										
3	斎院鳥山									集落	
4	鳥越									集落	
5	大洞									打製石包丁 彩文土器など	
6	朝美町1～2丁目									木製品	
7	大峰ヶ台									高地性集落	
8	吉摩ワドン温泉										
9	桑原高井									集落	
10	東本									集落	
11	小坂釜ノ口(1～5次)									集落	
12	中村									集落	
13	柘南中学校									集落	
14	松木末塚									集落	
15	天山天主・森									集落	
16	北久米									集落	
17	五郎兵衛谷									集落	
18	平井I・II・IV									集落	
19	西石井荒神堂									集落	
20	石井東小学校									集落	
21	来住									環濠 集落 墓	
22	久米窪田(II～IV)									集落	
23	浮穴小学校									墓	
24	行進山									高地性集落	
25	西小泉										
26	怡町II									集落	
27	水満田									墓	
28	高尾田									集落	
29	土壇原									集落 墓	
30	西野I									集落	
31	西野II									集落	
32	西野III									集落 墓	
33	佐庭面山									高地性集落 万形岡溝塁	
34	佐庭面山南									墓	
35	谷田II・IV									集落 墓	
36	茅根山									高地性集落	
37	宝泉									中細形銅矛(1口)	

表 I 主要弥生遺跡一覧表

いる。すなわち、道後平野内では少なくとも3つの拠点集落が同時期に営まれていた可能性があろう。その中でも、保有する平形銅刀の量、あるいは近年発見された道後城北遺跡内の若草町遺跡の日光鏡、文京遺跡第10次調査の舶載鏡の破鏡から考えれば、道後城北遺

調査概要

跡がこれら弥生時代の村々の盟首的な存在であったことは、容易に予想できよう。このことはまた、続く古墳時代の本地域を考える上でも重要である。すなわち近年発見された初現期形態の朝日谷古墳は、城北地域の大峰台に位置しており、道後城北遺跡の盟首的なあり方が、そのまま古墳時代においても、城北地域に存続していることを物語っている。従って、当該地域の初現期の古墳は、弥生時代の盟首層を発展させ、より強固な権力が発生した結果であるともいえよう。

以上のように、道後城北遺跡は道後平野内の拠点集落の中でも重要な存在である可能性が理解された。そのうち、とりわけ文京遺跡では密集した弥生集落の存在が明らかにされている。この弥生集落の変遷、あるいは集落内の構造が理解されれば、本地域ひいては瀬戸内西部の弥生時代の社会構造の一端を垣間見ることにもつながろう。ここに、副題を「文京遺跡における弥生時代遺跡の調査」とした所以がある。

[注]

- 1 愛媛大学法文学部考古学研究室・愛媛大学埋蔵文化財調査室『文京遺跡第8・9・11次調査－文京遺跡における攝文時代遺跡の調査－』（愛媛大学埋蔵文化財調査報告Ⅱ）1990年
- 2 古代学協会四国支部『松山道後城北の弥生遺跡をめぐって』（シンポジウム資料）1988年

第2章 層位

調査区の地区割は、国土座標第4座標系、(X=93,000, Y=-66,000) が (X=0, Y=0) となるように設定した構内座標に従った。本調査区は城北キャンパスの地区割でいう AG25・AG26区に位置している。調査区内の10m四方のグリッドは AG25区と AG26区の100m四方を西から東へ10m間隔で a, b, c ~ j とし、南から北へ10m間隔で 0, 1, 2, 3 ~ 9 とした記号で表記される。本調査区の場合は、図4に示すようなグリッド記号がつけられている。また構内座標 X=970 と Y=-1,290 の軸線上に、幅50cmの畦を設定した。これを、それぞれ東西畦、南北畦と呼称する。

なお、調査開始直後、施設部から載荷試験の申し出があり、その部分の試掘調査の依頼があった。再三にわたる協議で、その申し出の必要性の疑問や、調査上の不利益を主張したにもかかわらず、試掘調査を余儀なくされた。そのため、調査行程上最も被害の少ない調査区南東部分の c 6 区に 2×2 m の調査区を設けることを決定した（図4）。しかしながら、不幸にも、その地点が住居址 S B 1 の北西部にかかっており、住居址 S B 1 檜出

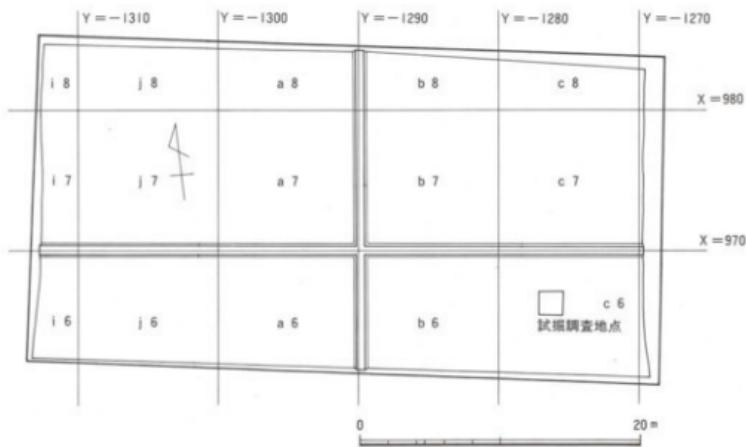


図4 調査区の地区割 縮尺 1/400

層位

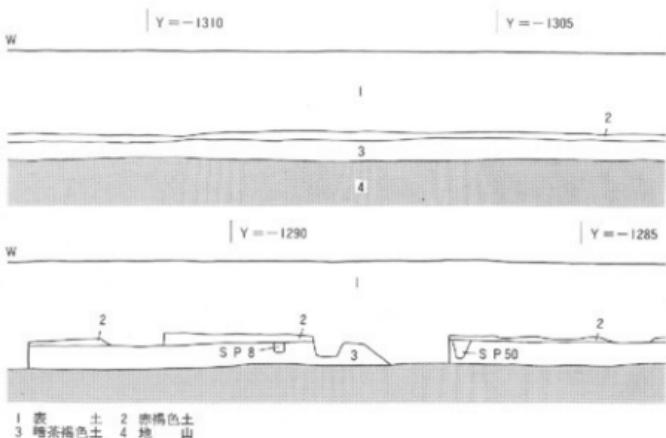


図5 東西壁南壁の層位 縮尺1/80

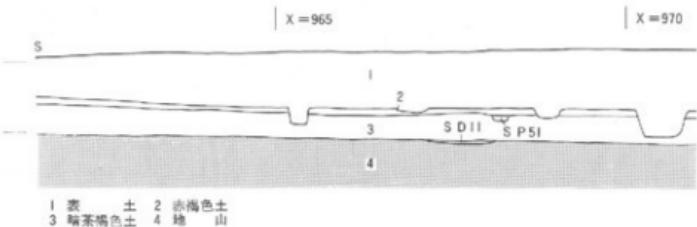


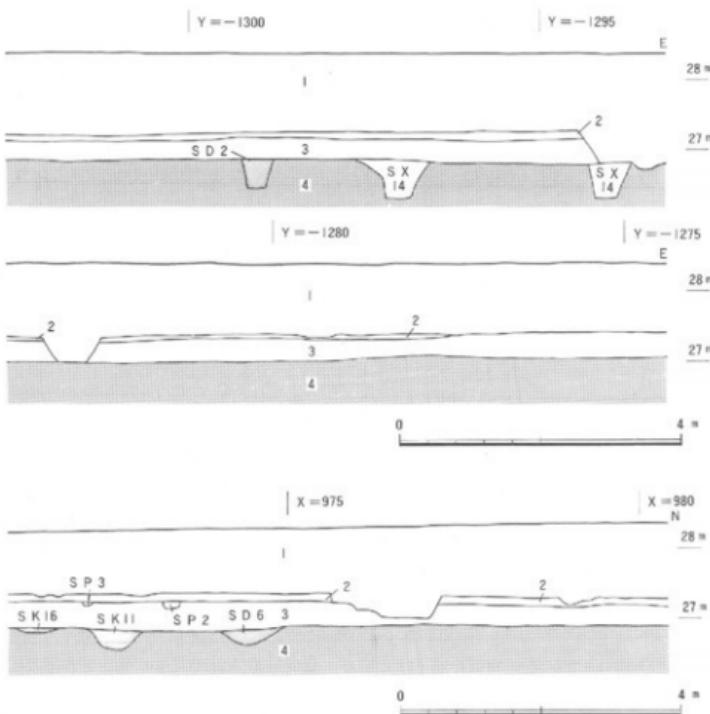
図6 南北壁東壁の層位 縮尺1/80

時に、多大な不利益を被った。遺跡破壊を前提とした緊急調査ではあるが、建設主体の計画的な建築計画の実施があれば、このような事態は回避できたものと思われる。今後の事前協議における課題を残した。

本調査区は、図5に示されるように東から西へ緩傾斜している。また、図6・7に示されるように南から北へ緩傾斜している。従って、調査の南東部から北西部にかけて緩傾斜を示す舌状台地の傾斜面にあたっている。これに関しては、『文京遺跡第8・9・11次調査』の図69にみられる城北キャンパスの現地形から、明瞭に理解されよう。

基本層序は(図版2)、表土から下面に向かって以下の順で堆積している。表土、赤褐色土、暗茶褐色土、地山の順である。赤褐色土は、弥生土器以外では、古墳時代から

層位



中世の遺物を含んでおり、中世の堆積層と考えられる。この赤褐色土下面すなわち暗茶褐色上の上面で、古代から中世の遺構が検出された。図5のSP 8・50、図6のSP 2・3・51がこれにあたる。一方、暗茶褐色土は、弥生中期末から後期前半にかけての遺物を含む弥生時代の包含層である。包含する弥生土器は、グリット単位で多少主体とする時期に変異がみられる。これに関しては次章で詳述する。また、暗茶褐色土は厚さ50~60cmに達するものの、分層は不可能であったことから、上面から下面に向かってほぼ15~20cm単位で人工的に3層に区分し、上・中・下層で遺物をとりあげた。さらに弥生時代の遺構は、暗茶褐色土下層の下面すなわち地山直上で検出された。図5のSX14、SD 2、図6のSK

層位

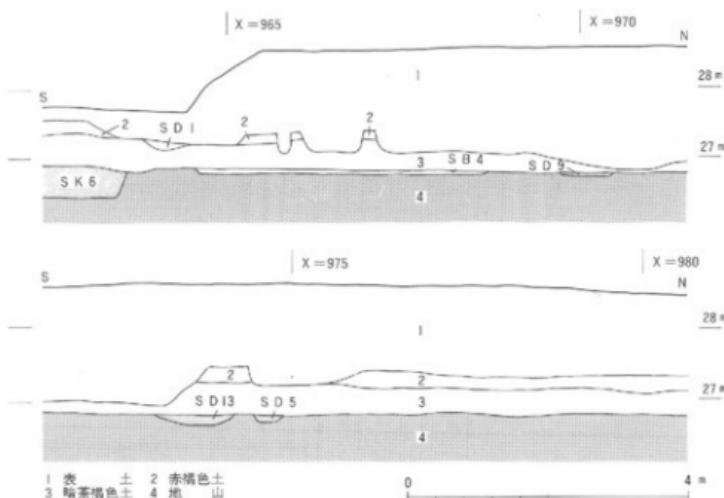


図7 調査区西壁の層位 縮尺 1/80

11・16, SD 6・11, 図7のSK 6, SB 4, SD 5・9・13が、この状況をよく示している。なお、ここで地山としたものは黄褐色粘質土にあたっている。ただし文京遺跡第8・9・11次調査のように厚い堆積を示さず、C 6・C 7・C 8区ではすぐ灰色砂礫層が検出されている。また、黄褐色粘質土の厚さも一定しておらず、灰色砂礫層が波打って堆積している凹部に僅かに堆積したものと判断される。従って、本調査区以東で厚く黄褐色粘質土が堆積しているのとは異なり、本調査区付近は安定的に黄褐色粘質土が堆積していないと推測される。このことは、C 6・C 7区の地山直上で発見された2・3点の縄文土器が、かなり摩滅を受けていることからも、縄文後・晩期にはこの地点が不安定な地形環境を有していたものと考えられる。その後、弥生時代中期以降の地形の安定化にともない、本調査区が居住地域として利用されたものと推測される。

〔注〕

- 1 宮本一夫「文京遺跡の地形復元」『文京遺跡第8・9・11次調査—文京遺跡における縄文時代遺跡の調査—』（愛媛大学埋蔵文化財調査報告Ⅱ）1990年

第3章 遺構と遺物

1 古墳時代～中世

暗茶褐色土上面で検出した遺構は、掘立柱建物跡 S B 7・S B 8、柵 S A 1、土坑 S K 1・SK 2・SK 3、ピット S P 42、溝 SD 1・2・3 である。このうち SD 1～3 は古代の溝と考えられるが、それ以外の遺構は中世のものである。

中世の遺構 挖立柱建物跡 S B 7 は C 6 区に位置する。2間×2間の建物であるが、南壁と北壁の柱間は一定していない。建物北西隅には小区画の独立した部屋があったと判断している。⁽¹⁾ 出土遺物は図 9-1 の土器類である。当該地域の中世土器の編年からいえば、13～14世紀代に属するものと考えられる。S B 8 は、1間×4間の建物である。西壁の柱穴群には、一度の作り替えがあったことが認められる。柱穴出土遺物は図 9-2～4 であり、S B 7 より年代的に新しく14世紀後半～15世紀代に属するものであろう。S B 8 に隣接する柵列 S A 1 は、柱穴内に遺物を含めず、年代が不

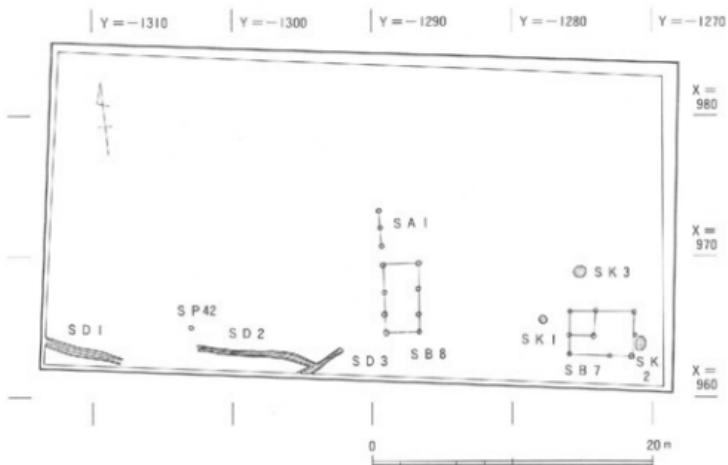


図 8 古墳時代～中世の遺構 縮尺 1/400

遺構と遺物

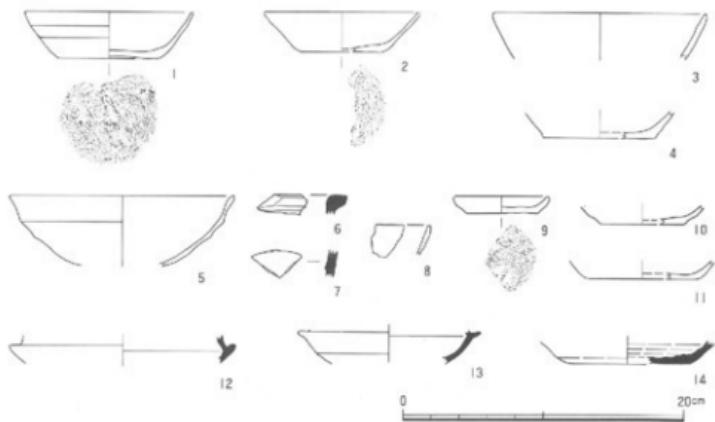


図9 SB 7出土遺物(1), SB 8出土遺物(2~4), SP 42出土遺物(5), SK 1出土遺物(6~7),
SK 2出土遺物(8~9), SK 3出土遺物(10~11), SD 1出土遺物(12~14)

明である。従って、SB 8とSA 1との関係は明らかではないが、多少方位を異にしているようである。同じくSB 7の周辺に位置する土坑SK 1~SK 3はどうであろう。SK 1は図9-6の青磁洗や7の滑釉壺を有している。SK 2からは8の瓦器碗、9の土師器皿が出土した。8の瓦器碗の年代は不明であるが、外面の研ぎは消失しており、13世紀以降のものであろう。9の土師器皿は小型の皿にあたり、底部には糸切り痕が明瞭に残っている。13~14世紀のものであろう。SK 3は10・11の土師器皿が出土しており、SK 1・SK 2とあまり時期差はないものと考えたい。このようにSK 1~SK 3の出土遺物はSB 7の出土遺物の年代に近接しており、同時期の関連する遺構である可能性も想定できよう。なお、5の瓦器碗はj 6区のSP 42から出土している。外面は口縁端部を撫でられるのみで暗文は認められない。器壁内面の暗文も磨滅が著しく不明である。SP 42周辺でもピットは検出できたものの、建物跡を構成しないことから図示していない。同様にSP 42の性格も判断しかねる。

古代の遺構 溝SD 1~SD 3は、古墳時代後期から古代の遺構と想定している。またこれらの溝の埋土は砂質土からなっており、おそらく一時的な豪雨などにともなう小流路であると判断している。なお同じような溝は、文京遺跡第11次調査のSD 1・SD 2にも

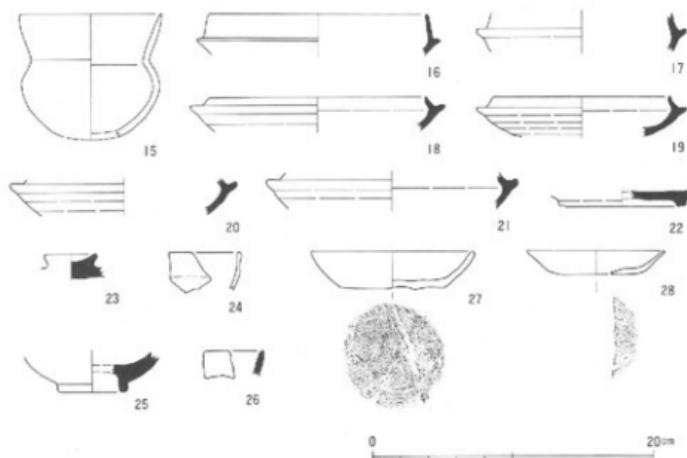


図10 赤褐色土出土遺物（15～28）

認められる。図9-12-13-14は、SD1出土の須恵器杯である。12・13は受部をもつ杯であり、13は7世紀初頭のものであろう。14は受部をもたない杯であり、7～8世紀代のものと考えられる。従って、SD1は7～8世紀代に埋積したものと考えられる。他のSD2・SD3は、出土遺物がほとんどなく、年代は不明である。SD1とSD2は途中に大きな攪乱が存在しており、その関係が不明であるが、流路方向からして同一の可能性も考えられる。そうした場合、SD2・SD3もSD1と同様な年代が考えられ、これら溝群はほぼ同一時期のものと想定しておきたい。

赤褐色土出土遺物 図10の15～28は赤褐色土出土遺物である。15は古墳時代の土師器の小型丸底壺である。c 6区の赤褐色土下面と弥生時代の暗茶褐色土上面の境界付近で発見された。隣接する松山北高遺跡にも同様な小型丸底壺が認められる。5世紀代のものであろう。16～23は須恵器杯である。16～21は杯身で、16・17が6世紀前半、18～21が6世紀後半のものと判断される。22は杯Bで、7・8世紀のもの。23は杯蓋の宝珠つまみであり、22同様7・8世紀のものである。24～28は中世の遺物である。24は瓦器椀、外面口縁端部を撫でており、内外面とも暗文は認められない。25・26は青磁椀である。27・28は底部に糸切り痕を残す土師器皿である。27が大型の皿I、28が小型の皿IIである。両者ともSB

7・8と同様な時期のものと考えられる。このように赤褐色土は中世を下限として、古代や古墳時代の遺物を包含している。

2 弥生時代

(1) 造構の概観

弥生時代の造構は、円形堅穴住居址2棟、方形堅穴住居址2棟、掘立柱建物跡2棟、土坑6基、円形周溝状造構1基、溝10基、柱穴などからなる。これらは弥生時代中期末～後期前半の造構であり、数時期の造構が重なり合って形成されている。ここでは、個々の造構について述べる前に、各段階での造構のまとまりについて、概観することにしたい。なお、これらの段階は造構の切り合いや、出土土器の型式学的細分によって、5段階に細別できる。

I段階 住居址では、円形住居址のSB1とSB3が共存し、それらに伴う形で掘立柱建物跡SB5とSB6が存在している。土坑はSK4・SK6・SK13である。それらの建物に隣接した地域に存在している。柱穴では、SP104・SP106・SP117・SP161・SP179が認められる。また溝SD7・SD8もこの段階のものである。SD7・SD8はこれらの建物群より北側に位置し、別の機能を有する造構群であるかもしれない。なお、遺物集中地点であるSX1・SX3～SX6は溝SD11に伴うものである可能性がある。SD11は、包含層堆積時に調査区南側にあるI段階と同時期のものが流れ込んだ可能性を想定でき、形成された時期はI段階の直後のものと判断している。溝SD9もそのような時期の同種の溝である可能性が考えられる。I段階は、出土遺物から弥生第Ⅳ様式のものである。

II段階 出土土器の型式学的検討によって、弥生後期初頭に属するものは土坑SK15と土坑SK11である。同時期のものとしては、造構の切り合いから土坑SK18がこれに属する可能性がある。また、溝SD5も造構どうしの切り合い関係から、この段階に考えることも可能である。また統く段階の円形周溝状造構SX14に類似する遺物をもつ溝SD13を、SX14と同時期のものとするならば、溝SD13に切られた方形堅穴住居址SB2は、この段階のものと考えられよう。

III段階 円形周溝状造構SX14は、出土土器が型式学的にII段階の土坑SK15・SK11より後出するものであり、この段階を代表とするものである。上記したように、溝SD13がSX14と同時期であれば、SD13と方形堅穴住居址SB4は、この段階に属することに

弥 生 時 代

$y = -1310$

| Y = -1300

| Y = -1290

$\gamma = -1270$

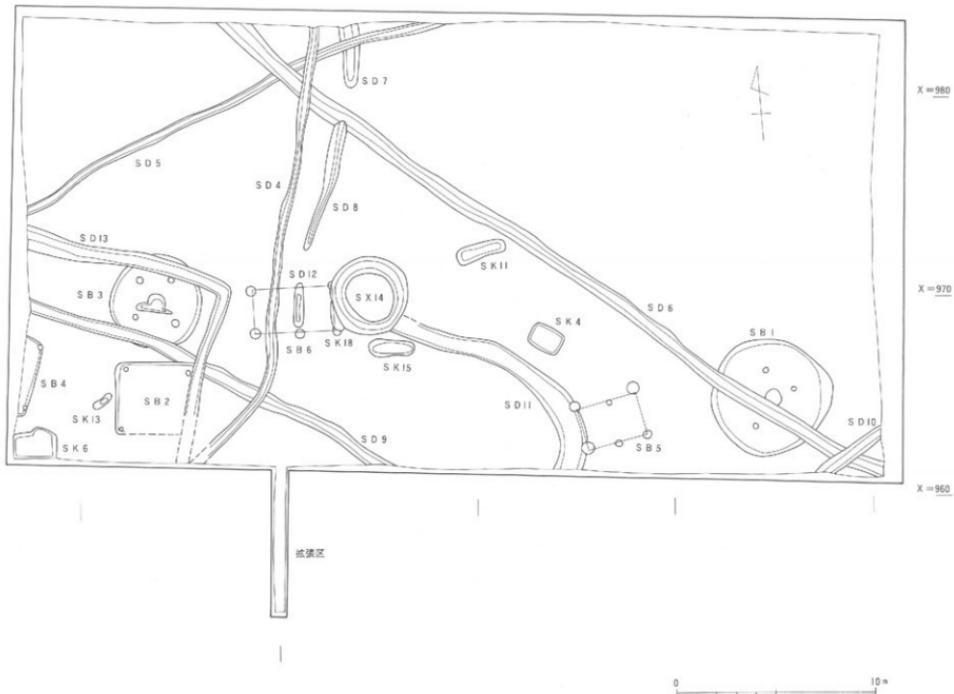


図11 弓生時代の遺構 縮尺1/200

なる。

N段階 溝S D 6は溝S D 5を切っており、S D 6の方が新しい段階のものである。溝S D 6は遺物が限られており明確な年代観を示し難い。しかしながら遺物集中地点であるS X11やS X12の一部は、その位置関係からS D 6に伴う可能性が高い。そこでこれら遺物集中地点のものをS D 6の遺物内容と考えると、S D 6はS X14の土器群より型式学的に後出するものである。これらの土器群は、従来、弥生後期中葉と見做されてきたものである。遺物集中地点S X11とS X12の一部を含むS D 6は、本地域の弥生後期中葉の典型的な資料といえよう。

V段階 溝S D 6を切る溝S D 4は、切り合い関係から最も新しい段階のものといえ、この段階に属そう。同様の理由で、S D 6を切る溝S D 10もこの段階に属す。V段階は出土遺物から明確な年代を論することは不可能である。ただIV段階を弥生後期中葉前半としたことから、V段階が弥生後期中葉後半に属する可能性もある。

以上5段階に細別した段階は、I段階が弥生中期末、II・III段階が弥生後期前葉、IV段階が後期中葉にあたっている。V段階は弥生後期中葉に属するものと想定できるが、明確な一括遺物が認められず、正確ではない。また包含層の出土遺物は、地点によって主体とする時期に差がみられるものの、全体的には弥生中期末～弥生後期中葉に納まるものと考えられる。

この他、出土遺物として特筆すべきは、船載の銅鏡片や管玉が包含層から出土している点である。これらはa 6区から出土しており、両者の出土位置もごく近接しているものの、遺構からの出土遺物ではない。この破鏡が遺構出土遺物ではなく、しかも弥生中期末～後期中葉の包含層から検出されている点も、特異といえよう。さらにc 6区からは貝象的な土偶状土製品も出土している、このような祭祀関係遺物は、調査区周辺に、祭祀を司る首長が存在していた可能性を示すものであり、興味深い事実といえよう。また包含層からは、この他に、石包丁13個、石鎌13個、石斧4個、石製紡錘車1個など、豊富な石製品を有している。さらに板状鉄製品や鐵鎌などの鉄製品、あるいは土鍤などの漁具も出土している。同様に、包含層の弥生土器はコレクター約300箱に達しており、この遺跡の豊富な余剰生産性を示すものといえよう。

これらの遺構や遺物について、以下、個別にその内容を提示することにしたい。なお、説明にあたっては、円形竪穴住居址、方形竪穴住居址、掘立柱建物跡、土坑、円形周溝状遺構、溝、柱穴、遺物集中地点、包含層出土遺物の順で説明して行きたい。

(2) 円形竪穴住居址

S B 1 (図12~14、図版9・10・27)

住居址 S B 1 は C 6 区に位置する。直径5.7~6.0mの円形竪穴住居址である。検出面から床面までの深さは僅か15cmあまりであるが、本来の掘り込み面はより上位部にあったものと推定される。従って、壁体などの痕跡は検出されていない。また床面も貼床などの痕跡は見い出されなかった。床面上では、柱穴5個と住居址中央に掘り込まれた炉跡、さらに炉跡の北側で地床炉が発見されている。柱穴は1基を除いて直径45~20cmであり、深さもほぼ一定している。北側の1基のみ他の柱穴に比べて異常に大きいが、これはこの部分の1部が試掘坑にあたっていたため、本来検出されるべき柱穴より大きくなった可能性がある。炉跡は直径95×80cmの梢円形、深さ30cmを測る。地床炉は50×40cmの梢円形で、薄い焼土層をなす。なお、住居址の縁部分に巡る周溝は存在していない。

遺物の分布は、炉跡周辺の住居址中心部に集中している。一方、柱状片刃石斧や石製錘車は住居址の延辺部に位置しており、その対比が興味深い。主な土器や石器は図13・14に示されるが、土器には完形品が認められない。これらは一括遺物として理解しているが、図11で述べたように、S B 1 は溝 S D 6 によって切られており、一部混入がある可能性がある。これは、住居址発掘時には、S B 1 中に S D 6 が流れ込んでいるものと、判断できないまま掘り上げたためである。S D 6 は S B 1 の南東部分から北西部分に向けて流れ込んでおり、その部分に位置し住居址床面より浮いた状態で検出された遺物は、S D 6 に含まれる可能性が残っている。

29・30は壺である。29は口縁部に3条の凹線を施すもの。30は口端部に凹線が施されず、口端下方部に肥厚するものである。30は29に比べて式学的に新しい時代のものと判断される。図12の平面図に示された30の位置からは、30が S D 6 に属する可能性が大きい。31は高杯の杯部であり、口縁部には4条の凹線が施されるものの、凹線は既に退化しており、雑な沈線状を呈している。32は鉢。33・34はミニチュア土器であり、この内34には器壁内外面に指圧痕がよく残っている。35~39は甕である。35は口縁屈曲部外面に撫での単位が明瞭に認められる。36は口縁屈曲部に近い隆帯を貼り刻み、かつ隆帯の下方部分に刺突文が施されるものである。胴部下半は縦方向の研ぎ、口縁内面には横方向の刷毛目の痕跡が認められる。37も同様に口縁屈曲部に低い隆帯を貼り刻むものであるが、36に比べ37の刻みの幅は広く、布状の圧痕によるものであろう。38・39は小型の甕である。40は高杯の脚部、41~43は壺の底部である。44~47も甕の底部であるが、みな上げ底状を呈している。45

弥生時代

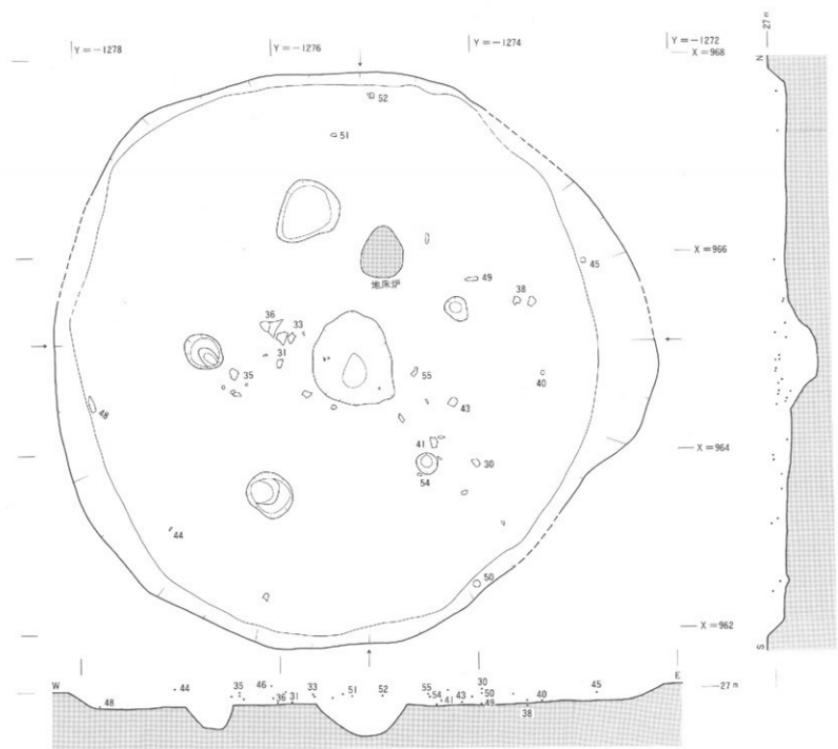


図12 円形竪穴住居址 比尺1/40

弥生時代

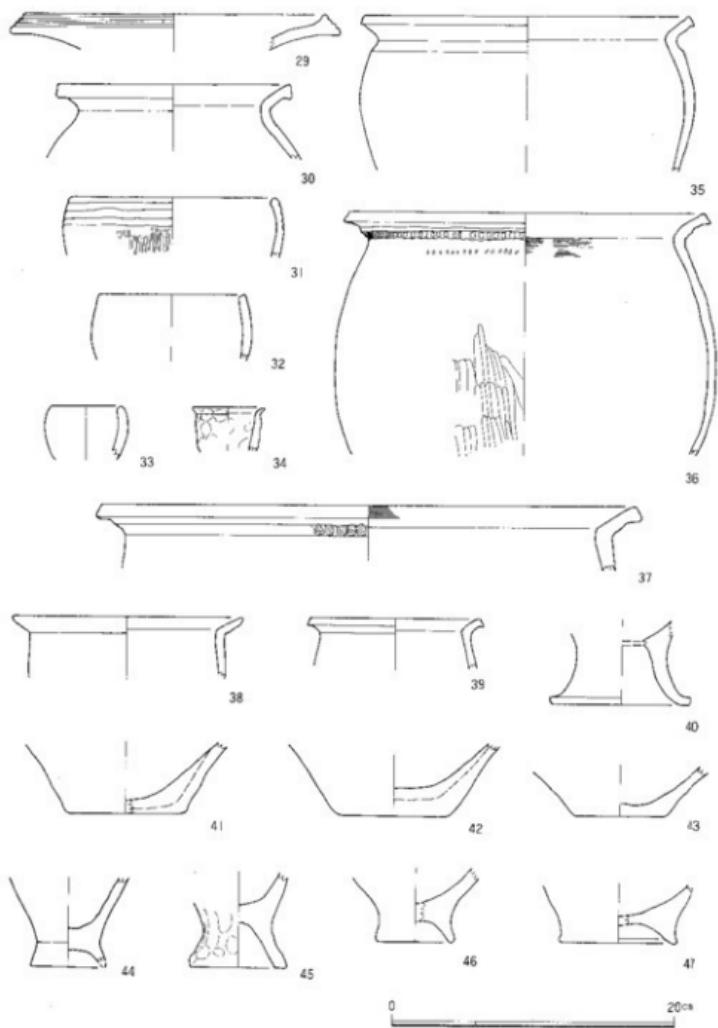


図13 SB 1出土遺物 (29~47)

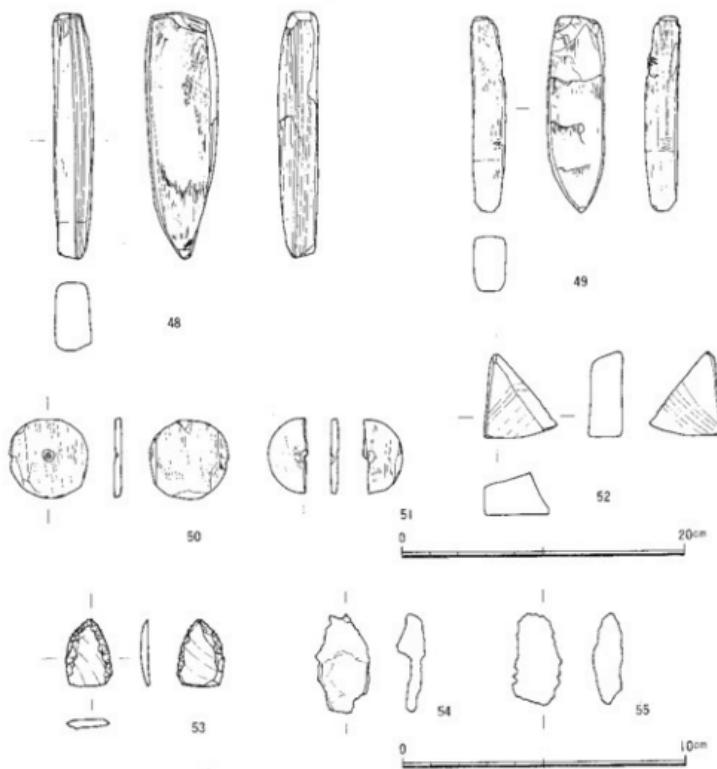


図14 SB 1出土遺物 (48~55) 53~55 縦尺 1/2

は外面に指撫で痕や指頭圧痕がよく残っている。以上、出土土器のうち30や31を除く他の土器は、弥生第IV様式の特徴を示しており、SB 2の廃棄された年代もこの時期にあてておきたい。

48・49は緑泥片岩製の柱状片刃石斧である。48は長さ17.5cm、幅2.7cm、厚さ4.9cm、重さ445.6g。49は長さ14.9cm、幅2.2cm、厚さ3.9cm、重さ249.5gと、48に比べ小振りである。50・51も同様に緑色片岩からなる紡錘車。50は片面穿孔で完通しておらず、51は両面

穿孔でありながら同様に完通していない。両者とも未製品といえよう。50は直径5.5cm、厚さ0.5cm、重さ27.5g、51は直径5.2cm、厚さ0.5cm、重さ14.5gである。52は陶石製の砥石。不正形を呈するが縦ての面が磨かれており、携帯用の砥石と考える。53は赤色頁岩製の石鎌。剥片を利用した小振りのもので、住居址の柱穴内から出土している。地山に混入していたものも可能性もあり、SB1に属するものか疑問がもたれる。長さ2.4cm、幅1.5cm、厚さ0.2cm、重さ1.5gである。54・55は鉄がひどく、形状不明の鉄製品である。54は残存長3.3cm、残存幅1.9cm、重さ5.3g、55は残存長3.2cm、残存幅1.6cm、重さ5.5gである。このように、出土土器の残りが悪いのに比べ、石器は他の住居址に比べても豊富である。未製品の石製紡錘車や砥石の存在からは、この住居址がこういった石製品の工房的存在であった可能性も考えられよう。

SB3 (図版15~18、図版11・28)

円形竪穴住居址SB3はj6・7区に位置し、SB3とSB1の中心間距離は約30mを計る。SB3の直径は約4.6m、検出面から深さは約10cmであり、SB1よりやや小型である。中心には90cm×80cmの楕円形の炉を有する。炉内には炭を多量に含み、深さ20cmを計る。また炉の南面には、炉に直交するように、40cm×180cmの直方形を呈した土坑があり、炉を切った状態で検出された。おそらく炉内の炭を掻き取るためのものがあるいは住居址廃絶時に何らかの理由によって形成されたものと判断される。柱穴は炉を中心にして直径30cm前後のものが4本あり、深さも約20cmと一定である。東北側の柱穴では柱穴に接して深さの浅い柱穴が検出されたが、これは住居址に伴うものか不明であり、おそらくこの住居址とは無関係のものであろう。住居址の縁延部には、SB1同様、周溝は存在しない。

出土遺物は、SB1に比べほぼ完形を呈するものが多い。56・66・67がほぼ完形品に近いものである。

56~62が壺である。この内、56~61は口縁部に凹線文が施されるもの。56は頸部に3条の沈線文を配し、それ以下を縦方向の研ぎ、胴部上半を横方向の研ぎ、そして胴部下半を縦方向の研ぎが施される。57も同様に頸部下半に縦方向の研ぎがみられる。61は同じ凹線文をもつ壺であるが、やや特異な文様が施され、大型である。口縁端部は凹線文を施してのち斜め方向の沈線文が刻まれる。また頸部には刻み日隆帯が施されているが、その下方にも斜め方向の沈線文が施される。62は小型の壺であり、器壁の内外面に刷毛目が残っている。

63~65は高杯。63は口縁に3条の浅い凹線が施される。凹線以下や杯部内面には刷毛目

遺構と遺物

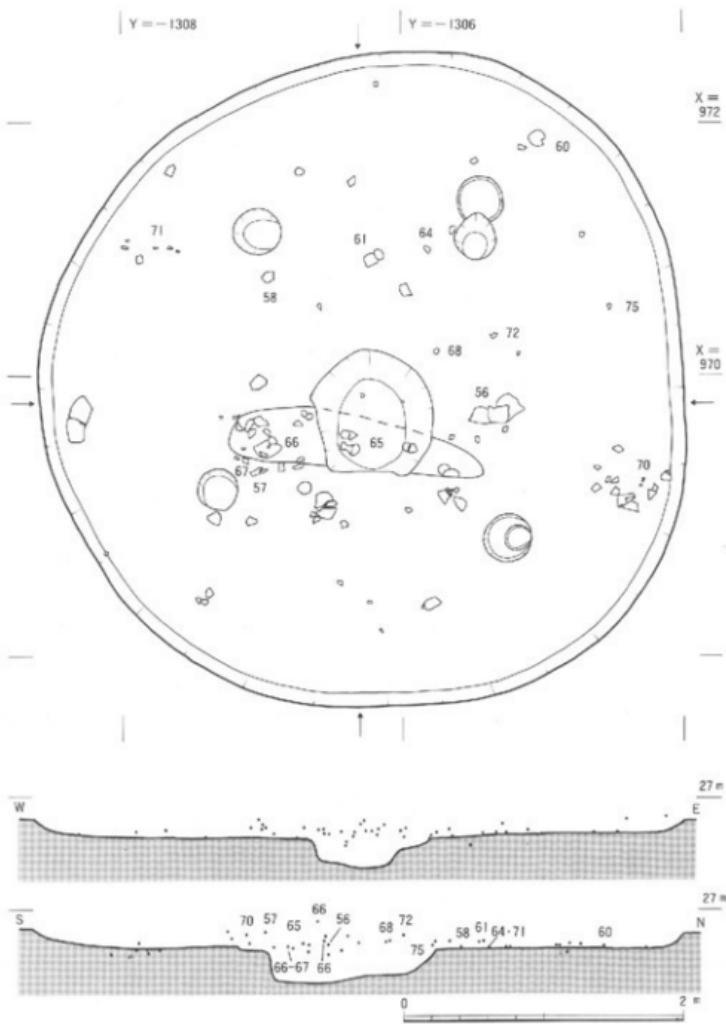


図15 円形堅穴住居S.B.3

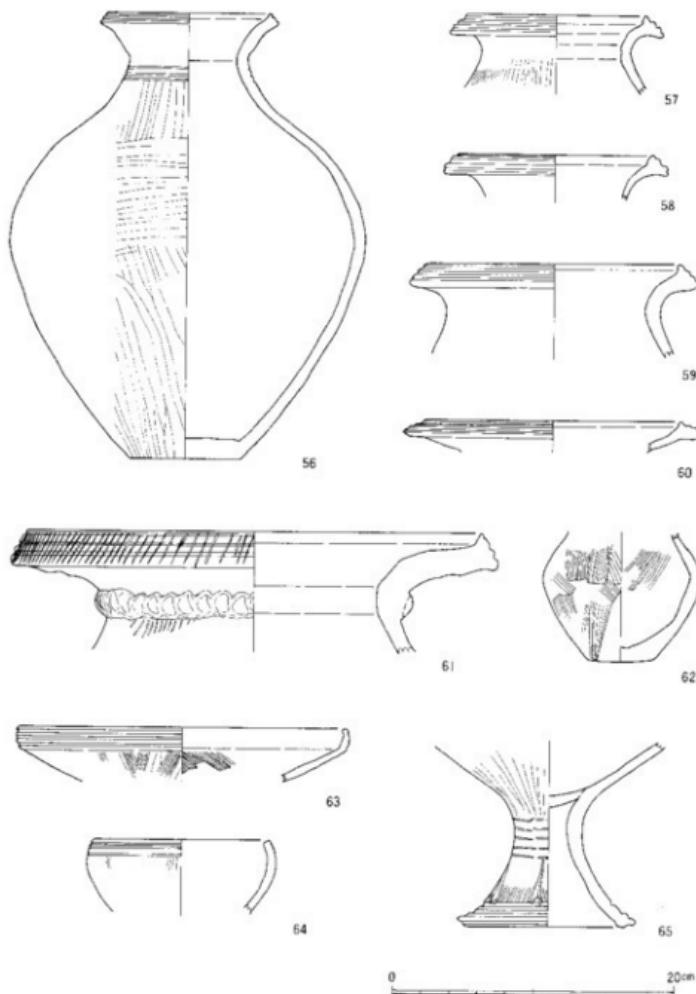


図16 S B 3出土遺物 (56~65)

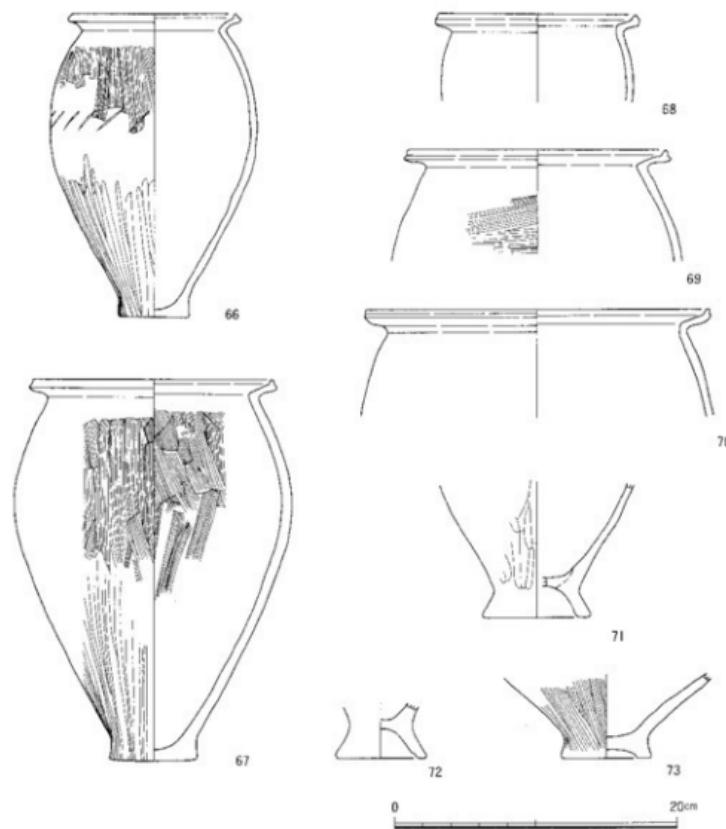


図17 SB 3 出土遺物 (66~73)

の跡がみられる。64の場合は、凹線が既に退化した粗雑な沈線文が口縁部に3条引かれている。沈線文の下部には、故意に3~4条の短沈線が縦方向に刻まれる。64は焼き自体もやや軟質で悪い。65は高杯の脚部で杯部と脚部を接合する際の円盤充填法の痕跡が明瞭に見とれる。杯部外面には縦方向の研ぎ、脚部外面には刷毛目が若干残る。矢羽根透しは完

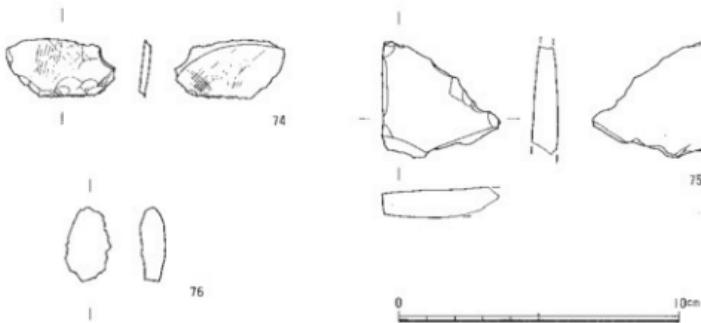


図18 SB 3出土遺物 (74~76) 縦尺1/2

全に彫り込まれてはおらず、脚端部には3条の凹線文が施される。

66~73は甕である。口縁端部をつまみ上げ状にする型式がすべてである。66は頸部から胴部上半に刷毛目が残され、胴部下半は研ぎが施される。67も同様な調整が施されるが、67の場合胴部上半内面にも刷毛目が認められる。一方66は胴部中央に斜方向の沈線文が刻まれる点に相違点がみられる。66・67はともに平底を呈する。なお同じ口縁部形態を有する69は、胴部上半外面の刷毛目が横方向である点、66・67と異なっている。甕の底部は、平底の他、上げ底状を呈する71~73がみられる。71は外面に縦方向の研ぎが認められるが、73は同じく外面に縦方向の刷毛目が残っている。

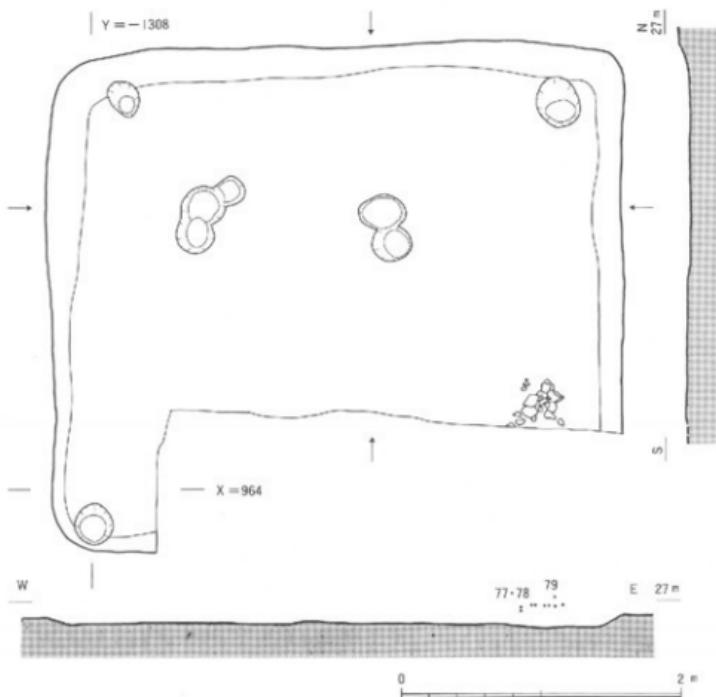
以上のように、SB 3出土土器は弥生第IV様式の四線文土器の特徴を示しており、SB 1同様弥生第IV様式の住居址と考えられる。なお、SB 3を切る溝SD13は、SB 3の掘り上げ時には、その遺構の検出が不可能であった。従って一部SD13の遺物が混じっている可能性もあるが、幸いに図15でも示すようにSD13の流路部にはほとんど遺物がなく、混入物はないと考えている。同様に時期不明のSD9の流路部にも遺物がほとんどない。以上からSB 3の出土遺物の一括性は高いものと考えられる。

その他、SB 3からは石器や鉄器が出土している。74はサスカイトの剝片。長さ2.0cm、幅3.9cm、厚さ2.5mm、重さ3.2gである。剝片の側面には細分調整の痕跡がみられる。75は両面が丁寧に研かれ、側面も面をなしているところから、携帯用の砥石と考えられる。石材は緑色片岩であり、残存長3.8cm、残存幅4.1cm、厚さ8mm、重さ18.8gである。76は形状不明の鉄製品である。残存長2.6cm、残存幅1.4cm、厚さ8mm、重さ4.0gである。

(3) 方形堅穴住居址

SB 2 (図19・20、図版12)

方形堅穴住居址であるSB 2は、j 6区に位置している。3.6m×4.1mのプランをなし、深さは約10cmである。住居址の南側の一部が攪乱のために破壊されており、全体的な住居址構造を理解することはできなかった。そのためか、炉跡は検出できていない。柱穴は、住居址のコーナー部分に直径20~30cmのものが存在する。深さは20~25cmとほぼ一定している。このほか住居址の中心部分に柱穴がみられる。西側のものは3個の柱穴が重なり、東側のものは2個の柱穴が切り合っている。西側の柱穴群のうち、最も北側に位置する小



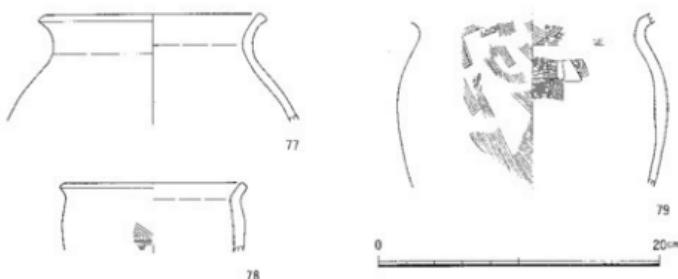


図20 SB 2 出土遺物 (77~79)

振りのものを除けば、あとの2つの柱穴は西側と東側のものでそれぞれ深さも一定しておらず対になる可能性がある。すなわち、西側と東側の柱穴で対になって作り替えられている可能性が考えられるのである。

出土土器はSB 2の現存する南東部分でかたまって出土している。77の壺、78の鉢、79の甌である。77は口縁が外反する壺である。78の鉢は口縁の外反の弱いもので、胴部の外面に一部刷毛目が残っている。79は口縁部形態は欠損しているため不明であるが、頭部から胴部にかけて器壁内外面に刷毛目がよく残されている。これら出土土器は弥生第V様式前半の年代が与えられるが、明確な時期決定は難しいと思われる。

さてこれらの出土土器は、図19の断面図で示されるように住居址内で浮いた状態で出土している。SB 2の場合も、住居址検出時ならびに発掘時に、溝SD13の存在を認識しないままに堀り上げたため、SB 2とSD13の前後関係は発掘時には明確でなかった。これらの出土遺物の存在位置はSD13の流路上にあり、しかも住居址から浮いた状態で発見されているところから、SB 2に属するというよりはSD13に属する可能性が強いといえよう。そうであれば、SD13はSB 2を切って作られたことになり、SB 2より新しい段階のものということができる。後に述べるように、SD13の出土遺物は限られており、明確な年代を与え難い。従って、出土遺物の比較から、SD13とSB 2出土遺物の同時性を示すことも困難なのである。いまのところ、上記のような状況証拠から推論すれば、SB 2出土遺物はSD13に属する可能性が非常に高く、SD13はSB 2を切っているということができるよう。さらに後で記述するように、SD13と住居址SB 4は一体のものである可能性があり、SB 2はSB 4よりも古い住居址であることが想定できよう。

SB 4 (図21、図版13-1)

調査区西南隅のi 6区で検出された方形竪穴住居址である。住居址の一部が調査区西壁際で発見されたもので、その大半は未調査区に残されている。平面プランは1辺3.9mを計り、深さは約8cmと浅い。同じ方形竪穴住居址であるSB 2と同様に、確認できる範囲では、柱穴は住居址の四隅に配置されている。これらの柱穴はともに直径が約20cm前後と小振りであるが、断面図で理解できるように深さは一定していない。

住居址内からは、遺物が検出されなかったため、住居址の年代は特定できない。ただ、住居址の方位と同様な方位を示す溝SD13は、同時期の遺構である可能性が高い。すなわち

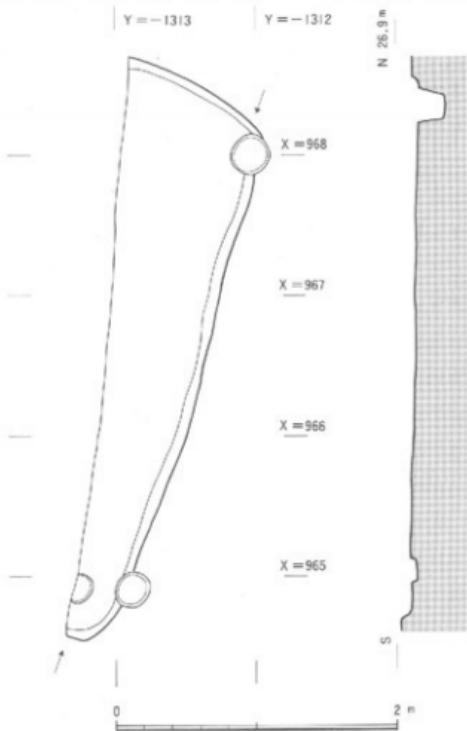


図21 方形竪穴住居SB 4 比尺1/40

ち集落址内の、特殊な住居群を囲む溝である可能性が想定できよう。従って、SB 4はSD13によって区画された特殊な住居群の一部であると想定できるのである。そうであれば、上記したSB 2の説明で述べたように、SD13はSB 2を切っており、SB 2より新しい。すなわちSD13と対になるSB 4は、SB 2より後出するものとなるのである。SD13の年代の特定は弥生後期前半に属し、詳細な年代観は求められない。そこで弥生後期内で、相対的にSB 2とSB 4に年代差があるものと認識しておきたいのである。

(4) 挖立柱建物跡

S B 5 (図22, 図版13-2)

掘立柱建物跡 S B 5 は b 6 区にあり、円形窓穴住居址 S B 1 の南西側、僅か3.5m離れた地点に位置している。2間×1間の建物である。四隅の柱穴は S P 112・140・145・147 は、直径40~60cmと大きく深さも40~50cmと、他の一般の弥生時代の柱穴に比べ大きくかつ深い。S P 112 と S P 145, S P 140 と S P 147 のそれぞれの柱間に位置する柱穴は、四隅の柱穴に比べ直径が30cm前後で小さく、また深さも20~25cmと浅い。おそらく、文京遺跡の掘立柱建物跡の構造は、この S B 5 のような 2 間 × 1 間のプランで四隅の柱穴に比べ柱間の柱穴が小さいものが、一般的であったものと考えられる。

なお、柱穴内の出土遺物はごく小さく図示できるものはほとんどないといってよい。弥生第Ⅳ式様式に属するものと判断できるものも含まれるが、遺物からこの住居址の確定な年代を推測することは不可能であろう。ただ S B 1 に隣接するところから、S B 5 は S B 1 に伴う掘立柱建物跡である可能性が考えられよう。後述する S B 6 は、円形窓穴住居址 S B 3 とセットをなす建物と考えられることが、上記した類推の根拠となっている。

S B 6 (図23~25, 図版14・15-1)

j 6・a 6 区に位置する掘立柱建物跡 S B 6 は、円形窓穴住居址 S B 3 の西側2.5mに隣接して存在している。四隅の柱穴 S P 107・114・163・164 は、直径50cm前後、深さ40~50cmである。S P 163 は円形周溝状遺構 S X 14 によって、S P 164 は S K 18 によって、その半分が破壊されている。柱間の柱穴 S P 115 は直径40cm、深さ10cmと、四隅の柱穴に比べ小さく、S B 5 と同様な構造であったことが考えられる。なお、北側の S P 114 と S P 163 の間に存在するはずの柱穴は検出されていないが、これは溝 S D 12 によって破壊されたものと考えられる。

S B 6 で特筆すべきは、S P 107 と S P 114において、ほぼ完形な状態の土器が柱穴内に埋納されていることである。またこれら2つの柱穴間で接合する土器資料がある点も興味深い。さてほぼ完形の土器が柱穴内から発見されたことは、これらの土器が少なくとも S B 6 の柱を抜きとられて後に埋められたものと判断される。すなわち、S B 6 廃絶後、柱を抜き取って、故意に土器を埋められたものと考えられるのである。そこでは接合資料もみられるところから、完全な状態の土器を割ってそれぞれの柱穴に埋納したり、あるいは完形の状態の土器を柱穴に埋納したものと推測される。おそらく、住居址解体後の、地鎮ないしそれに近い状態での祭祀が行われたものと想定できる。このような状態の遺構は道

遺構と遺物

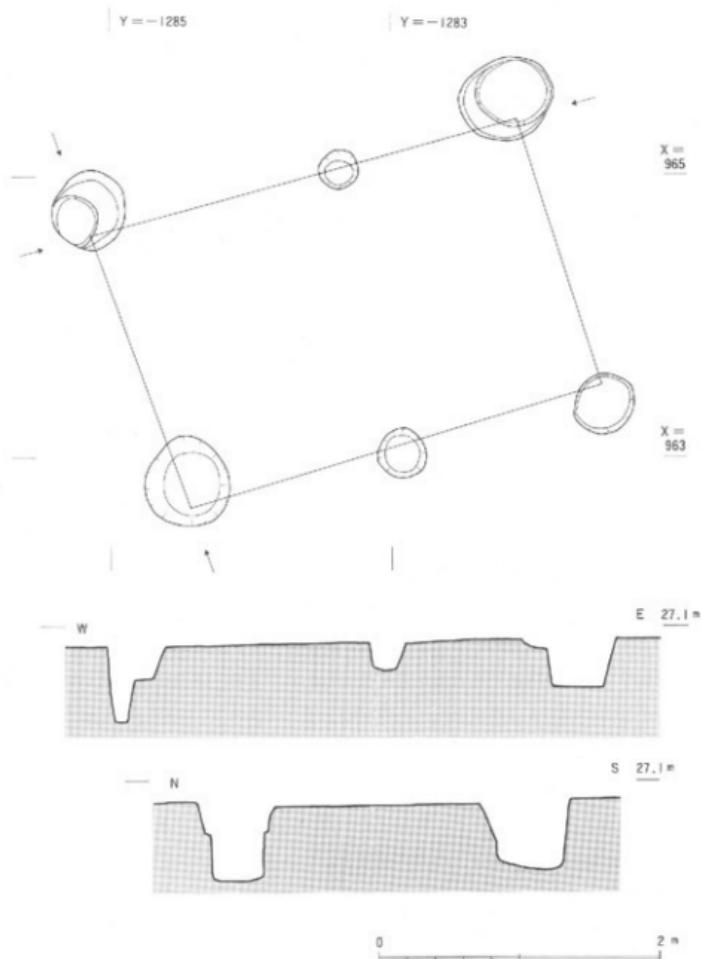


図22 振立柱建物跡 S B 5 縮尺 1/40

後平野の別の遺跡や、この文京遺跡の別の地点でもみられるところから、これらの遺構を柱穴祭祀遺構と一応呼んでおきたい。

80~82はS P 107出土遺物である。80・81はほぼ完形を呈し、その一部の破片はS P 114からも発見されている。80・81は壺で、両者とも口縁端部に凹線文が施され、前者は3条、後者は4条施されている。80は頸部外面を縱方向に撫であげた痕跡が残っており、その上

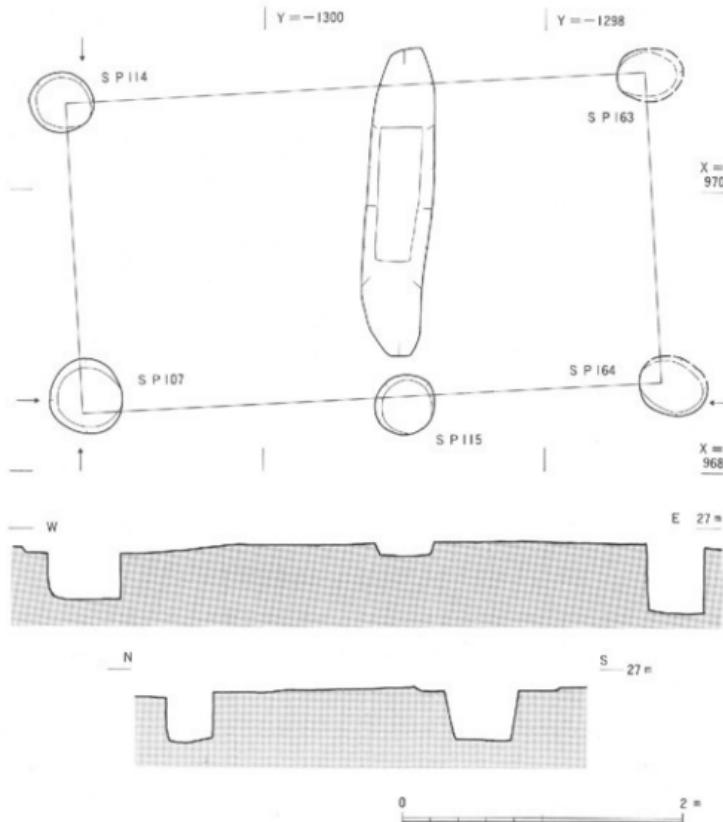


図23 挖立柱建物跡 S B 6 縮尺 1/40

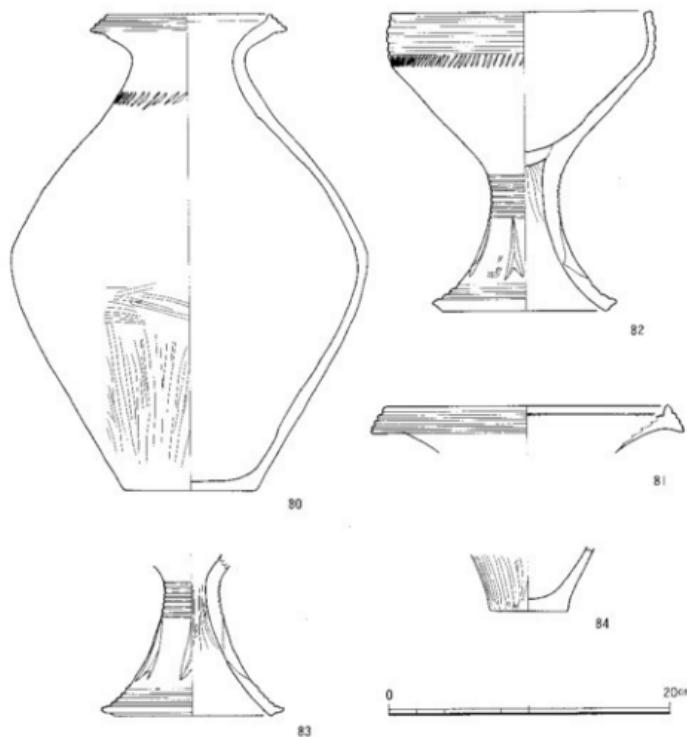


図24 S P107出土遺物(80~82), S P114出土遺物(83・84)

に板状木口で斜め方向の刺突文が刻まれている。また胴部は横方向、胴部以下から底部にかけては縦方向の研きが施される。82は高杯である。口縁部に6条の凹線文が施され、最も下位の凹線文上に刻み目が施される。頸部には9条の平行沈線が施され、その下位には矢羽根状透し、さらにその下の脚部下端には3条の凹線文がみられる。

83・84はS P114出土遺物。83は82と同型式の高杯。84は甌の底部と考えられる。外面には縦方向の研きが施されている。

85~90はS P164から発見されている。85・86は壺である。85の壺は口縁端部の凹線文が僅か1条と特異である。また頸部には1条の蔭帶が貼られ、壺の4方向に2連単位で隆

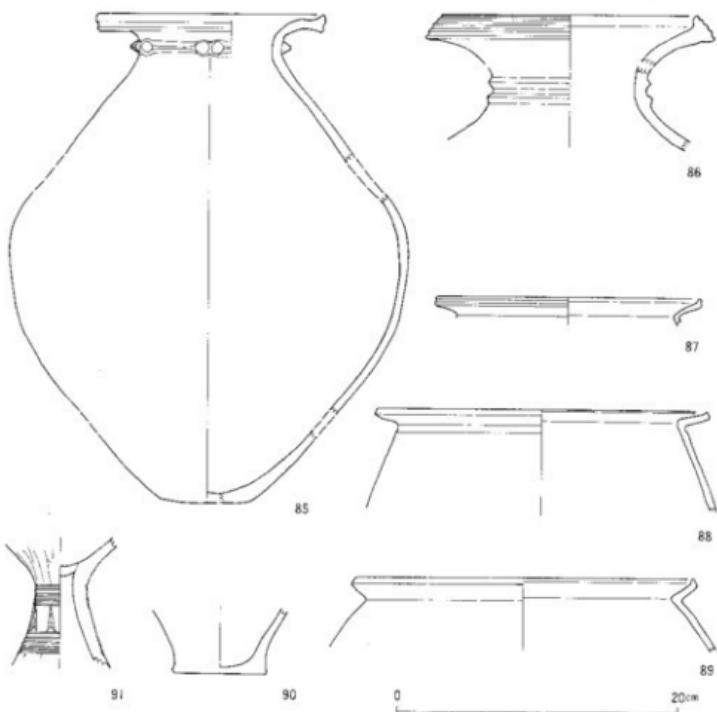


図25 S P 164出土遺物（85～90）、S P 163出土遺物（91）

帶上を指押さえがなされる。この指押さえ部には布の圧痕が明瞭に残り、布によって指押さえがなされたことが理解できよう。86は口縁部に4条の凹線文がみられ、頸部には2条の隆帯が平行に貼られている。87～90は甕である。87～89の甕の口縁は、みな端部がつまみ上げられているところに特徴がある。90は甕の底部。

91はS P 163出土の遺物。S P 163は破壊を受けているせいもあって、遺物はごく少ない。91は82・83の高杯脚部と違って、2段の矢羽根状透しをもつ。透しの彫り込みは82・83に比べて浅くかつ小さい。杯部外面は縱方向の研ぎが認められる。

以上のように、S B 6 出土遺物は弥生第N様式の典型的な土器群といってよいであろう。

従って、SB 6 の柱穴祭祀が行われた時期は、弥生第IV様式の段階といえよう。近接する SB 3 の廃絶時期も弥生第IV様式であり、SB 6 を廃絶後すぐに柱穴祭祀が行われたとすれば、SB 3 と SB 6 の廃絶時期はほぼ同じといってよいことになる。すなわち、SB 3 と SB 6 は同時存在していた可能性が強く、堅穴住居と獨立柱建物がセット関係をなして存在していたと捉えることができよう。

(5) 土 坑

SK 4 (図26, 図版19-2・29)

SK 4 は約1.6m × 1.4mの隅丸方形の土坑でb 6 区に位置している。検出面からの深さは僅か15cmと浅いものである。この土坑の東南隅にはほぼ完形を呈する壺が1点埋設されていた。壺は斜め方向に口縁を上に向け、底部が土坑の床面にくい込む形で検出された。

92が検出された壺である。口縁部に3条の凹線文を施し、頸部に斜線文を刻むものである。頸部外面は縦方向の刷毛目、胴部下半は横方向の研ぎが施される。胴部内面には縦方向の刷毛目が残されている。この壺は典型的な弥生第IV様式の壺である。従って、この土

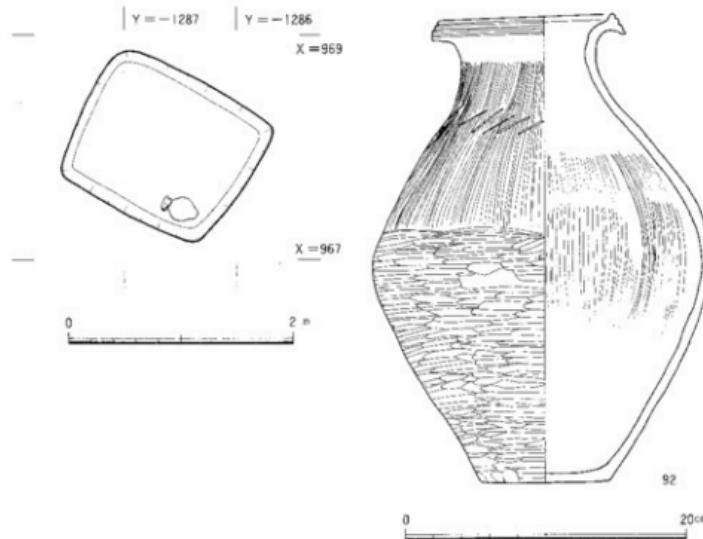


図26 土坑SK 4 縦尺1/50, SK 4 出土遺物(92)

坑の年代もその時期にあてておきたいが、土坑の性格については明確でない。

SK 6 (図11・27、図版29)

SK 6は調査区の西南隅、I 6区で検出された土坑である。土坑の西側部分と南側部分は未調査区にかかっているため、土坑の全体の形状は不明である。残存部分は約1.2m×2.1mの長方形形状を呈している。深さは約40cmとしっかりした形態を示す。

出土遺物は、壺・甕・石包丁などがあげられる。94・95は壺の底部。93は甕で、口縁端部をつまみ上げ状に施し、頸部に横方向の撫でをくわえるものである。また胴部上半には縦方向の刷毛目、胴部下半には縦方向の研ぎが施される。96は外面に研ぎを残す甕の底部である。93と調整技法の類似から同一個体である可能性も想定できるが、土器の遺存状態の違いから、一応別個体としておきたい。97は杏仁形の石包丁である。輝緑岩製である。孔は片面穿孔がなされるが、上端部にも穿孔痕がみられる。これも両面穿孔であるところから、本来は石包丁の形状がもう少し大きかったものが、穿孔時の破碎などに伴って、再加工した可能性も考えられよう。93が典型的な弥生第Ⅳ様式の特徴を示すところから、97

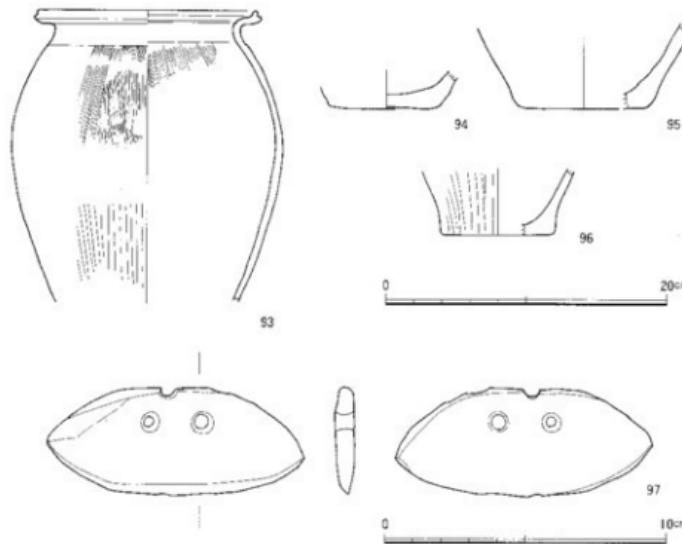


図27 土坑SK 6出土遺物 (93~97) 97のみ縮尺1/2

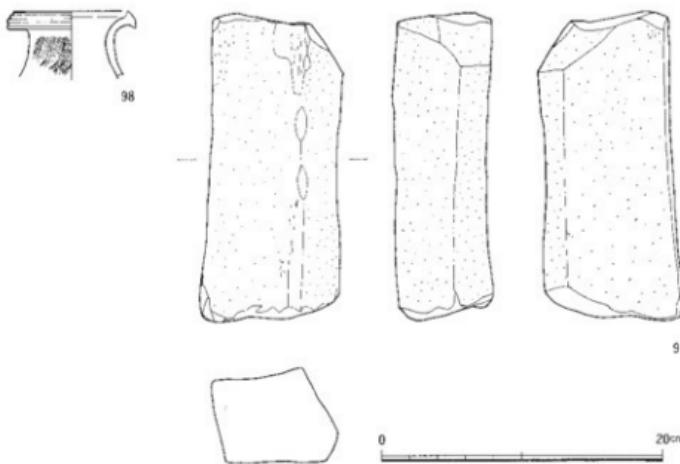


図28 土坑SK13出土遺物(98・99)

の石包丁も弥生第N式に属するものと考えておきたい。同時に、SK 6 もこの時期に該当するものになるのであるが、遺構自体の性格は不明といえよう。

SK 13 (図11・28、図版29)

SK 13は約1.2m×0.4mの梢円形を呈する土坑で、深さも10cmと浅い。j 6区のSB 2の西側に隣接して検出された。出土遺物はごく僅かであり、98の素と、99の砥石が発見されている。98は、口縁に3条の凹線、頭部に縱方向の刷毛目を施したのち斜線文を施す、典型的な弥生第N様式の壺である。99は長さ21cm、幅9cm、厚さ6cm、重さ2165gの変質黒雲母安山岩岩製の砥石である。4側面すべてが研かれており、それらの側面すべてが砥石として使用されたものと考えられる。弥生第N様式の98から、99や土坑の年代をその時期に考えておきたいが、資料が不足しているところからその年代決定は不確かである。また遺構そのものの性格も明確ではない。

SK 15 (図29~31)

円形周溝状遺構SX14の南側に隣接して検出された土坑である。a 6区に位置し、東西約2.3m、南北90cm、深さ約55cmを計る。遺物は西側と東側の2地区に大きくそのまとまりが認められる。西側の遺物の集中は、102・107・108・111・116が対応し、それ以外は

東側の遺物集中地点、さらに101は東壁際に貼りついて検出された。100・106~108はほぼ完形に近い状態で検出され、110~112は胴部大半や底部が欠損しているが、胴部上半はほぼ完形を呈している。この内、111は故意に底部を打ち欠いた状態で放置された可能性が高い。また断面の写真(図版18-2)でも示されているように、埋土の堆積層はV字形を呈しており、水平堆積層の落ち込んだ状態が見取れる。また埋土にはかなりの炭化物が認められ、土器埋積後、木質物をその上に置いた可能性も考えられよう。そのため、木質物が腐って後、陥没した状態が想定できよう。ただ、墓と考えるには証拠が不足しており、遺構そのものの性格は不明とせざるをえない。

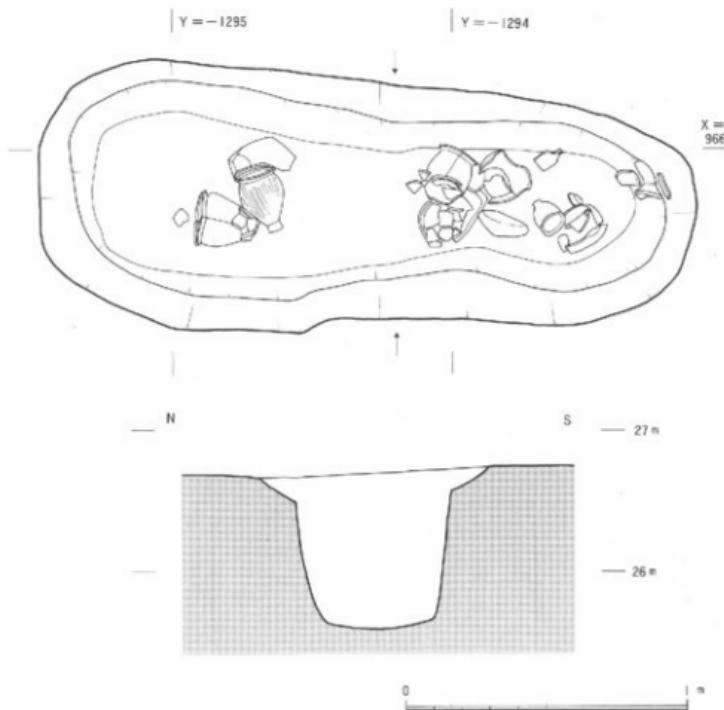


図29 土坑SK15 比尺1/20

造構と遺物

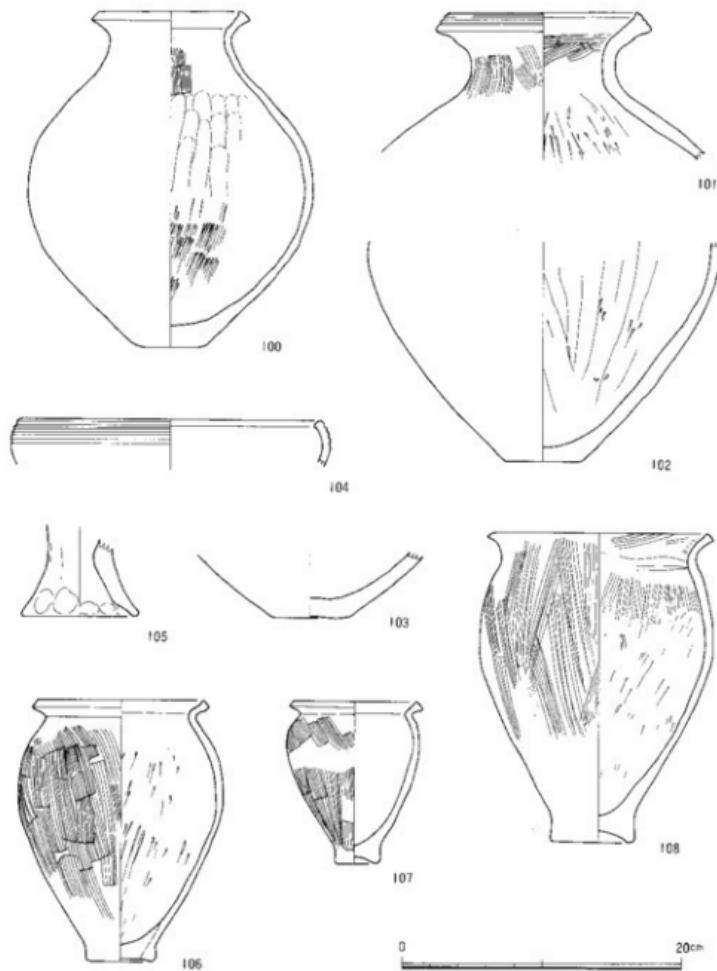


図30 SK15出土遺物（100～108）

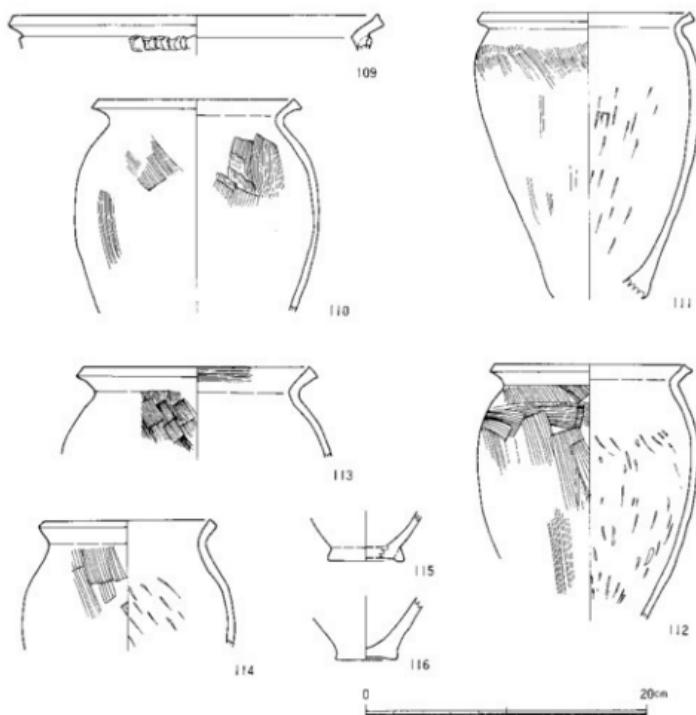


図31 SK15出土遺物（109~116）

出土遺物は、100~103の壺、104・105の高杯、106~116の壺が存在する。

100は胎土や焼き具合が悪く、粗製の壺である。土器内面には、縦方向に下から上へ向かって指撫で施された状態がよく残っている。また、内面の上半や下半には縦方向の刷毛目痕も認められる。101は口縁に3条の凹線文が施される凹線文壺である。頸部外面には刷毛目痕が残る。また土器内面の頸部下半には、下から上に向かって削り状の荒い撫での痕跡が認められる。102の壺も、同様に胸部内面で削り状の荒い撫でがみられる。101・102は同一個体の可能性が考えられるが、出土位置が異なる点や、土器の焼きや胎土が異なるところから別個体としておきたい。103は壺底部。

104は4条の凹線文が口縁部に認められる高杯。105は脚部内外面に指圧痕がよく残っている高杯脚部である。作りの粗雑さからいえば、在地的な土器ということができよう。

106～116の甕は、大きく4種類に分かれる。口縁端部をつまみ上げぎみて、平底の甕がある。106がそれにあたり、胴部外面には刷毛目、内面には荒い削り状の撫でが認められる。107はミニチュア土器であり、やや上げ底を呈しているが、106と同型式のものと考えられる。109は107と同じように口縁端部ががつまみ上げられるが、頸部に隆脊が貼られる。隆脊上は押し引き状に刻まれている。108・110～113は、口縁端部の形態がこれまでのものと異なり、つまみ上げをせず、むしろ下方に向かって肥厚するように口縁端部が撫でられるもの。また108の例からみれば、これらの甕には、上げ底状の底部を呈するものが伴おう。またこれらの甕には胴部外面に刷毛目痕が残り、内面に荒い削り状の撫でがみられる場合が多い。114は上記したものと口縁端部の形態が類似しているものの、口縁の外反は弱く、壺の一種と考えられる。調整技法は上記した甕と同じである。他に、やや上げ底化した底部115・116がみられる。以上のように甕には、口縁をつまみ上げる2つの型式と、口縁をつまみ上げない2つの型式が認められる。前者が外来的な系譜をもつもの、後者が内存的系譜をもつ甕ということができるものと思われる。

このようなSK15出土遺物は、型式学的にSK4・SK6・SK13のが弥生第Ⅳ様式よりやや新しい器物を包含しており、弥生後期初頭と考えておきたい。

SK11(図32～34、図版20・21-1・29)

SK11はa7・b7区にまたがる地点で検出された。長軸の方位を北東から南西にとり、平面形が約2.5m×0.7mの隅丸長方形を呈する。深さは45cmである。ほぼ完形を呈する上器は、土坑断面の中間地点で浮いた形で発見される場合と、土坑の底に貼りつく形で発見されている。図32の上段は、地山でSK11を検出した時点での土器の分布状況であり、図32の下段は土坑を掘り下げた状態で検出した土器の出土状況である。117・121・122・126・129・131が図32の下段で示された土器にあたり、それら以外の土器は図32の上段で示されている。

117～123が壺である。117～119は凹線文壺。このうち118・119は凹線文を口縁部に2条有する壺である。ただし118の場合は土器の遺存状態が悪く、凹線文も明確に残っていない。一方117の場合は、同じく2条の凹線文を有するものの、口縁部凹線文は若干退化しており浅い沈線状を呈している。また118・119に比べ口縁の外反が弱まり直立気味の傾向を示す。頸部と肩部の構には2条の平行沈線文が施され、沈線文の下端には刺突文が刻ま

弥生時代

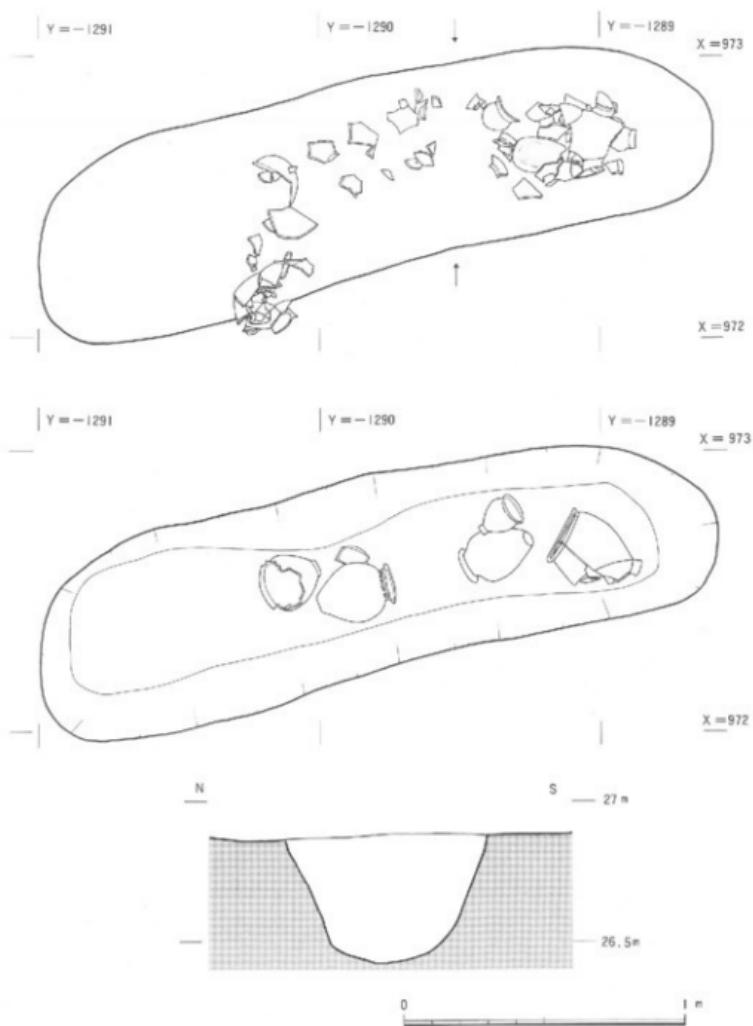


図32 土坑SK11 箱尺1/20

遺構と遺物

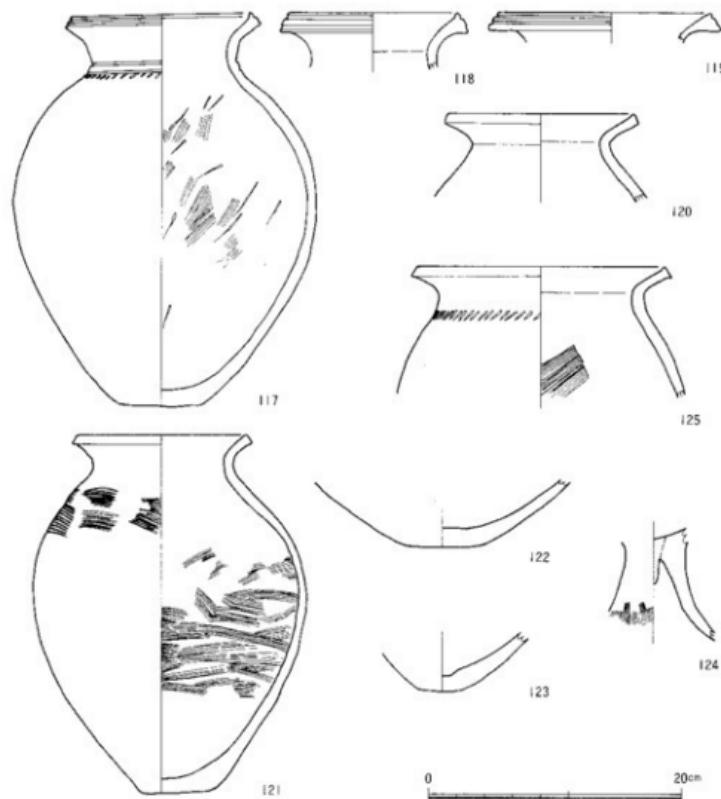


図33 SK11出土遺物(117~124)

れている。胴部内面には刷毛目痕が認められる。120・121は無文の壺である。120の方がやや口縁の外反がきつい。121は完形を呈する例体で、胴部外面上半に横方向の刷毛目、胴部内面にも横方向の刷毛目が施されている。122・123は壺の底部と考えられるものである。

124は高杯の脚部である。脚部外面下半には縦方向の刷毛目痕が認められる。杯部と脚部の接合部には、棒状の粘土紐を杯部側から押し込んで成形しており、粘土紐がよく残っている。

弥生時代

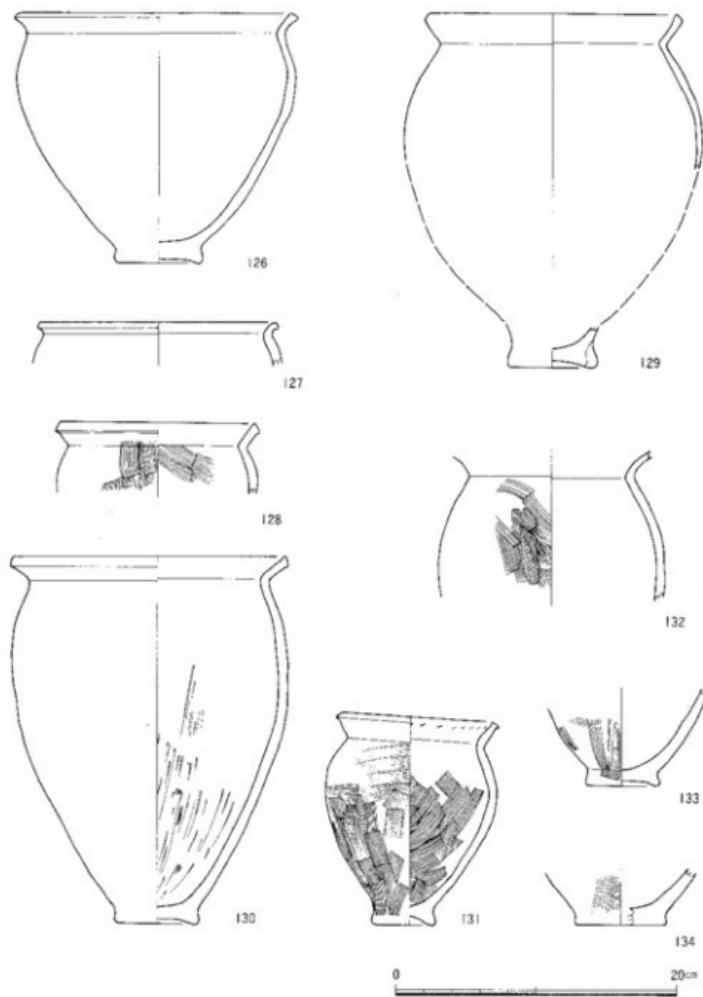


図34 S K11出土遺物 (126~134)

126～128が鉢である。126は口縁端部がやや下方に張り出しており、口縁の屈曲の様子からも、後に記述する甕の口縁と類似している。また126は甕の129と同じように土器の焼きが他の土器にくらべ悪く、遺存状態もよくない。127は126の口縁と異なり、口縁がやや外側に巻き込み気味である。128は口縁端部の形状が126によく似ているものの、口縁屈曲部に強い撫でが加えられている。胴部外面は、撫で後、縦方向の刷毛目、内面は斜め方向の刷毛目が施されている。

125・129～134は甕である。125は器形的には壺に類似するが、この時期以降甕の1器種として存続するところから、甕としておきたい。125は大型の甕で、肩部に斜行した刻み日文を施すところに特徴がある。また口縁端部が下方にやや張り出している点は、他の甕の特徴に類似し、この時期の様式的な特徴であろう。胴部内面には斜め方向の刷毛目が施される。129はほぼ完形に近い状態で出土したが、土器がきわめてろく、取り上げ時に破損した。126と同様に焼きが悪いためであろう。口縁部は内側に巻き込む形態を示し、底部は上げ底状を呈する。在地的な甕であろう。130は、125・126と同様な口縁部形態を有するもの。胴部内面には、下から上に向かって削り状の荒い撫でが施される。底部は上げ底状を呈する。131も130と同様な形態的特徴を示すが、小型である。胴部上半は横方向、胴部下半は縦方向の刷毛目が施され、胴部内面には斜め方向の刷毛目が施される。また口縁内面には刺突文状のものが認められるが、これは意図的な文様というよりは、器面調整具があつたためにできたものと考えている。132は甕の胴部で、外面には縦方向の刷毛目がみえる。133・134は甕の底部で、外面には縦方向の刷毛目が施されている。

これらの出土土器の特徴は、SK4・SK6・SK13の弥生第IV様式のものに比べ、型式学的に後出する傾向を示している。特に117の凹線文の退化状態や、125にみられる新出の甕、あるいは口縁端部が下方に向けて張り出す甕や鉢の様式的特徴は、弥生第IV様式には認められないものである。統いて説明する円形周溝状遺構SX14よりは古式の様相を示すところから、弥生第IV様式とSX14との間に位置づけられるものとして、SK11を弥生第V様式の初頭に位置づけておきたい。

一方、SK11内では完形に近い上器がきまった位置に埋納されているといった状況は認められないところから、これらを墓葬における副葬土器として位置づけることはできない。木棺状の木質部の痕跡も認められない。SK15などと同様な遺構と考えられるが、その具体的な性格は不明といえよう。

SK18（図11）

你生時代

S K18は残存長約1.3m、残存幅約60cm、深さ約45cmの長方形の土坑である。a 6区に位置し、S P164を切り、S X14によって破壊されたことが、発掘時の所見であきらかとなっている。すなわち、S B 6より新しくS X14より古いとすることができよう。SK18内からはほとんど土器が認められなかったことから、遺物の方面からは年代決定が不可能である。ただし、SK18内からは骨片が出土しているところから、これが人間の骨であるとするならば、SK18は墓葬の可能性も考えられる。時期的には、遠縁の切り合い関係からSK11とはほぼ同時期としておくのが妥当であろう。

(6) 円形周溝状遺構

S X14 (図35～図43、図版21-2～25-1、巻首図版2)

a 6区とa 7区にまたがって位置するSX14は、平面形が円形周溝状を呈している。直

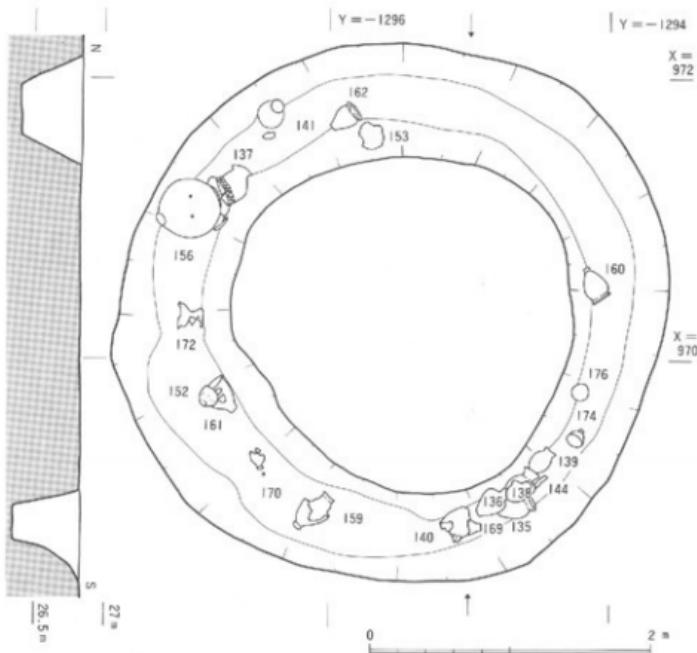
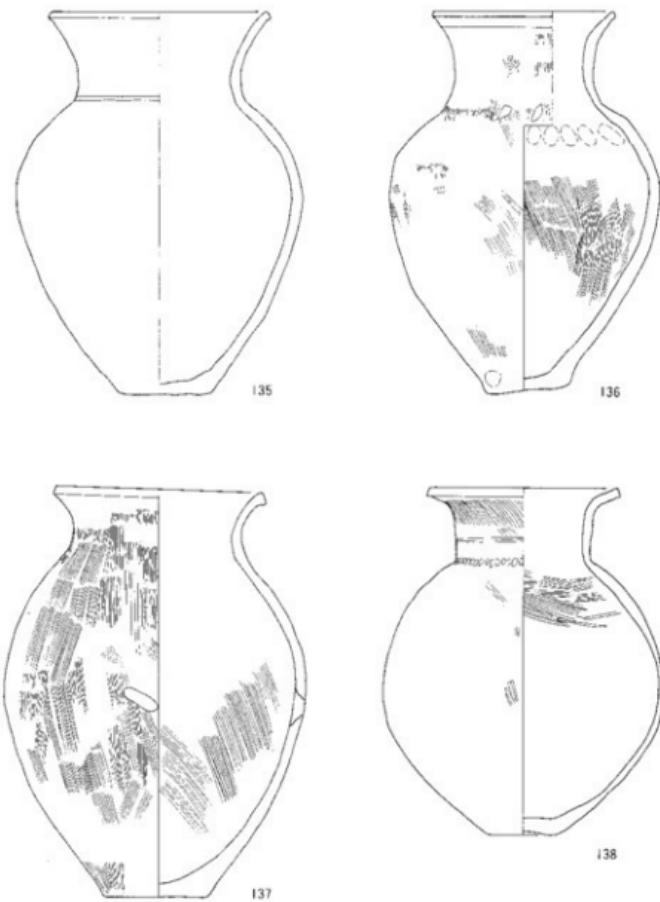


図35 円形周溝状遺構 S X14 縮尺 1/20

遺構と遺物



0 20cm

図36 S X14!出土遺物 (135~138)

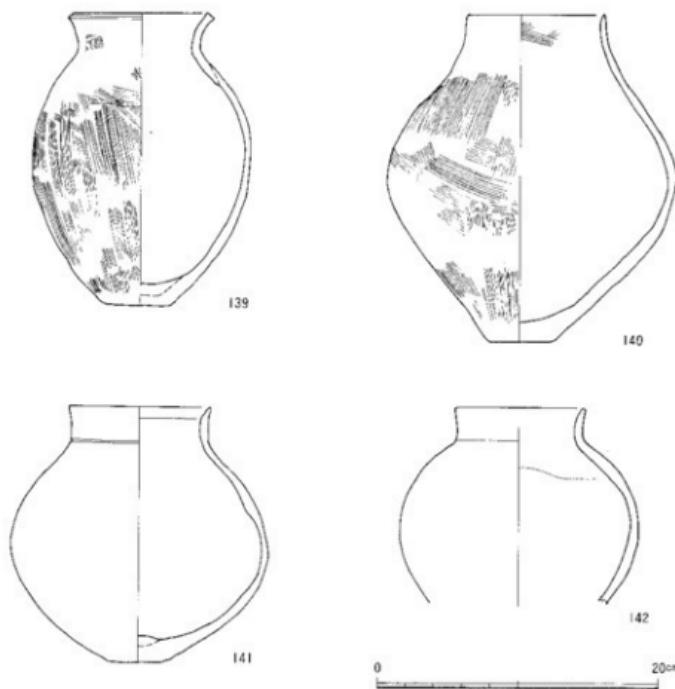


図37 S X14出土遺物（139～142）

径3.9mの円形で、溝の幅は70～90cm、溝の深さは45～50cmを呈する。溝は鋭角的に切り込まれており、周溝内側の平地には土坑などの遺構は何ら検出されていない。出土した土器は、地山面での遺構検出時には細片が多かったが、掘り下げていくに従い完形土器が目立った。S X14の南東側では、135・136・138・139の土器がそれぞれ一定方向に連続するように配置されている。これらに140などの土器などを加えて考えると、これらの土器群は溝が埋積する際に落ち込んだ土器というよりは、溝を埋める際に意図的に土器を配置したと考えざるをえない。一方、S X14の西北部の大型壺156は、壺の口縁に137の壺を載せたものが、自然に倒置した状態で溝が埋積したのではないかとも想像させるような検出状況を呈している。なお、この156内からは小型の甕171も出土している。その他、172の高

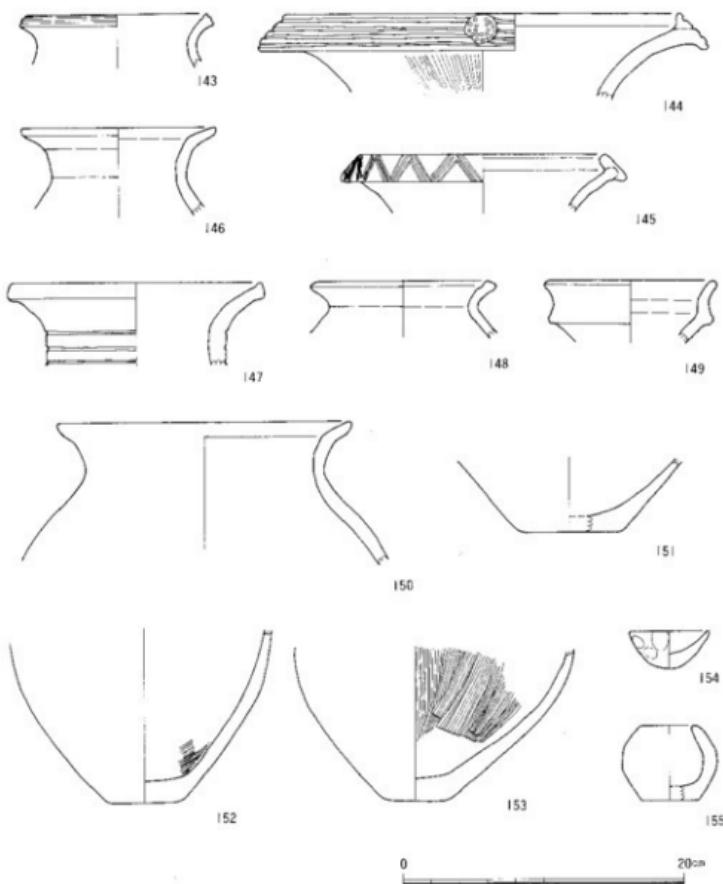


図38 S X14出土遺物 (143~155)

杯や160~162の甕など完形の土器は、溝の底に貼りついた状態ではなく、浮いた状態で発見されている。従って、S X14の南東部の土器群を除いて、大半の土器は、溝がある程度埋積して後、落ち込んだもの、ないし投棄されたものと判断される。その場合、前者では、周溝の周辺にそれらの土器群が配置されていたものが、流れ込んだものと想定できよう。

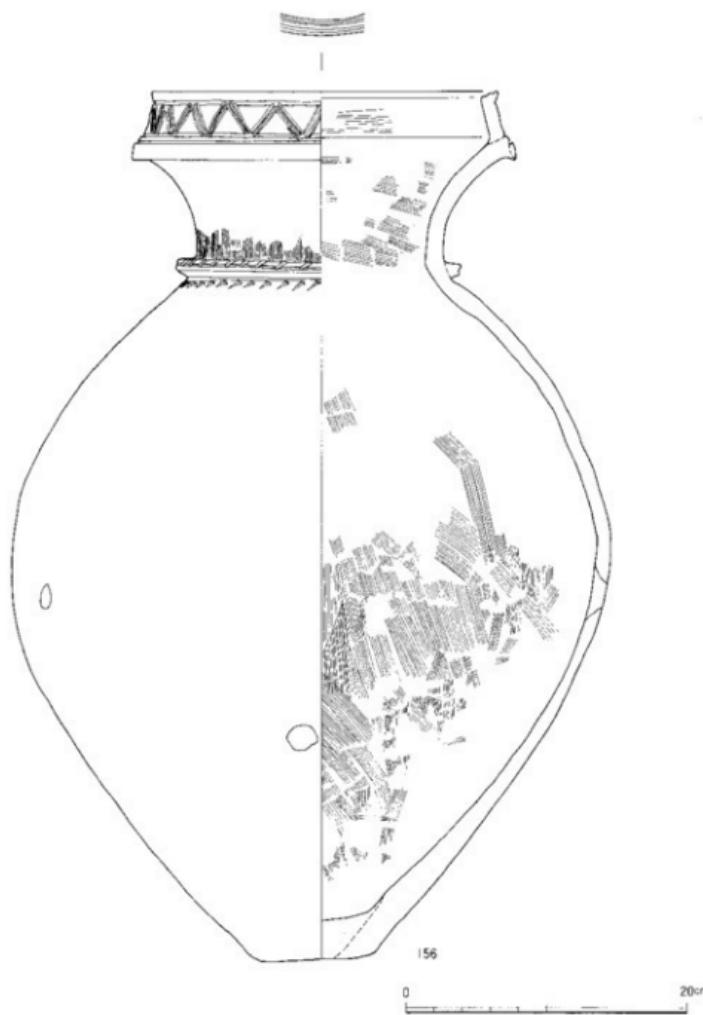


図39 SX14出土遺物 (156)

遺構と遺物

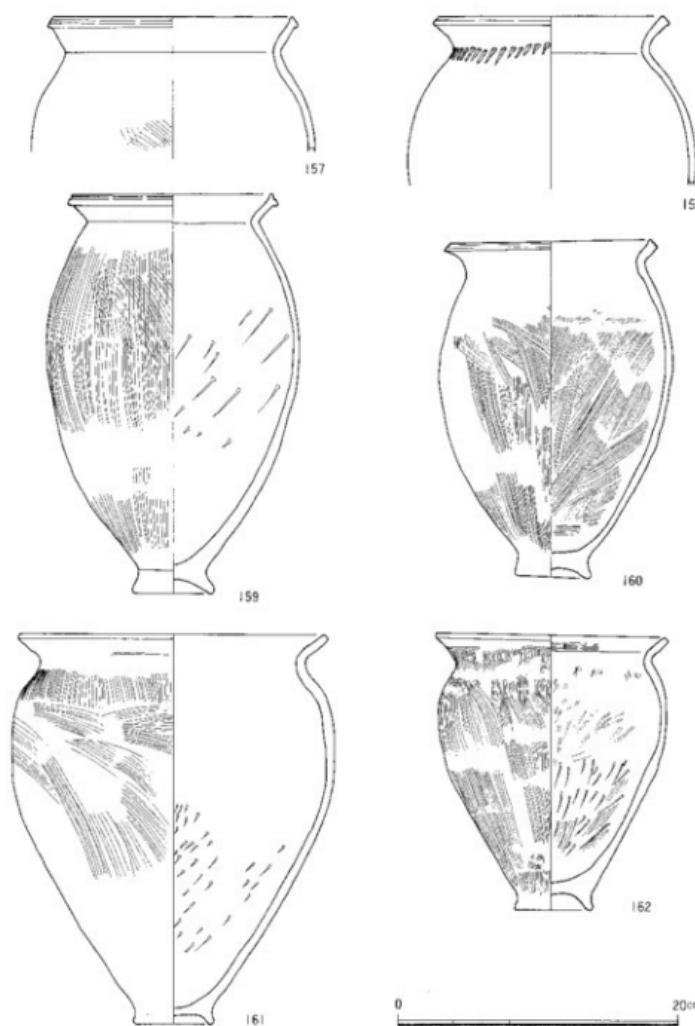


図40 S X14出土遺物 (157~162)

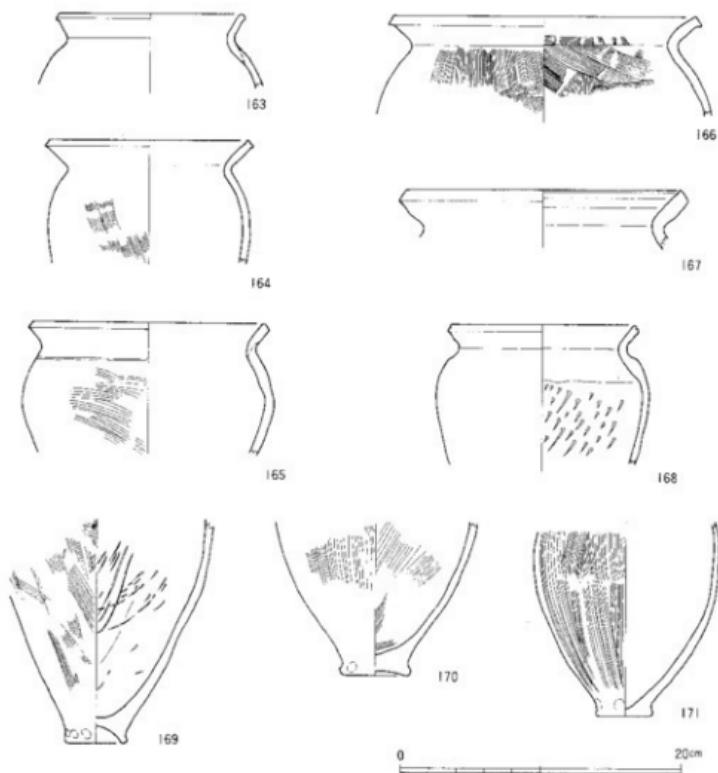


図41 SX14出土遺物（163～171）

すなわち、祭祀用に配置された土器群が祭祀終了後、自然の風化現象に伴って、土器群が流れ込んだものといえよう。一方、後者の判断では、これらの土器群を周溝埋積時に投棄、あるいは意図的に投げ込んだり配置したものということができよう。SX14の南東部の状況からすれば、後者の判断の方が妥当な可能性が強いと思われる。その場合でも、これらの土器群の投棄しない配置は、周溝埋積時における祭礼的な行為である可能性は高いものと考えられる。従ってどちらの解釈においても、SX14は祭祀用の遺構であると考えられるのである。

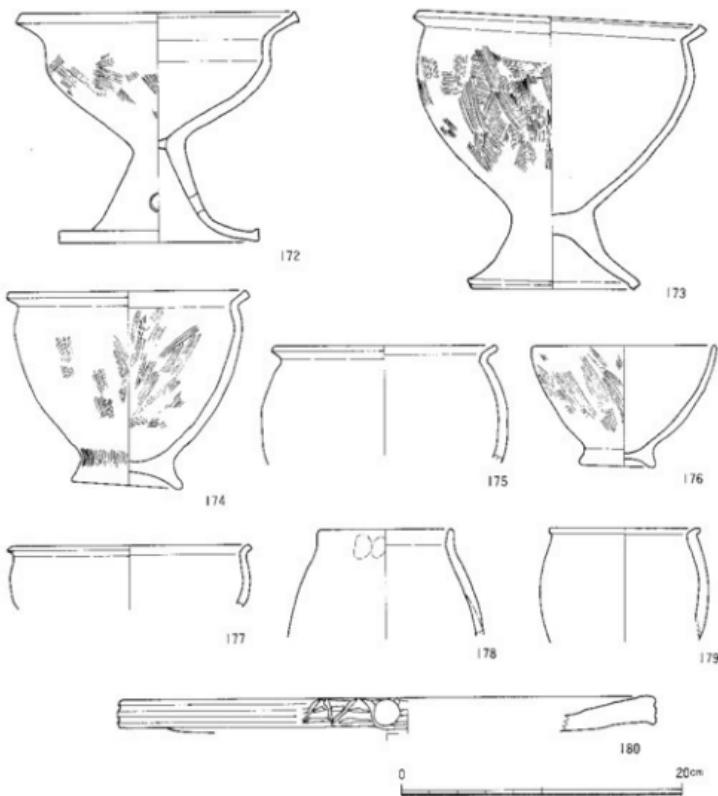


図42 SX14出土遺物（172～180）

SX14からは、壺、甕、鉢、高杯、器台、石包丁、土製紡錘車、砥石、鉄製品などが出士している。

135～153・156は壺である。135～139は長頸壺である。135・136は頸部が比較的長く外反するものである。135は肩部に浅い凹線状の沈線が1条施される。136は肩部に2つの棒状浮文が貼りつけられており、土器の中心を示すものと考えられる。口縁端部はやや肥厚ぎみで横撫でが施されている。それ以下は縱方向の刷毛目、胴部外面では斜め方向の刷毛

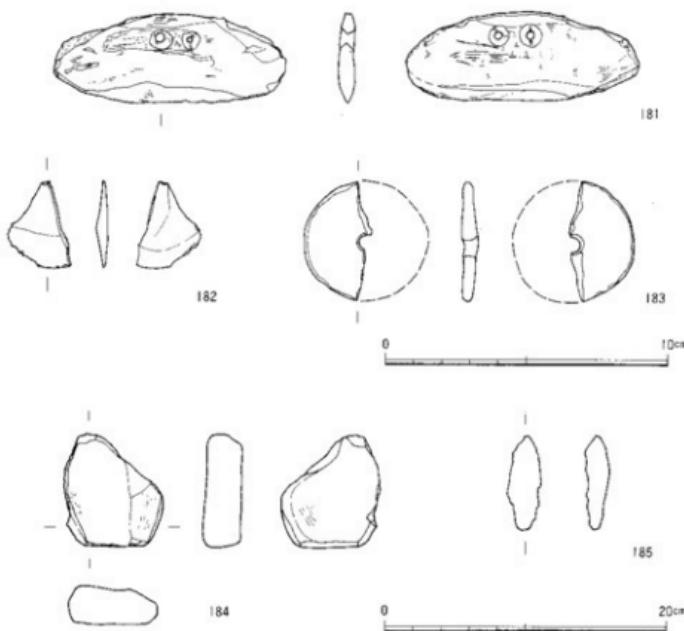


図43 SX14出土遺物（181～185） 181～183のみ縮尺1/2

目が施される。また胴部内面も刷毛目が施されるが、肩部内面には明瞭な指圧痕が認められる。137はやや短めの頸部をもつ長頸壺で、口縁端部がやや下方に張りだす。胴部内外面は刷毛目が施されている。胴部中央には1ヶ所の穿孔がみられる。これは内面から穿孔されており、土器焼成前になされたものと考えられる。また、頸部の屈曲部には2つの刺突文が施される。この刺突文はもう1ヶ所みられるが、完全な点対称とはなっていないが、上器の方向を示すものとして意図されたものであろう。138は直立した頸部から口縁が急に折れまがるものである。頸部外面は縦方向の刷毛目、胴部外面には一部研き状の撫でが認められ、肩部内面は横方向の刷毛目が施される。また肩部と頸部の壠には刺突文が列をなして施されている。139もやや短めの頸部をもつ長頸壺である。胴部外面には縦方向の刷毛目が認められる。口縁端部は強く撫でられることにより、端部下方が張り出している。

このような特徴は、このS X14の長頸壺に共通してみられる様式的特徴といえよう。140～142は短頸壺である。140は外面に刷毛目調整をよく残すものである。口縁部の遺存状況が悪く、口縁端部が図37のごとく収束しているのか確定できない。141は軟質の土器で、焼成状態が悪かったものと判断される。頸部に1条の凹線状の浅い沈線が施される。142もやや軟質の土器である。内面には粘土帯の接合痕が明瞭に残っている。143・144は凹線文を有する壺である。143の凹線はかなり退化しておりかすかに沈線的に残っている。144は大型の壺であり、弥生第N様式の凹線文壺に比べ内面の肥厚が顕著である。また、円形の浮文を貼り、浮文上に刺突文を施す点は特異である。凹線文を4条施され、その間隔は上方から下方に向けて段々狭まっている。145は小型の二重口縁をなす壺である。二重口縁部には櫛描きによる斜格子文が施される。同様に二重口縁を呈する大型の壺が156である。二重口縁の端部はやや外方に張り出しており、口縁端部には2重の沈線が引かれている。また口縁部には二条の平行沈線間に、櫛描きによる斜格子文が施される。また、この斜格子文を画する1条の平行沈線文の下にもう1条の平行沈線文が認められる。この部分は二重口縁の接合部分近くで、さらに外方へ粘土帯を貼られていることが理解された。一方頸部と肩部の辺には隆帯が貼られ、隆帯上を凹ませた後、刻み目を入れ、また隆帯の下端に刺突文を施している。頸部外面に縦方向の刷毛目、頸部内面には横方向の刷毛目、胸部内面には縦方向の刷毛目の痕跡が認められる。なお、胸部には2つの穿孔がみられるが、これらは焼成前に内面からあけられたものと考えられ、137と同様な状況を呈している。149も同様な小型の二重口縁壺といえよう。146・147・150は長頸壺の可能性があるものである。146・150はともに口縁の外半が顕著である。147は頸部に3条の沈線分が施される。148も壺であろう。151～153は壺の底部で、153の内面には刷毛目痕が顕著に認められる。154・155はミニチュア土器である。154は鉢形を呈し、外面に指圧痕がよく残っている。157～171は甕である。157～160は凹線文が退化し、沈線状を呈しながらかすかに残るもの。これらは口縁端部を面取り状に撫でる際にできるものと考えられるが、そのため口縁端部は下方に張り出すというこの時期の様式的な特徴が認められる。158は頸部に刺突文が施される。159・160はともに胸部外面に刷毛目が顕著に認められるが、159の胸部内面には削り状の撫でがみいだされる。ともに上げ底状を呈する。163～168は口縁端部を面取り状に撫でるもので、164・168はそのため口縁部が淀んで見えるものである。また164・166では口縁端部が下方に張り出している。165の頸部にはかすかな横方向の沈線が認められる。撫での痕跡が明瞭に残ったものであるかもしれない。168は胸部内面に下から上に

向けての削り状の撫での痕跡がみられる。169～171は壺の底部である。みな外面に縱方向の刷毛目が施される。169の内面には削り状の撫でが施されている。

172は高杯である。口縁端部を面取りし、杯部外面に刷毛目痕が認められる。172の脚部の透かしは3ヶ所にあけられている。胎土はやや乳白色を呈しており、他の土器群と異なっている。

173～179は鉢である。173は脚付の鉢である。脚端部は凹線状の窪みがみられる。174は173と鉢部分の形状がよく似ているもので、173・174ともに口縁が「く」の字形に外反し、脚部外面には刷毛目が施されている。175・177も同様な形態を呈するが、口縁の外反はややあまくなっている。179はより口縁の外反があまい鉢である。176は174と同様に上げ底の底部を有するものであるが、口縁は外反しない。174・176はともに胎土に石英を大量に含んでおり、焼きもやや悪い。178・179は小型の鉢で、短頸壺の小型化したものといってもよいであろう。

180は器台と考えられるもの。口縁端部に円形浮文を貼り、その両側に平行沈線文と沈線による鋸歯状文が施されている。口縁端部と口線上端には丹漆の痕跡も認められ、祭祀用具と考えるにふさわしいものと思われる。

181・182・184は石器である。181は緑泥片岩製の石包丁。長さ8.2cm、幅3.2cm、厚さ0.5cm、重さ24.5gと小振りである。孔は、右側のものが両面穿孔されているにもかかわらず完通していない。182はサヌカイト製の剥片。長さ3.0cm、幅2.1cm、厚さ3mm、重さ2.1gである。184はホルンヘルス岩製の砥石と考えられるもの。残存長8.0cm、残長幅7.0cm、厚さ2.6cm、重さ220.1gである。表面に2つの磨り面を有している。

183は土製紡錘車。直径4cm、厚さ4mmで、全体の約半分が残っている。残存部の重さは5.5gである。

185は鍛がひどく形状不明の鉄製品である。長さ6.7cm、幅2.3cm、重さ24.0g。形態からは鉗または刀子の可能性が想定できよう。

以上のように、祭祀用の遺構であるSX14の遺物は、上坑SK15・SK11より型式学的に新しい傾向を示しており、SK15・SK11に後出するものと考えられる。

(7) 溝

S D 7 (図44・45、図版16-2・3、29)

溝SD7はa8区にあり、南北方向に位置している。調査区北壁にかかっており、それ以北の状況は不明である。残存長約3.1m、幅約90cm、深さ約45cm。溝の底面の高さは南

遺構と遺物

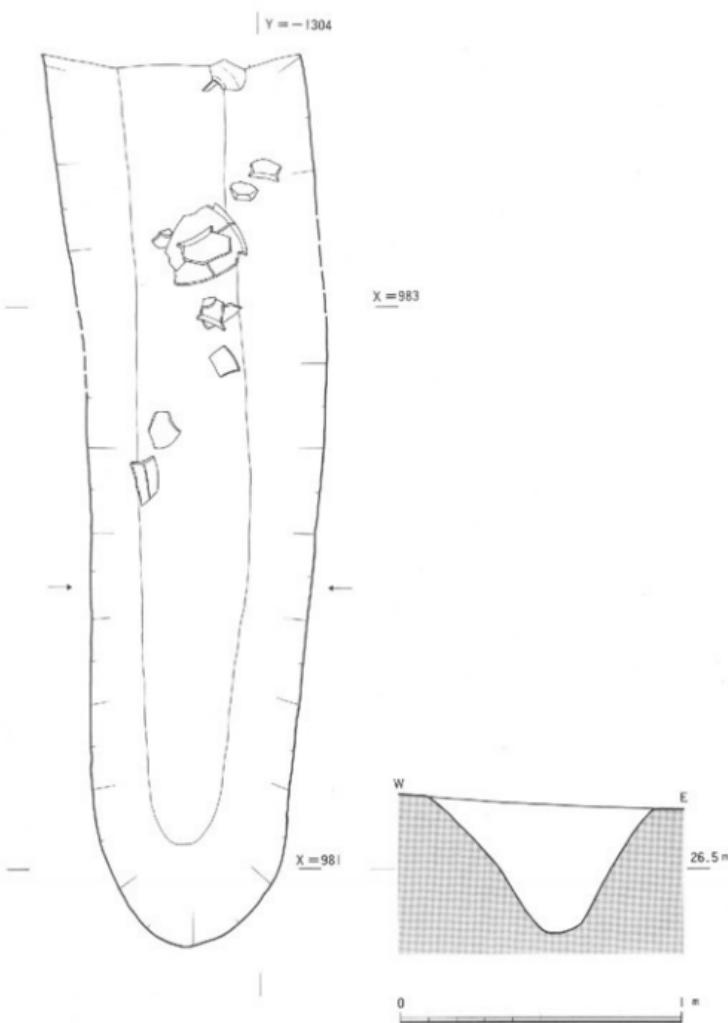


図44 溝 S D 7 缩尺 1/10

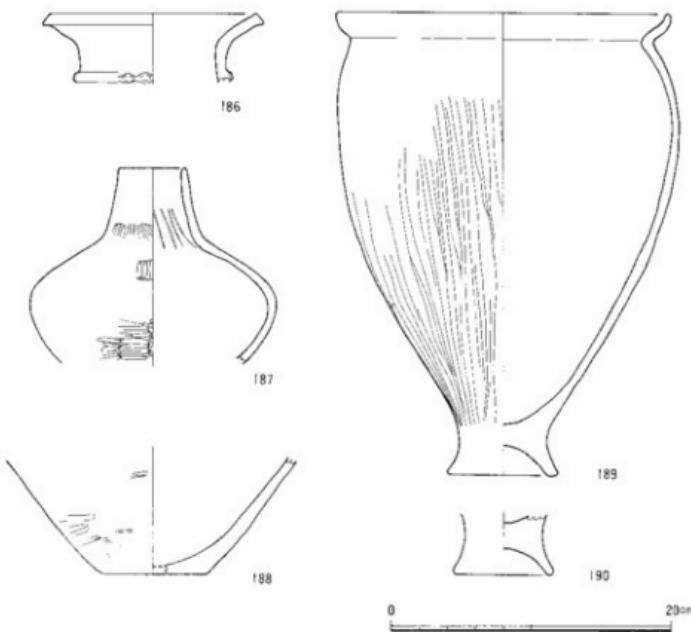


図45 SD 7 出土遺物 (186~190)

から北に向けて若干低くなっている。出土した土器は、この底面に貼りついた状態で検出された。189の甕は、復元するとはほぼ完形を呈し、溝内で破損したものと考えられる。ただし、SD 7は埋積状態からは自然流水とは考え難い。

186~188が壺である。186は口縁部で、端部には凹線文は認められない。頸部に1条の隆帯を貼り、隆帶上を指押ししている。187は長頸甕。胴部外面上半には縦方向の研ぎ、胴部外面下半には横方向の研ぎがみられる。また頸部内面には、粘土の絞り痕が顕著である。188は壺の底部。外面に横方向の研ぎが若干認められる。186と188が同一個体であるかは、焼や胎土などからは判断し難い。189は口縁が内湾するこの地域の特徴的な甕である。⁽²⁾既に文京遺跡第2次調査においても出土している。胴部外面には縦方向の研ぎが認められ、底部は上げ底状を呈している。190も同じく上げ底状を呈する底部である。

SD 7出土土器は、186の壺がやや古式の傾向を示しているが、その他の土器群から一

心彌生第Ⅳ様式に属するものと考えておきたい。

SD 8 (図11・46)

SD 8はa 7区に位置し、南西から北東方向に方位をとる。長さ約7m、最大幅約70cmである。深さは、北半では約40cmで、南側になるにつれ浅くなり、南端部では約5cmとなっている。SD 7と同様に自然流路とは考えられない。

191は2条の凹線文を口縁端部に有する壺。凹線は浅くやや退化している。193は高杯の脚部。192は口縁端部に刻み目を有し、口縁外面には縱方向、内面には横方向の刷毛目が施されるもので、在地系の甕と考えられる。194・195は口縁端部をつまみ上げる系統の甕であるが、端部のつまみ上げではなく、口縁端部が窪みぎみに撫でられている。また、口縁と頸部の肩には強い撫で痕が残っている。これもまた在地系の甕に属するものであろう。196・197はともに上げ底状を呈する甕の底部であるが、前者の方が上げ底状部分は発達している。

SD 8の出土遺物はやや量的に少なく、明確な年代決定は難しいが、191の凹線文壺や194・195の甕の特徴から、弥生第Ⅳ様式に属するものと考えられる。従って、SD 7とSD 8は同時期に埋積した可能性が高く、同時存在していたことも想定できよう。その場合、調査区の東半と西半を区分する溝の可能性もあり、SD 7とSD 8の切れ目は、進入路の可能性も考えられる。なお、南接するSD 12には遺物が出土しておらず年代決定は不可能であるが、掘立柱建物跡SB 6を切っている可能性があるところから、弥生第Ⅳ様式以降のものと考えられる。従って、SD 12はSD 7・SD 8とは同時期に存在していたとはいえないことになる。

SD 13 (図11・46)

SD 13は、i 7, j 7, j 6区に存在し、コ字形を呈する溝である。幅約70cm、深さ約10cmである。南端部分は擾乱によって破壊され、西端部分は調査区西壁にかかっており、不明である。検出状況からすればSD 9やSB 3を切っていることが考えられ、またSB 2を切っている可能性が高い。後者の点については、SB 2の説明で示したように、SB 2内で遺物が浮いた状態で検出されかつSD 13の流路状にそれらの遺物があたっていることが、傍証材料となっている。

198～201がSD 13出土遺物である。198は短頸壺。口縁端部がやや丸味を帯びている。胴部外面は刷毛目の痕跡がかすかに残り、内面には横方向の削り状の撫で痕が明瞭である。199は矢羽根状透しを有する弥生第Ⅳ様式の典型的な高杯である。199の出土位置は住居址

弥生時代

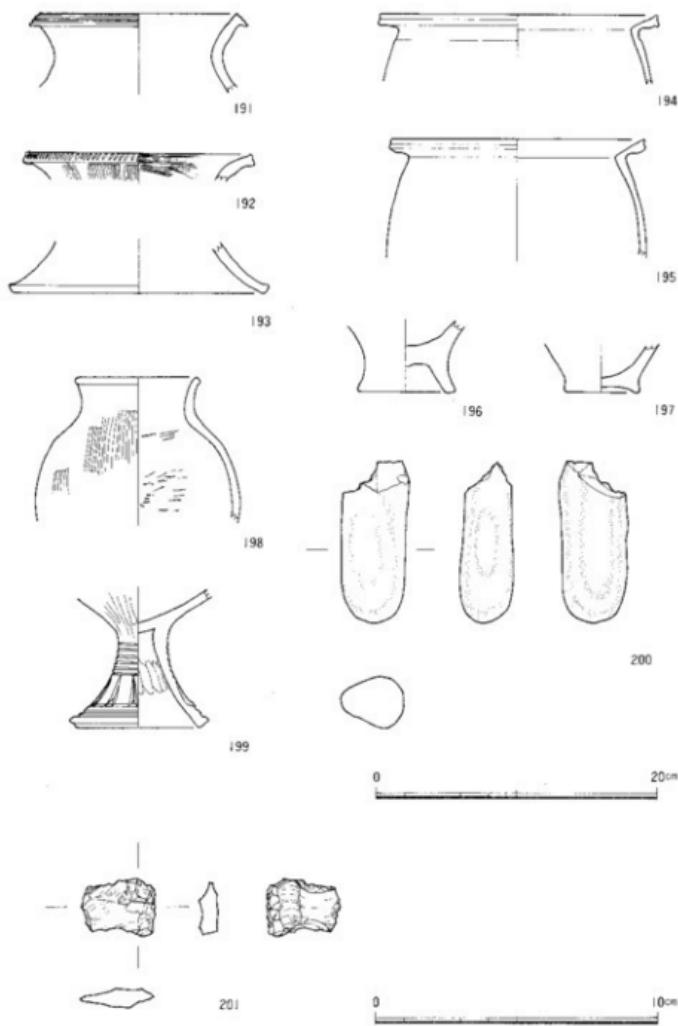


図46 溝S D 8出土遺物（191～197） 溝S D 13出土遺物（198～201）

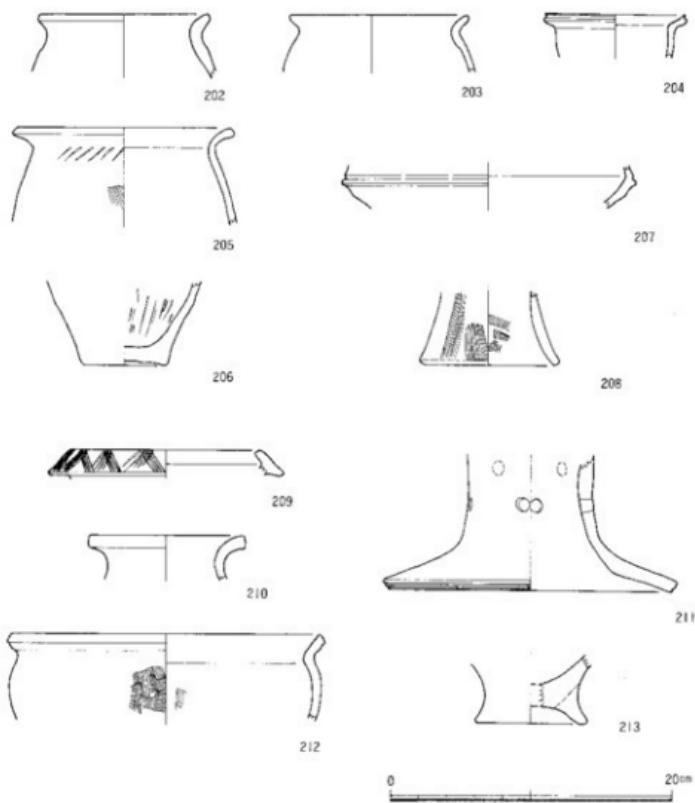


図47 潟SD 5出土遺物(202~208) 潟SD 6出土遺物(209~213)

S B 3とごく近接した地点で発見されており、S B 3のものが流れ込んだ可能性がある。200は砂岩製の磨石状の石製品。石器の3側面に磨面が認められる。201は赤色頁岩製の剥片。側面には細部調整状の調整痕らしきものがみられるが、明確な細部調整とはいえない。

以上のように、SD13の遺物は少なく、また199~201の遺物が明確にSD13に伴うものであるかどうか不明といえよう。198のみから弥生第V様式に属するものであると想定されるが、遺物から年代の特定は難しい。遺構の切り合いから、SD9・SB3・SB2以

弥生時代

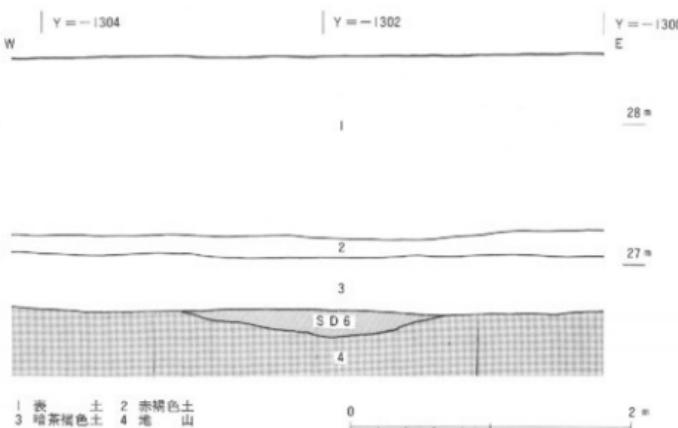


図48 清SD 6の位置 縦尺1/40

降のものとすることができよう。また自然流路とは考えられず、住居を取り囲む溝である可能性がある。特に住居址SB 4とは方位が同じであり、集落内のこれらの住居址を囲む溝であることも想定できる。

SD 5 (図11・47)

SD 5は調査区西北隅のa 8・j 8・j 7・i 7に位置している。北東から南西方向に流れている溝であり、それぞれ調査区北壁と西壁にかかっており、それ以北と以西は不明である。ただし文京遺跡第2次調査においても同様な溝が調査区西北隅で検出されており、それに連続する溝であると考えられる。また、埋土内下層は砂質土からなっており、SD 5は自然流路の可能性が高い。検出状況から判断して、SD 5はSD 7を切り、SD 6とSD 4によって切られているものと考えられる。

202~208が出土遺物である。202~206は甕。204は口唇に沈線状に窪みがある小型の甕ないし鉢である。205は胴部外表面の刷毛目を施し、頭部に刻み目を入れる弥生第V様式の典型的な甕。206は内面に削り状の撫でを有する甕底部である。207は高杯の杯部の一部と考えるもの。杯部屈曲部がやや外方へ突出し、突出部の上端に1条の沈線が引かれるもので、特異な形態を示す。208は高杯の脚部で、内外面に刷毛目痕をよく残している。

SD 5の年代は、出土遺物から判断して弥生第V様式前半のものと考えられる。また遺

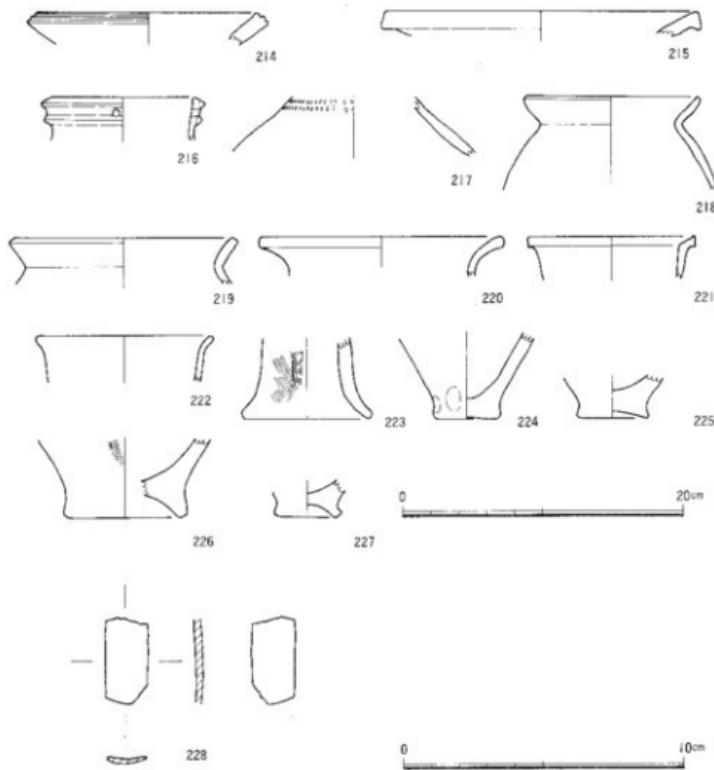


図49 溝SD4出土遺物(214~228) 228のみ縮尺1/2

構の切り合いからは、統いて説明するSD6よりは前出する溝であると判断される。

SD6 (図11・47・48)

SD6は調査の南東隅から北西にむけて流れ出る流路状の溝である。図48の調査区北壁で示すように、SD6の幅は約1.8m、深さは約20cmと小さな溝である。ただこれは地表面での検出時の大きさであり、後に述べる遺物集中地点との関連からはより大きな流路であった可能性がある。ただし、この流路は恒常に流れ出ていたものではなく、暗茶褐色

上埋積時に、一時的に流れ出たものと判断される。なお、SD 6は住居址SB 1を切り、溝SD 5・SD 8を切っており、溝SD 4とSD 10によって切られている。

209～213がSD 6出土遺物である。住居址SB 1内の30も既に述べたように、SD 6に含まれるもの可能性がある。209は複合口縁の壺。複合口縁部には擗描きによる鋸歯状文が施される。210も壺、212は鉢。213は甕の底部である。211は器台の脚部である。円孔の透しはおそらく2個が組となって1段に6個施され、上段と下段で互い違いになるよう配列されている。脚端部は凹線状の沈線が2条引かれている。これらの遺物からは、SD 6が弥生第V様式に属するものであることは確かであるが、詳細な年代は決め難い。209や211の存在から、SX 14段階以降に属するものと判断される。SD 6は、後に記述する遺物集中地点のSX 11やSX 12の一部と同一のものである可能性があるところから、それらの検討を待って、詳細な年代観を示したい。

SD 4 (図11・49、図版17)

a 6・a 7・a 8区に位置しており、南北方向に方位をとる。北端は北壁にかかり、南壁は攪乱によって切られている。遺構検出時には、SD 5・SD 6・SD 9を切っている最も新しい溝と判断された。

214～228が出土遺物である。214～216は壺。214は2条の凹線文が口縁端部に施される凹線文壺。216は口縁部に2条の隆帯が貼られた長頸壺。214・216はともに弥生第IV様式に属する古式の壺である。215は口縁が下方に貼り出すもの。217～220、224～227は甕である。217は頸部に2列の刺突文を施すもの。218～220は口縁がくの字状に外半する甕、222～227は甕の底部と考えられるものである。221・222は鉢。221は口縁端部が強く撫でられ、凹みを呈するものであり、ミニチュア甕の可能性もある。223は外面に刷毛目の残る高杯脚部。228は鉄器で、断面が反っているところから鉈に相当するであろう。残存長3.0cm、幅1.5cm、厚さ1.5mm、重さ3.4gである。

SD 4は、出土遺物の内215の壺や217の甕の特徴から、弥生第V様式に属するものであることは確かであろう。遺構の切り合いからはSD 6より後出するものである。

(8) 柱 穴

柱穴は調査区の南側部分に多くみられる(図50)。とくにa 6・c 6区とi 6・j 6区に集中している。これらは掘立柱建物跡SB 5・6以外では、建物跡や柵列を構成しておらず、それらの性格は不明である。また柱穴内に遺物が混入する例は少なく、年代決定も難しい場合が少なくない。ここでは、遺物を包含している柱穴についてのみ説明を行いた

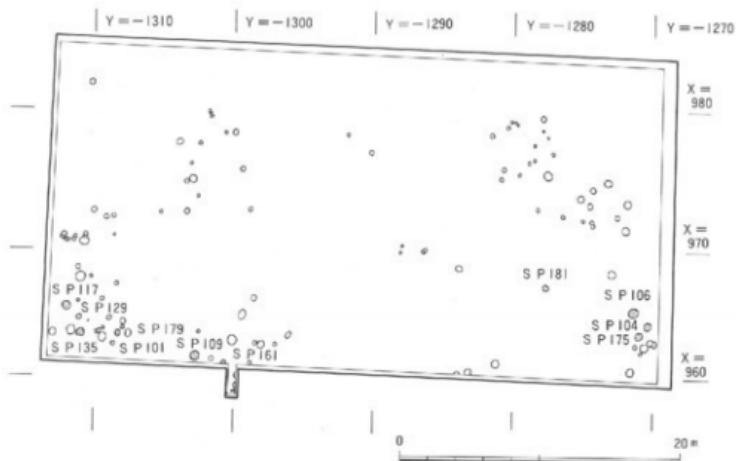


図50 孵生時代の柱穴 縮尺1/400

い。それらに該当する柱穴は、c 6 区と j 6・i 6 区の大きく 2 つの地区に分かれて分布している。そこで、地区別にそれらの内容を眺めてみたい。

c 6 区 (図51)

c 6 区で遺物を包含している柱穴は、SP104・106・175・181があげられる。

229~231がSP104出土の遺物である。SP104は直徑約60cm、深さ約10cmの柱穴ないし土坑である。229・230は、口端部をつまみ上げる弥生第IV様式の典型的な甕である。231も同時期の矢羽根状透しをも高杯の脚部である。

SP106は直徑約70cm、深さ約30cmで、中心に直徑約20cmの柱あたりをもつことから柱穴であることは確かである。232・233がその出土遺物である。233は、SP104の甕と同様に、口縁端部をつまみ上げる同時期の甕。232はミニチュアの鉢であろう。

236はSP168出土遺物である。SP168は直徑約50cm、深さ約25cmをなす。236は弥生中期末~後期前半の特徴を示す甕底部である。

SP181は直徑約40cm、深さ約10cmを示す柱穴ないし土坑である。SP181出土の234・235は胎土に金雲母が多量に含められている点が、特異である。234・235はどちらも甕に属する。234は頸部に斜方向の刻み目が施される。235は口縁端部が強く撫でられ、口縁端

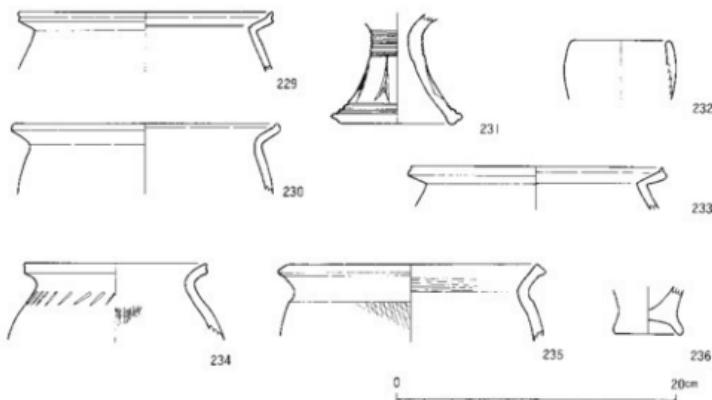


図51 S P 104出土遺物（229～231） S P 106出土遺物（232・233）
S P 181出土遺物（234・235） S P 168出土遺物（236）

部下方が張りだすものである。口縁内面と頸部下面には刷毛目が認められる。弥生後期S X15・SK11段階以降に属するものであろう。

I 6・j 6区（図52・53）

237～241・250がS P 117出土遺物である。S P 117（図版15-2）は直径約50cm、深さ約40cmで柱あたりを有する柱穴である。掘立柱建物跡S B 6と同様に、遺物量の多さからも柱穴祭祀を行っている可能性が考えられる。ただしS P 117と組み合わさせて遺構を構成する柱穴が存在するかは、S P 117が調査区の東南隅に位置するため、明確ではない。237は凹線文を有する壺。239は口縁端部に1条の凹線状の沈線が引かれた特異な形態を示す壺。240・241は壺の胴部・底部である。238はかすかな凹線文を有する壺。外面には刷毛目が施される。250（図版34）は用途不明の石製品。砂岩製で角の面取りが行われている。残存長約5cm、残存幅約4.5cm、厚さ4.5cm、重さ107.5gである。表面には薄い斜線で示すような黒色の焼けた面がみられる。同じような黒色の焼け面は裏面の一部にも認められる。鑄型の可能性を想定したが、明確な証拠は見い出せない。S P 117の年代は、237・238の特徴から、弥生第IV様式に属するものと考えておきたい。

S P 161は直径約30cm、深さ約25cmの柱穴である。242・243がその出土遺物、242は2条の凹線を有する壺、243は鉢である。両者の特徴からは、S P 117と同時期のものと判断さ

遺構と遺物

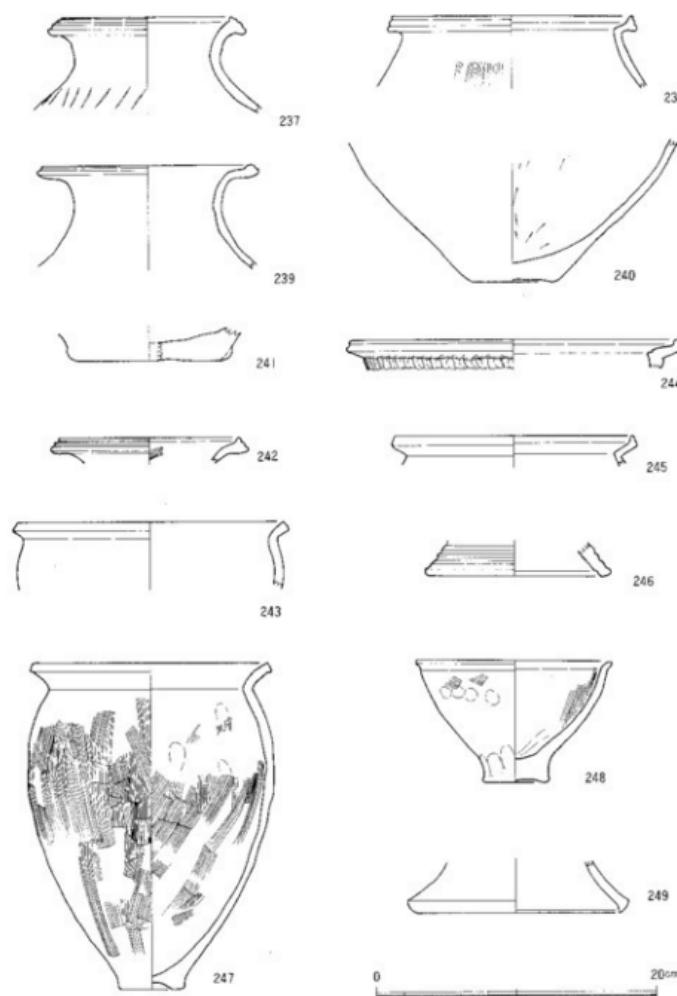


図52 S P117出土遺物(237~241) S P161出土遺物(242・243) S P179出土遺物(244)
S P129出土遺物(245) S P109出土遺物(246) S P101出土遺物(247・248)
S P135出土遺物(249)

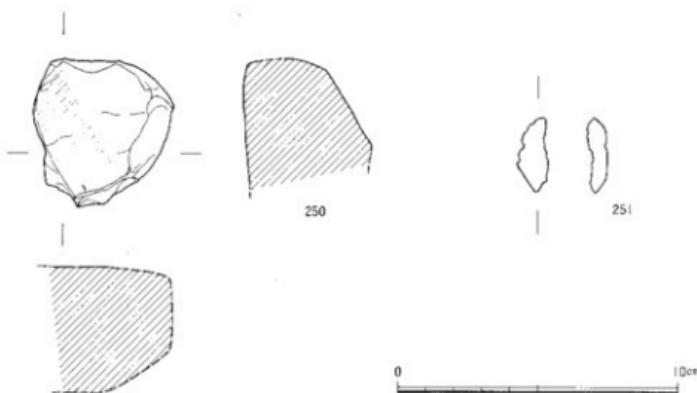


図53 SP 117出土遺物(250) SP 174出土遺物(251) 縮尺1/2

れる。

244はSP 179出土遺物。245はSP 129出土遺物である。ともに口縁端部をつまみ上げる甕で、前者は頸部に刻みを有する隆帯が貼られる。246も同じ凹線文段階の高杯で、SP 109出土遺物である。これらの柱穴は、出土遺物が僅か1点であり、明確な年代決定は難しいが、図示したものは弥生第IV様式のもである。なお、SP 179は直径約30cm、深さ約50cm、SP 129は直径約20cm、深さ約20cm、SP 109は直径約50cm、深さ約45cmである。

SP 101(図版16-1)は直径約30cm、深さ約10cmで、247と248が出土した。248(図版34)は完形の状態で柱穴内に埋置され、その上に247が破片の状態で検出された。これも柱穴祭祀が行われていた可能性が想定できよう。247は胴部内外面に刷毛目調整がよく残るもので、口縁端部は下方に張りだすSX15・SK11段階以降の特徴を示す。248は鉢で、刷毛目調整や指圧痕が認められる。SP 101は、住居址SB2に接して位置することから、SB2と関連する遺構になる可能性も考えておきたい。

249はSP 135出土遺物である。SP 135は直径約50cm、深さ約45cm。249は高杯の脚部で、亦生後期に属するであろう。

251(図版34)は形態不明の鉄製品である。残存長2.7cm、残存幅1.1cm、重さ1.6g。SP 174出土遺物で、他に共伴する上器はない。SP 174は直径約20cm、深さ約20cmである。

(9) 遺物集中地点

弥生時代の包含層である暗茶褐色土を発掘する際に、SX1～SX13の遺物集中地点12ヶ所を検出した（図54）。なおSX6は図示していないが、これはSK4と同一であり、発掘時の遺構の名称決定の混乱によるものである。暗茶褐色土は厚さ50～60cmに達する包含層であるところから、人工的に厚さ10～20cmで3層に分けて発掘した。上から上層、中層、下層である。上層ではSX1・SX2（図55）、中層ではSX3～SX5・SX7～SX11（図56）、下層ではSX12・SX13（図57）が検出された。

図54で示されるように、SX1・SX3～SX5はb6区、SX7～SX10はc6区、SX2・SX11～SX13はa7・a8区に地点が集中している。個々の遺物集中地点の遺物内容については後述することになるが、SX1・SX3～SX5は弥生中期末、SX7～SX10は弥生後期前半、SX2・SX11～SX13も弥生後期前半である。この内SX2（図版5-2）は、遺物の依存状況が悪く、遺物取り上げ後に崩壊したため、遺物内容の詳細なあり方は不明である。一方、一連のものであるSX1・SX3～SX5は、地山面で検出された溝SD11にはほぼ対応している。SD11は検出面からの深さが約10cmと浅く、SX14付近で漸移的に消滅している溝である。本来の溝の堀り込み面はより高い所にあり、溝の深さも深かったものと推測される。その意味で、SX1・SX3～SX5がこの流路方向にはほぼ対応した位置で検出された点は、これらの遺物集中地点が溝SD11の一部であった可能性を強くしている。同様に、SX11とSX12の位置は、溝SD6の流路方向に一致している。後に述べる遺物内容から判断しても、SX11とSX12の一部はSD6に含まれる可能性が高い。なお、SX12は不整形を呈しているが、これはこのSX12の位置が溝SD4・SD5・SD6の交錯している地点と重なっているためである。すなわち、SX12は、SD6に対応する遺物のみならずSD4とSD5に対応する遺物を包んでいる可能性が高いのである。さらにSX13が溝SD4の流路位置と一致していることからも、SX12の一部とSX13はSD4に対応する遺物を包含していると推測されるのである。

SX7～SX10が何らかの遺構と関係しているものであるかどうかは不明であるものの、それ以外でSX2を除く遺物集中地点は、地山面で検出された遺構に伴うものである可能性が高い。従って、地山面で検出した遺構は、本来の堀り込み面はより高い地点に存在することになるのである。逆に言えば、遺物包含層である暗茶褐色土を人工的に分層しても年代的な推移は追い難い。遺物包含層内には遺構に付随する遺物が含まれる可能性が高いところから、地点差が年代差を生む可能性が高いことになるのである。以下、個別に遺物集中地点の内容を述べていくことにしたい。

SX 1 (図54~図63, 図版5-1, 図版35)

図版5-1に示すように、SX 1は不整形に遺物が集中している地点をさす。ここからは、壺、甕、鉢、高杯など多量の土器が出土している。

252~276は壺である。壺は大型の壺と中型の壺そして小型のミニチュア壺に分け得る。252~255は大型の壺である。252は口唇が肥厚し、口端部がくの字形を呈するもの。口端部には5条の凹線が施され、さらにその上を縦方向に刻みが施されている。さらに凹線文上に円形浮文が貼られている。また頸部には低い幅広の隆帯を貼って後、2段に押し引き状に刻みが施されている。なお口縁部と頸部は接合しないものの、土器の胎土・色調や調整から同一個体と考えられるものである。253も252と同様に口縁がくの字形を呈し口端部に5条の凹線と円形浮文が施されるが、縦方向の刻みは認められない。254は、252・253と違い口端部が下方に肥厚する凹線文壺である。頸部は252と同様に2段に押し引き状の刻みが施されると思われる。また口端部の文様構成は、252に近似する。255は、同じく口端部が下方に肥厚するものであるが、凹線文は認められない。口端部に斜格子状の沈線文が施され、頸部の隆帯には布目压痕が認められる。255は他の土器群とは違い古式の様相を示しており、弥生第Ⅲ様式に属するものと考えられる。

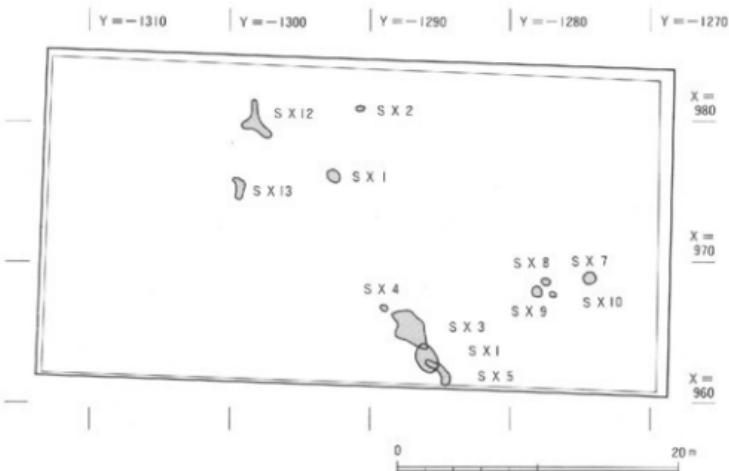


図54 遺物集中地点SX 1～SX 5・SX 7～SX 12　縮尺1/400

遺構と遺物

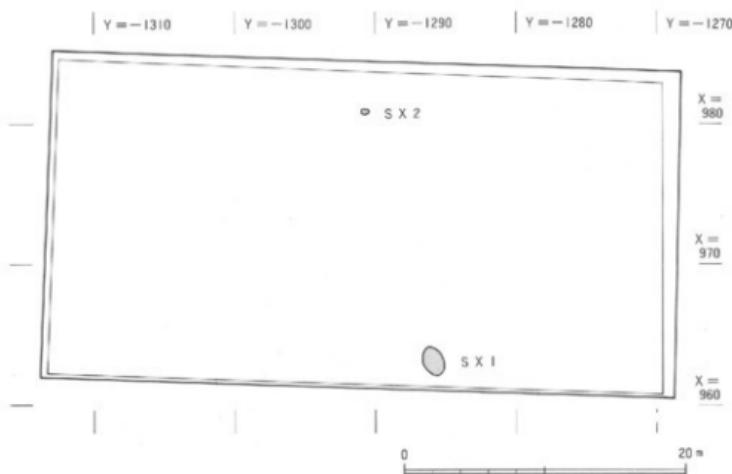


図55 脱茶褐色土上層の遺物集中地点 縮尺 1/400

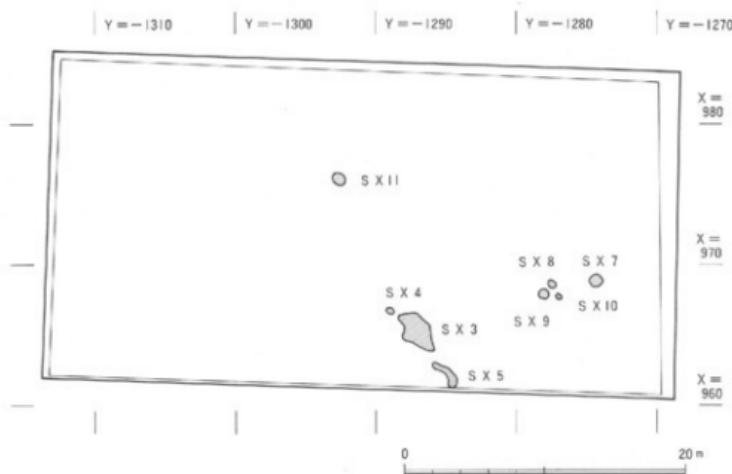


図56 脱茶褐色土中層の遺物集中地点 縮尺 1/400

弥生時代

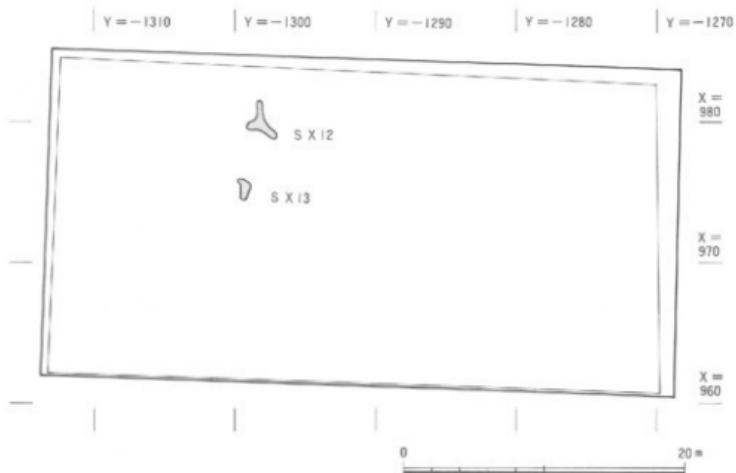


図57 暗茶褐色上下層の遺物集中地点 縮尺1/400

256～270・276は中型壺である。256～266は凹線文壺である。256～262は口端部が上方に肥厚し、263・264は口端部が下方に肥厚している。また265・266は口端部の肥厚がほとんど認められないものである。276はこれらの凹線文壺に伴う胴部であろう。胴部上半は縱方向の刷毛目、胴部下半は、横方向の研ぎが認められる。267は、形態的には、256～262の口端部が上方に肥厚する形態であるが凹線文が施されないものである。268は口縁がくの字形を呈し二重口縁状の特異な形態を示すもの。269は凹線文を有さず、口縁が外反する壺。頸部の1条隆帯は刻まれている。270は、口端部は不明であるが、頸部は大型壺にみられたように、隆帯上が2段に押し引き状に刻まれている。これは板状原体によって施されているであろう。271はミニチュア壺である。272～278は壺底部。273は大型壺に伴うものである。

277は把手付のショッキ型の鉢である。弥生第Ⅲ様式のものに比べやや小型である。口端部には1～2条の沈線が施される。278～280は鉢である。この内、278は頸部に刻み状の斜線文が施される。

281～300は甕である。281はミニチュアの甕。その他の一般の甕は大きく5つに分類できる。A類は凹線文を有する甕であり、282・283があたる。B類は口唇がつまみ上げ状を

量する典型的な弥生第N様式の壺で、287がある。C類は頸部に刻み目の1条隆帯を有するものである。284～286があるが、284は口唇に3条の凹線文を有しており、I類との接夷型式である。また285の口唇には刻み目が施されている。D類の289～300は口縁がくの字形を呈する壺で、在地的な壺である。おそらく上げ底状を呈する底部が伴うであろう。259・296・297に認められるように口縁部から頸部にかけて撫でが施され、頸部と胴部が明瞭に区分されることに、この型式の1つの特徴が存在する。口縁が内渦する288はF類である。在地的な壺であり、完形品はSD7に認められる。

301～313は高杯である。301～303・306～312は典型的な凹線文期の欠羽根状透しを有する高杯である。304・305も凹線文を有する大型の高杯の脚部、文様構成や色調・胎土から両者は同一個体と考えられるが接合しない。313は透しをもたない在地的な高杯の脚部。314は円形の透しをもつ器台の可能性のあるもの。杯部外面には研ぎが施されている。

S X 3 (図64～図70、図版5-3、図版35～37)

S X 3は、S X 1と同様に多量の壺、甕、鉢、高杯などが出上している。S X 1とS X 3は型式学的には同一時期のものである。351の高杯などのように、S X 1とS X 3の土器片が接合する場合があり、両者の遺物出土地点は同一のものである可能性が高い。またS X 1に比べ、S X 3の土器の依存状況はよく、完形の個体に接合できるものがS X 1より多かった。

315～324は壺である。S X 1のような大型の壺は認められず、みな中型の壺である。315・320・321は頸部に隆帯を有し、口縁部に凹線文をもつ壺。315・321の頸部の隆帯はともに布日在痕を有している。また321は微隆帯上に刻まれている。315の場合、口縁が水平に折れ曲がっており、特異な形態を示す。316～319は典型的な凹線文壺である。316は胴部上半に縱方向の刷毛目、胴部に横方向の研ぎ、胴部下半に縱方向の研ぎが認められる。322は凹線文を有せず、口唇部が若干窪み気味の壺である。323・324はともに壺の頸胴部、刷毛目などの調整痕は認められず、撫で調整している。

325～349は壺である。S X 1と同様な分類基準によって、A～D類に分けて説明して行きたい。325は凹線文を有するA類の壺。326は325と同様に凹線文を有するものの、やや粗雑である。しかも、外反する口縁とその下端の頸部を撫で、上げ底状の底部を有する点は、在地的特徴をもつD類壺の特徴であり、326はA類とD類の折衷様式をなすということができよう。330～333は口縁端部がつまみ上げを呈するII類壺である。330は典型的なB類壺に比べ底径が大きい点、やや在地的特徴をもつ。333も頸部に強い撫でを有してお

弥生時代

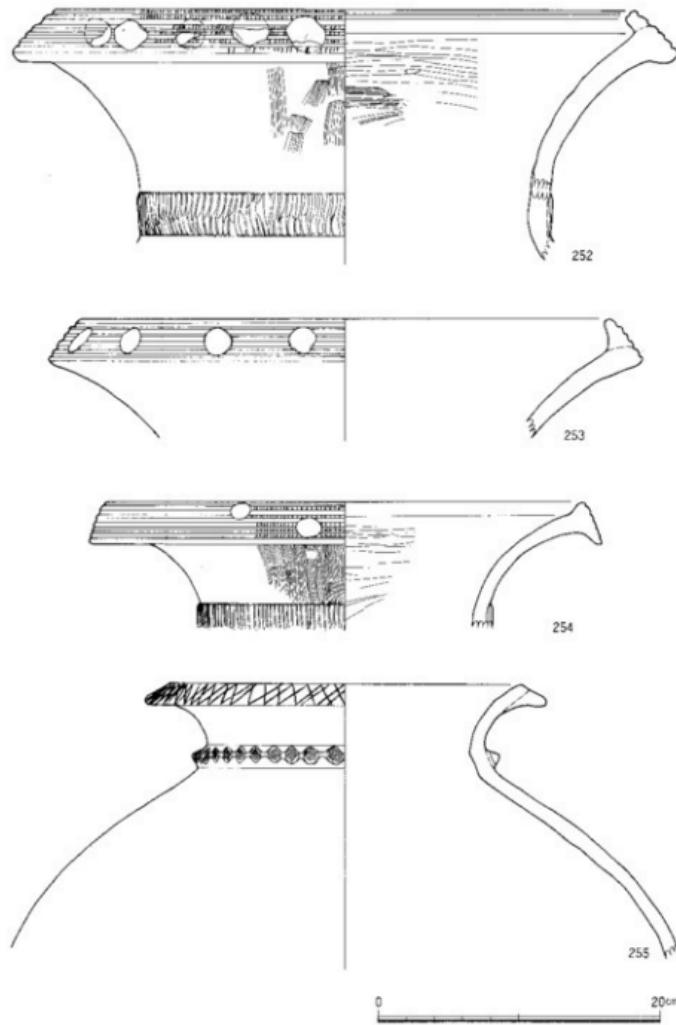


図58 SX 1 出土遺物 (252~255)

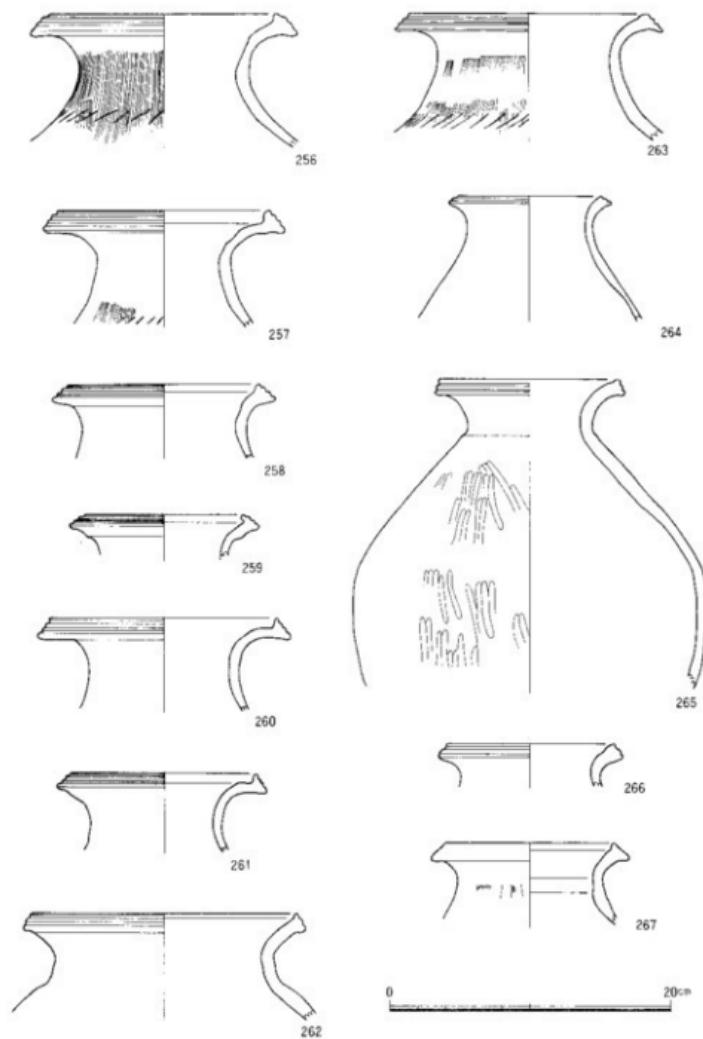


図59 SX I 出土遺物 (256~267)

弥生時代

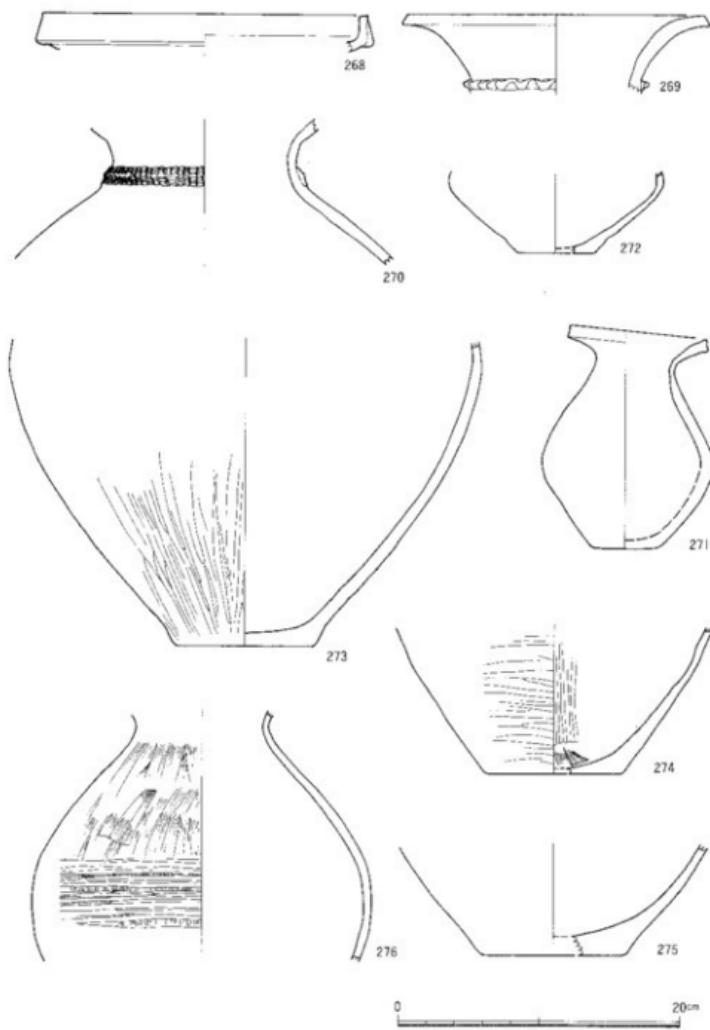


図60 SX I 出土遺物 (268~276)

遺構と遺物

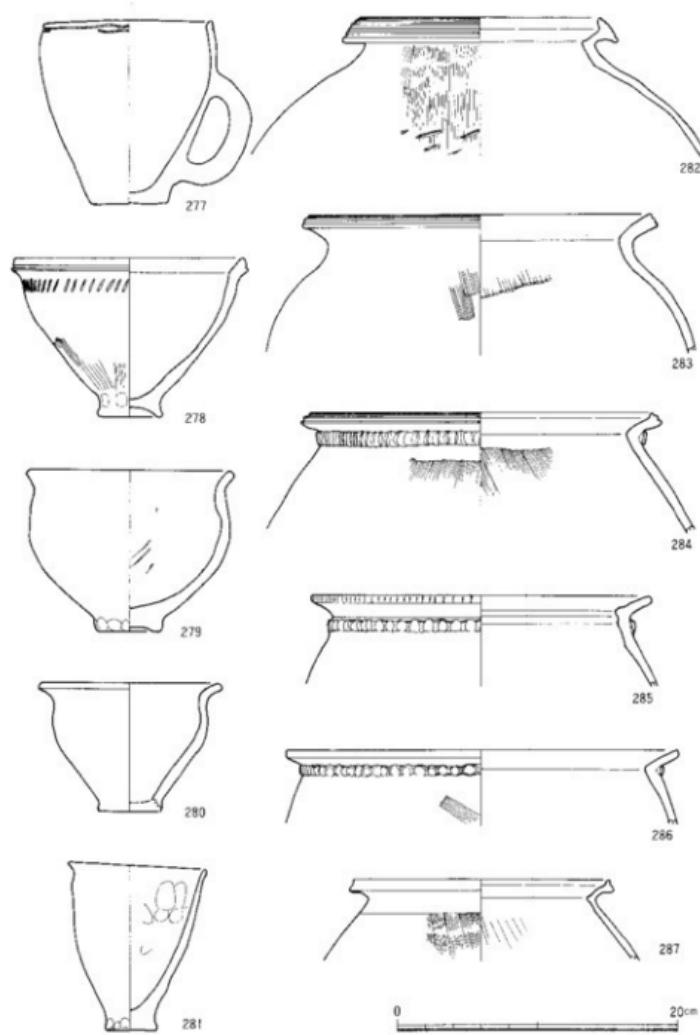


図61 SX I出土遺物 (277~287)

弥生時代

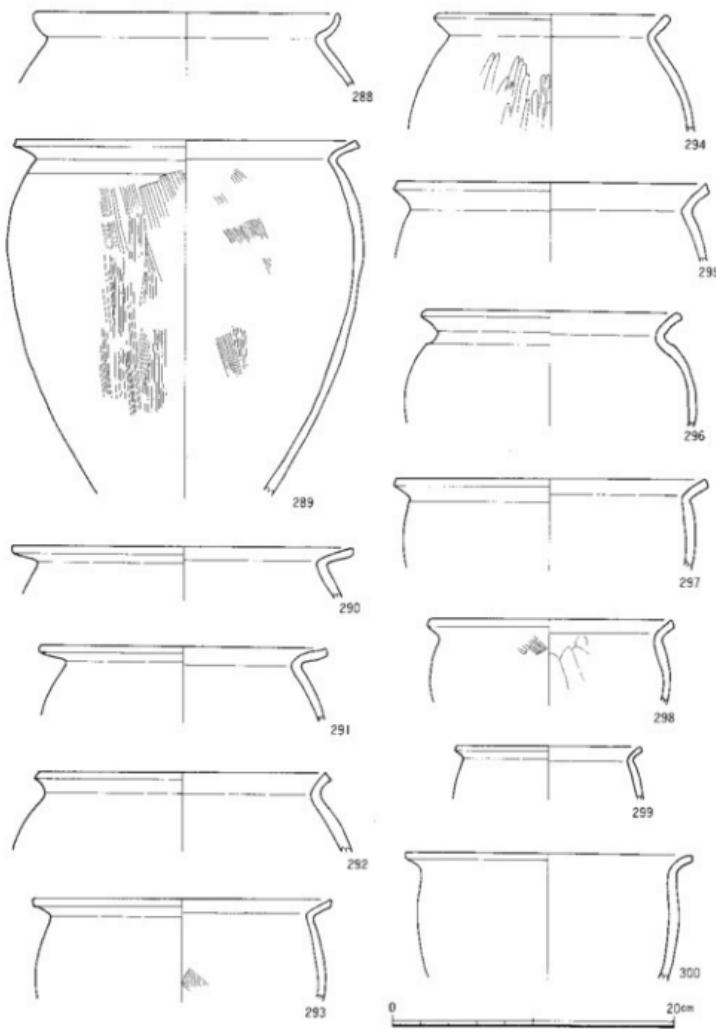


図62 SX 1出土遺物 (288~300)

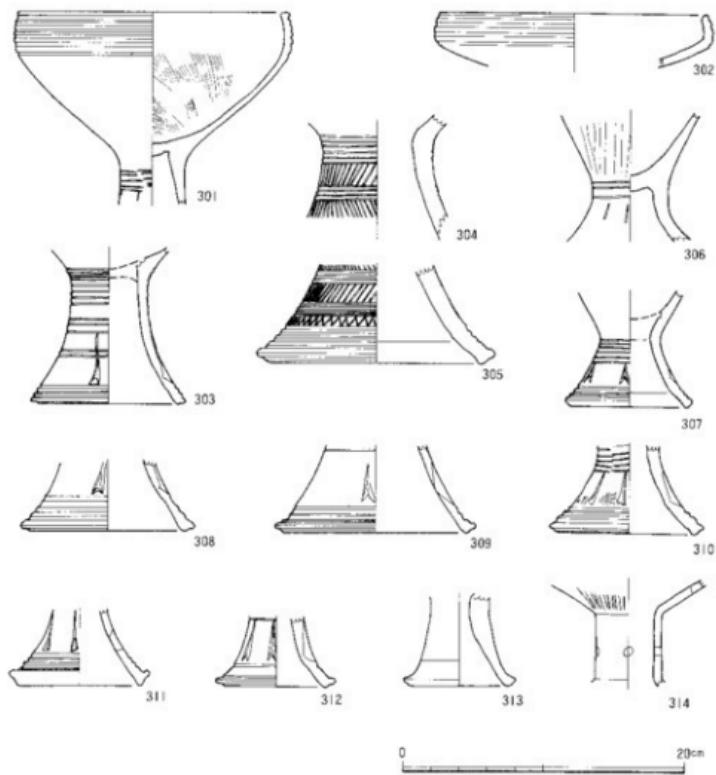


図63 SX 1 出土遺物 (301~314)

り、在地的特徴が認められる。327~329は頸部に刻み目隆帯が貼られる甕C類である。327は隆帯下部にも刺突が施されているように見えるが、これは隆帯上を刻む際に同時に器体にも施文工具が押しつけられたためにできたものである。334~343は在地的な甕である甕D類に属する。特に334・336・338・339~343は頸部に強い横方向の撫で痕が認められ、この型式の特徴をなす。これらの甕の大半は上げ底状の底部をなすものと考えられるが、341のように平底を呈するものもみられる。341はやや特異な形態を呈する地方甕ということができ、E類として独立させた。344~346が平底、347~349が上げ底状底部である。

350～353は高杯である。353はこの時期の典型的な矢羽根状透しを有する凹線文の高杯脚部。352は四線文を有しない、この時期の在地的な高杯である。351は大型の高杯。口縁部に4条の円線文と2段にわたる斜線文が施される。杯下部は内外面ともに研ぎが施されている。脚部は2段に分離して凹線文と矢羽根透しが施される。350は口縁が板状に折れ曲がる特殊な高杯。口縁の内側がやや肥厚することに特徴がある。杯部外面は刷毛目調整が施される。前段階の系譜をひくものあるいは九州系統の高杯とすることができる。

S X 4 (図71)

S X 4 も S X 1・S X 3 と1連の遺構に伴うと考えられる遺物である。図示できる遺物は少く、壺と甕のみである。甕354は口縁断面が三角形状を呈し、口端部に鋸齒状文が施される。口唇下端には一部刺突文が認められる。頭部は、S X 1 の252・254・270と同様に、隆帯上を2段に押し引き文が施されている。口縁部の文様や形態は弥生第Ⅲ様式の特徴を残しているが、頭部文様などから他の遺物と同様に弥生第Ⅳ様式に属する遺物であることが判断される。355は口縁に凹線文、頭部に隆帯を有するC類甕。356は在知的なD類甕である。357はS X 3 では認められなかつたが、口縁が内湾する地方的特徴を示すF類甕である。完形品はS D 7の189と同様な形態であろう。

S X 5 (図72)

S X 5 も、遺物内容や出土位置からみて、S X 1・S X 3・S X 4 と一連のものである。358～361が甕。すべて凹線文甕である。362は矢羽根状透しをもつ高杯脚部。363～367が甕である。363は口縁部に2条の凹線文をもち、頭部に刻み日隆帯を1条もつものである。A類甕とC類甕の接続的な様相を呈する要であり、分類上はC類甕に属する。364・365は口端部がつまみ上げ状を呈するB類甕。367・368は在地性を示す甕である。366が口縁が内湾するF類甕。367は口縁がくの字形を呈するD類甕である。

S X 7 (図73)

S X 7～S X 10は、遺物内容や近接した地点に位置することから、一連の比較的時期の近接した遺物であることが考えられる。これらは後期中甕に属するものであろう。

368～371が甕である。368・369は複合口縁を呈する甕である。複合口縁を呈する口縁部文様は欠損しているため不明。370は凹線文甕で、弥生第Ⅳ様式の古い時期のものが混入したものと考えておきたい。371は甕の底部。372・373は高杯である。372は杯部で、口縁部分に凹線文を施す。373は脚部である。374は口端部が面取られる鉢。375～377は甕である。375は甕の口端部がやや下方に垂れぎみに撫でられるもので、内外面に刷毛目痕が顯

遺構と遺物

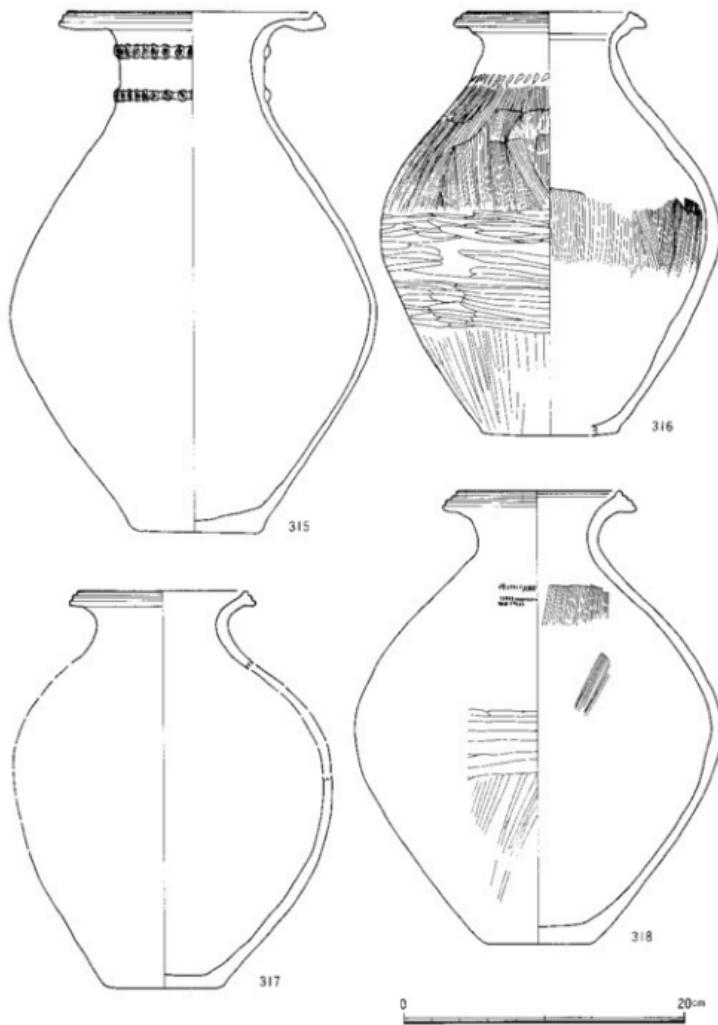


図64 SX 3 出土遺物 (315~318)

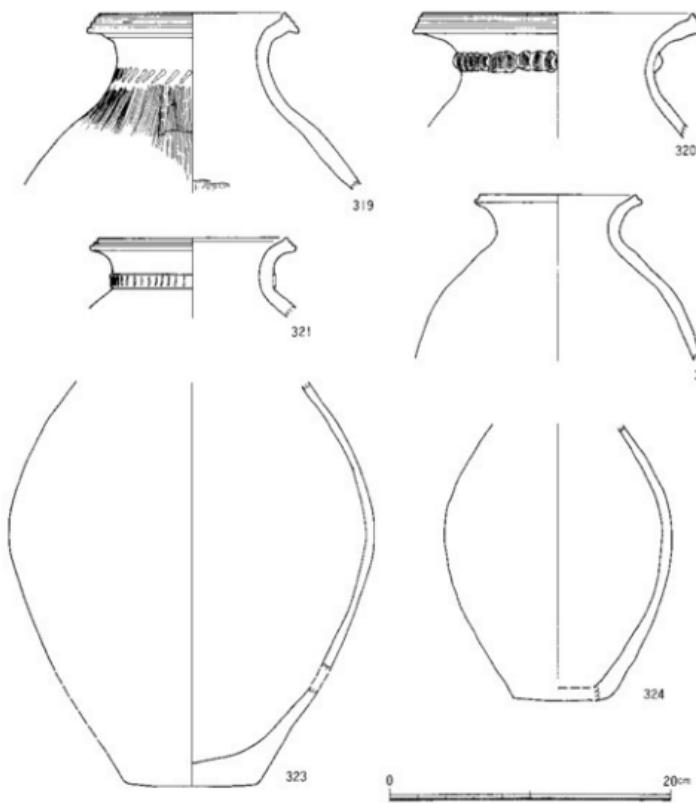


図65 S X 3出土遺物 (319~324)

著である。376・377は壺底部で、上げ底状のものである。378は器台である。凹形の透し孔が施され、外面には刷毛目調整が施されている。

S X 8 (図74)

379は鉢。器の残存状態は悪い。380は壺底部。381～383は高杯脚部である。382・383は脚端部にあたる。382は、高杯の脚部に凹形の透しを施し、脚部屈曲部に刺突文を施すものである。383は無文の脚端部である。

遺構と遺物

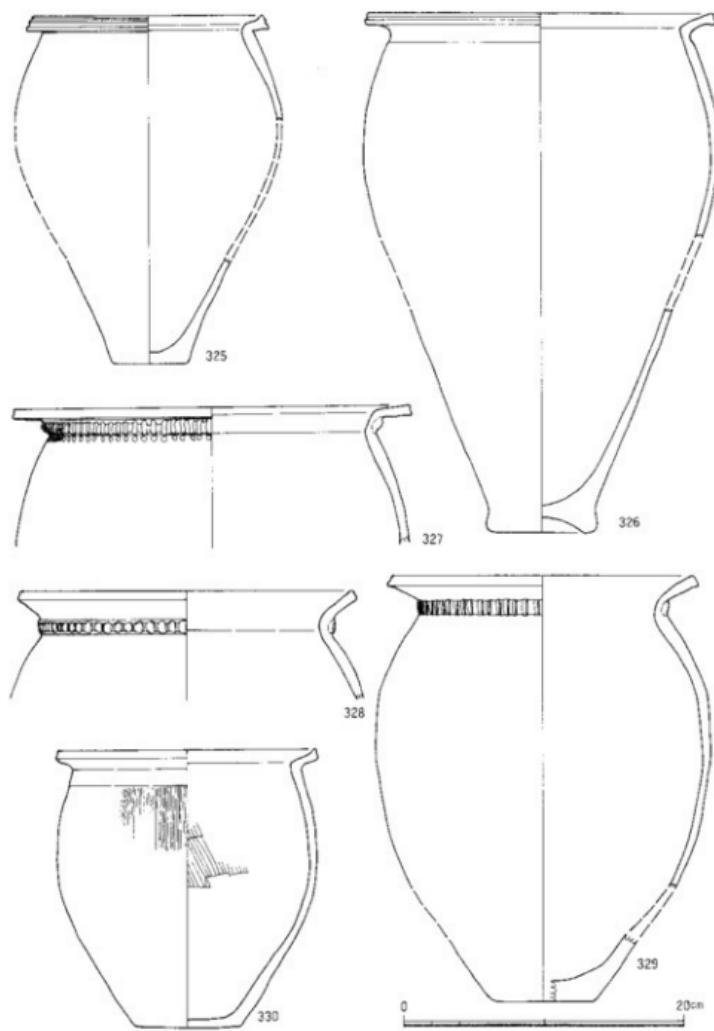


図66 SX3出土遺物(325~329)

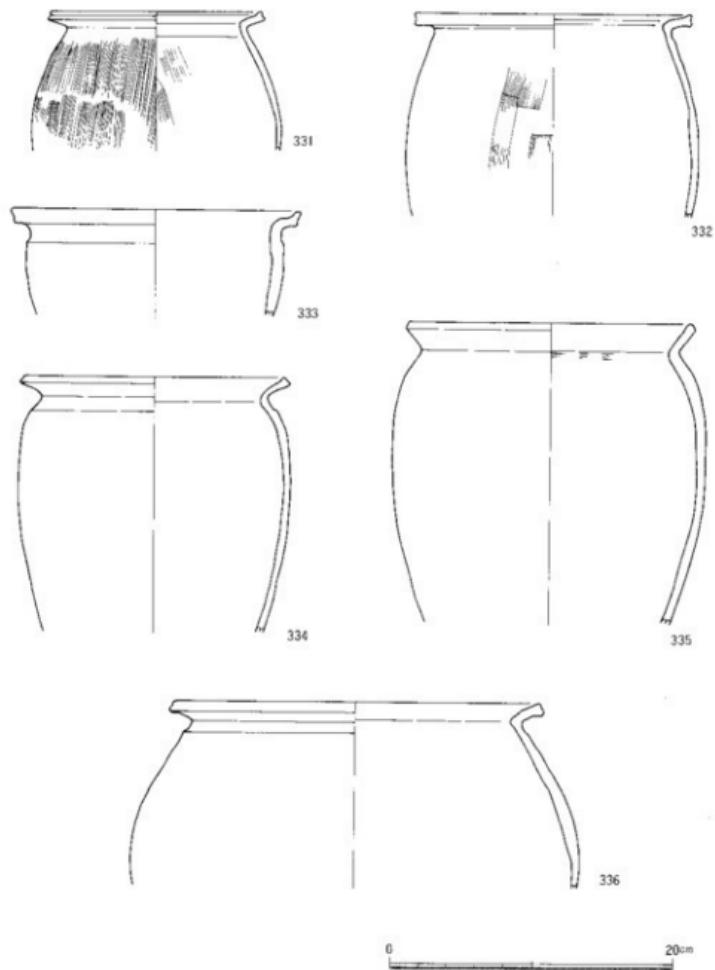


図67 S X 3 出土遺物 (331~336)

遺構と遺物

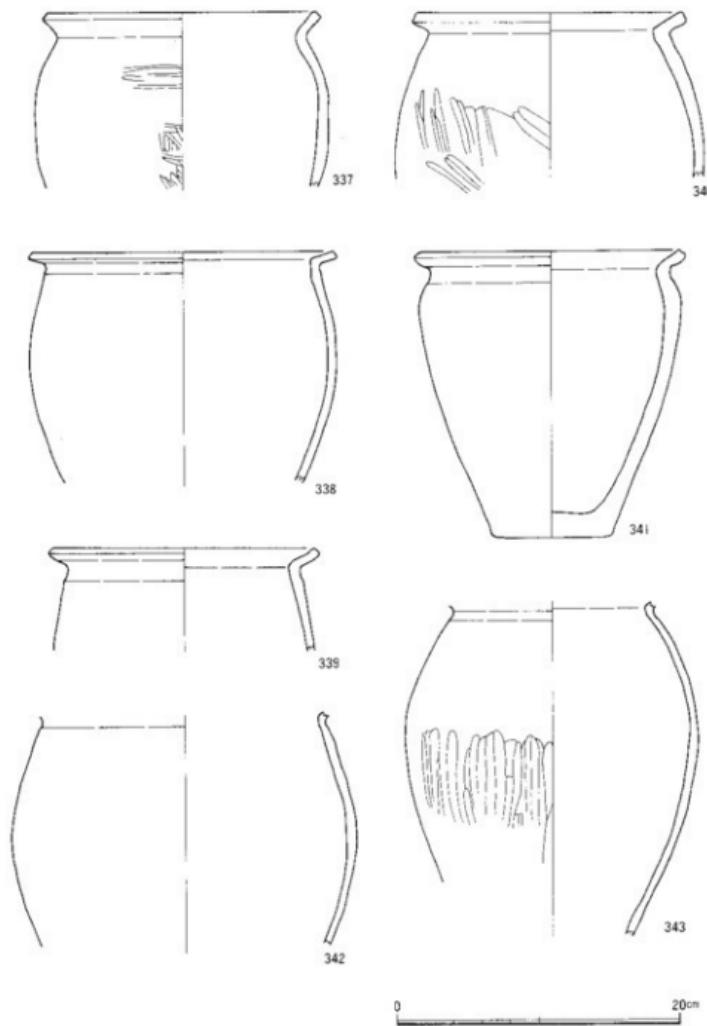


図68 S X 3 出土遺物 (337~343)

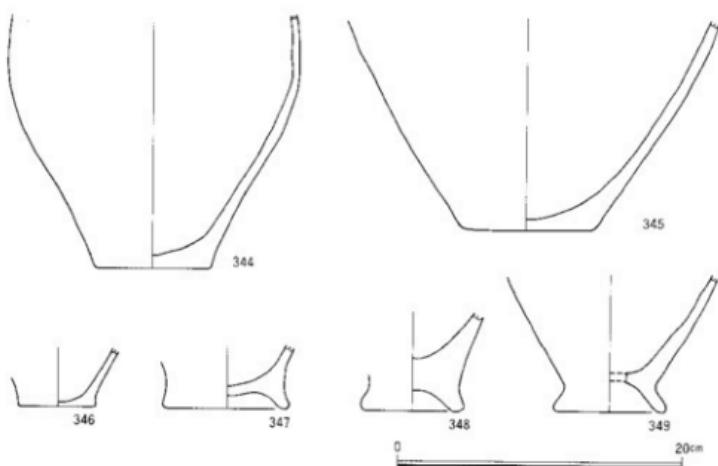


図69 S X 3 出土遺物 (344~349)

S X 9 (図74)

図示できるものは、384・385の高杯脚部のみである。脚部はかなり高いものである。385の脚外面には刷毛目が施されている。

S X 10 (図74)

S X 10の遺物も、図示できるものはかなり少い。386は壺である。口縁端部が下方に延びるように口端部が撫でられている。頸部には横方向の撫でが施される。387は土製支脚の上腕部である。

S X 11 (図75~図77, 図版6-2, 図版37)

S X 11は、溝S D 6の位置と重なり、また出土遺物の内容も位置することから、同一の遺構に伴うものと判断される。従って、S X 11の出土遺物は一括遺物に近い性格を帶びている可能性が高い。

388~399が壺である。388・389は複合口縁の大型壺である。388は、胎土や土器の色調・調整から同一個体と考えられるものである。口縁部文様は櫛描きによる斜格子文をなし、S X 14の156に退化形態を示す。口縁端部は竹管による円孔文が施され特異であるとともに、S X 14の156にみられた回線文は既に消失している。頸部は2条の断面三角形状の隆

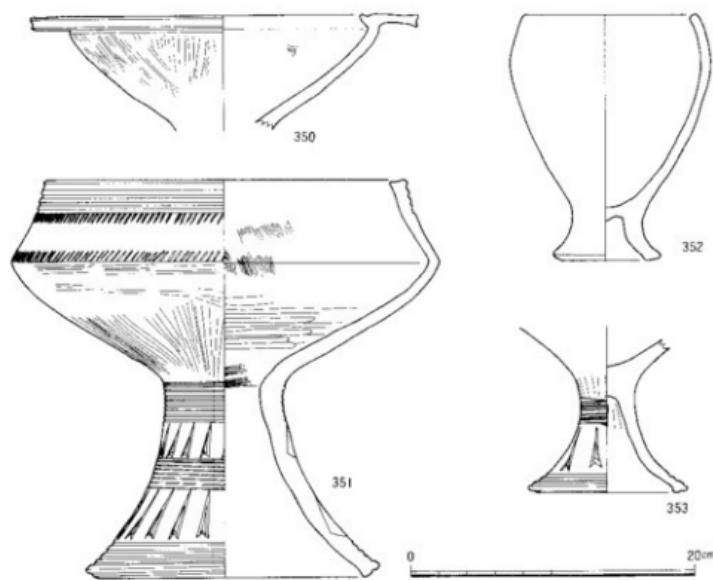


図70 SX 3 出土遺物 (350~353)

帶の上端、下端に押引き上の刺突文が施されるものである。これもSX14の156の頸部文様の系譜を引くものである。また隆帶上方は2条以上の沈線文が施されている。389は388より口縁部の文様形態が退化しており、描書き状の直線文が施されるのみである。388と389は型式学的年代差を捉える必要があろう。390は口縁端部が下方に肥厚する壺で、住居址SB1のSD6に伴うものとした壺30に近似している。391は一応短頸の壺としたものである。口縁端部下方に貼り出すこの時期の様式的特徴をもつ。392は長頸壺の胴部であろう。393は溝SD7の187にみられる細頸壺に似ている。この壺の系譜がこの段階まで存続するか不明であり、古式のものが混入した可能性を考えられよう。394は内外面に刷毛目痕をよく残す底部。398・399は平底の壺底部と考えられるものである。

400~402は高杯である。400は杯部で屈曲部が明確なこの段階の特色を示すものである。402は、高杯脚部で縱方向の刷毛日の後、2条以上の凹線と2条の浅い沈線文が施されるものである。

弥生時代

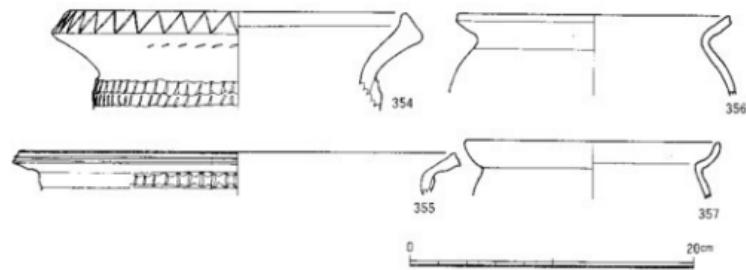


図71 SX 4出土遺物 (354~357)

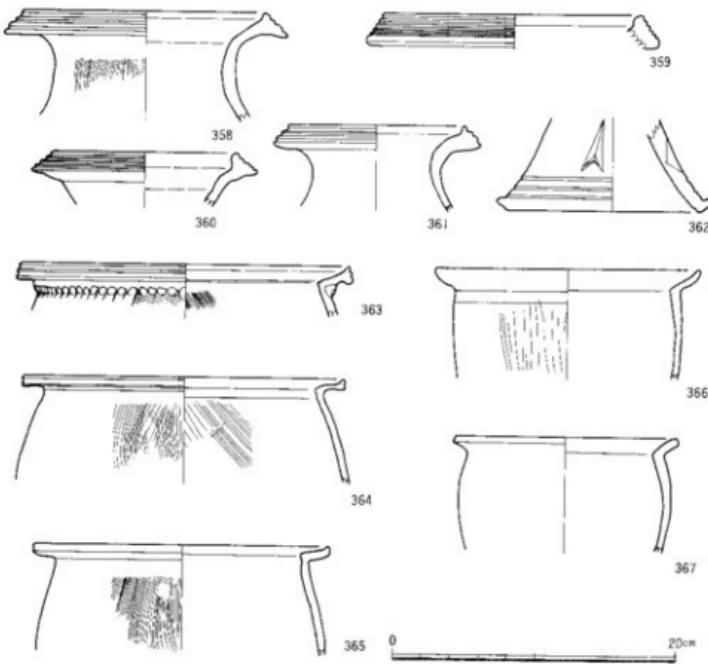


図72 SX 5出土遺物 (358~367)

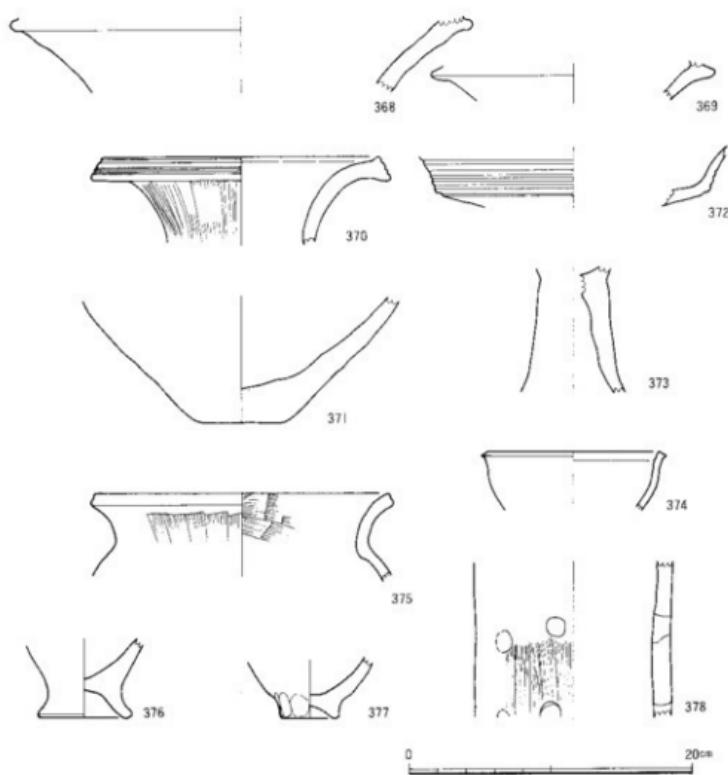


図73 SX 7出土遺物(368~378)

403は鉢である。404~412は甕である。404・405は、頸部に押引き状の刺突文が施されたもの。土坑SK11の125に比べ、施文原体が幅広で三角形状を呈するようになる。406~408は口縁部がくの字状を呈するものである。406は頸部に横方向の撫での痕が残る。SX1などの甕D類の系譜を引くもので，在地形系甕といえよう。409~412は甕底部である。410~412の上げ底状底部は、弥生第IV様式のものに比べ、浅くなっている。

以上のように、SX11の遺物は、弥生第IV様式のものに比べ新しい段階のものであり、弥生後期に属そう。しかも円形周溝状遺構のSX14の遺物に比べても退化傾向を示してお

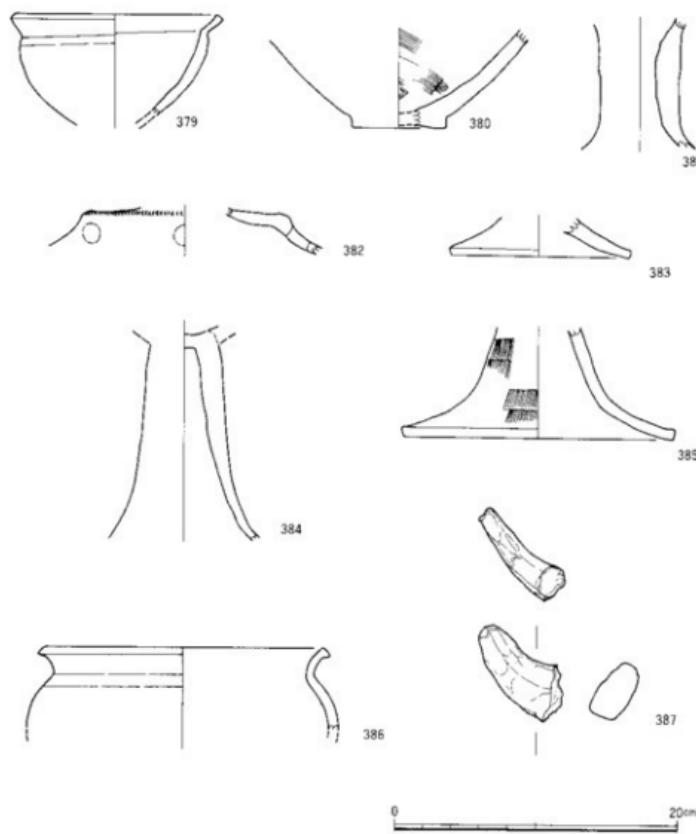


図74 Saitama X 8出土遺物 (379~383) Saitama X 9出土遺物 (384・385) Saitama X 10出土遺物 (386・387)

り、Saitama X 14より新しい段階のものである。従って、弥生後期中葉に該当するものと考えておきたい。やや時間幅のある Saitama X 7～Saitama X 10も、その主体はおおよそこの Saitama X 11段階にあるものと思われる。

Saitama X 12 (図78・79、図版7-1)

Saitama X 12は、溝 Saitama D 4～Saitama D 6が交錯する地点に位置している。従って、これら3つの溝

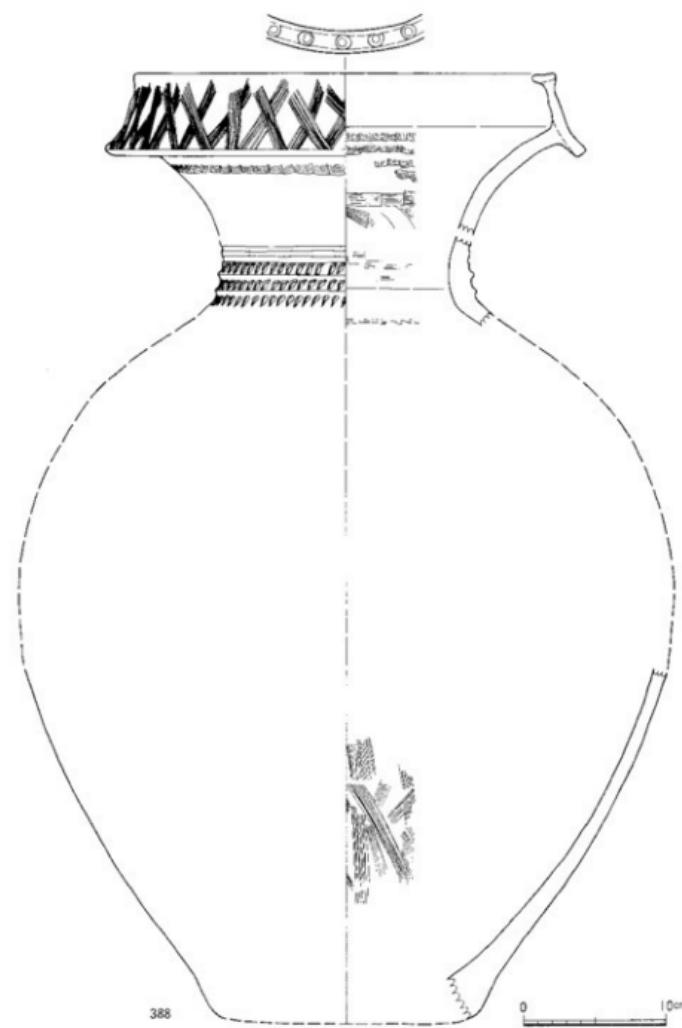


図75 S X11出土遺物 (388)

弥生時代

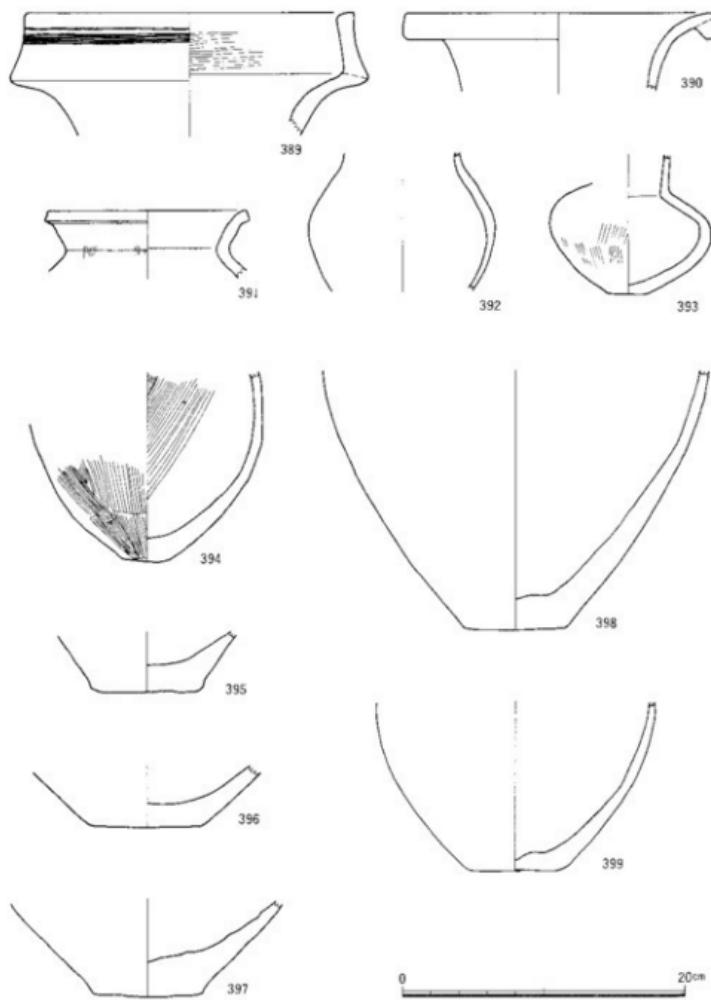


図76 S X 11出土遺物 (389~399)

遺構と遺物

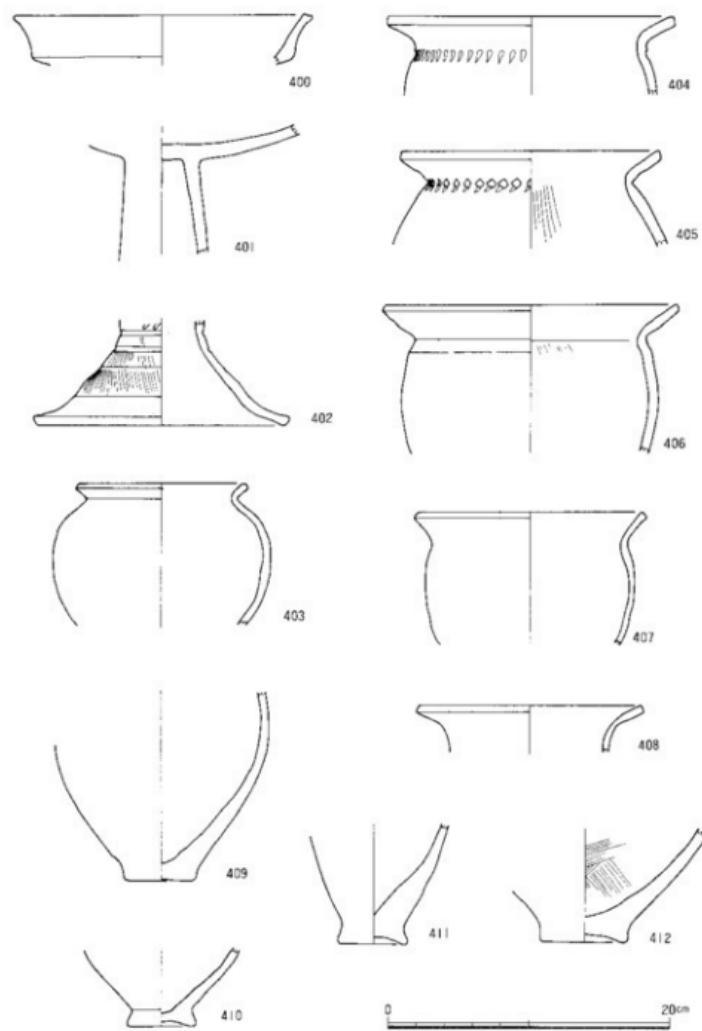


図77 SXII出土遺物(400~412)

に対応する遺物を含んでいる可能性があり、SD11より一括性は低いものと考えられる。

413～424は壺である。413～415は凹線文壺である。413は弥生中期末の典型的な凹線文壺。414は擬凹線文状をなすもので、後期に属するものであろう。415は大型壺であり、やや凹線文が退化傾向を示している。417は複合口縁壺の口端部である。櫛撻き直線文や曲線文が施されている。418は口端部に鋸歯状の沈線文が施されるもの。古式の型式が混入しており、弥生第Ⅲ様式に属するものであろう。419は細頸壺の胴部の可能性がある。420～424は壺底部である。

425～427は高杯。425は杯部の一部で、屈曲部に刺突文が施されている。426は高杯の脚部で小さな円孔が施される。427は脚端部である。

428～434は甕。428・429はくの字口縁の甕D類の系譜を在地的な甕である。428は口縁の屈曲部が緩やかになっている。430・431は頸部に刺突文が施される甕。430は2段に押し引き状の刺突文が施される。431は刺突する際に、原体を下方に向けて引き抜くもの。432～434は甕底部。434は脚付の鉢の一部であるかもしれない。

以上、SX12は413・415・418のように弥生中期のものが一部混じっているものの、大半は弥生後期のものである。特にその主体は後期中葉にあり、SX11とほぼ同一時期のものと言ってよいであろう。

S X13 (図版7-2)

S X13の検出位置は、最も新しい溝であるSD4にはほぼ一致している。SD4に対応する遺物群である可能性が高い。出土遺物は胴部片が大半を占め、形態が小さく特徴を示す上器が少いところから、図示していない。

⑩ 暗茶褐色土出土遺物

暗茶褐色土は厚さ50～60cmと厚い包含層であったため、人工的に上・中・下層に分けかたグリッドごとに遺物を取り上げたが、上～下層における層位的な時期差は見い出し難い。一方、グリッドごとに眺めると、j7・j8・a7・a8・b7・b8区とj6・a6・b6・c6区を比べた場合、量的には前者が弥生後期前半、後者が弥生中期末が主体となっている。これは、地点差として捉えられる傾向ではあるが、周辺に位置する遺構に影響された結果であると思われる。あるいは、遺物集中地点で認められたように、本来遺構が存在した可能性が強く、遺物集中地点に伴う遺構群が存在した結果、その遺構群の遺物を包含層遺物として取り上げたことにも影響があるものと思われる。しかしながら、ここではそれら人工層位やグリッドに基づく検討が、土器型式学を基本とした編年体系作製にあま

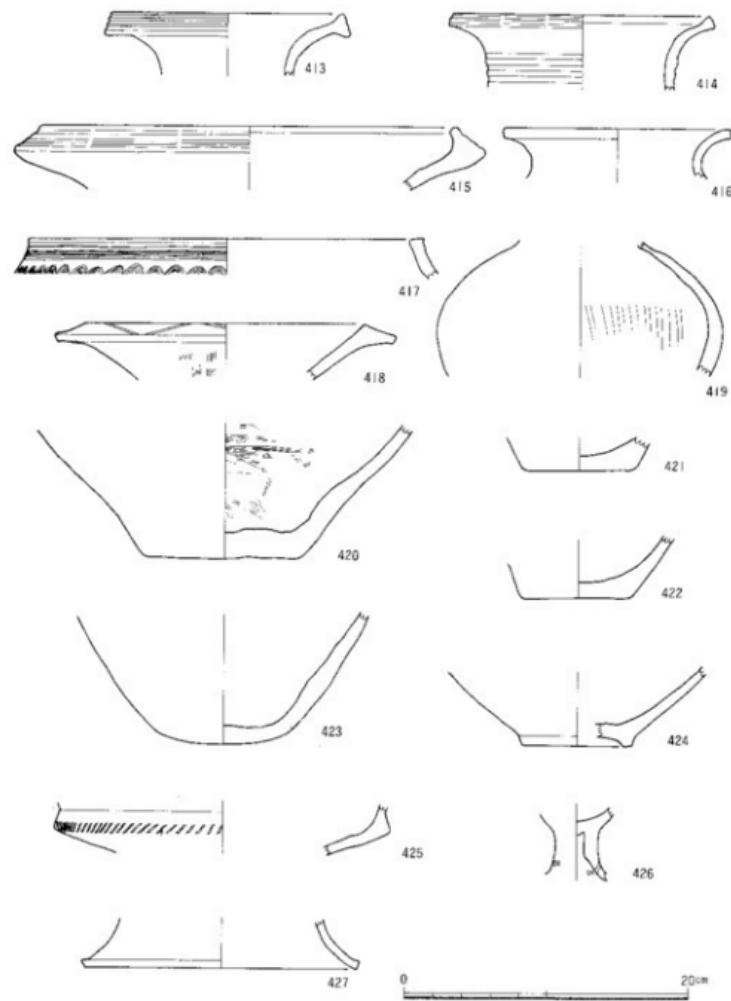


図78 S X12出土遺物 (413~427)

弥生時代

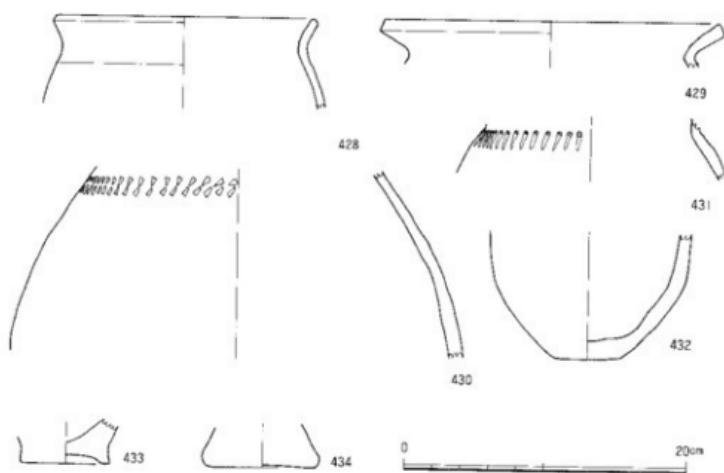


図79 S X12出土遺物 (428~434)

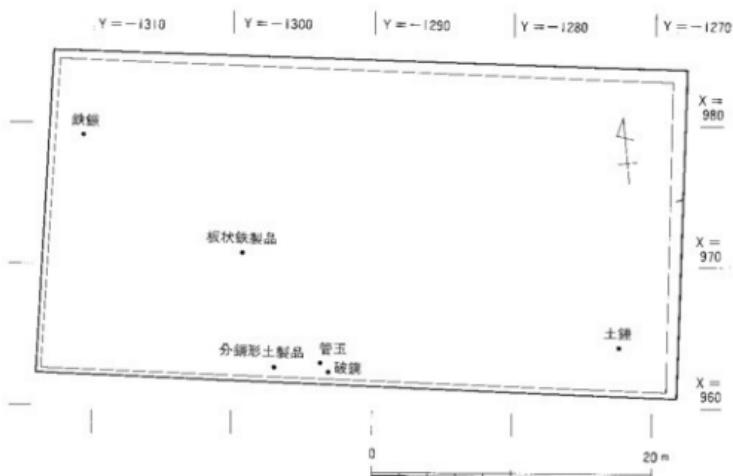


図80 特殊遺物出土地点 比尺 1/400

遺構と遺物

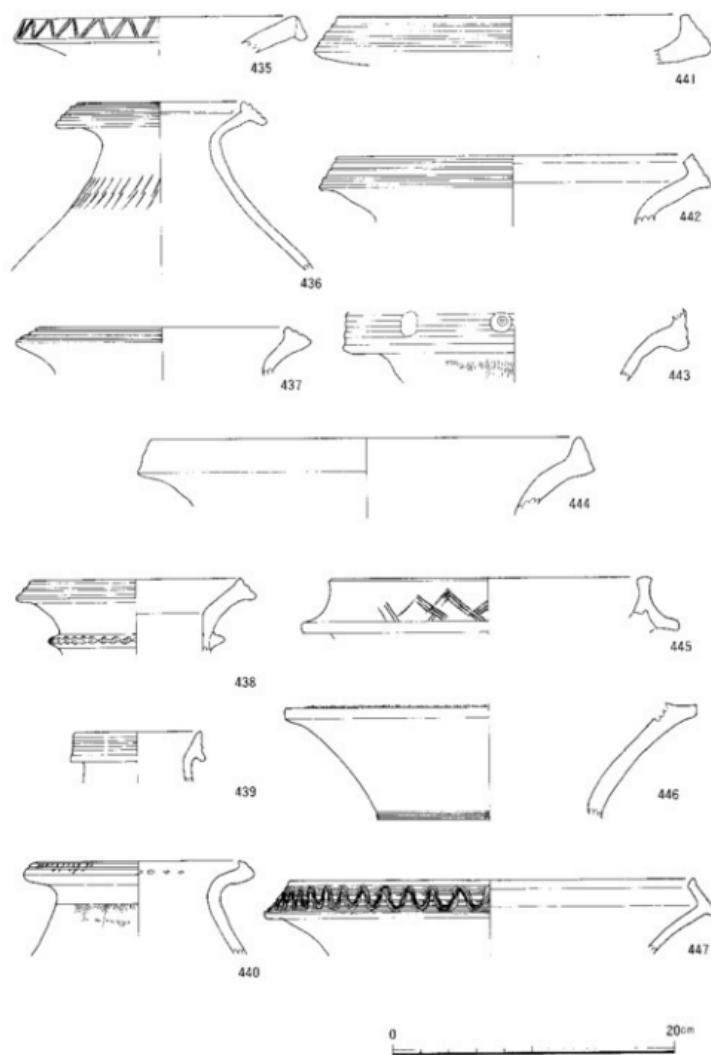


図81 晴茶褐色土出土弥生土器 (435~447)

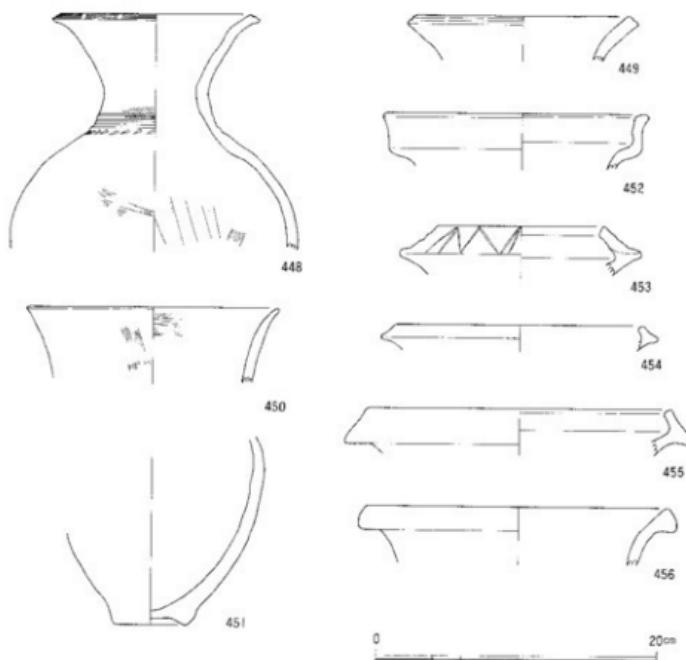


図82 暗茶褐色土出土弥生土器（448～456）

り参考にならないところから、一括して土器、石器、金属器の順番で説明を加える。なお、包含層遺物に関しては、表2によって、各遺物の所属する層位と地点を明記しておく。将来再検討を加える際に、必要な事項と考えるからである。また、破鏡や管玉あるいは鉄鎌など特殊遺物の出土地点は図80に示してある。破鏡と管玉はごく近接した地点から出土し、また土偶状土製品も近接した地点で発見されている。さらに土鍤を加えれば、これは調査区の南端部分に集中しており、板状鉄製品や鉄鎌は調査区西北部にかたまっている。土偶状土製品、管玉、破鏡、土鍤は暗茶褐色土中層、鉄鎌や板状鉄製品は暗茶褐色土下層から検出されている。

出土土器（図81～88、図版38・39）

出土した土器を、次章で検討を加える型式学的変化方向に照らしながら、その型式名を

遺構と遺物

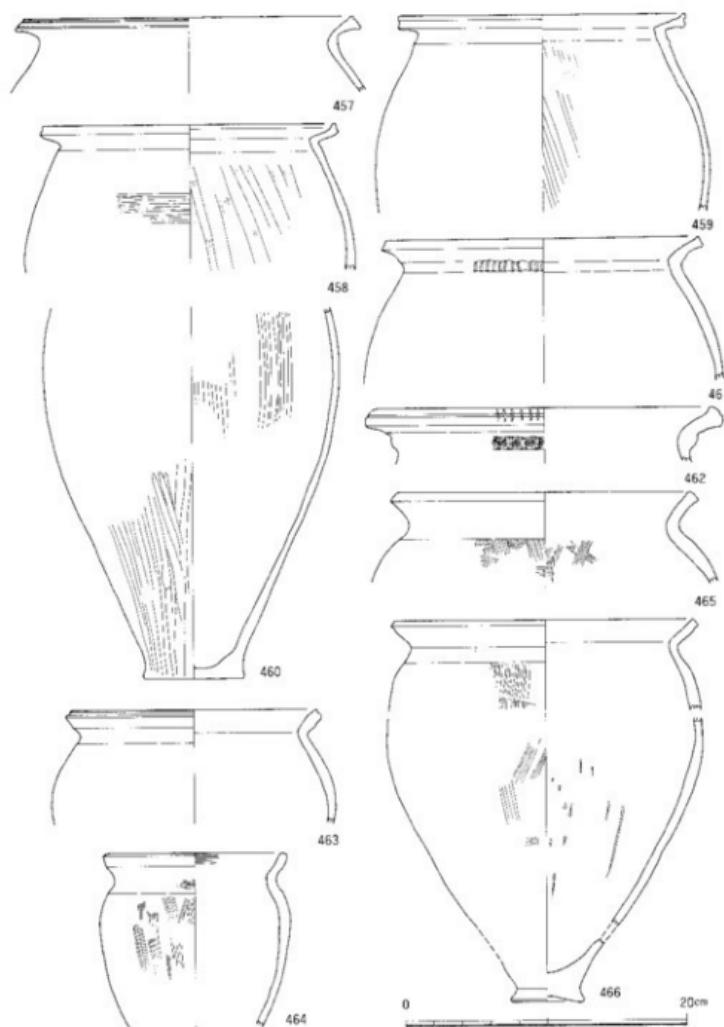


図83 茶葉褐色土出土赤土器 (457~466)

使いつつ、壺、甕、高杯、器台、鉢、その他の土製品の順で説明しておきたい。

435は肥厚した口縁端部に撫描きによる鋸歯状文が描かれるもので第Ⅲ様式の壺である。436～440は凹線文を特徴とする壺B I類の凹線文壺である。436は頸部に2段の斜線文が施されるもので、436・437は壺B I類の典型である。438は頸部に刻み日隆帯をもつもので、やや特異な存在であり、壺B I類と壺B II類の中間的様相を呈している。439は小型の凹線文壺で、器形的に特異である。440は口縁部に斜線文が施されてのち浅い凹線文が施される特異な壺B I類である。一応これらは中期末の壺と考えておきたい。

441～447は大型の壺A類に属する。441は凹線文を特徴とする壺A I類。442・443も同様の壺A II類であるが、441に比べ口縁の屈折が鋭く、443は円形浮文が貼られている。これは一応中期末のものと考える。444は口縁部の形態が441に類似するが、凹線文をもたないもの。445～447は複合口縁壺である。口縁部に445は撫描きの斜格子文、446・447は撫描き波状文を施されるもので、文京遺跡4段階に属する後期中葉のものである。

448・449は口縁部に擬凹線文が施されるものである。448は長頸ぎみとやや特異な器形をなし、頸部には3条の平行沈線文と刺突文が施される。SK11の壺B I類(117)に類似しているといえよう。そこで、これら448・449は文京遺跡2段階の後期前葉のものと考えられる。450は後期前半の長頸壺。451は壺の脚部である。452～455は複合口縁の小型壺である。452はSX14の149の複合口縁壺に類似する。453は口縁部に撫描きで鋸歯状文が施されており、後期中葉のものであろう。456はSX11の390に類似しているように、口縁端部が下端に肥厚することに特徴がある。文京遺跡4段階の後期中葉に属そう。

457～466は甕である。457は口縁部に凹線文をもつ甕A類。458～460は口縁端部がつまみ上げ状を呈する甕B類である。460は口縁部が欠損しているものの、平底をなし胴部下半から底部にかけて丁寧な縦方向の研ぎが施される点は甕B類の特徴を有している。461・462は頸部に1条の隆帯を貼り隆帯上が刻まれる甕C類である。461はやや薄い隆帯が貼られ、押し引き条の刻み目が施される。462は口縁端部に1条の沈線が引かれて後、縦方向の刻み日が施されている。また隆帯上は布状圧痕による刻みが行われる。463は口縁端部に1条の凹線が引かれるくの字形口縁をなす甕D類。頸部には横方向の撫でが施される甕D類の特徴を備えているものの、凹線文を有するなどやや特異な形態を示している。464は口縁がやや肥厚ぎみに撫でられる甕E類である。これら457～464は文京遺跡1段階、弥生第IV様式に属するものである。465・466は甕D類に属する。465・466は頸部を横方向に撫でることによって胴部刷毛目調整との境を明瞭にしている点、第IV様式近い特徴を残

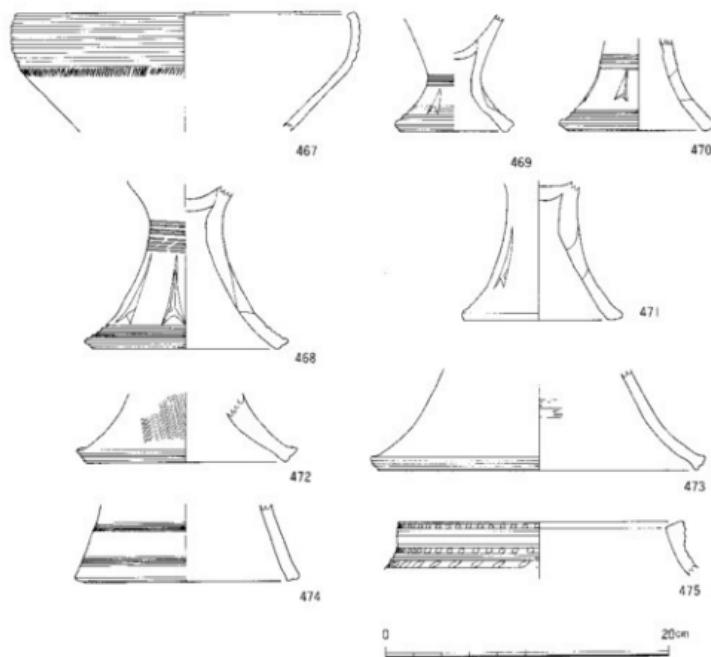


図84 黒茶褐色土出土弥生土器 (467~475)

している。しかし465の口縁端部下端が肥厚ぎみに面取り状に撫でられる点は弥生後期の特徴である。特に466はS X14の161の器形に類似している。また466の内面には、中期末から後期前半に特徴的である削り状の荒い撫でが認められる。そこで465と466は後期前葉に属する甕と考えられる。

467~492は高杯である。467~471は杯部に凹線文が施され脚部に矢羽根状透しをもつ高杯B類である。467は杯部に凹線文が施され凹線文下端に刻み目が施される典型的な高杯B類。468~470も凹線文と矢羽根状透しをもつ典型的な高杯B類である。471は矢羽根状透しをもつものの凹線文をもたないやや特異な高杯B類といえよう。472~474は矢羽根状透しをもたないものの脚端部に凹線文を有しているもので、在地的な高杯D類に属する可能性がある。474は櫛描き平行線文が施されるなど独特な文様をもつ。475は杯部が内接す

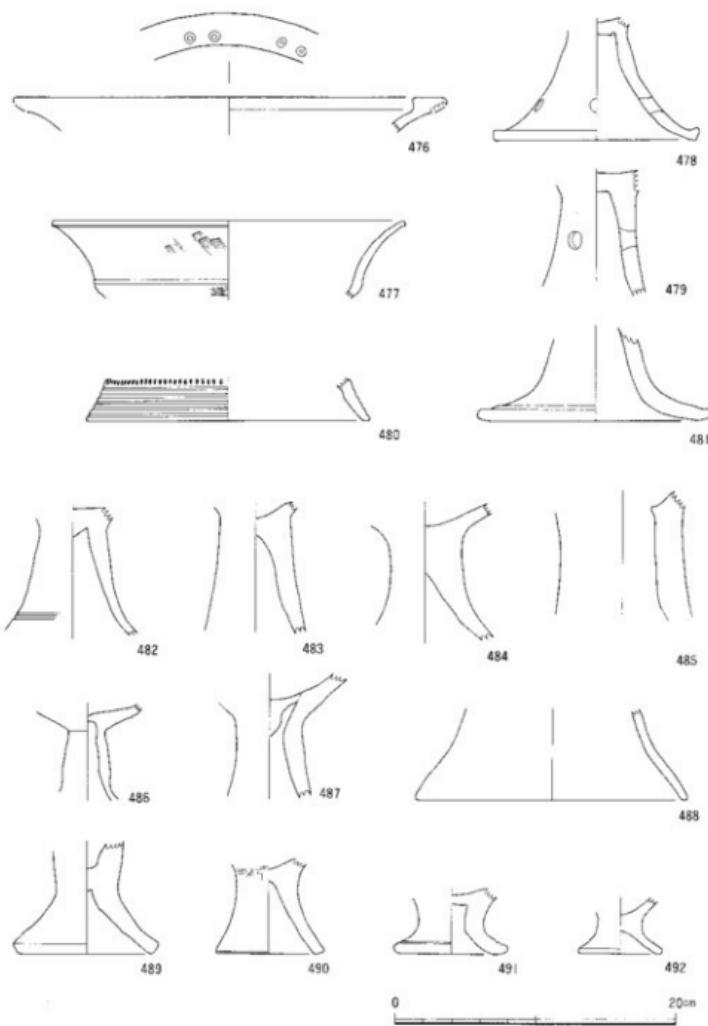


図85 晴茶褐色土出土弥生土器 (476~492)

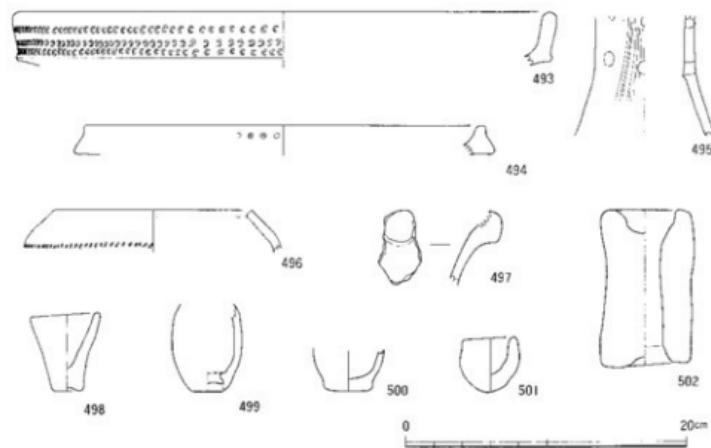


図86 善茶褐色土出土弥生土器 (493~502)

る高杯A類に属する器形と判断される。平行線文と平行線文間に施される刺突文に特徴があろう。472~475の年代は明確でないものの、その他の467~471はほぼ弥生第Ⅳ様式に納まる高杯と考えられる。なお472~475の大半は中期末に納まろうが、一部は後期前半にも属そう。一方、同じ第Ⅳ様式にみられた高杯C類に類似する476は、口縁が板状をなし水平に延びるものである。これは、第Ⅳ様式のS X 3にみられた高杯C類に比べ、板状部が退化して幅が狭くなっている点、時期的に後出するものと考えられる。さらに口縁板状部上面には竹管文が施されるなど独自の文様が施されている。477の高杯は杯部が外反する器形で、松山大学構内遺跡S B 7出土高杯に類似する弥生後期中葉の高杯である。480も同じく松山大学構内遺跡S B 7で特徴的な脚部がエンタシス状を呈する高杯の脚端部に器形が類似する。しかしながら、脚端部に平行沈線や刺突文が施される点は特異である。478・479は脚部に円孔透しをもつもの。481~488は脚部に円孔透しや凹線文をもたないものである。482のみ2条の沈線文が施されている。また485と488は大型の高杯にならう。これら478~488の大半が弥生後期前半に属するものと考えられる。489~492は低い脚部を呈するもので、台付鉢あるいは高杯の脚部と考えられるものである。同じく弥生中期末~後期前半のものであろう。

493~495は器台と考えられるもの。493・494は器台の受部にあたる部分と思われる。

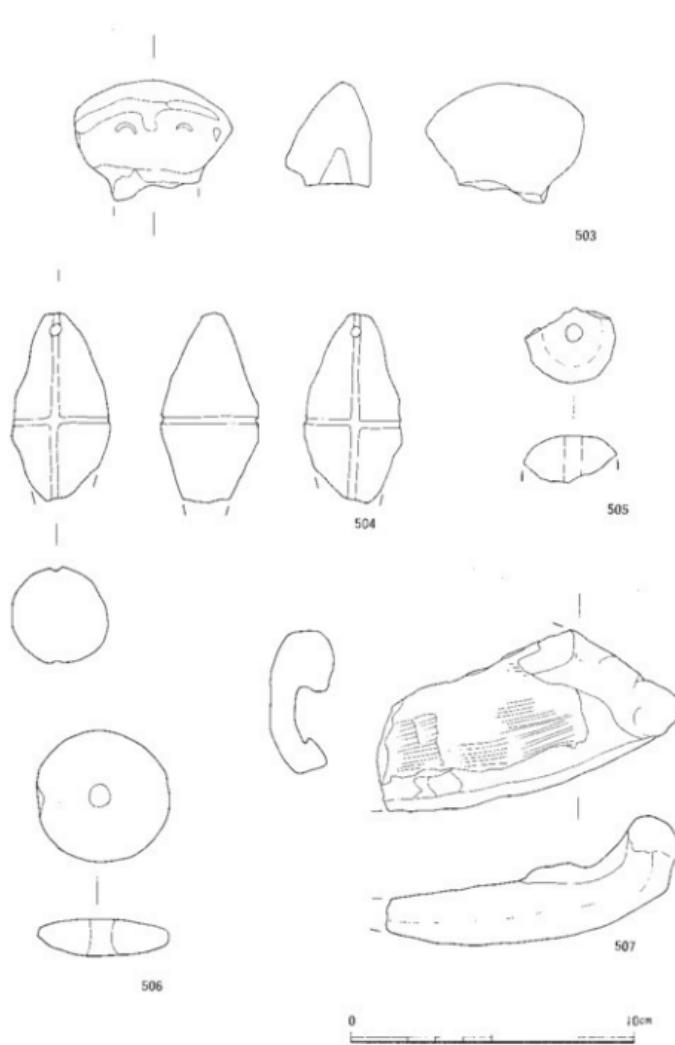


圖87 級茶褐色土出土土製品 (503~507) 總尺 1 / 2

493は口縁部に半裁竹管文が、494は竹管文が施されている。495は脚部で、円孔透しが施されるところに特徴がある。やや径が小さいが、SD 6 の器台211に類似するところから、器台と認定しておきたい。

496は鉢。板状工具によって刻みが施されている。497は器形は不明であるが、把手上の突起を有する特異なもの。498~501はミニチュア土器。498は杯状の器形をます。502は支脚。このような円筒状の支脚は、本地域では松山大学構内遺跡S B 7 や桑原田中遺跡S K (4) -1にも認められるが、これほど直立した筒状を量しかつ口縁の一方向がえぐれるものはみられない。後期中葉のものと判断され、また本地域ではこの時期から支脚が出現し始めている。

503~507は暗茶褐色出土の土製品である。

503は分銅形土製品に類似するが、顔面表現だけではなく頸や中空の首をもっており、土偶状の形態にあたる。弥生時代の土偶状土製品は岡山市百間川遺跡などで知られるが、瀬戸内西部では初出例である。また、土偶状の形態でありながら、顔面表現は、眉が微隆起線で表現されるなど、瀬戸内西部とりわけ中子地域の分銅型土製品に共通した特徴をもっており、同時期の本地域で生産されたものであることが認められる。その他、依存状態が悪いため右耳しか明確なことはいえないが、耳の位置に完通しない孔があけられている。この耳に小孔をもつ点は、吉備地域の土偶状土製品と共通した特徴でありかつ高橋護氏も指摘する繩文時代の土偶との関連が注目される点である。なお、出土地点は、図80に示すように破鏡・管玉と近い地点から出土しており、祭祀との関係からは興味深い位置関係である。残存重量は48.8 gである。

504・505は土錘である。504は卵形の有溝土錘である。溝は長軸方向と短軸方向に十字に交差した溝がめぐらされている。また一端が欠けているため両端に孔が存在するかは不明であるが、長軸方向の一端には小孔があけられている。和田晴吾氏の分類によれば有溝土錘C類に属そうが、有孔である点や溝の切り方はやや特異である。有溝土錘C類は瀬戸内海域に分布し類例も少ないものであるが、504は新たにその出土例を増加させたものである。またこの種の土錘が瀬戸内海域に分布する新たな証拠となったものと思える。長軸は残長6.7 cm、短軸3.3 cm、残存重量67.7 gである。出土地点は、図80に示すように、暗茶褐色土中層のC 6 区である。505は同じく暗茶褐色土中層出土であるが、a 8 区出土と出土地点はかなり離れている。和田晴吾氏分類の管状土錘a類にあたろう。長軸残存長1.6 cm、短軸残存長3.3 cm、残存重量10.9 gである。

弥生時代

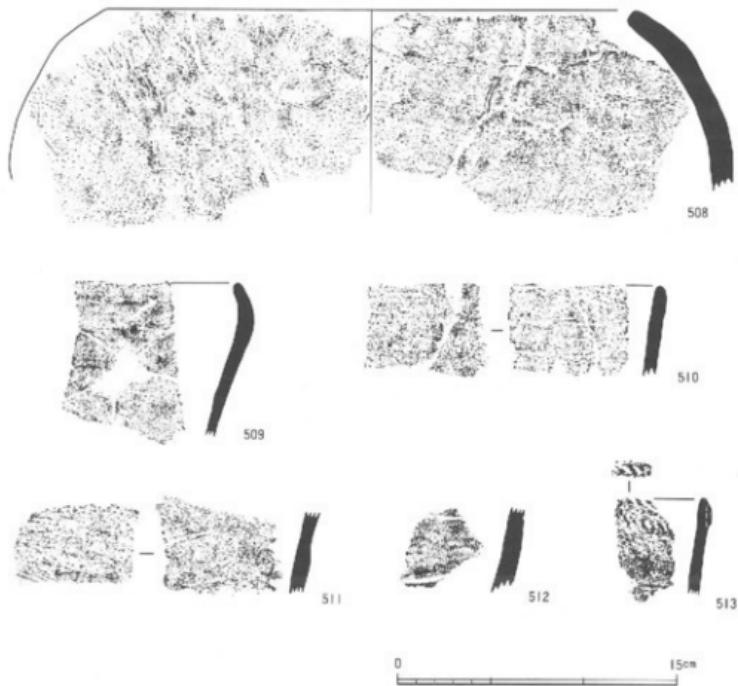


図88 縄文土器 (508~513) 縮尺1/3

506は土製紡錘車である。直径4.6cm、厚さ1.2cm、重さ28.4gである。

507は舟形土製品と考えられるものである。板状の土魂の両側端に粘土紐を貼りつけ軸先を表現していると考える。内面には刷毛目痕が残っている。残欠であり全長不明。長軸は残存長約10cm、残存重量96.8gである。弥生時代の舟形土製品は、久保寿一郎氏の集成によれば、岡山市百間川原尾島遺跡出土例など岡山県内に3例の出土例が知られている。⁽⁸⁾ 近年これらの出土例に加え、大分市下郡遺跡からは弥生時代前期末の1例が新たに加わっている。⁽⁹⁾ 岡山県内の出土例は弥生時代中・後期のものであることから、下郡遺跡例は最も古い舟形土製品である。さらにこの文京遺跡出土舟形土製品を加えると、これらの舟形土製品が弥生時代には瀬戸内海域を通じてみられる土製品であったことが想定できよう。ま

遺構と遺物

番号	器種	地層	層位	層位
436	鉢	土 1 25	a 6	暗茶褐色土上層
437	鉢	土 25	c 6	暗茶褐色土下層
438	鉢	土 25	a 6	暗茶褐色土上層
439	鉢	土 25	a 6	暗茶褐色土下層
440	鉢	土 25	b 6	暗茶褐色土上層
441	鉢	土 25	j 6	暗茶褐色土下層
442	鉢	土 25	j 7	暗茶褐色土下層
443	鉢	土 25	i 8	暗茶褐色土下層
444	鉢	土 25	b 6	暗茶褐色土下層
445	鉢	土 25	b 6	暗茶褐色土下層
446	鉢	土 25	a 8	暗茶褐色土下層
447	鉢	土 25	b 6	暗茶褐色土下層
448	鉢	土 25	b 7	暗茶褐色土上層
449	鉢	土 25	i 7	暗茶褐色土下層
450	鉢	土 25	a 7	暗茶褐色土下層
451	鉢	土 25	a 7	暗茶褐色土下層
452	鉢	土 25	a 8	暗茶褐色土下層
453	鉢	土 25	b 7	暗茶褐色土上層
454	鉢	土 25	j 6	暗茶褐色土下層
455	鉢	土 25	灰陶器	暗茶褐色土上層
456	鉢	土 25	a 7 a 8	暗茶褐色土上層
457	鉢	土 25	j 7	暗茶褐色土下層
458	鉢	土 25	j 6	暗茶褐色土中層
459	鉢	土 25	a 6	暗茶褐色土上層
460	鉢	土 4 25	a 6	暗茶褐色土下層
461	鉢	土 25	b 6	暗茶褐色土下層
462	鉢	土 4 25	b 6	暗茶褐色土下層
463	鉢	土 25	j 8	暗茶褐色土下層
464	鉢	土 25	b 2	暗茶褐色土下層
465	鉢	土 25	a 6	暗茶褐色土下層
466	鉢	土 25	a 7	暗茶褐色土上層
467	鉢	土 25	a 6	暗茶褐色土下層
468	鉢	土 25	a 6	暗茶褐色土下層
469	鉢	土 25	a 6 b 6	暗茶褐色土上層
470	鉢	土 25	b 6	暗茶褐色土上層
471	鉢	土 25	c 6	暗茶褐色土上層
472	鉢	土 25	j 6	暗茶褐色土下層
473	鉢	土 25	a 7	暗茶褐色土下層
474	鉢	土 25	灰陶器	暗茶褐色土下層
475	鉢	土 25	b 7	暗茶褐色土中層
476	鉢	土 25	b 6	暗茶褐色土下層
477	鉢	土 25	a 8	暗茶褐色土下層
478	鉢	土 25	b 7	暗茶褐色土下層
479	鉢	土 25	a 7	暗茶褐色土上層
480	鉢	土 25	b 6	暗茶褐色土中層
481	鉢	土 25	b 6	暗茶褐色土下層
482	鉢	土 25	a 8	暗茶褐色土中層
483	鉢	土 25	c 6	暗茶褐色土下層
484	鉢	土 25	a 7	暗茶褐色土下層
485	鉢	土 25	j 8	暗茶褐色土下層
486	鉢	土 25	c 6	暗茶褐色土下層
487	鉢	土 25	a 7	暗茶褐色土下層
488	鉢	土 25	c 6	暗茶褐色土下層
489	鉢	土 25	i 7	暗茶褐色土下層
490	鉢	土 25	a 7	暗茶褐色土上層
491	鉢	土 25	a 7	暗茶褐色土上層
492	鉢	土 25	c 6	暗茶褐色土上層
493	鉢	土 25	c 6	暗茶褐色土上層
494	鉢	土 25	c 6 - c 7	暗茶褐色土中層
495	鉢	土 25	a 7 - b 7	暗茶褐色土中層
496	鉢	土 25	a 7	暗茶褐色土下層
497	鉢	土 25	i 8	暗茶褐色土下層
498	鉢	土 25	a 6	暗茶褐色土中層
499	鉢	土 25	a 7	暗茶褐色土下層
500	鉢	土 25	b 6	暗茶褐色土下層
501	鉢	土 25	a 7	暗茶褐色土中層
502	鉢	土 25	a 8	暗茶褐色土中層
503	鉢	土 25	a 7	暗茶褐色土中層
504	鉢	土 25	c 8	暗茶褐色土下層
510	縄文土器	土 25	a 8	暗茶褐色土下層
511	縄文土器	土 25	a 8	暗茶褐色土下層
512	縄文土器	土 25	a 7	暗茶褐色土下層
513	縄文土器	土 25	c 6	暗茶褐色土下層

表2 暗茶褐色土出土土器一覧表

番号	器種	地層	遺構・部位	JIS規格 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)
183	砂輪車	a 6 - a 7	S X 14	4.0	4.0	0.4	5.5
503	土器状土製品	a 6	暗茶褐色土中層	4.2	5.6	3.0	48.8
504	土器	c 6	暗茶褐色土中層	6.2	3.3		67.2
505	土器	n 8	暗茶褐色土中層	1.6	3.3		10.9
506	砂輪車	a 6	暗茶褐色土上層	4.6	4.6	1.2	28.4
507	舟形土製品	c 6	暗茶褐色土中層	10.2	5.3	2.6	96.8

表3 上製品出土一覧表

たこのことは瀬戸内海を通じて同様の祭祀形態があった可能性も想像できる。

508~513は縄文土器である。508・509は暗茶褐色土内から、510~513は灰色砂礫層上面から出土している。なお後者の灰色砂礫層上面は暗茶褐色土下面を意味し、採集された地点には黄褐色粘質土は認められない。これらの縄文土器はかなり摩滅を受けているものもあり、文京遺跡8・9・11次調査で明らかとなった縄文時代の遺構面の安定している地域から流れ込んだものと判断される。また調査区東半の黄褐色粘質土が認められない地点は、黄褐色粘質土堆積後、氾濫など新たに土地環境の不安定さが起きたことによるものと想像でき、それに伴って縄文土器が流れ込んだ可能性もある。508・509は口縁が内渦する器形

で、508はやや器壁が厚く内面口端部には指圧痕が認められる。510は内面にかすかに巻貝条痕が残るもの。511も内外面にかすかに巻貝条痕が残っている。512は唯一の有文土器であるが、区画線内を擬似縄文によって充填している。これら508～512は縄文時代後期の土器と考えられる。一方、513は刻日凸帯文土器である。口唇部に刻日を施し、微隆起帶状の凸带上にV字形刻みが施されるもの。縄文晩期後葉のものである。

出土石器（図89～99、図版40～43）

出土した石器は、石包丁、石斧、石鎌、砥石、紡錘車、不定形な石器などである。これらの出土した地区、層位、大きさ、石材などを表4に示した。また大きさの寸法を示す際、破損品に関しては（ ）で表記した。さらに遺構出土の石器に関しても同様に表記し、便宜を計った。

514～526が石包丁。527～529が石包丁の未成品と考えられるものである。514は外湾刃半月形。515～520は直線刃半月形である。この内、519・520は両端に抉りをもつ型式で、520のようなやや小振りのものは中予地域の中前期～後期にみられるものである。521・522・523は直線刃直方形の石包丁。523～526は刃部が形成されているところから石包丁であることは疑いないが、全体の形態が推定し難いものを指す。524の場合、刃部は両側縁につけられており、特異な型式である。このように、包含層出土の石包丁では、直線刃半月形石包丁が最も主体をなしており、直線刃直方形石包丁や外湾刃半月形石包丁は少ない。このような石包丁の各型式の出土傾向は、本地域が各型式の石包丁の融合地であることを示すばかりでなく、近畿が主体である直線刃半月形石包丁が本調査区では主体であることが見取れよう。また、吉備地方に多出するサヌカイト製の打製石包丁は、本調査区からは出土していない。一方、石包丁未製品と考えられる527～529のうち、527は上面が丁寧に研かれている。528・529は一端に抉り状の痕跡が認められ、形態的類推から石包丁未製品と考えておきたい。

530～535は磨製石斧（図93）である。おそらくすべてが伐薪斧である両刃の磨製石斧にあたろう。530は唯一完形品で長さ11.9cm、幅5.6cm、厚さ4.2cm、重さ442.8gとやや小振りであり、小型斧ということができよう。531は大型斧と思われるが、欠損している。532～534は同一の石材であり出土地域も比較的近接し、加工状態もよく類似しているところから、同一の磨製石斧と考えられる。535は灰塵石製であり、表面が丁寧に研かれているところから磨製石斧の破損品と判断した。

536～548は石鎌（図94・95）である。このうち、536～547が打製石鎌、548が磨製石鎌

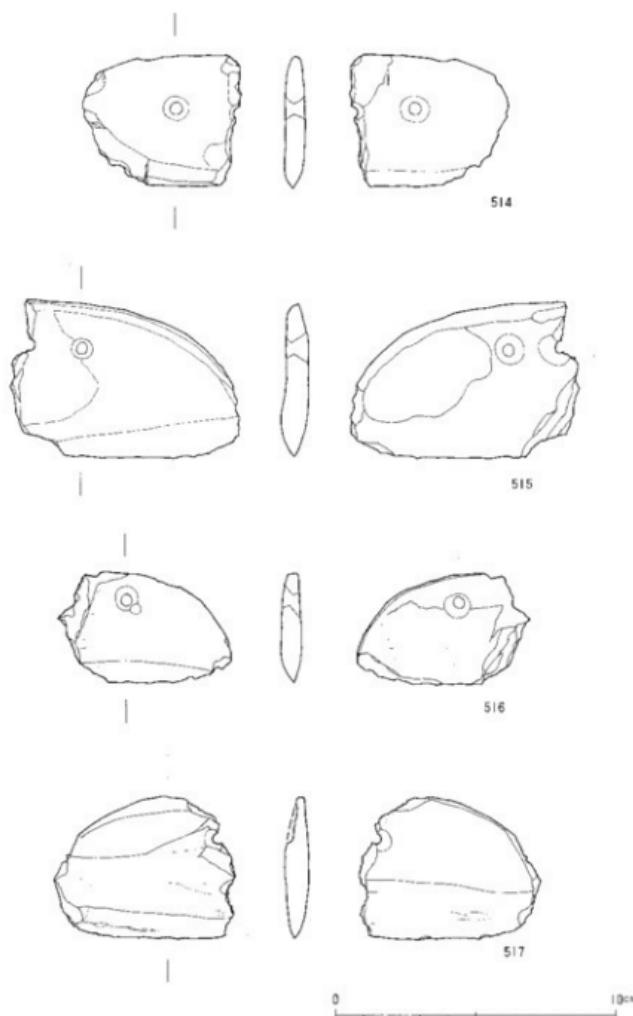


図89 暗茶褐色土出土石包丁 (514~517) 比尺 1/2

苏生時代

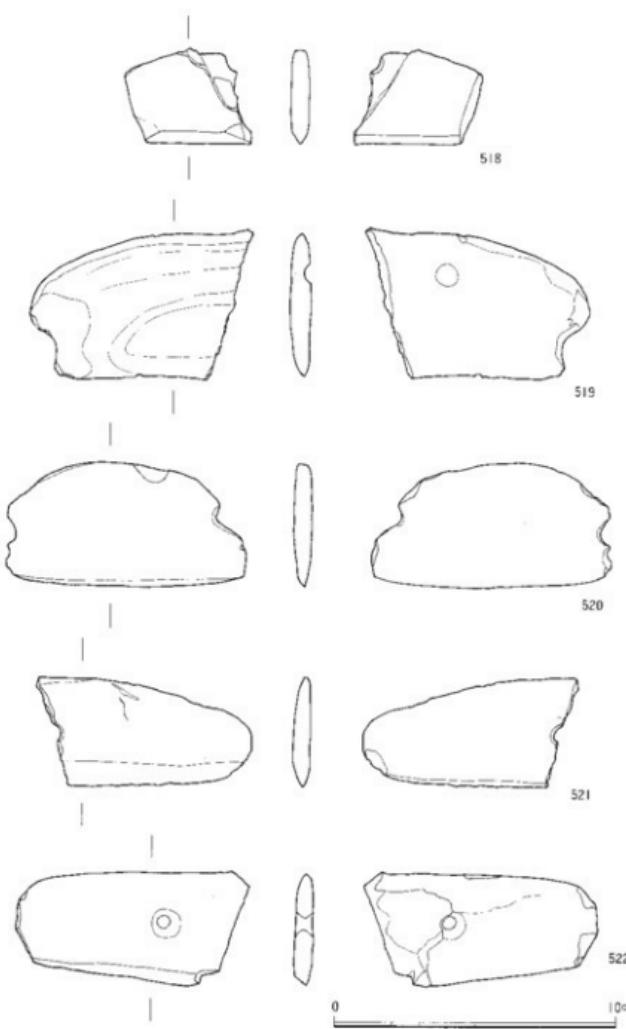


図90 茶葉褐色土出土石包丁 (518~522) 縮尺 1 / 2

遺構と遺物

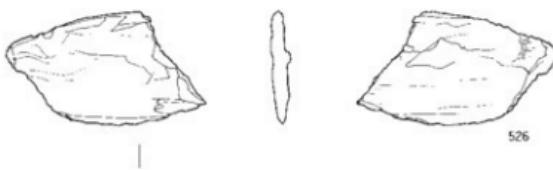
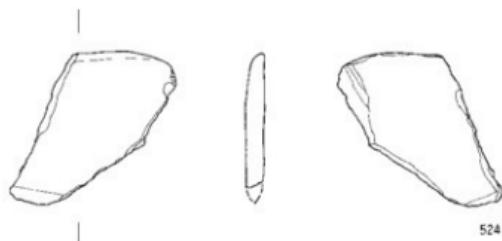
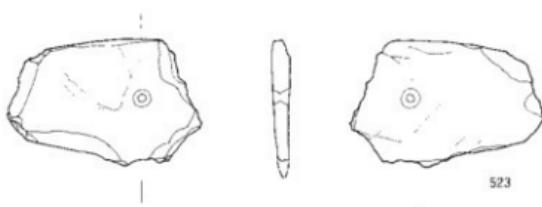


図91 晴茶褐色土出土石包丁 (523~526) 縮尺1/2

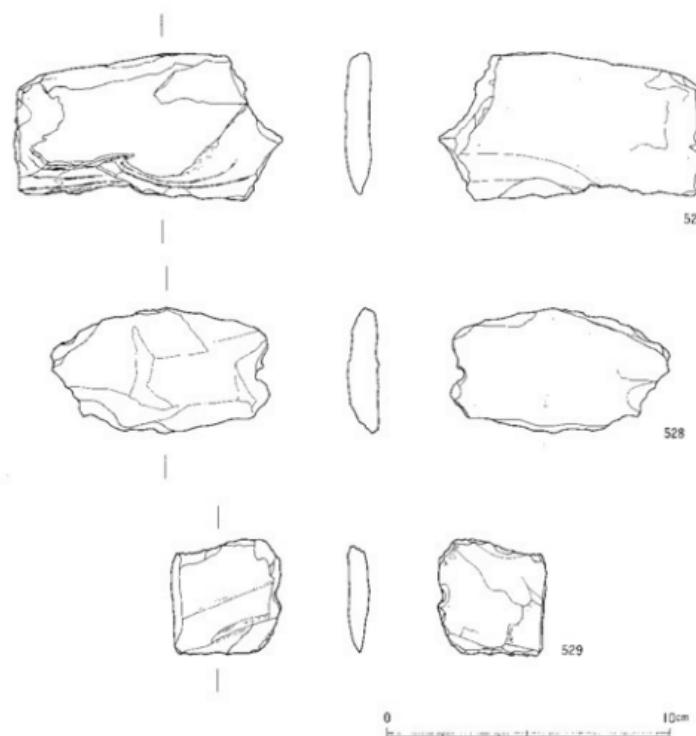


図92 茶色土出土石包丁木製品 (527~529) 錄尺1/2

である。打製石鎌は四基式三角形石鎌と平基式三角形石鎌、平基式葉形石鎌に区分することができる。547の赤色頁岩を除けば他はすべてサスカイト製である。536~542は四基式三角形石鎌。この内、536~538は凹基部の湾曲度がやや鋭い。またこれらの石鎌は図96の縦・横長比に示すように比較的大きな形態に属している。543は基部が不明であるが、おそらく三角形石鎌に属すると考えておきたい。544・545は平基式三角形石鎌である。これらは図96で理解されるように比較的小型の石鎌である。546・547は平基式葉形石鎌である。出土打製石鎌は僅か12点で、これ以外に本調査区ではS B 1 出土の53がある。53は繩文時

代に属する可能性もあるが、平基式三角形石鎌であり、上記した傾向と同様に小型である。近畿地方においては、この時期凸基式あるいは有基式石鎌が多量に出土するが、本調査区ではこの型式の石鎌は存在しない。この傾向は瀬戸内東部や九州の地域と同様であり、四基式石鎌あるいは平基式石鎌が主体を占める。また、近畿から瀬戸内東部においては弥生中期に打製石鎌の大型化が顕著であるが、本調査区出土の石鎌においても図96に示すように大型のグループが存在している。小型のグループは平基式三角形石鎌主体のグループと平基式葉形石鎌のグループに分かれようが、これは従来の考えでいえば狩猟用石鎌であり、大型のグループは戦闘用石鎌とみなすことができよう。従って、瀬戸内西部を石製武器のほとんど発達しない地域とみなすことには問題があり、本地域においても一定の石製武器の発展はあったものと考えられる。また、それは、鉄製武器を併用する北部九州のあり方に近いものであったと想定したい。また図96の打製石鎌の縦・横長比に示すように、一部の石鎌を除けば各型式に応じて大きさのまとまりがあるように思える。このことは、各型式と機能とが関連していることを物語っている。また542・546・547を除いて、これらの石鎌は裏面あるいは両面に初剥離面を残しており、薄い制片を剥いだのち刃部を調整する、大量生産を意図した製作技法が用いられたことが想定される。なお、図96においては、完形ではない石鎌は、その最大長、最大幅を用い白丸で記入している。黒丸は完形の石鎌を示す。一方548は断面菱形を呈する柳葉形の磨製石鎌である。出土地点は、破鏡や管玉あるいは土偶状土製品が出土した地点のごく近くであり、暗茶褐色土下層である。この柳葉形の磨製石鎌は、今治市中寺州尾遺跡における縄文晩期末から弥生前期前半の大邱系石器の一部に認められる。しかしながら、それに比べこの548はやや幅が狭く細長くなっている。大陸系磨製石鎌とは異なり、新しい時期に属するものと想定しておきたい。

549～556は砥石である。549は平面形が楔形を呈する典型的な砥石。550は薄い平板な砥石で、裏面は表面に比べあまり研かれていない。551は断面多角形状に研かれる面をもつもの。552はやや厚さの厚いもので、平面形が楔形を呈する可能性がある。553も直方体をなす砥石の側端面である。554～556は平面が梢円形を呈する石の両面に研きの痕跡をもつもの。554・555は厚さの薄い平板な形態。556はやや厚さが厚く、縄文時代の磨石に近い形態が想像される。

557は石製紡錘車。C 6 区出土であり、近くに位置する円形窓穴住居址 S B 1 からは石製紡錘車の未製品が出土しており、それとの関係が想像できる。558は用途不明の石器である。表面はよく研磨されており、上下両側面は研かれて終結しており、両端は破損して

齐生時代



图93 赤茶褐色土上出土磨制石斧 (530~534) 缩尺 1 / 2

遺構と遺物

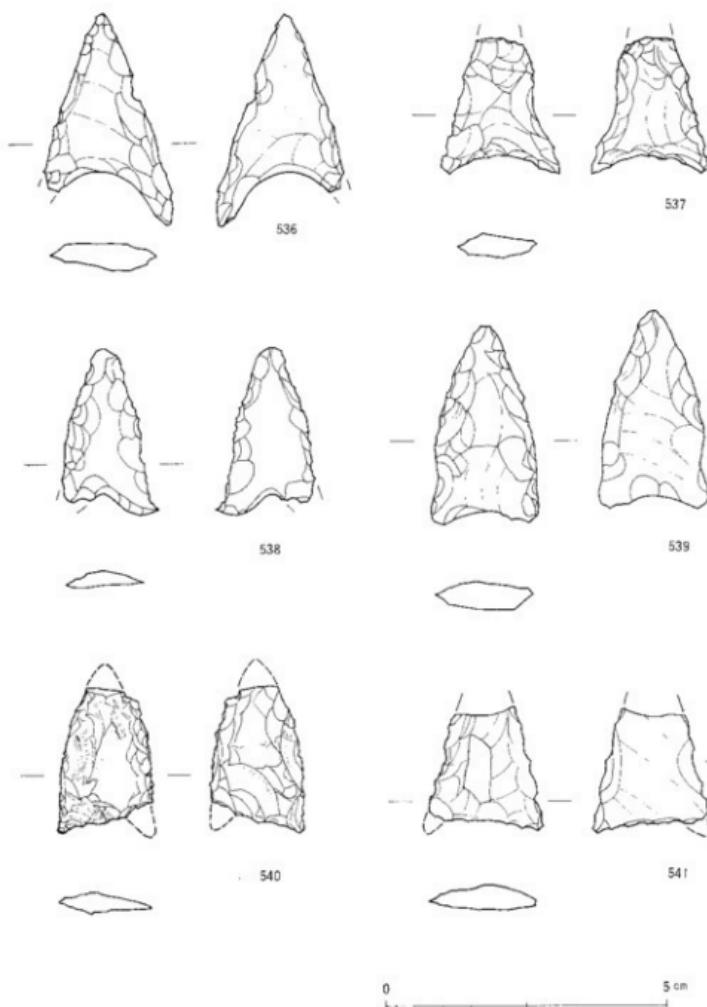


図94 砧茶褐色土出土石器（536～561）　縮尺1/1

弥生時代

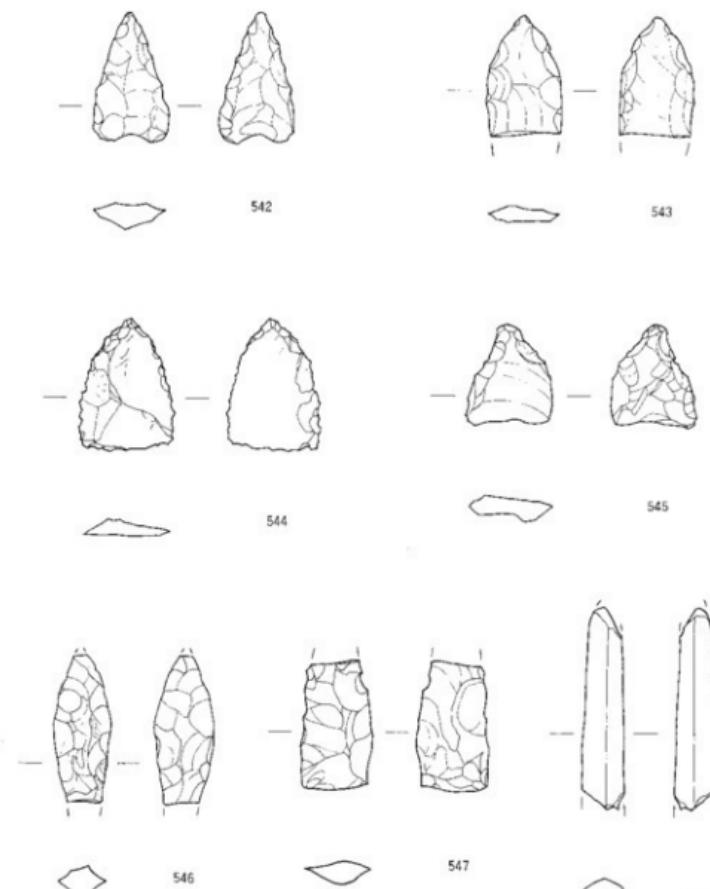


図95 暗茶褐色土川土石器 (542~548)

0

5 cm

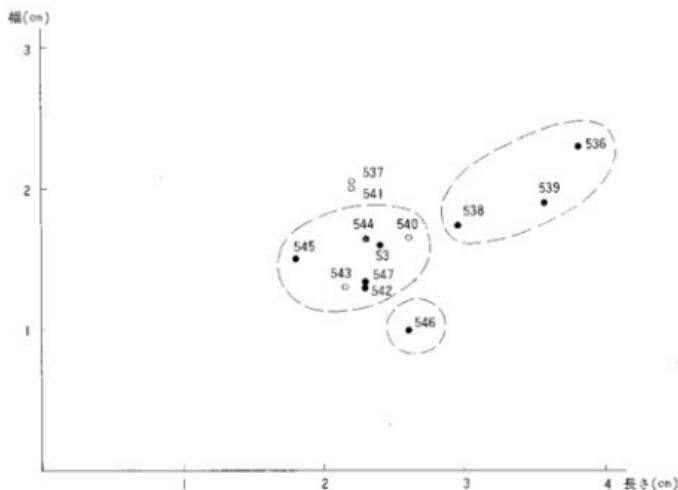


図96 打製石器の分布

いる。研磨の状態からは人工品ということができ、石器とすることができよう。559はサスカイト製の石匙。縦長の石匙であり、縄文時代のものと考える。弥生時代の包含層に混入したものと考えたい。560はサスカイト製の石槍。両面に研磨痕が認められ、また両側面の細部調整後にも一部研磨痕が認められる。その意味では、いわゆる打製石槍ということはできず、磨製品の未製品とも想定できる。どちらにしろ打製石槍であればこれまでの分布でいうと最西端の分布ということになり、問題を残している。561はサスカイト製の剝片の周縁に調整痕がみられるもので、石鎌の未製品の可能性を想定したい。

562～564はサスカイト製の不定形な石器である。側縁に調整痕をもっており、いわゆるスクレーパーと呼ばれるものにあたる。565はサスカイト製の横長剝片。566は赤色頁岩の縦長剝片。サスカイト製の剝片やチップは包含層中から数点出土している。

567と568は図80で示すように、a 6 区の暗茶褐色土中層から出土しており、出土位置が僅か1 mあまりと近接した位置で発見されている。墓葬に伴う出土遺物の可能性も想定されたが、地山面で掘方などが発見されなかった点からいえば、遺構に伴う可能性は低い。567は舶載鏡の紐座部分のみが残っている。紐座は輻射文をなす。輻射文は岡村秀典氏の

弥生時代

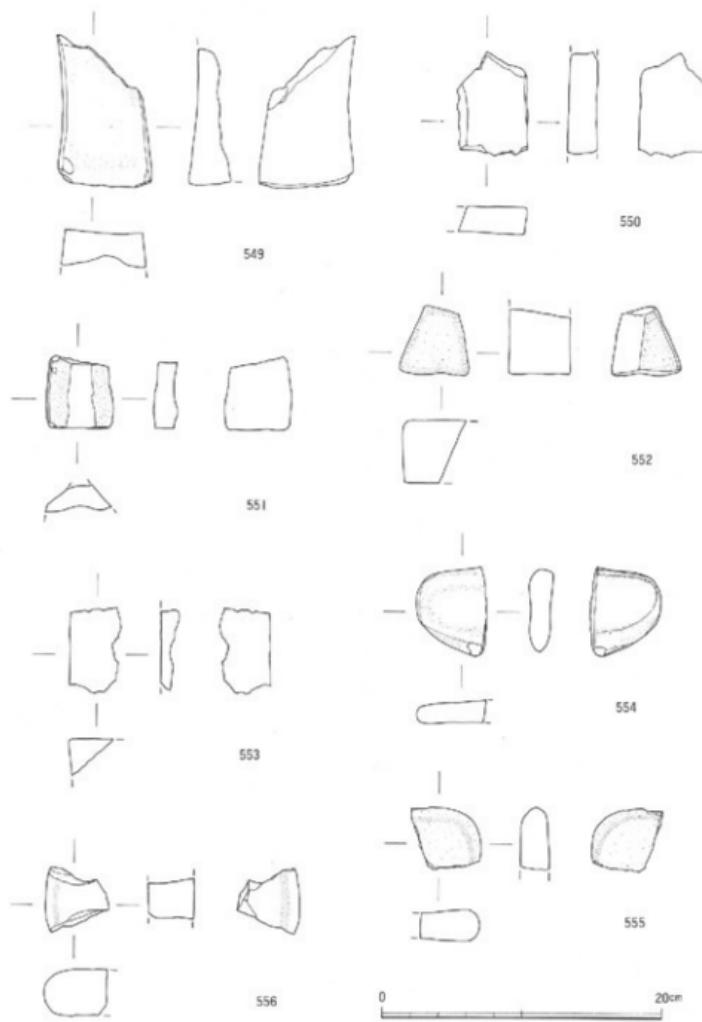


図97 暗茶褐色土出土砥石 (549~556) 縮尺1/2

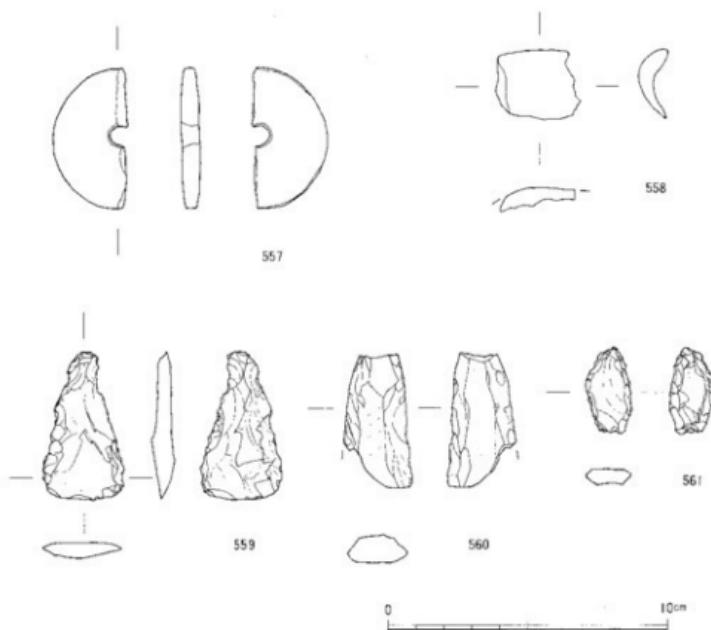


図98 暗茶褐色土出土石製品（557～561）

縮尺 1/2

編年によれば、前漢後葉から後漢初頭の裸鏡に認められるもので、船載鏡であることが認められる。これはいわゆる破鏡と呼ばれるもので、九州を除く西日本では弥生後期末から古墳時代初頭に多出するものである。⁰⁹ 暗茶褐色土は弥生中期～後期前半の包含層であることから、この破鏡は最も古い例に属することになる。しかし、破鏡の特徴である破面の研磨痕などが認められない点は、いわゆる破鏡とは異なり、完形鏡が何らかの原因で破碎したものが出土したとも解釈できる。そう考えれば、この破鏡が一般的な出土時期より早い段階の出土であることにも何ら不都合な点はなく、一般的な破鏡の存在意味とは異なった社会的位置が与えられよう。すなわち、首長層の権威の象徴的な鏡が本来は完形あるいはそれに近い状態で集落内で使用されたものが、何らかの原因で破損した状態で残存したとも解釈できるのである。その場合、そこには、破鏡という形で、より高位の首長層から下位の首長層への配布という形で伝播したものとは違う位置づけがなされよう。また、調

弥生時代

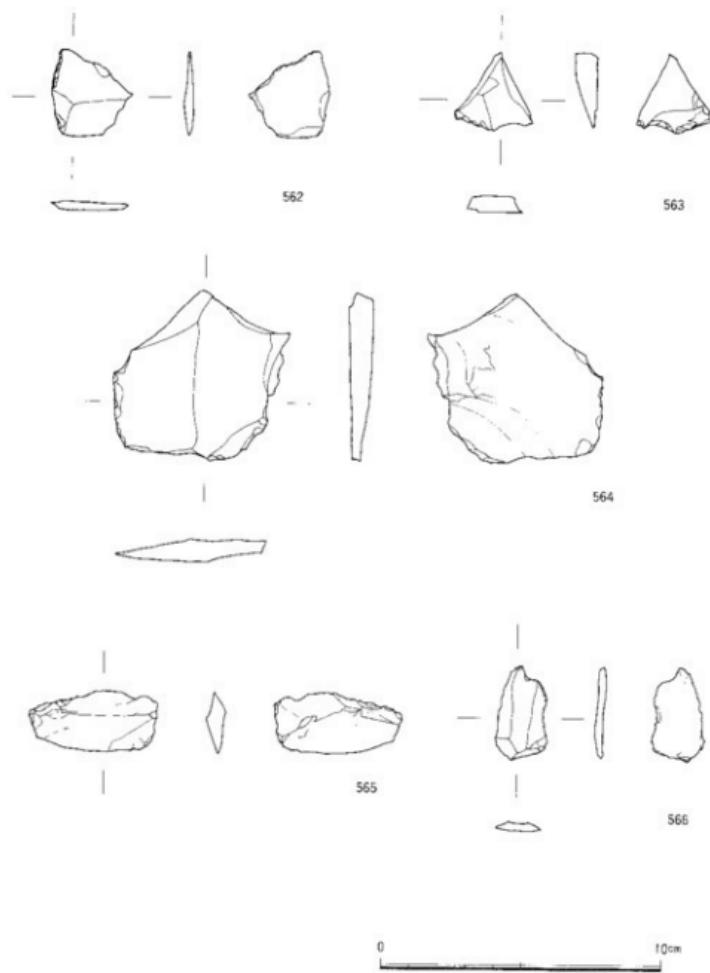


図99 暗茶褐色土出土不定形な石器（562～564）・剥片（565・566）　縮尺1/2

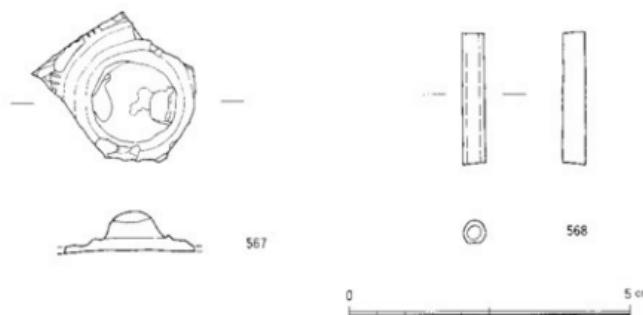


図100 暗茶褐色土出土破鏡（567）・管玉（568）　縮尺1/1

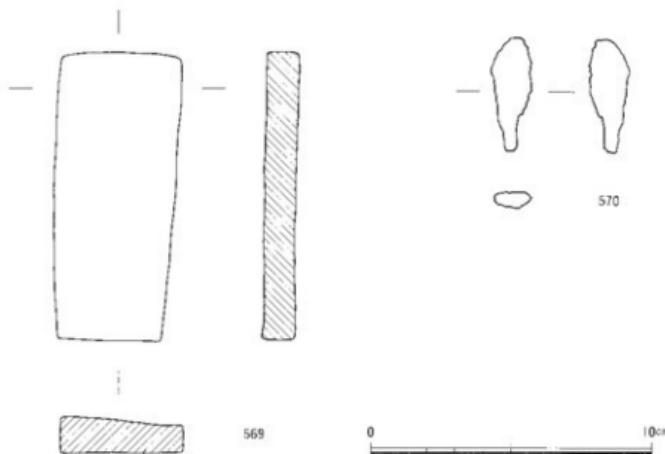


図101 暗茶褐色土出土鐵器（569・570）　縮尺1/2

査区周辺の若草町遺跡からは、完形の日光鏡が出土しており、この破鏡と合わせて考えれば、本地域一帯が当時の道後平野一帯の盟首的な集団をなしていたことが想像される。一方、管玉は道後平野の弥生時代ではその存在がほとんど知られておらず、初出例の一つに数えられよう。緑色凝灰岩製であり、碧玉製に比べ質が悪い。これは本地域がこういった

弥生時代

番号	器種	地	地	形	色	長さ(cm)	幅さ(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	参考
43	有孔石刀	c	b	S-B	17.5	2.2	4.9	445.6	緑色片物	
49	有孔石刀	c	b	S-B	13.0	2.2	2.0	247.3	緑色片物	
50	動彎車	c	b	S-B	10.6	2.5	0.5	27.5	緑色片物	
51	動彎車	c	b	S-B	9.2	(2.8)	0.5	(14.2)	緑色片物	
52	研磨器	c	b	S-B	5.9	(5.0)	2.3	(65.9)	研磨台	
53	石器	c	b	S-B	2.4	-	-	-	赤色質坚硬	
54	研磨器	c	b	S-B	1.5	-	0.2	1.5	赤色質坚硬	
74	鋸片	j	?	S-B	2.0	3.9	0.25	3.2	+メカイト	
75	鋸片	j	?	S-B	(3.8)	(4.1)	(0.8)	(18.8)	緑色片物	
97	石器	j	?	S-K	9.2	3.8	0.65	31.7	研磨器	
99	石器	j	?	S-K	21.0	9.0	6.0	2,165.0	東省重要母貝山遺跡 研磨片記	
181	石器	a	b	S-X	8.2	3.2	0.5	24.5	緑色片物	
182	鋸片	a	b	S-X	(3.0)	(2.1)	0.5	2.1	+メカイト	
184	鋸片	a	b	S-X	(18.0)	(7.0)	2.6	(220.1)	ホルンヘルム 研磨	
200	石器	a	b	S-X	(1.5)	4.0	3.8	(311.1)	研磨	
201	鋸片	j	?	S-D	2.0	2.6	0.2	0.4	赤色質坚硬	
250	不明石削器	i	?	S-P	14.7	(5.0)	4.5	(107.5)	赤色片物	
514	石冠	b	b	磨茶褐色土上層	(5.6)	4.6	0.7	(71.1)	緑色片物	
515	石冠	c	b	磨茶褐色土上層	(8.2)	5.6	0.9	(57.8)	緑色片物	
516	石冠	a	b	磨茶褐色土上層	(6.2)	4.0	0.75	(22.7)	緑色片物	
517	石冠	c	b	磨茶褐色土上層	(6.5)	5.0	0.85	(47.3)	緑色片物	
518	石冠	b	b	磨茶褐色土上層	(4.55)	3.35	0.65	(13.6)	緑色片物	
519	石冠	a	b	磨茶褐色土上層	(7.9)	5.25	0.75	(54.4)	緑色片物	
520	石冠	a	b	磨茶褐色土+中層	8.65	4.4	0.6	38.3	緑色片物	
521	石冠	a	b	磨茶褐色土下層	(7.7)	3.8	0.6	(30.4)	緑色片物	
522	石冠	b	b	磨茶褐色土上層	(8.3)	4.1	0.65	(35.0)	緑色片物	
523	石冠	a	b	磨茶褐色土+中層	(6.9)	(4.5)	0.65	(29.2)	緑色片物	
524	石冠	a	b	磨茶褐色土上層	(5.9)	5.4	0.65	(26.6)	緑色片物	
525	石冠	j	?	?	(4.5)	2.05	(0.5)	(1.9)	緑色片物	
526	石冠	j	?	?	(4.1)	1.4	(0.7)	(24.3)	緑色片物	
527	石冠	b	b	磨茶褐色土上層	(9.5)	5.2	(0.9)	(66.9)	緑色片物	
528	石冠	a	b	磨茶褐色土+中層	(7.6)	4.4	(1.1)	(43.6)	緑色片物	
529	石冠	j	?	?	(3.8)	4.1	(0.75)	(16.6)	緑色片物	
530	石斧	a	b	磨茶褐色土下層	11.9	5.6	4.2	442.8	研磨器	
531	石斧	a	b	磨茶褐色土下層	(15.0)	6.7	(3.15)	(412.2)	研磨片記	
532	石斧	c	b	磨茶褐色土+中層	(8.7)	(4.9)	(1.8)	(110.8)	黑色質寶石記	
533	石斧	b	b	磨茶褐色土上層	(7.1)	(4.3)	(1.15)	(46.3)	黑色質寶石記	
534	石斧	b	b	磨茶褐色土上層	(6.9)	(5.8)	(1.9)	(80.4)	黑色質寶石記	
535	石斧	a	b	磨茶褐色土上層	(9.6)	(5.4)	(0.45)	(44.9)	赤色石	
536	打制石器	j	?	?	3.8	2.3	0.5	2.8	+メカイト	
537	打制石器	b	b	磨茶褐色土中層	(2.2)	2.05	0.5	(2.0)	+メカイト	
538	打制石器	c	b	磨茶褐色土上層	2.95	1.75	0.5	3.4	+メカイト	
539	打制石器	j	?	?	(1.5)	1.7	0.5	3.5	+メカイト	
540	打制石器	a	b	磨茶褐色土中層	(2.6)	1.65	0.4	(1.6)	+メカイト	
541	打制石器	j	?	?	(2.2)	2.0	0.45	(2.0)	+メカイト	
542	打制石器	b	b	磨茶褐色土中層	2.3	1.3	0.45	1.6	+メカイト	
543	打制石器	b	b	磨茶褐色土中層	(2.15)	1.3	0.3	(1.1)	+メカイト	
544	打制石器	b	b	磨茶褐色土下層	2.3	1.65	0.3	1.3	+メカイト	
545	打制石器	j	?	?	1.8	1.5	0.4	1.3	+メカイト	
546	打制石器	a	a	磨茶褐色土上層	2.6	1.0	0.55	1.2	+メカイト	
547	打制石器	a	b	磨茶褐色土上層	(2.3)	1.5	0.4	(1.5)	赤色質坚硬	
548	磨石	a	b	磨茶褐色土下層	(3.6)	0.75	0.4	(1.5)	緑色片物	
549	研磨器	c	b	磨茶褐色土下層	(10.8)	6.7	(2.95)	(216.4)	研磨台	
550	研磨器	D	b	磨茶褐色土下層	(7.4)	(4.95)	2.05	(141.5)	研磨片記	
551	研磨器	c	b	磨茶褐色土下層	(4.95)	(4.0)	2.05	(17.4)	研磨片記	
552	研磨器	c	b	磨茶褐色土中層	(4.95)	(4.0)	2.05	(17.4)	研磨片記	
553	研磨器	a	b	磨茶褐色土中層	(6.0)	(3.65)	(1.3)	(41.3)	小形研磨器	
554	研磨器	j	?	?	磨茶褐色土下層	(6.4)	(4.9)	1.65	(21.0)	香爐野原遺跡出土
555	研磨器	a	b	磨茶褐色土下層	(4.4)	(5.1)	2.05	(76.3)	研磨台	
556	研磨器	c	b	磨茶褐色土下層	(4.55)	(4.5)	3.2	(82.9)	研磨台	
557	動彎車	c	b	磨茶褐色土下層	5.0	(2.65)	0.65	(13.8)	緑色片物	
558	不明石削器	j	?	?	3.0	(2.4)	(0.6)	(6.8)	シルト層	
559	石鏡	b	b	磨茶褐色土上層	5.2	2.9	0.8	9.5	+メカイト	
560	石鏡	j	?	?	4.6	2.45	1.0	(16.2)	+メカイト	
561	石鏡	a	b	磨茶褐色土中層	5.1	1.6	0.55	3.7	+メカイト	
562	不明石鏡	a	b	磨茶褐色土下層	3.1	2.9	0.3	2.8	+メカイト	
563	不明石鏡	c	b	磨茶褐色土下層	2.8	2.7	0.8	4.3	+メカイト	
564	不明石鏡	j	?	?	6.0	6.3	0.85	35.7	+メカイト	
565	刮片	c	b	磨茶褐色土下層	2.05	1.6	0.7	7.0	+メカイト	
566	刮片	j	?	?	3.3	1.9	0.3	2.4	赤色質坚硬	
568	磨玉	a	b	磨茶褐色土中層	2.3	0.4	0.4	0.8	赤色質坚硬	

表4 出土石器一覧表

良質の碧玉が入手しにくい地理的位置に存在していたためであり、出土数が少ない原因もそのあたりにあろう。また、破鏡とともに管玉の出土は、両者の出土地点の近接地に、弥生集落の中心的な構造物があった可能性も否定できない。すなわち出土地点は、首長層の

遺構と遺物

番号	形種	地點	測定値	L.S.(cm)	幅(cm)	P.E.(cm)	重量(g)
562	鉄	a 6	暗茶褐色土下層	(2.7)	(2.9)	(0.2)	(6.6)
564	鉄製品	c 6	S B 1	(3.3)	(1.9)	(1.0)	(5.3)
565	鉄製品	c 6	S B 1	(3.2)	1.6	(1.0)	(5.5)
570	鉄製品	a 7	S B 3	(2.6)	(1.4)	(0.8)	(4.0)
185	鉄?	a 7	S X 14	(6.7)	(2.3)	(1.7)	(24.0)
226	鉄	a 8	S D 4	(3.6)	1.5	0.15	(3.4)
251	鉄製品	a 6	S P 174	(2.7)	(1.1)	0.7	(1.6)
569	板状鉄製品	a 7	暗茶褐色土下層	(10.3)	4.5	1.2	(62.0)
570	鉄製品	a 7	暗茶褐色土下層	4.0	1.5	0.6	5.0

表5 出土金属器一覧表

居住位置に近い場所に位置する可能性があるものである。

569・570は鉄器である。569は長さ10.3cm、幅4.3cm、厚さ1.2cmの板状鉄器である。図版9-1と図版39に示したように出土後しばらくして腐食がかなり進行し、残存状態が悪くなったものの、その形は図101のようになる。刃部は存在しておらず板状鉄斧と見なすことはできず、板状鉄器と呼んでおきたい。附編1で清水欣吾氏が述べるように、金属学的分析によれば鉄製品である可能性が高いとされる。これが事実であれば、板状鉄斧などを鉄素材であると考える東潮氏のように、この板状鉄器がインゴットなど鉄素材である可能性も想定できよう。その可否は今しばらく類例の増加を待たなければならないが、本調査区からもかなりの量の鉄器が出土していることからも、本地域では弥生中期末～後期前半にかなり鉄器が普及していたことが考えられ、鉄器の普及と铸造製板状鉄器との関連も注目しておく必要があろう。570は長さ約4cm、幅約1.5cmで、茎をもつ柳葉式鉄鎌である。道後平野では、類例は北条市掠／原山遺跡、松山市笠ノ口遺跡などにしられる。なお、本調査区出土の破鏡・鉄製品の一覧を表5に示しておく。改めて遺構に伴う鉄器の出土が意外と多いことに気づかれよう。

図版43の571・572は、a 6区暗茶褐色土下層出土のガラス塊である。両者ともa 6区中の比較的近接した地点から発見されており、関連がある遺物と考えられる。571は最大長約3cmと約2cm、572は最大長約2.5cmと小さなものであるが、附編2の刈谷道郎氏の分析によって、岡山県百間川遺跡出土のいわゆるガラスさいによく似ているものとの指摘がある。ガラスそのものではないが、ガラス製造の副成物の可能性もある。これは近接する松山大学構内遺跡S B 7からガラス玉が出土している事実と関連づけるならば、本遺跡でガラス製造を行っていた可能性を予見するものにつながろう。

〔注〕

- 1 宮本一夫「道後平野の中世土器編年-13~15世紀を中心に-」『糸子・梅味遺跡の調査』 1989年
- 2 古代学会四国支部『松山道後城北の弥生遺跡をめぐって』(シンポジウム資料) 1988年

弥生時代

- 3 松山大学・松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター『松山市通接城北遺跡群松山大学構内遺跡－第2次調査－』 1991年
- 4 愛媛県埋蔵文化財調査センター『桑原住宅埋蔵文化財発掘調査報告書』 1990年
- 5 高橋義『分銅型土製品』『弥生文化の研究 第8巻 祭と墓と装い』 1987年
- 6 前掲注5文献
- 7 和田勝吾「土鍬・石鋤」『弥生文化の研究 第5巻 道具と技術I』 1985年
- 8 久保寿一郎「古代の船舶資料－舟形模造品資料集成－」『九州考古学』第61号 1987年
- 9 大分市教育委員会『下郡遺跡群』 1990年
- 10 愛媛大学法文学部考古学研究室・愛媛大学埋蔵文化財調査室『文京遺跡第8・9・11次調査 文京遺跡における圓文時代遺跡の調査－』 1990年
- 11 松木武志「弥生時代の石製武器の発達と地域性－とくに打製石器について－」『考古学研究』第35巻第4号 1989年
- 12 前掲注11文献
- 13 愛媛県埋蔵文化財調査センター『一般国道196号今治道路埋蔵文化財調査報告書II』 1989年
- 14 藤本吉「不定形な石器」『弥生文化の研究 第5巻 道具と技術II』 1985年
- 15 冈村秀典「前漢鏡の編年と様式」『史林』第67巻第5号 1984年
- 16 寺沢薫「弥生時代船載製品の東方産入」『考古学と移住・移動』 1985年
- 17 松山市考古館『松山の原始・古代』 1990年
- 18 東洲「鉄器の基礎的研究」『櫛原考古学研究所紀要 考古学論叢』第12冊 1987年
- 19 長井数秋「椋ノ原山遺跡」『愛媛県史 資料編 考古』 1986年
- 20 松山市教育委員会『釜ノ口遺跡発掘調査報告書』 1973年
- 21 前掲注3文献

第4章 文京遺跡出土弥生土器の編年

1はじめに

これまで道後平野の弥生土器の編年については、松岡文一氏や岡本健児氏を始めとして、森光晴・大山正風氏や長井數秋氏などによって明らかにされつつある。その中でも、道後平野に限った編年としては森光晴・大山正風氏による文京遺跡第1次調査の成果が端緒となつたといえよう。その後、文京遺跡は10回以上の発掘が繰り返されてきたが、その内容は縄文時代を除けばごく限られた範囲でしか発表されていない。これが、その後の本地域の弥生土器編年体系作製の遅延をもたらしたことは疑い難いであろう。ところで、この度の文京遺跡第10次調査では、弥生第Ⅳ様式から第Ⅴ様式前半の遺物がまとまって出土している。とりわけ一括遺物や一括遺物に準ずる資料が豊富である。これは、従来までの一括遺物によらない土器編年に比べ、より型式学的かつ様式的把握や系譜関係を明確にできる土器編年の作製の可能性を意味している。円形竪穴住居址SB3、掘立柱建物跡SB6、土坑SK11・SK15、円形周溝状遺構SX14などが良好な一括遺物として挙げられる。また、遺物集中地点SX1・SX3・SX11、溝SD6なども一括遺物に準ずる良好な資料である。これらの資料を使い、弥生第Ⅳ様式から第Ⅴ様式前半の細かな土器の変遷過程について理解することにしたい。さらに、他地域との土器交流の足跡を辿るとともに、土器の器種組成の変化にも注目し、道後平野の地域的あり方の特性を明らかにすることを試みたい。

2一括遺物の検討

上記した一括遺物あるいは一括遺物に準ずる資料について、個々に検討していくことにしよう。なお、検討にあたっては、土器の系譜を明らかにする意味で、壺や甕などの各器種を通じて、統一的な型式細分を行った。それらの基準については、個々の一括遺物の検討の中で呈示することにする。なおそれらの型式分類については、既に第3章の遺物の説明の際に使ったものと同じ分類基準を基本としている。

S B 3

円形住居址SB3からは、完形を呈する土器が比較的多く出土している。壺は大型の壺

一括遺物の検討

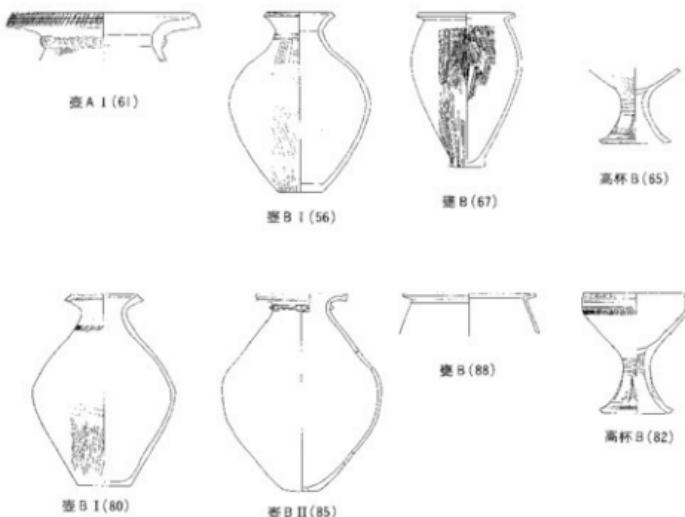


図102 SB 3・SB 6十器組成 錄尺1/10

A類と小型の壺B類に分け得る。大型の壺A類（図102-61）は口径が30cm以上あり、口端に凹線文が施されてのち縦方向の斜線文が刻まれ、頸部にも指頭圧痕をもつ隆帯が施される。これを壺A I類とする。小型の壺B類は口端に凹線文をもつものであり、これを壺B I類（同56）とする。甕は、口端がつまみ上げ状を呈し、平底である甕B類（同67）である。高杯は口縁部と脚端部に凹線文が施され、脚部に矢羽根状透しをもつ高杯B類（同65）である。

SB 6

掘立柱建物跡SB 6からも、比較的まとまった形で完形土器が出土している。壺は小型で口縁端部に凹線文を有する壺B I類（図102-80）が存在する。これは頸部に斜線文が施される典型的な壺B I類である。その意味では、SB 3の壺B I類は頸部に平行沈線文が施されており、やや特殊である。またここでは、壺B I類の他に、口縁端部に僅か1条の凹線文が施され、頸部に隆帯が張りつけられる小型壺の壺B II類（同85）も存在する。一方、甕はSB 3と同様に口唇がつまみあげられる甕B類（同88）である。また高杯も、

凹線文を有するこの時期の典型的な高杯B類（同82）である。

S X 1 · S X 3

遺物集中地点S X 1 · S X 3は、前章でのべたように、接合資料の存在などからも、一連の造構あるいは同一の造構である可能性が高い。出土土器の様相も同じであり、両者を一括遺物として検討しても問題はないであろう。

壺は大型壺A類と小型壺B類が存在する。壺A類は複合口縁状に口縁が内折し、口縁部には凹線文と縱方向の刻み目、あるいは円形浮文が施される。頭部にはやや幅広の隆帯が貼られ、上下2段に渡って押し引き状の刺突文が施されている。これはS B 3の壺A I類と一部文様要素も類似しているが、口縁部形態や頭部隆帯あるいは文様技法に大きな差異がみられるところから、壺A II類（図103-252）とする。小型壺の壺B II類では、典型的な凹線文壺である壺B I類（同316）と、口縁部に僅かな凹線文と頭部に隆帯をもつ壺B II類（同315）が存在する。なお、これら壺B I類と壺B II類は、両者とも胴部下半に最大径をもつ様式的な特徴を有している。さらに、ミニチュア壺の壺C類（同271）も存在し、これらの形態も、この時期の壺B類の様式的特徴を踏襲している。なおS X 1 · S X 3では出土が認められないが、同時期のS D 7では細頸壺（187）が出土している。この細頸壺は文京遺跡第7次調査でも同時期の造構から出土しており、本時期の特徴的な器種の1つといえよう。

甕はA~E類すべてが存在する。甕A類（図103-282）は口縁部に多条の凹線文を有する吉備系の甕である。底部は平底をなす。甕B類（同321・330）は、S B 3 · S B 6にみられたと同様に、口端がつまみ上げられ、器壁外面に縱方向の刷毛目が施され、平底を呈することに特徴がある。精良な甕であり、系統的には外来系のものといえよう。その中でも図103-330のように頭部のくびれが小さく口縁が広がり、底脚がやや大きい在地的なものも存在する。甕C類は頭部に刻み目をもつ1条の隆帯が貼られるものをさす。このなかには口縁部に凹線文をもつもの（同284）と、口縁がくの字形に外折するもの（同329）がみられる。後者は平底を呈するものの、口縁部形態からはやや在地的な色彩が濃いものである。甕D類（同289・326）はくの字形口縁を呈し、底部があげ底状を呈する。在地的な特色をもち、在地甕ということができよう。甕D類の様式的特徴としては、頭部に横方向の撫でがあり、胴部との辯が認められるところにある。この撫では、口縁部を撫でる際に同時に行われたものと考えられる。なお、口端に凹線文を有するもの（同326）もこの型式に含まれる。甕A類の文様要素の影響と解釈しておきたい。甕E類（同341）は、甕

一括遺物の検討

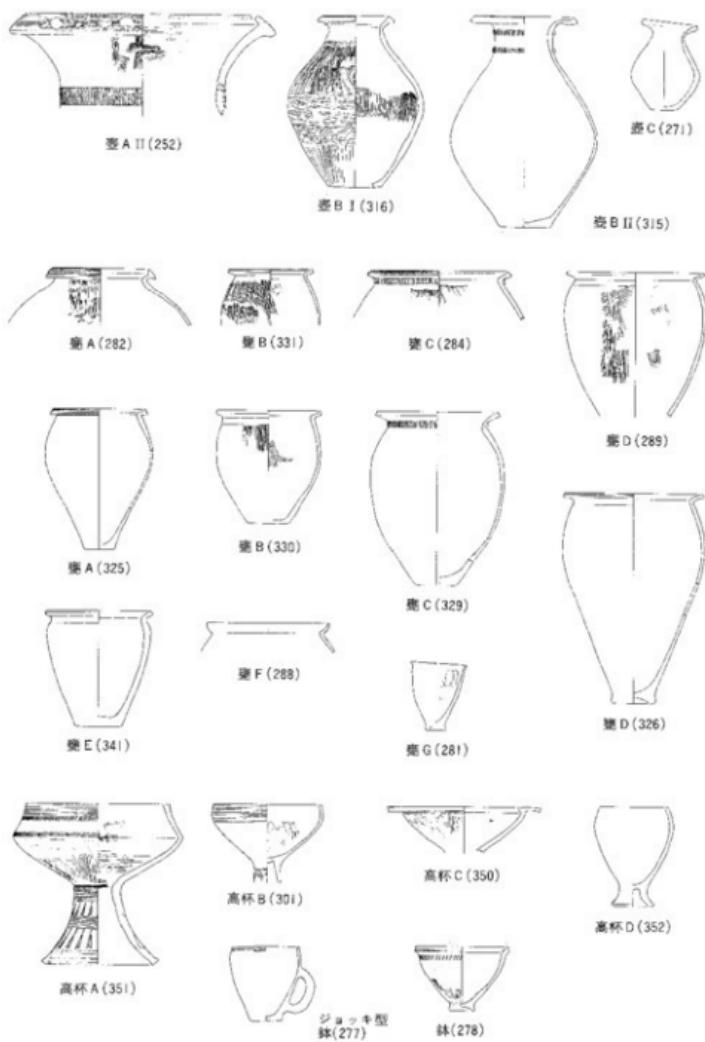


図103 SX1・SX3土器組成　縮尺1/10

D類と同様に口縁がくの字形に外反するものの、器壁が全体的に厚いものである。また口縁部と同時に頭部を強く横撫するため、口縁外面がやや肥厚しているところも特徴的である。底部は平底をなす。甕E類も在地甕と考えたい。甕F類（同288）は、口縁が内湾する特殊な甕である。溝S D 7 の完形例からも、この種の上器は上げ底を呈する。出土例は道後平野の中でも文京遺跡を中心として地域的に限られる在地甕である。以上のように、甕の中でも甕A・B類のように、凹線文土器の影響を帯びた外來系の甕と、甕C～F類は前時期からの系譜を引くものと考えられる。しかしながら、甕C・D類にも凹線文を有する折衷的な土器も認められ、かつ甕B類にもやや在地化したものがみられる。甕E・F類は特異な形態で、最も在地的な特徴をもつ在地甕ということができよう。なおこの他に、ミニチュア甕である甕G類（同281）が存在する。

高杯は4類に分類できる。高杯A類（同381）は大型で凹線文を有する高杯で杯部が内折する形態である。脚部は2段の矢羽根状透しをもっている。高杯B類（同301）は口縁部と脚端部に凹線文を有し、脚部に矢羽根状透しをもつ典型的な高杯である。口縁はやや内湾するものである。高杯D類（同352）は凹線文をもたず脚部にも透しをもたない高杯である。口縫はやや内湾しており、在地系の高杯である。この他、同時期の文京遺跡第7次調査S P169からは、凹線文をもつものの、脚部に透しをもたない在地的な高杯が出土しており、これらも高杯D類に属するものとしておいてよいだろう。さらに、杯部の口縁が水平に延びるものがあり、水平口縁の内側はややつまみ上げ状を呈し、口端はやや腫んでいる。これを高杯C類（同350）としておきたい。

以上の甕・甕・高杯の他、SX1・SX3では鉢やジョッキ型の鉢（同277）が存在する。鉢（同278）には文様を有するものと無文が存在する。またジョッキ型の鉢は第Ⅲ様式の系譜を引くもので、やや退化傾向を示している。

S K15

上坑SK15は、弥生第N様式の特徴をもつSB3・SB6・SX1・SX3に比べ、やや新しい上器型式が含まれている。凹線文甕や凹線文高杯がこの段階まで存続する可能性があるが、第N様式のものと区別し難いものを除いて、SK15の上器内容を開陳すれば以下のようなになるであろう。

甕は口縁部に凹線文を有せずまた頭部に隆起をもたない甕BN類（図104-100）が存在する。これは前段階の甕B類に比べ胸部の張りがやや強く様式的な変化がみられる。また口縁端部がやや内面に肥厚しているのは、前段階の凹線文甕の口端部の系譜にあるものと

一括遺物の検討

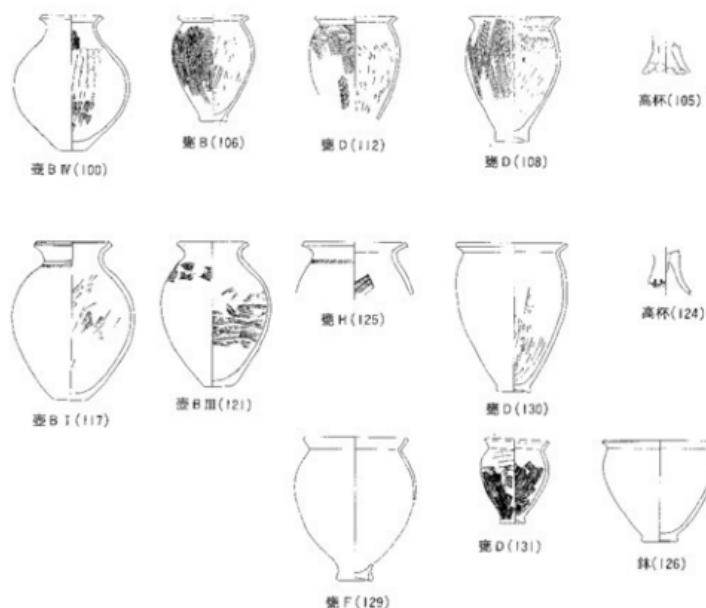


図104 SK15・SK11上器組成 縮尺1/10

も想定できる。

更に前段階の壺B類と壺D類の系譜を引くものが認められる。壺B類（同106）では口縁端部のつまみ上げがかすかに残り、また胴部下半の研ぎの消失や、底部の上げ底化が認められる。壺D類（同112・108）では、くの字形口縁の屈折がややあまくなり、頸部に認められた1条の横撫で消失している。また口縁端部は面取りぎみに下端方向にやや肥厚しているのが、この段階以降の様式的特徴であろう。なお形態の判明した底部は上げ底状を呈している。

高杯・鉢では明確な遺物が認められないため、詳細な状況は把握できない。ただ残存する高杯の脚部（同105）には矢羽根状透しや凹線文は認められない。

SK11

SK15出土遺物と型式学的に近い内容をもつ土坑SK11は、SK15と同様に凹線文壺の

壺B I類の上器片を若干含むが、それらを捨象して考えれば、SX1・SX3などよりは型式学的に後出する土器群である。

壺では壺B I類の系譜をひくもの（図104-117）が存在するが、口端部の凹線文は退化し浅くなっている。また、SK15と同様に無文の壺B III類（121）が出現する。これらの壺は、SK15の壺B IV類と同様に、前段階のものに比べ胴部の張りが強くなっている。

壺は、壺A・B・C類が存在しない。壺D類（図104-130・131）は存在するが、前段階に比べ胴部の張りが弱く胴部の最大径位置が上がっている。同様に壺F類（同129）も胴部の最大径位置が上がり、口縁の内鷺形態もややあまくなっている。これらの壺は、SK15と同様に、前段階にみられた頸部の横撫でが認められない。また新たに頸部に押し引き状の刺突文を特徴とする壺H類（同125）が出現する。

この他、鉢（同126）は、前段階のSX1・SX3のものに比べ、胴部が深めの鉢に変化している。また高杯（同124）は、残欠ではあるが、前段階で特徴的な矢羽根状透しなどは認められない。

S X 14

円形周溝状遺構SX14は、SK15・SK11より後出するものであり、新たに長頭壺や短頸壺、器台が出土し、いわゆる複合口縁壺も生まれている。

大型壺である壺Aは複合口縁化した壺A III類（図105-156）である。口縁部には凹線状の直線文がめぐり、口縁部文様は鉛描きによる平行直線文とその間を鋸歯状文がめぐる。また頸部には1条の隆帯が貼られ、隆帯上と下端部に押し引き状の刺突文が施されている。この刺突文は、SX1・SX3にみられる大型壺A II類の頸部にみられた隆帯上の2段にわたって施される押し引き刺突文に系統的につながっているものと考える。また、複合口縁の形態も壺A II類の口縁部形態の進化過程で生まれたものとも解釈できる。

中型の壺B類では、前段階にある無文の壺B III類（同139）が存在するが、胴の張りが前段階に比べ弱まっている。この他、複合口縁状の壺B V類（同145）も存在する。口縁部には鉛描きによる鋸歯状文が施される。

この時期から出現する長頭壺には、口縁がやや肥厚するものや、頸部に刺突文が施されるものが存在する。また短頭壺も出現している。

以上のように、壺形土器はこの段階以降急激な器種の増化が認められる。なおやや大型の凹線文壺の残片も存在しているが、この段階に通有のものかあるいは前段階以前に属するものか、その判断を保留しておきたい。

一括遺物の検討

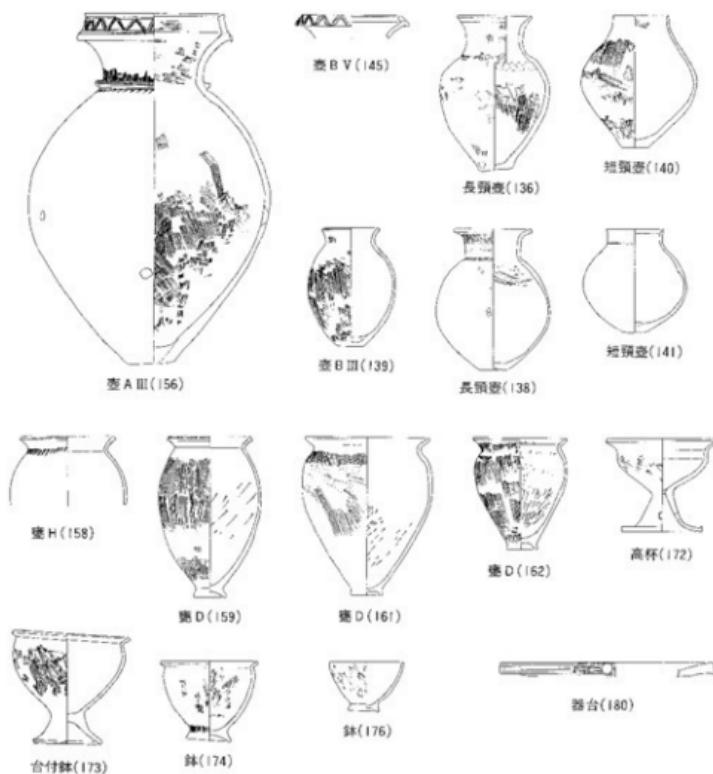


図105 SX14土器組成 比尺 1/10

壺は壺D類と壺H類が存在する。壺D類（同159・161・162）はくの字形口縁の屈折が前段階より弱まり、胴部の最大径がより上方に達し、肩部に張り出しがみられる。また前段階にもみられたように胴部内面には削り状の荒い撫でが認められる。一方、同じ壺D類に属するもので、口縁端部に擬凹線が施されるもの（同159）が1点存在する。胴部内外面の調整痕や底部の形状は他の壺D類と同様である。壺H類（同158）は、前段階に比べ、特徴的な頸部の刺突文の単位がやや大型化している。また、壺D類と同じようにくの字形

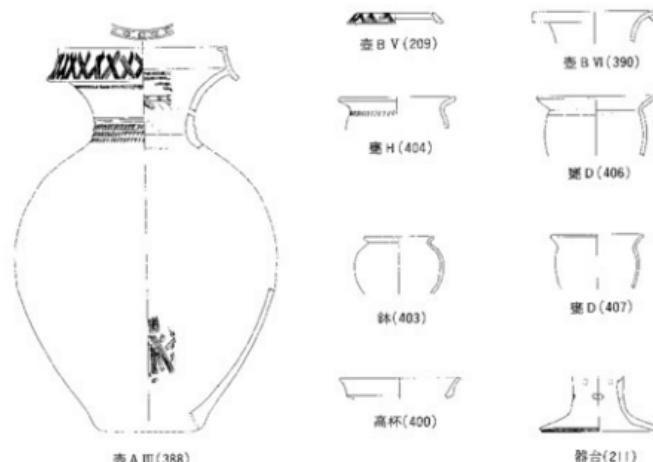


図106 SD 6・SXII土器組成 比尺1/10

口縁の屈折が甘く、胴部最大径が頸部に達する様式的特徴が認められる。なお、この壺H類は口縁端部に擬凹線文が施されている。

高杯（同172）は口縁が外反し口端部がややつまみ上がっている。脚部には円孔の透しが施される。鉢（同174・176）には口縁が外反するものと直口するもの、また台付鉢（同173）が存在する。またこの段階から器台（同180）が出現する。

SD 6・SXII

溝SD 6と遺物集中地点SXIIは、同一の遺構に伴う可能性を既に前章で述べている。従って、ここでは両遺構の遺物をまとめてとりあげることにする。またこれらの遺構の遺物は資料的に比較的数量が限られており、この段階の土器組成を十分に反映していないいうらみがある。また、これらの資料は、SX14と比べ、型式学的に後出するものである。

複合口縁の壺A III類（図106-388）は、SX14のものに比べ、口縁部文様が櫛描きによって施されており、かつ斜格子文に変化し、上下にみられた平行線文が消失している。また口端部の凹線文は消失し、かわりに竹管文が施される。頸部は多段の微隆帯下半に刺突文が施される。壺B類では複合口縁化した壺B V類（同209）が存在する。文様は櫛描きによって施される。また、口縁端部が下方に肥厚する壺B M類（同390）もこの段階から

出現する。

甕は前段階と同様に甕D類（同406・407）は前段階に比べ口縁の外反度がより弱まる傾向にあり、肩部の張りも弱まっている。甕H類（同404）も同様な様式的な特徴を示し、また頸部の刺突文もより粗雑化している。

高杯（同400）はより大型化する傾向にある。また杯部の形態では、杯部で一度屈折する形態を示す。鉢（同403）・器台も前段階同様存在している。器台（同211）は残欠のみで全体的な形態は不明であるが、円孔透しをもつことに特徴がある。

3 時期区分と他地域との関係

これまで一括遺物の内容を、型式分類により系譜関係を明らかにしながら相対的な前後関係を述べてきた。それにより大きく4つの段階の変遷が明らかになったと思われる。1段階はSB3・SB6・SX1・SX3を代表するものである。2段階はSK15・SK11があたり、3段階はSX14を基準としている。最後に資料がやや不足しているが、SD6・SX11を代表とする4段階に分けることができる。これらの段階の特徴を概述すれば以下のようにだろう（図107）。

1段階は凹線文を特徴とする段階で、壺では壺A I・壺A II類、壺B I・壺B II類、甕では甕A～G類、高杯A～D類、鉢、把手付鉢がみられる。この内、凹線文が施されるものは壺A I・A II・B I類、甕A類、高杯A・B類である。また口端部がつまみ上げ状を呈する甕B類は、前段階の弥生第Ⅲ様式に系譜を求められない精製の甕である。これらの各器種で基本的にその系譜を前段階に求めうるには、壺B II類、甕C～F類、高杯D類、把手付鉢などがあげられる。なお、高杯C類は、第Ⅲ様式の高杯からその系譜をもとめる考え方もある。⁽⁷⁾あるいは瀬戸内西部から北部九州にその系譜を求める考え方もあり立とう。1段階は凹線文が盛行するところからも弥生第Ⅳ様式に相当しよう。

2段階は凹線文が粗雑化しながら存続している。これを仮に擬凹線文と呼んでおきたい。ここで器種的系譜の特徴を説明したい。壺A類の存在は不明であるが、壺B類では擬凹線文を有しながら存続する壺B I類、あらたに出現する壺B III類・B IV類、そして壺B II類の消失に特徴がある。甕では、外来系の甕A類の消失、あるいは在地甕の甕C類の消失がみられる。また1段階の代表的存在である甕B類は、その特徴をかすかに残しながら存続している。同様に甕F類も退化しながら残っている。一方この段階以降最も主体化するのは甕D類の系譜であろう。さらにこの段階から以降、系譜が続く甕H類が出現している。

文京遺跡出土弥生土器の編年

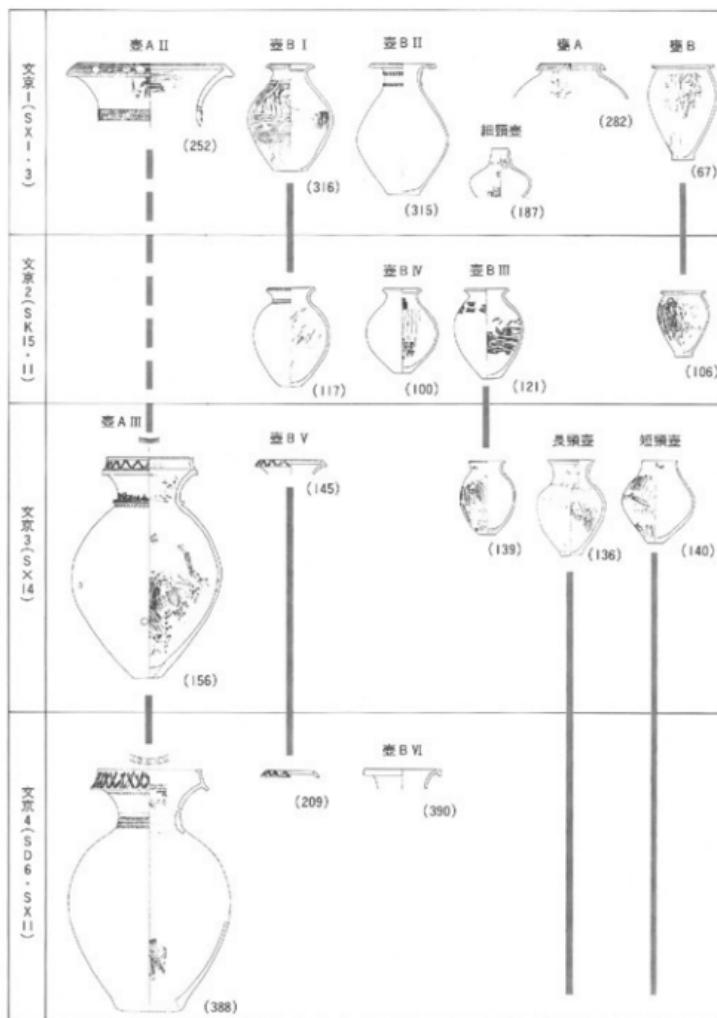
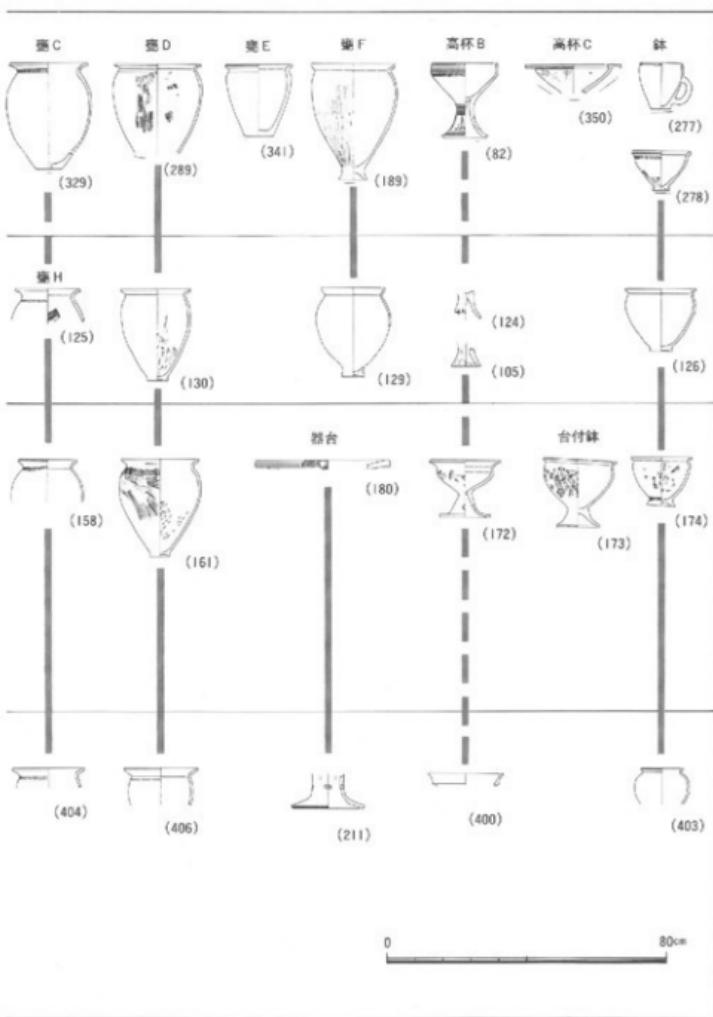


図107 文京遺跡弥生土器変遷図 比尺1/16

時期区分と他地域との関係



甕H類の頸部の刺突文は、前段階の甕C類にみられる頸部の刻口隆帯がルジメント化した可能性を考えられる。また凹線文、矢羽根状透しを特徴とする高杯は存在しない。従って、この段階は凹線文が擬凹線文化しながら存続にするにもかかわらず、前段階の特徴をなす器種である壺B II類、甕A類、高杯A・B類が消失し、さらにその後に続く系譜をもつ壺B III・B IV類、甕H類が新たに出現している。これらの諸要素からこの段階は明らかに分離期することが可能であり、弥生第V様式として区分したい。

3段階は、壺A III類、長頸壺・短頸壺・器台の出現によって特徴づけられる。また、甕A III類、壺B V類はともに複合口縁化しており、いわゆる複合口縁の開始期と位置づけられる。なお、甕A III類は、口縁部形態や文様の施文規則については、1段階の甕A II類の系譜をひいているものと考えている。また、この段階には、依然としてより粗雑化した擬凹線文が残っていることにも特徴がある。

4段階は、資料的な限界があり、器種全体に渡って概観することが難しい。幸い、文京遺跡と同遺跡群として考えられる松山大学構内遺跡では、同時期の良好な一括資料SB 7が存在する。この資料を参考にして考えるならば、この段階の特徴は次のようである。3段階の系譜をひく甕A III類の一般化、新たに出現した壺B VI類、口縁が屈曲する高杯の出現、長頸壺・短頸壺・器台の一一般化である。

先に2段階以降を弥生第V様式とした。2段階と3段階では大きく器種差もみられるが、壺B III類が両段階にみられ、さらに擬凹線文も存続している。この2つの段階は、1段階の第IV様式の伝統を幾分残しながら新しい器種の出現にみられる搖籃期ということができ、4段階の完全に確立した第V様式の様相とは区分して考えることが可能であろう。そこで、2・3段階は第V様式前葉、4段階を第V様式中葉と考えるのが妥当である。

ここで以上の考え方の妥当性の可否を問うため、他地域との関係を示してみたい。1段階は、凹線文を特徴とする甕A I・A II・B I類、甕A・B類、高杯A・B類から、弥生第IV様式に属することは間違いない。特に甕B I類・甕A類・高杯B類は、瀬戸内東部の影響を受けて成立したものである。また、甕B類、高杯C類は東予、中予地域を中心にやや広域の分布を示すものである。一方、甕B II類、甕C~F類、高杯D類は豊後平野の在地的特徴をもった土器群といえよう。ところで2段階以降の動きは、瀬戸内東部との対比での検討からは難しい。瀬戸内東部以外の他地域との比較を行えるものとして、複合口縁壺があげられる。これは、瀬戸内西部の各地域にみられるが、それぞれの地域で特色をもちながら変化している。⁽⁸⁾ 豊後でいえば安田寺式がこれにあたり。複合口縁壺の出自をどの

地域に求めるといった問題は別として、複合口縁壺が普遍化する段階が各地域にみられる。ここでいえば、4段階がそれにあたっている。壺AⅢ類の多様化である。壺AⅢ類はすでに3段階にみられるが、これが一般化する時期を他地域と比べるならば、瀬戸内各地域では弥生後期中葉（第V様式中葉）がこれにあたっている。既に4段階を弥生第V様式中葉として示したが、他地域との併行性からみても、この年代観を与えるのが妥当ということになろう。そこで、2・3段階を第V様式前葉とすることの蓋然性もでてきたのである。2・3段階は1段階の系統が存続する場合もあるが、特に凹線文にみられる擬凹線文化など、前段階の系譜が収束化する段階にあたっている。また壺BⅢ・Ⅳ類や壺H類、長頸壺・短頸壺など新たな器種の出現とともに、壺D・F類のような在地的な土器が強い主体性をもって存続している。このように、この段階ではそれまでの瀬戸内東部系統の土器が一掃されており、新たな地域的再編成が行われた段階ということができよう。このような中で3段階では瀬戸内西部に共通した複合口縁壺が成立し、本来の地域的細胞の強い瀬戸内西部圏の中で地域的主体をもつて土器変化が成立することになるのである。

4 地域的展開の様態

これまで弥生中期末から後期前半の土器編年と土器の系譜関係を明らかにし、地域的な展開を提示しようと試みてきた。ここでは、さらにその地域的な展開をより鮮明に明らかにしてみたい。さて、弥生土器の地域性の検討は学史上、様々な試みがなされている。その中で、都出比呂志氏らが、近年試みている方法に、一括遺物における器種組成比を示し、その地域的あるいは時代的変容のあり方から、地域的特質を提示する研究方法がある。⁽⁹⁾ 文京遺跡第10次調査では一括遺物あるいは一括遺物に準ずる資料が比較的豊富に出上していることから、上記の方法を使って地域的展開を示すことも可能である。対象とする資料は、括性がありかつ当時の一般的な状況を反映した性格をもつ遺構出土のものが適当である。1段階ではSX1・SX3、2段階では資料的にやや欠ける嫌いもあるがSK15・SK11、3段階ではSX14が該当しよう。4段階では、残念ながら本遺跡ではこの分析に堪え得る良好な資料がない。しかしながら、1～3段階の器種組成差の検討は、大枠で地域的動向を把握する目安になるものと信ずる。また時代的変移のあり方を知るため、文京4段階にあたる松山大学構内遺跡SB7の土器組成比を4段階の代表とする。⁽¹⁰⁾ 以下、各遺構の組成比を提示してみよう。

土器組成比は表6に、その時代別変遷は図108に示した。土器組成を算出するにあたっ

文京遺跡出土弥生土器の編年

S X 1 - S X 3 (文京 1段階)			
	個体	比率	
壺 A I	3		
B I	27	40 (55%)	
B II	6		
C	1	37	
その他	3		
壺 A	3		
B	11	14	
C	11		
D	21	52 (45%)	
E	2		
F	1		
G	3		
			計115個体

S X 10 - S X 11 (文京 2段階)			
	個体	比率	
壺 B I	4		
B III	2	8 (31%)	
B IV	2		
壺 B	1		
C	1		
D	7	13 (50%)	
F	1		
G	2		
H	1		
			計26個体

S X 14 (文京 3段階)			
	個体	比率	
壺 A I	1		
A III	1	2	
B I	1		
B III	1		
B IV	1		
B V	2		
長頸壺	7	17 (45%)	
円錐壺	3	10	
壺 D	11	12 (52%)	
H	1		
			計38個体

表6 土器組成比

では、口縁部径1/12以上の破片で個体識別法によって土器数を提示している。そのため、破片資料の多いS X 1やS X 3は、凹線文壺の壺B 1類など個体差の少ないものにおいて、同一個体を二重に算出している可能性もあり、実際よりは大きな数字になっている点を了承して頂きたい。また、高杯の場合は、杯部と脚部の接合する例が少なく、それそれを1個体として算出したため、これも実際より多い数字になっている可能性がある。

文京1段階のS X 1・S X 3は、壺35%、甕45%、高杯16%、鉢4%と、甕の比率が高い特徴が示された。この内、ミニチュア甕である甕G類を特別な器種として差し引いても43%とやはり高い比率が示される。なお組成比の中の壺や高杯にみられる「その他」は、壺の場合これまでの分類にあてはまらないものであり、高杯の場合は器台の可能性のあるものを数えたものである。また全体的な組成比以外の特徴として、壺では凹線文壺である壺B 1類、高杯では凹線文高杯である高杯B類が多いが、甕の場合、在地系の甕D類、つ

地域的展開の様態

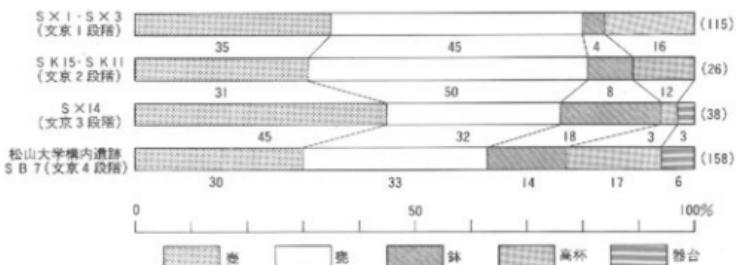


図108 土器組成比変遷図

いで甕B類・甕C類が多い結果得られた。従って、壺・高杯と甕の構成内容は異なっているといえよう。すなわち、外來系の影響を受けて成立した甕B I類や高杯B類が壺・高杯では多いのに対し、甕では在来系の甕D類や甕C類が多く、外來系の甕A類や甕B類が少ない点が認められるのである。これは壺・高杯と甕の受容のあり方が異なることに起因するものと考えられる。

後期初頭とした文京2段階のS K15・S K11は総個体数が少ない点に問題があるものの、全体的な構成比は前段階とはほぼ同様であり、甕が50%と高い比率を示している。個々の器種内での型式比率を眺めると、壺では前段階同様甕B I類が多い。また、在地的な系譜をひく甕B II類は消滅するものの、在地的傾向をます甕B III・B IV類が出現している。一方甕では、前段階以上に在地的な甕である甕D類の比率が高まっているといえよう。

文京3段階のS X14では、器種構成比に大きな変化がみられる。壺が45%で、甕の32%を遙かにしのぐ量比を呈している。これは、S X14が祭祀用の特殊遺構であることによるためと想定することも可能である。しかしながら、文京4段階に相当する松山大学構内遺跡S B 7では、S X14と同様に壺・高杯が非常に高い出土比率をしめており、S X14の構成比は遺構の性格だけに起因しない可能性がある。後期中葉の文京4段階において、壺・高杯の出土渦度が高いとすれば、その前段階で既に器種構成比の変化が生まれたことを評価してよいことになろう。ここで、S X14の器種内での構成比を検討してみると、甕A類と甕B類の総数は7個体、甕の個体数は12個体と、壺と甕の比率においては、前段階とはほぼ同様の比率が認められる。ここに致ってS X14で甕の比率が急増したのは、壺内に新たに成立した長頸壺・短頸壺を含めたためと理解できよう。従って、S X14では新たに成立した長頸壺・短頸壺が、器種構成内で重要な意味をもつようになったことが理解できるの

である。それは、従来の壺の欠を補充する形で成立したのではなく、従来の壺の構成の上に、新たに新器種である長頸壺・短頸壺が加わるということであり、生活習慣の大きな革新があったと評価しなければならないであろう。さらにそのあり方は、この段階から鉢の構成比が高まっていることと相應するものであると推測される。

こういった時代的な土器組成の変化を都出氏が畿内で示した土器組成の変化と対比して眺めてみたい。畿内の場合は、弥生第Ⅲ～Ⅳ様式には、壺32.9%、甕47.6%、鉢6.1%，高杯13.4%と甕の比率が非常に高い。これは、同時期の文京遺跡S X 1・S X 3の土器構成比と類似した傾向を示している。これに対し畿内第V様式では壺36.2%，甕26.9%，鉢10%高杯26.9%で、壺の比率が高まり、同時に高杯や鉢の組成比が高まっている。この傾向は、文京遺跡S X 14・松山大学構内遺跡S B 7と類似した出土傾向といってよいであろう。従って、文京遺跡を中心としてみた弥生中期末から後期中葉の土器組成比は、畿内と同様な変化傾向を示している。すなわち、中期から後期に移向するに従って、甕の減少に伴って壺の出土比率が高まり、さらに鉢や高杯の構成比が高まっているのである。

5 まとめ

本稿では、一括遺物を基に、文京遺跡内の基礎土器編年を確立し、今後の本遺跡を考察する基準とすることを目的とした。これにより、弥生中期末から後期中葉を4段階に細別し、弥生第Ⅳ様式が文京1段階、第V様式前葉が文京2・3段階、第V様式中葉が4段階とした。⁰³ 4段階は、梅木謙一氏が提示するⅡ-1式とⅡ-2式に細分できることを指摘しておきたい。また文京4段階の大半は梅木氏の言うⅢ-1式（松山大学構内遺跡S B 7）段階にあたるとしておいてもよからう。その間の土器変遷は図107を見て頂ければ、そこに本稿で述べようとした意図を読みとて頂けよう。ここでは、各段階の動きを概略することによってまとめとしたい。

文京1段階は、外米系の壺B I類、甕A・B類、高杯B類に特徴がある。しかし、その構成比は壺や高杯では壺B I類や高杯B類が多いのに比して、甕内では在地系の甕C・D類が主体を示し、甕に強い保守的なあり方が読みとれる。また、大型の壺A II類が存在し、これらは文京3段階に初出する複合口縁大型壺A III類に系統的につながるものと考えられる。さらに本段階の特徴は、構成比において、甕が主体を占めていることがあげられよう。

文京2段階は1段階同様甕の比率が高く前段階と同様な器種構成を示す。しかしながら壺B I類においては、凹線文が退化し擬凹線文に変化したり、壺B III類、B IV類といった

新しい型式が出現する。甕は前段階に比べて甕D類が主体となるとともに、甕F類は退化し、新たに甕H類が出現する。本段階は前段階の様相を色濃く残しながらも、新しい変化と在地的な傾向が強まったことが読みとれる。

文京3段階は、新たな器種の成立として、長頸壺・細頸壺そして複合口縁壺AⅢ・BⅤ類の出現があげられる。また器種構成比も前段階に比べ大きく変化し、甕の比率が減少し壺の比率が上昇するとともに、鉢の構成比も増加している。ここに土器型式さらに土器構成として、弥生後期的な様相が確立したといえよう。

文京4段階は、3段階に出現した土器型式が主体となって安定した段階といえる。その中でも大型複合口縁壺AⅢ類が、一般的に道後平野内に出土し、多様化することも、本段階の特徴といえよう。このような大型複合口縁壺が、瀬戸内西部で各地域に地域的な特徴をもちつつ普遍化する段階がこの時期にあたり、後期初頭の文京2段階から生まれた在地的特徴が、瀬戸内西部一帯を背景として成長していった過程が読みとれよう。また、松山大学構内遺跡S B 7に示されるように、鉢・高杯の組成比が前段階以上に高まっている。これは畿内と同様な傾向を示し、このことも弥生後期土器様式の確立が安定した段階に至ったことを示すものといえよう。

〔注〕

- 1 松岡文・「北四国地方」『弥生式土器集成編』1 1968年
- 2 国本健児「入門講座 弥生上器 四国1~5」『考古学ジャーナル』No.88~93 1973~1974年
- 3 森光晴・大山正風「土器の相对年代」『文京遺跡』1976年
- 4 長井教秋「農耕文化の形成と発展」『愛媛県史 原始・古代1』1982年
- 5 爰媛大学法文学部考古学研究室・爰媛大学埋蔵文化財調査室『文京遺跡8・9・11次調査—文京遺跡における縄文時代遺跡の調査—』1990年
- 6 古代学協会四国支那「松山道後城北の弥生遺跡をめぐって」(シンポジウム資料) 1988年
- 7 荒山昌児「東予地方における中期後半弥生土器に関する若干の考察」『遺跡』第32号 1990年
- 8 古代学協会四国支那「瀬戸内の弥生後期土器の編年と地域性」1990年
- 9 郡出比呂志「日本農耕社会の成立過程」1989年
- 10 松山大学・松山市教育委員会・松山市立埋蔵文化財センター「松山市道後城北遺跡群 松山大学構内遺跡—第2次調査—」1991年、なお国108のS B 7の土器組成比は、支脚、ミニチュア土器それぞれ4個を総数からはずしたため、上記報告書記載のパーセンテージとやや異なる数字となっている。
- 11 郡出比呂志「七器の器種構成と消費単位」『日本農耕社会の成立過程』1989年
- 12 梅木謙・「松山平野における弥生後期土器」『松山市道後城北遺跡群松山大学構内遺跡—第2次調査—』1991年

第5章 道後平野の石包丁の展開

1 はじめに

弥生時代の磨製石器研究は、大陸からもたらされた新作農耕文化との関係を知る上で重要な要素として、古くから研究が成されてきた。中でも、石包丁、磨製石斧などは、その用途もほぼ限定でき、特定の地域では編年の研究や、地域性を言及するに至っている。しかし、そのような具体的研究がなされている地域は決して多くない。本論で対象とする西部瀬戸内海沿岸地域（道後平野）においても、磨製石器に関する研究は断片的で、不十分と言わざるを得ない。

さて、石包丁に関する型式分類、編年の研究は、戰前の段階において森貞次郎氏および小林行雄氏によって為されている。森氏は福岡県立岩遺跡について、小林氏は奈良県唐古遺跡の研究をするに当たってのことである。そのほか、石包丁の形態分類や広範囲にわたる⁽¹⁾地域的特色を明らかにした、森本六爾氏の研究も重要である。

また、近年においては、九州地方の石包丁の形態的変遷を明らかにした、下條信行氏の⁽⁴⁾研究があげられる。

瀬戸内海沿岸地域の石包丁については、間壁忠彦氏の打製石包丁に関する研究がある。そのほか、このような形態を中心とした型式学的研究、編年学的研究とは別に、石包丁の法量（石包丁各部の計測値）に基づいた研究も成されている。武末純一氏は、北九州市地域⁽⁶⁾の弥生時代前期・中期・後期の石包丁の特徴を、石包丁各部の法量の大小から明らかにした。

以上のような石包丁研究の現状を踏まえたうえで、本論では、道後平野を対象に、統一された形態分類で、弥生時代各時期における主要形態を、付属的要素である法量・石材質についてもつけ加えながら、量的に明らかにし、石包丁の展開を明らかにしていきたい。

2 形態分類

本論では、対象地域全体の石包丁に関して、共通した形態分類を行った。また、石包丁には、磨製石包丁、打製石包丁があるが、それらは、石材、製作技法の違いとして捉え、両者とも同様に分類した。欠損品については、本来の完形品の状態に復現（基本的に左右対称）して分類した。法量の計測についても同じである。

形態分類

ここで行う形態分類は、基本的に、森本六爾氏の行った分類に多少の修正を行い、対象地域すべての石包丁についてもっとも適するよう、4形態（外湾刃半月形態、杏仁形態、直線刃半月形態、長方形態）に分類した。

各形態の定義にはいる前に、石包丁各部の名称などを説明しておくことにする（図109）。刃付けを施してある部分を刃部、その反対で刃をつけていない部分を背部とする。刃部と背部の区分は容易で、それは、石包丁の機能によるものと考えられる。刃部と背部によつて区切られた部分を側部とする。また、形態によっては、刃部と背部が左右両端でつながるため側部を持たない形態もある。

法量は、刃部と背部の距離の最大値をもって全幅とし、左右両端部、あるいは左右両側部の距離の最大値をもって全長として計測をおこなった。

以下、具体的に各形態の定義を、図を用いて説明していくことにする。

外湾刃半月形態（以下、A形態と略称する。図110-1～6）

A形態は、直線あるいは、直線に近い背部を持ち、刃部は、背部両端から大きく弧を描いて外湾する。背部と刃部の接点は、背部寄りになる。典型例としては、図110-1・2

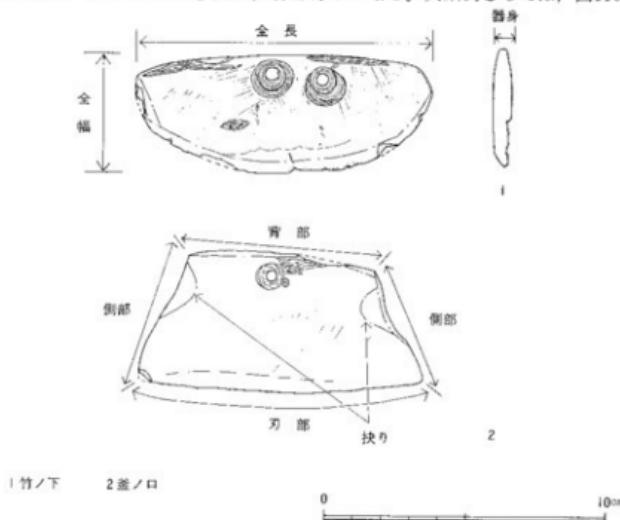


図109 石包丁の各部名称（1竹ノ下、2、釜ノ口）　縮尺1/2

道後平野の右包丁の展開

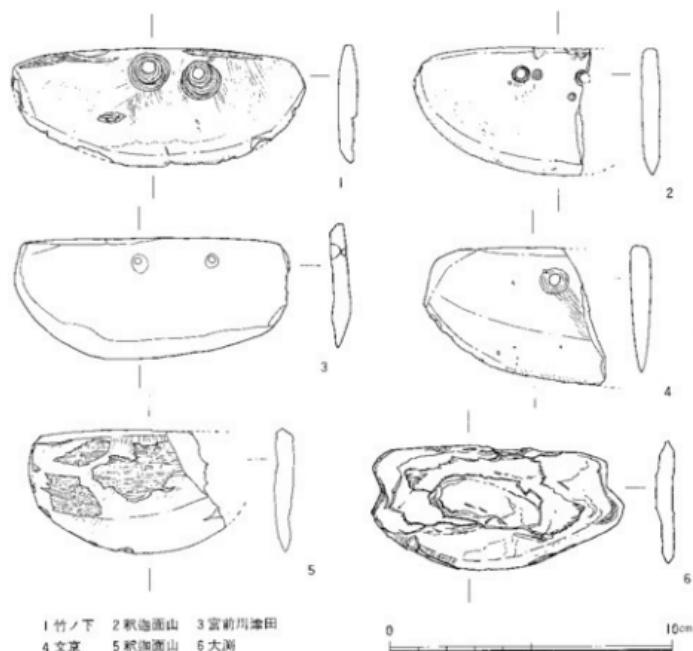


図110 道後平野のA形態の石包丁 横尺1/2

があげられる。また、両端部に不明瞭な小さい側部を持ち、そのため、刃部の外湾がゆるやかになる、図110-6もA形態の中に含める。

杏仁形態（以下、B形態と略称する。図111-1～6）

B形態は、外湾する背部と、同じく外湾する刃部を持つ。背部と刃部の接点は、両者のほぼ中央になる。典型例としては図111-2があげられる。また、背部と刃部の接点が、全幅中央より上にくるもの（図111-1）、逆に全幅中央より下にくるもの（図111-3）、両端部に不明瞭な小さい側部を持ち、そのため背部、刃部の外湾がゆるやかになるもの（図111-4～6）も、B形態の中に含める。

直線刃半月形態（以下、C形態と略称する。図112-1～4）

C形態は、直線あるいは直線に近い刃部を持ち、背部は刃部両端から大きく弧を描いて

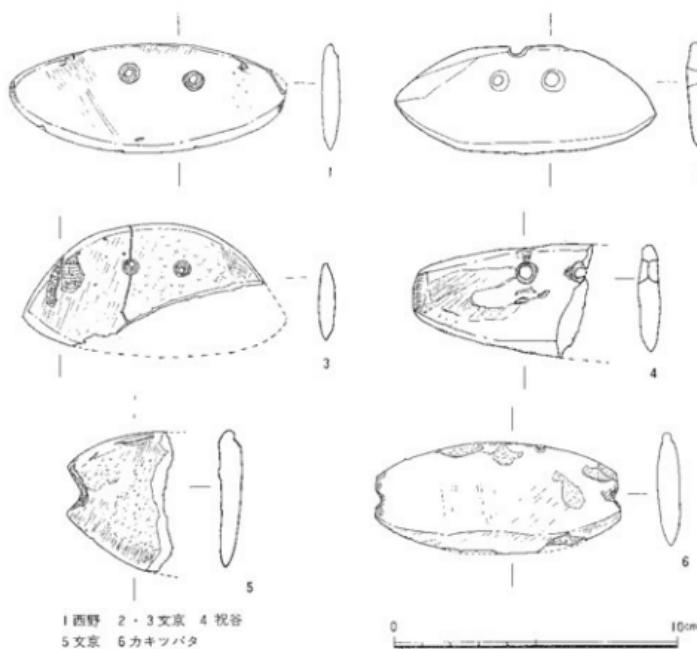


図111 道後平野のB形態の石包丁 縦尺1/2

外湾する。背部と刃部の接点は、刃部寄りとなる。ちょうど外湾刃半月形態（A形態）をひっくり返した形態となる。典型例としては図112-1・3・4があげられる。また両端部に小さい側部を持ち、そのため背部の外湾がゆるやかになる図112-2もC形態の中に含める。

長方形（以下、D形態と略称する。図113-1～9）

D形態は、直線あるいは直線に近い背部と刃部を持ち、両者によって区切られた明瞭な側部を持つ。そのため、四角形に近い形態となる。また、背部と刃部が不明瞭な側部によってゆるやかにつながるもの（図113-2・5）も、D形態の中に含める。

3 道後平野での展開

以上の形態分類をもとに、道後平野での石包丁の展開を明らかにしていきたい。なお、

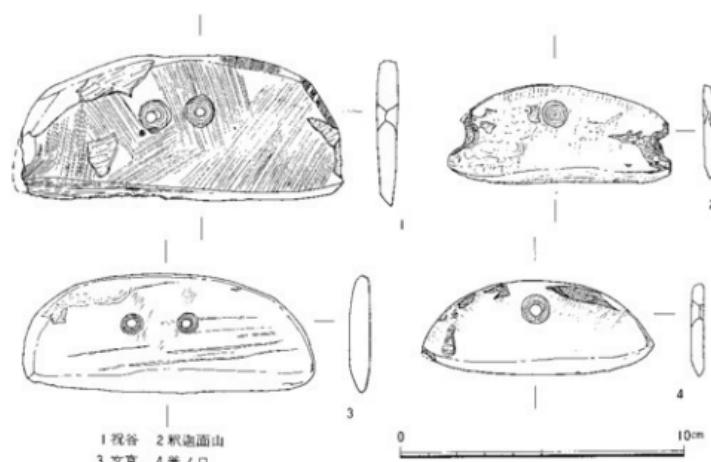


図112 道後平野のC形態の石包丁 縦尺1/2

各時期における形態組成比率については図114を、平野内での各遺跡での出土数については表7を、法量については図115を、各形態の時期的な変化を表した編年図については図116を参照していただきたい。

縄文晩期後葉（図116-1・2）

当地において石包丁が初出るのは、縄文晩期後葉である。その形態組成比率は、A形態1点50%，D形態1点50%である。この時期のA形態（図116-1）の特徴は、比較的小型（全長9cm, 全幅5cm）で、両端に抉りを持っており、穿孔を持たないということにある。また、石材には軟質の堆積岩を用い、仕上げも粗雑で器身も薄く貧弱な作りをしている。D形態（図116-2）についても、両端に抉りを持ち、法量も小さく（全長9cm, 全幅5cm）、石材、仕上げに関してもA形態と同様な特徴をもっている。

弥生前期末～中期初頭（図116-3）

この時期になると、初出のA形態は消滅し、D形態（図116-3）10点100%のみとなる。⁽⁷⁾ この時期のD形態の特徴は、法量は、前時期のものに比べてかなり大型化（全長12～17cm, 全幅4～6cm）し、石材も在地産の硬質の緑色片岩を用い、器身も厚く仕上げも丁寧になる。これらのこととは、石包丁の機能的な強化をはかり、より丈夫な石包丁を作り出したものと解釈される。なお、前時期にみられた抉りを持つ石包丁は一点も見られず、すべて穿

道後平野での展開

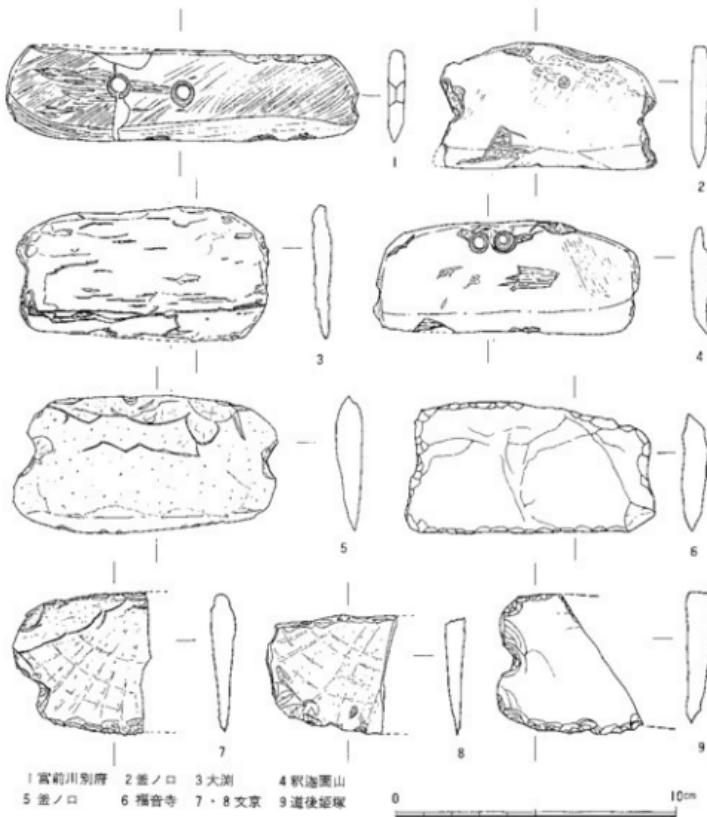


図113 道後平野のD形態の石包丁 鉢尺1/2

孔を有する石包丁となっている。

弥生中期中葉（図116-4～6）

この時期になると、D形態の他、B形態、C形態が初出する。その形態組成比率は、B形態3点11%、C形態5点19%、D形態18点69%となる。やはり、D形態が主流と言える。この時期、全形態（図116-4～6）とも、法量は前時期と比べて多少全長に対して全幅

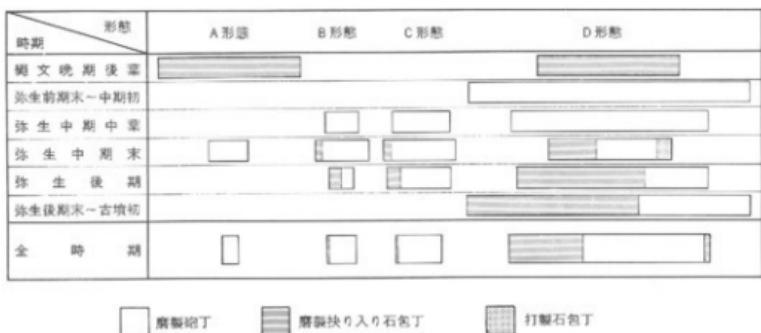


図114 道後平野の形態組成比率

が長くなり（全長12～16cm, 全幅4～6cm），やや幅広い形となる。また各形態は、石材、器身、仕上げとも前時期に比べ大きな変化はないものの、丈夫な石包丁の作りとなっている。

弥生中期末～後期初頭（図116-7～11）

この時期になると、再びA形態が再出する。また、B形態、C形態も依然として存在し、形態分類したすべての形態が存在することになる。このことは平野内での各遺跡単位でも同様で、多くの遺跡で各形態が存在し（表7）、平野内の遺跡単位での普遍性が伺える。D形態は各形態の出現により多少全体に占める割合は減少するが、それでもほぼ半数を占め、やはり主要形態である。この時期の形態組成比率は、A形態8点13%, B形態11点18%, C形態15点25%, D形態26点43%である。またD形態の中には、多少ではあるがサスカイト製の打製石包丁がみられる（図116-11）。各形態（図116-7～11）とも法量（特に全長）は前時期に比べ小型化している（全長8～12cm, 全幅4～6cm）。石材、器身、仕上げについては、前時期とほぼ同様で、石材には硬質の緑色片岩が使われ、器身も厚く、仕上げも全体的に丁寧である。またこの時期になって、初出期の縄文晩期後葉にみられた抉りを持つ石包丁が、B形態（図115-5）、C形態（図112-2）、D形態（図113-4, 図116-10）に見られる。ことにD形態では、D形態26点中10点のものに抉りが見られる。

弥生後期（図116-12～14）

この時期になるとA形態は再度消滅し、B形態2点9%, C形態5点23%, D形態15点68%となる。やはりD形態が主要形態となる。法量も各形態とも小型で（全長7～11cm, 全幅4～6cm），石材、器身にもほぼ変化はない。しかし仕上げにおいては、特に表面、刃部の研磨などかなり粗雑な仕上げとなる。また各形態とも抉りを持つものが多く、D形態

においては、D形態15点中10点に抉りが施されている。また、穿孔途中の未貫通の穿孔を持ちなおかつ抉りを持つ石包丁（図113-14）も数多く存在する。抉りを持つ石包丁（図116-14）については、仕上げは粗雑で、抉りも左右両端部を打ち欠いた程度のもので、粗雑な作りをしている。

弥生後期末～古墳時代初頭

（図116-15）

この時期になると、D形態18点100%のみとなる。他の、B形態、C形態は消滅する。法量は、後期のものとほぼ同じく小型（全長7～10cm、全幅4～6cm）である。全体の仕上げは、さらに粗雑となり、自然石のまま使用し、表面が研磨されていないもの、刃部のみ研磨してあるもの（図116-15）が数多くある。石材も、緑色片岩以外に砂岩や玄武岩等、より身近なものを使用している。また抉りを持つ石包丁がほとんどで、その抉りも単なる打ち欠き程度の粗雑なものである。

4 まとめ

以上、道後平野における各時期の石包丁の展開を明らかにした。ここではそれらをまとめ、石包丁から見た弥生時代の背景を推察していく。

当地で石包丁が初出する縄文晚期後葉、大陸から伝来した稻作農耕文化の一要素として、

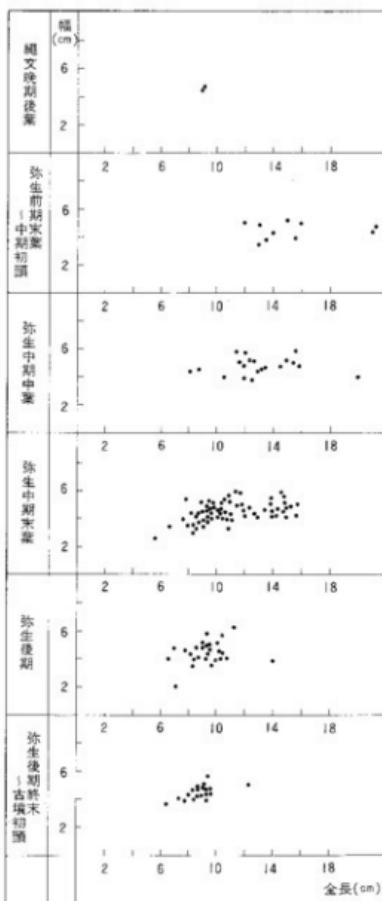


図115 道後平野の法量図

道後平野の石包丁の展開

遺跡名	時期	A形態	B形態	C形態	D形態	合計
大瀬	縄文晚期後葉	1			1	2
久米窪田	弥生前中期				6	
宮前川別府	3				3	
来住	弥生中葉初頭				1	
山越				1	1	
祝谷	弥生中葉中葉		3	4	18	27
文京		2	6	10	14(2)	
西野	弥生中期末	4	2	1	7(1)	
谷田	3	2	1	2(1)		
駿河面山	弥生後期初頭	2	1	2	1	
久米窪田				1		
北久米					2	
釜ノ口				3	10	
捨町			1		1	
水満田					1	
津田鳥越	弥生後期			1		
カキツバタ			1			
中村村田					1	
澤穴小学校					2	
東石井				1		
星の岡	弥生後期末				11	
福音寺	～古墳初頭				7	18
合計		12	17	25	132	186(5)

表7 道後平野の各遺跡の石包丁出土数 ()内は打製

石包丁も北部九州を経て当地の伝播したと考えられる。初出期の石包丁の特徴としては、他地域の初出期の石包丁と同様に、形態はA形態(図116-1)である。また、後に当地で主要形態となるD形態(図116-2)も初出の段階から存在している。両形態とも石材は軟質の堆積岩、器身は薄く仕上げも悪い。このことは、石包丁製作の上の技術も経験も乏しく、ただ伝播した石包丁をそのまま模倣したに過ぎなかつたためと思われる。またこの時期の石包丁には、穿孔はみられず両側部に抉りを持つという、他地域には見られない特徴を持っている。

弥生前中期から中期初頭にかけての時期では、当地での主要形態が選択され、D形態(図

116-3)が主要形態となる。また、石包丁の機能強化が成され、法量も大型化され、石材も硬質な在地産の緑色片岩が用いられる。器身も厚くなり刃もしっかりとつけられ、全体的な研磨などの仕上げも丁寧になる。これらのこととは、石包丁における地域性の選択と機能性の充実の2点が成された結果によるものと思われる。

弥生中期中葉以降後期に至るまでは、他地域との交流、石包丁製作の省力化・合理化という2点の変化が伺える。中期中葉には、それまで一形態であったD形態に加え、B形態(図116-4)とC形態(図116-5)が加わる。中期末から後期初頭においては、縄文晚期後葉以後消滅していたA形態が再出現する。さらに、D形態の中に見られるサスカイト製打製石包丁(図116-11)は、他地域との交流を推測させる。しかし、あくまでもD形

まとめ

形態 時期	A形態	B形態	C形態	D形態	D形態(打撃)
縄文後期 後葉	1			2	
弥生前期 末期～中期初葉				3	
弥生中期 中葉		4	5	6	
弥生中期 末期～後期初頭	7	8	9	10	11
弥生後期		12	13	14	
弥生後期 末古墳初葉				15	

1・2 大渕 3 宮前川別府 4～6 祝谷 7 駅泊面山 8 西野 9 文京
 10 駅泊面山 11 文京 12 カキツバタ 13・14 篠ノ口 15 福音寺

図116 道後平野における石包丁編年図 縮尺1/6

態の緑色片岩製の磨製石包丁が主要形態であり続けることに変わりはないのである。また、中期末から後期初頭においては、縄文晩期後葉以降みられなかった、抉りを持つ石包丁(図111-5、図112-2、図113-4)が、再び現れる。これを、初出石包丁からの系譜とみると、あるいは、抉りをもつサスカイト製の打製石包丁の影響とみるかであるが、弥生前期末から中期中葉までの石包丁には、抉りのある石包丁は存在しないことより、他地域ごとに抉りを持つサスカイト製の打製石包丁が主要となる岡山平野、讃岐平野等の東部瀬戸内海沿岸地域との交流の中で当地で再現したものと考えられる。また、この時期には、各形態ともに、小型化する傾向にある。後期に至ると、小型化とともに抉りを持つ仕上げの悪い石包丁(図116-14)が多く現れる。特に、穿孔を持たず打欠き程度の抉りを持つ、仕上げの粗雑な石包丁が目立ってくる。このことは、穿孔、研磨というかなり手間のかかる石包丁製作作業を簡略化した結果であると思われる。つまり穿孔は簡単な打ち欠きの抉りに、研磨は小型化による研磨面積の縮小、刃部のみの極部的なものへと作業の省力化・合理化が行われた結果と思われる。それを裏付けるように同一個体の中に、未貫通の穿孔跡と、抉りを持つ石包丁がこの時期多く存在している。このことは、従来穿孔が満たしていたひもかけの機能を簡略な両端部の抉りにより、その機能を代行した結果であると考え

られる。つまり他地域との交流で得た打ち欠きの抉りが、石包丁の作業の省力化、合理化に組み入れられた結果と言えよう。この合理化により、後期末から古墳時代初頭の石包丁は、そのほとんどが、穿孔を持たず小型で、仕上げの粗雑な抉りを持つ石包丁となっている（図116～15）。中には、研磨を省くためか、自然石の自然面をそのまま利用し刃部のみ研磨しているものや、それまでの緑色片岩を石材に用いず身近な砂岩や玄武岩を用いた石包丁もみられる。つまり、この時期には、石包丁に要求される必要最低限の条件が満たされていれば、石包丁として使用していたようである。時代の背景から考えても、古墳時代に入り、種の収穫法が石包丁による穂摘みから鉄鎌による根かりに移行する時期でもあり、石包丁の役割も終わろうとする時期であったこともその原因と考えられる。

以上、石包丁という稲作農耕文化の一要素である穂摘具が、道後半野でどのように展開してきたかを明らかにしてきた。そこから言えることは、穂穂を摘みとるという単純な機能を満たすだけの石包丁が、地域性や時代の変化を解明していく上で、重要な手掛かりとなりうるということであろう。今後の課題として、他の遺物、特に土器の地域性との関連を明らかにしていくこと、また当地と他地域の石包丁の比較研究があげられる。

最後に、小稿を執筆するにあたり、松山市教育委員会、愛媛県埋蔵文化財調査センターの皆様に、多大の協力をいただいた。この場を借りて感謝の意を述べたい。

〔注〕

- 1 森貢次郎「古跡弥生式文化に於ける立岩文化期の意義」『九州の古代文化』1983年
- 2 小林行雄他『大和・廐古・弥生遺跡の研究』京都大学文学部考古学研究報告第16冊 1942年
- 3 森本六爾「石包丁の諸型態と分布」『日本原始農業新論』1934年
- 4 下條信行「東アジアにおける外夷石包丁」『龍山猛先生古稀記念古文化論叢』1980年
- 5 間瀬忠彦「打製石包丁」『弥生文化の研究 第5巻 道具と技術Ⅰ』 1985年
- 6 武末純一「石包丁の計測論」『東アジアの考古と歴史（中）』岡崎歌先生追憶記念論集 1987年
- 7 石包丁の企画は、手のひらで握って使用するため、機能的にその長さは全時期を通じて4～6cmと一定している。しかし全長については時期によって変化するようである。よって法量の大型化、小型化とは、主に全長についてのことを目指す。

参考文献

- 愛媛県教育委員会、(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター「来往V」「一般国道11号松山東道路関係遺跡埋蔵文化財調査報告書II」1981年
 (財)愛媛県埋蔵文化財調査センター「宮前川別府」「宮前川遺跡」1986年
 愛媛県教育委員会、(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター「久米塚田IV・V」「一般国道11号松山東道路関係遺跡埋蔵文化財調査報告書II」1981年
 松山市教育委員会「文京遺跡」1978年
 愛媛県教育委員会「西野I、II、III」「愛媛県宮崎総合運動公園関係埋蔵文化財調査報告書I」1978年
 愛媛県教育委員会「佐庭山」「愛媛県宮崎総合運動公園関係埋蔵文化財調査報告書III」1981年

第6章 文京遺跡の集落立地について

1 はじめに

第10次調査の遺構の変遷については、すでに第3章第2節第1項の遺構の概観で概略を述べている。ここではこういった遺構の変遷を、第4章で展開した弥生土器の編年、あるいは発掘調査の所見にもとづく遺構の切り合い関係により、再度その変化を明らかにしてみたい。さらにこれまで文京遺跡の11回の調査によって検出された弥生時代の遺構を、総合的に捉え直してみたい。しかしながら、過去11回に渡る発掘の中で、弥生時代の遺構の主要部分である第2・3・7次調査の報告はいまだ出版されていない。この点が、これまで文京遺跡を総合的に捉える障壁となっていた。幸い1988年に行われた古代学協会四国支部のシンポジウム「松山道後城北の弥生遺跡をめぐって」⁽¹⁾でその概要が明らかにされたことを受け、その成果を利用して、第10次調査の成果と関連づけながら、文京遺跡の総合的な理解への一歩としている。古代学協会四国支部・松山市教育委員会をはじめ資料を提供して頂いた方々に感謝を申し上げるとともに、第2・3・7次調査に関しては、そのシンポジウム資料を根拠として、論を展開していくことにしたい。従って、確実な遺構の切り合い関係あるいは共伴土器の関係などが不明確で、やや資料的な裏付けに欠く感があることを断っておきたい。

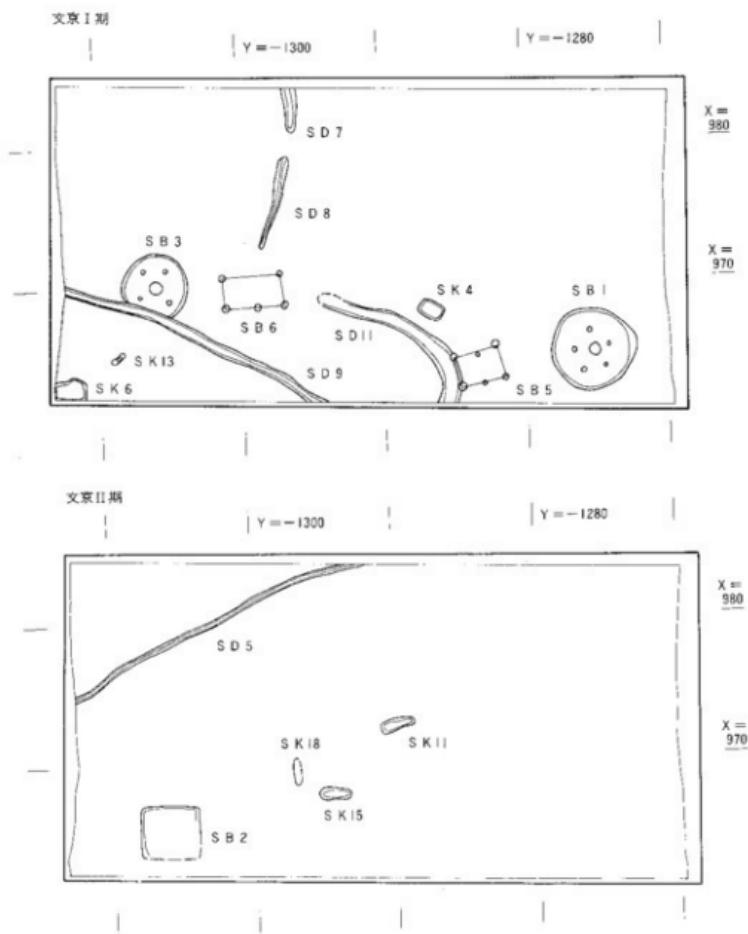
2 第10次調査の遺構の変遷

ここでは、第3章で述べた弥生土器編年を根拠として、文京1段階～文京4段階の土器編年觀にもとづき、遺構群の変化を図117を使って簡単に示しておきたい。

文京I期

弥生第N様式すなわち文京1段階の中后期の段階である。円形住居跡S B 1と掘建柱建物跡S B 5がセットとなり、また同様に円形住居跡S B 3と掘建柱建物跡S B 6が対になって存在する。土坑ではSK 4・SK 6・SK 13が存在する。溝はSD 7・SD 8が南北方向に位置するが、住居跡や土坑との関係は不明である。その他の溝SD 11とSD 9は、包含層堆積時に調査区南側の文京1段階の遺物を巻き込んで流れ出した溝と考えられ、文京I期直後に形成されたものと考えている。

文京遺跡の集落立地について



図II17 第10次調査地の遺構の変遷 縮尺 1/400

第10次調査の遺構の変遷

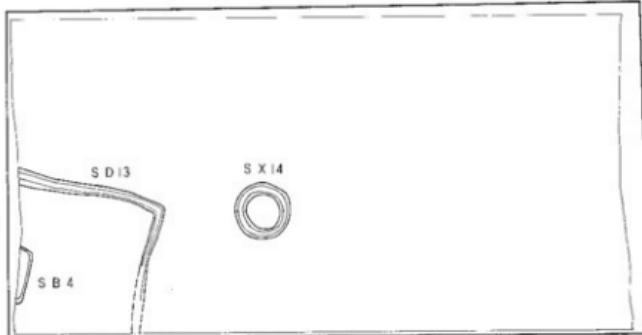
文京Ⅲ期

$Y = -1300$

$Y = -1280$

$X =$
980

$X =$
970



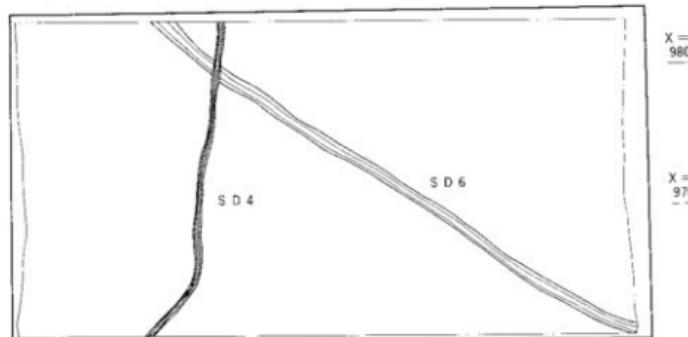
文京Ⅳ・Ⅴ期(斜線部分は文京Ⅴ期)

$Y = -1300$

$Y = -1280$

$X =$
980

$X =$
970



文京Ⅱ期

文京2段階の弥生第V様式初頭の段階である。方形住居址S B 2、そしてその東側に土坑SK11・SK18・SK15がかたまって存在する。SK18は骨片が出土しているところから、墓坑である可能性も指摘できる。SK11とSK15は多量の完形土器が埋設されており、墓葬と判断し難い。何らかの祭祀関連遺構とするならば、墓の可能性のあるSK18とともに、祭祀関連遺構が集中しており、この地点が特別な地域として当時理解されていたものと考えておきたい。またSD5は調査区北端を南西方向に流れる溝であるが、集落の北端を限る溝の可能性もある。

文京Ⅲ期

文京3段階の弥生後期前葉の段階である。方形住居址S B 4を取り囲むように方形区画の溝が巡る。その東側には祭祀関連遺構である円形周溝状遺構SX14が位置する。集落内の住居区を画する溝の出現とともに、前段階に特殊な地点であったと同様な場所に祭祀関連遺構が立地している。これは、集落内での居住空間と祭礼場とを明確に区分しようとしたものとして評価したい。

文京Ⅳ期

文京4段階の弥生後期中葉にあたる。溝SD6が存在するのみである。SD6は文京4段階のものを調査区南側から巻き込みながら流れ込んだものと判断される。人工的な溝というよりは、文京1期のSD11・SD9に類似して自然流路的な一時期の溝と判断される。この時期から本調査区では遺構は激減している。

文京Ⅴ期

溝SD6を切る溝SD4が存在する段階である。溝SD4の遺物は僅少であるため正確な年代は判断し難いが、後期中葉の文京4段階に納まるものといえ、後期中葉後半を考えたい。この段階を以て本調査区の土地利用は途絶えるのである。

3 文京遺跡における集落の変遷

以上に示した文京I期～文京V期までの第10次調査地における遺構の変遷を、他の第1次から第11次の調査区の遺構群との対応で考えてみたい。まず第10次調査地に近接する第1次と第2次の調査区の遺構配置を示したのが、図118である。これらの調査区に弥生時代の遺構が密集している様子が、よく理解できよう。これら3つの調査区の遺構の変遷を、先に示した文京I期～文京V期の年代観で示してみたい(図119)。なお第1次調査に関しては

文京遺跡における集落の変遷

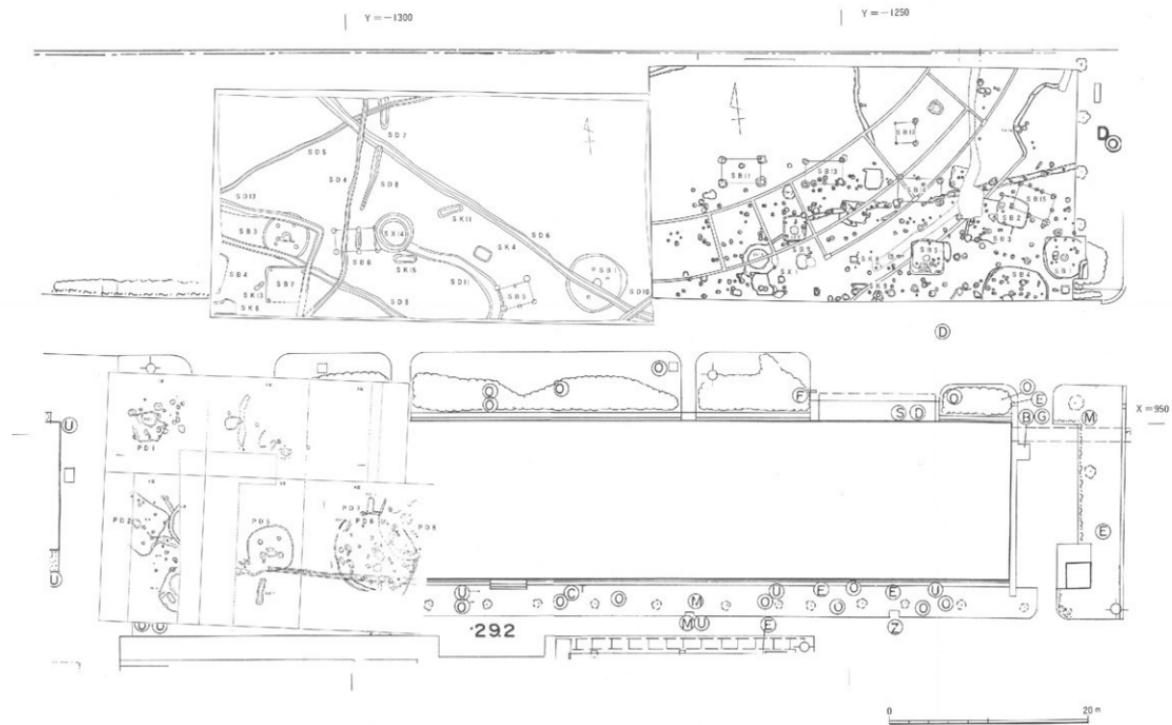


図118 第1・2・10次調査の遺構の配置 総尺1/400

文京遺跡における集落の変遷

(2) 報告書に記載されている共伴遺物を基に年代を決定したが、残念なことに遺構と共に遺物の関係が明確に語れるのは住居址 P D - 5 のみであった。また第 2 次調査に関しては、シンポジウム『松山道後城北の弥生遺跡をめぐって』の資料にみられる遺構共伴遺物を年代決定の基準とした。

文京 I 期

円形堅穴住居址 S B 1・S B 3 と、第 1 次調査の円形堅穴住居址 P D - 5、第 2 次調査の円形堅穴住居址 S B 1 が、住居址間約 20m 前後で並立して存在していることが理解できる。第 1 次調査では円形堅穴住居址と掘立柱建物跡がセットで捉えられたが、その他の調査区では不明である。第 2 次調査区では 5 棟の掘立柱建物跡が検出されているものの、その年代は明らかでなく、第 2 次調査区の掘立柱建物跡 S B 11 が文京 I 期に属する可能性がある。なお住居址間約 20m で集落が構成されていることは、集落構造を理解する意味で 1 つの成果といえよう。

文京 II 期

溝 S D 5 を境として、その南側に集落が構成されていたことが理解される。第 10 次調査区の土坑 S K 11・S K 18・S K 15 など土坑が集中している状況が認識できるが、これとともに祭祀関連遺構である円形周溝状遺構 S X 1 が第 2 次調査区に出現している。この円形周溝状遺構は、道後平野では釜ノ口 M 遺跡や釜ノ口 1 次調査においても既に検出されている⁽⁴⁾。釜ノ口 M 遺跡の場合、弥生後期の可能性が指摘されており、文京遺跡の例を加えるならば、円形周溝状遺構は、道後平野において弥生後期に集落内に出現する祭祀関連遺構ということができよう。

文京 III 期

文京 II 期に統いて円形周溝状遺構 S X 14 が第 10 次調査区にみえる。第 10 次調査では、集落内に方形区間の溝が設置され、溝の内側にも住居址が存在するところから、溝による集落内の区画が新たな階層の出現を意味するものと解釈される。すなわち、集落内の特殊階層の住居群を示している可能性があり、階級化という歴史的事実を裏づけるものである。

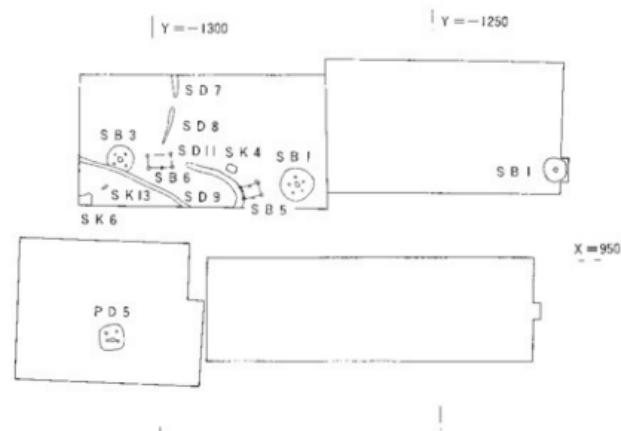
文京 IV 期

第 2 次調査区で方形堅穴住居址 S B 5 が認められる。第 10 次調査区の溝 S D 6 はこの段階の遺物を巻き込んだものであり、S B 5 以前にこの段階の住居址群が存在する可能性を指摘できよう。

文京 V 期

文京遺跡の集落立地について

文京Ⅰ期



文京Ⅱ期

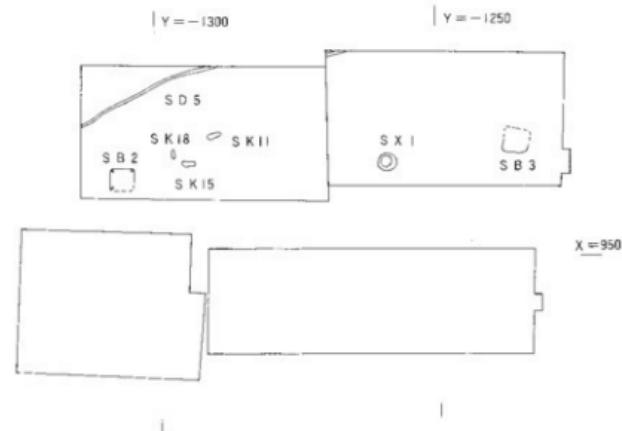


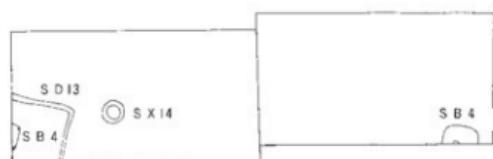
図119 第1・2・10次調査地の遺構の変遷 縮尺1/1000

文京遺跡における集落の変遷

文京Ⅲ期

$| Y = -1300$

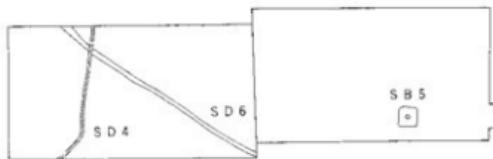
$| Y = -1250$



文京Ⅳ・Ⅴ期(斜線部分は文京Ⅳ期)

$| Y = -1300$

$| Y = -1250$



この段階は、第10次調査区の溝S D 4が認められる以外、遺構群の存在は不確かである。ともあれ、この段階に致って、調査区周辺では集落が衰退しているといふことがいえよう。

4 ま と め

上記したた第1・2・10次調査の遺構の変遷は、文京遺跡の集落の変遷を理解する1つの指標となったものと思われる。文京遺跡では、それら以外に第3・6・7・11次調査で弥生中・後期の遺構が検出されている。第3・6・7次調査に関しては、明確な年代づけができない部分もあるところから、その概観を論じ、文京遺跡の集落変遷を推測しておきたい。(図120)。

文京遺跡は、第4次調査の松山私立東中学校で発見された弥生前期前半の円形堅穴住居址を除けば、集落の開始期は弥生中期末の文京Ⅰ期にあたる。第1・2・10次調査区でその集落形態を復元できただけなく、第3次調査区にはこの時期の密集した遺構群が認められる。円形堅穴住居SB 1・SB 6、方形堅穴住居SB 10、方形周溝状遺構などである。隣接する第11次調査区では、この段階には、溝SD 3と土坑SK 3が認められるのみで、集落は溝SD 3以西に主体があり、その中心の1つが第3次調査区にあることが予想できる。方形周溝状遺構は、墓と断定することはできず、文京Ⅱ期以降に出現する円形周溝状遺構の先駆けとなつた祭祀遺構ではないかと想定できる。そうであるならば、文京遺跡の集落の祭祀的中心は、文京Ⅰ期の段階には、この第3・7次調査区付近を考えることもできよう。

ついで文京Ⅱ・Ⅲ期の段階は、第3・7次調査区では、第7次調査の方形堅穴住居址SB 7や土坑SK 5があげられるぐらいで、遺構の中心は第1・2・10次調査区に移っているといえよう。その祭祀的な中心存在である円形周溝状遺構は、文京Ⅱ期には第2次調査区のSX 1、文京Ⅲ期には第10次調査区のSX 14がある。しかも文京Ⅲ期には集落内にさらに住居群を区画する溝が集現し、集落内の特殊階層地を示している。これも第10次調査地西端で検出されており、時代を追って集落の中心が西側に移っていったことを裏づけるものであろう。文京Ⅳ期では、第1・2・10次調査区周辺に集落の一部があるものの、⁽⁵⁾松山大学構内遺跡SB 7のように、集落はより西側に移動したものと考えられる。なお文京Ⅱ・Ⅲ期の弥生後期前葉以降、梅木謙一氏も指摘するように、円形住居址に対し方形住居址が次第に多数作られるようになり、住居構造の変化が認められる。つぐ文京Ⅴ期の弥生後期中葉後半には、文京遺跡ではほとんど土地利用がなされなくなる。

ま と め

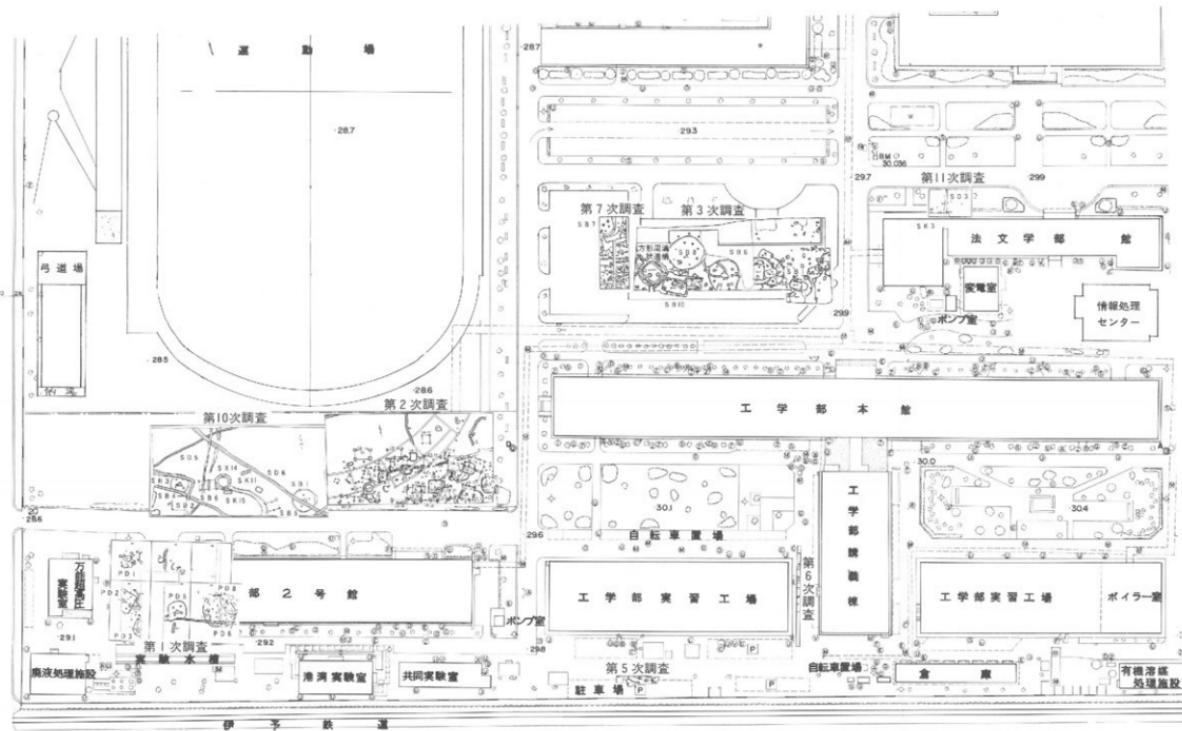


図120 第1・2・3・5・6・7・10・11次調査地の遺構の配置 比尺1/1000

ま　と　め

(7)
さらに復元した旧地形との対応からいえば、弥生中期末から後期中葉まで存続している文京遺跡の集落は、城北キャンパス南半部の尾根状台地の尾根部から北側斜面に向かって集落が作られ、それが時代を追うごとに尾根状台地の先端地すなわち西側に移動していった状況が読みとられる。集落は尾根状台地北側の谷部に面して常に立地していたと理解できる。すなわちその谷部の水田の存在を常に意識していた集落立地ということができよう。集落が次第に尾根状先端地に向けて移動するのは、沖積地の広がりによって水田がより西側低位部へ移っていったことと、あながち無関係ではないと推測される。

〔注〕

- 1 古代学会四国支部『松山市道後城北の弥生遺跡をめぐって』(シンポジウム資料) 1988年
- 2 愛媛大学・松山市教育委員会『文京遺跡』 1976年
- 3 前掲注1文献
- 4 西尾幸則「釜ノ口M遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅰ』昭和60~61年度 1987年
- 5 松山大学・松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター『松山市道後城北遺跡群 松山大学構内遺跡 第2次調査一』1991年
- 6 梅木謙一「松山平野の堅穴式住居址考」『松山市道後城北遺跡群 松山大学構内遺跡 第2次調査一』1991年
- 7 宮本一夫「文京遺跡の地形復元」『文京遺跡第8・9・11次調査』1990年

第7章 文京遺跡第10次調査の成果と意義

第10次調査は、弥生中期末～後期中葉の拠点集落の一部を発掘した。第8・9・11次調査が繩文時代を中心とした調査であったのに対し、本調査は從来から文京遺跡の主要な時期と考えられた弥生時代を対象とする調査であった。副題を「文京遺跡における弥生時代遺跡の調査」とした所以はここにある。さらに本調査は、本地域の弥生時代集落の解明に大きく寄与した調査であったと自負している。第1次調査の報告がなされてから既に15年以上がたとうとしているが、その間、城北キャンパスの建物新舊に伴い10回の発掘調査が繰り返されている。この内、弥生時代の集落を調査した第2・3・4・6・7次調査の報告はいまだ出版されていない状況にある。個々の調査の成果を利用しそれを蓄積して次の調査に向かうというごく普通の調査経過が連れなかつたことは、文京遺跡の評価を著しく低めていた原因といえよう。さらにこのことは、弥生時代の道後平野の地域的特性や時代史上の位置づけを得る上で、大きな障害となっていた。弥生時代の道後平野における盟主的な集落である文京遺跡の調査は、集落全体のごく一部、まるで点の部分の調査を繰り返しているに過ぎず、しかも弥生時代の複層した時間層の遺構が重なつて同時に検出される。従って、たとえいうならば、時代ごとの一枚一枚の紙に点と点を貼り合わせ1つの面とするような作業を繰り返さなければならないのである。それには、細かな時代を決定する土器編年の確立が必要である。この作業ですらこれまで本遺跡では行われていなかったといえよう。第4章で述べたのが、その基礎作業なのである。そしてその基礎作業のもとに、集落立地の変遷を復元しようとしたのが、第6章である。そこではやや恣意的な面もみられようが、あえて復元を試みることにより集落の全体像を推定しようとする狙いがある。いまその内容を繰り返し述べないが、その試みは、常に全体を追い求めなければ、その一部を知ることはできないと考える所以からである。第5章は石包丁という個別遺物論であるが、道後平野の地域性を理解できる遺物としてあえて掲載した。あるいはこれまで中部瀬戸内の特性を瀬戸内の代表とする嫌いがあつたことの反省として、西部瀬戸内の地域性を論じようとしたものである。本報告書の1つの目的はそこにあるといえよう。

さて、終章にあたり、本調査の成果をまとめることで、その責を盡ぐことにしたい。弥生中期末の文京Ⅰ期では、円形堅穴住居址と堀立柱建物跡が一対となったものが2組検出された。その円形堅穴住居址間は約20mで、第1次・第2次調査との比較においても、ほ

ぼその間隔が保たれて住居址が設置され、集落が構成されていたと予想された。2つの住居址内にはともに鉄器が残されており、第11次調査のSK3出土の板状鉄斧の存在からも、この段階には鉄器の普及が予想以上に広範囲になされていたと解釈できる。これは、この時代の凹線文土器の広がりにもみられるような瀬戸内の東西交通路の確立によるものと考えられる。それは、土器の影響関係のみならず、長方形石包丁を主体とするこの地域に、多様な型式の石包丁を成立させる契機となっている。また時期は確定できないが、この段階以降、土偶状土製品、舟形土製品、有溝土鍤など、瀬戸内を通してみられる汎瀬戸内的文化遺物の成立を促す結果につながったのである。一方、先に示した鉄器の普及は、より一層の農耕経済の発展やそれに伴う権力の集中による首長層の発展を意味する。その首長層の権威の象徴が鏡であり、本調査区内で発見された舶載の破鏡や管玉がそれにあたる。あるいは文京遺跡に近接する若草町遺跡の日光鏡もそうであろう。従ってこういった鏡の保有は文京遺跡を含む道後城北遺跡群が、道後平野内での弥生集落の盟主的存在であったことを物語るものと考えられる。こういった地域内での権力機構の成立は、弥生後期の文京Ⅱ期以降、次第にその地域的独自性を強めていく。言い換えるならば、本来の地域性がより顕在化する時期なのである。土器の様式でいえば、後期前葉の文京Ⅲ期がそれにあたり、後期土器様式が確立するのが後期中葉の文京Ⅳ期である。その段階の象徴的な複合口縁大型壺も、西部瀬戸内を通して地域的な独自性を備えつつ普遍化している。ここで文京遺跡内での動きを述べるならば、後期初頭の文京Ⅱ期以降、それまで集落の中心が第3・7次調査区付近にあったのに対し、第1・2・10次調査区付近が集落の中心に移っている。すなわち、城北キャンバス南側の尾根状台地の先端に集落の中心が移るのである。また、方形堅穴住居址が多出するなど住居構造の変化もみられる。さらに、第10次調査区では、集落内に新たに溝を開いて特定な居住区を設けるといった社会の階層性が顕在化している。これは、先に記した権力機構の出現によるものであり、本調査区では、弥生後期前葉の文京Ⅲ期以降の動きである。また、社会基盤の発展は、附編による自然科学的検討を基とした以下の推定も、今後の調査を以て検証されることとして、大胆ながら提起しておきたい。たとえば、本調査区で出土したガラス塊と松山大学構内遺跡出土SB7のガラス玉をからめて考えることにより、ガラス生産が集落内で行われていた可能性が推定できる。さらに検出された板状鉄製品は鉄造品の可能性があり、インゴットとして保有する権力上の意味を予想できるとともに、鉄器の集落内生産への可能性を示すものである。さて、文京Ⅴ期の弥生後期中葉後半を堺として、文京遺跡は集落としての土地利用を失う。これは、

集落の中心の移動にもみられるように、より広い可耕地を求めて水田が沖積地に移っていくことと関連しよう。社会基盤の発展はより集約的な大規模農耕を可能としより低位部の沖積地の開発を可能にしたものと予想できる。ここに弥生集落の移動の原因、文京遺跡の衰退の原因が存在しよう。

我々は、本報告書を含め、これまで3冊の報告書を世に問うてきた。それらの発掘報告は、キャンパスの分散状態に伴い、寄しくも、道後平野の南部から北部にかけて、また縄文時代から中世にかけて、地質学的には2万年前に遡るAT火山灰層に至るまで、道後平野の歴史を縦横に眺めることができた。発掘地点は道後平野のごく点にしかすぎない僅かな地点ではあったが、道後平野全体の中世に至るまでの歴史像を認識するに足る成果を得たと考えている。特に報告Ⅱ・Ⅲでは、弥生時代の道後平野の盟主的な集落である文京遺跡を、縄文時代、弥生時代という個別テーマ的に取り上げ、その内容を検討してきた。また報告Ⅰではそれら周辺の遺跡の調査から、旧石器時代から中世に至る過程での道後平野の歴史の大道の一端を紐解いたつもりである。これら個々の報告は、決して分離して成り立つものではなく、一完したものであり、道後平野の歴史像を再現することを目的としたものである。そしてまたそれらの報告の根底にあったことは、道後平野を中心とする西部瀬戸内の地域性の実体解明にある。その解明はいまだ未熟で満足に足るものになってはおらず、今後の調査により様々な補足と訂正が加えられよう。今後も我々は、大学キャンパス内の遺跡の消滅に際する緊急調査を遂行するという立場にあるものの、上記した目的意識のもとに調査を続けなければならないと考える。地方史の実体を解明することも、地方大学の1つの使命と考えるからである。

〔注〕

- 1 下條信行「松山平野と道後城北の弥生文化」『松山市道後城北遺跡群 松山大学構内遺跡－第2次調査－』1991年
- 2 下條信行「近年の文京遺跡調査の成果と課題」『社会科』学研究 第13号 1986年

附編 自然科学的分析

1 文京遺跡第10次調査出土板状鉄製品

清水欣吾

愛媛大学城北キャンパスの南西部に位置する文京遺跡の弥生時代包含層より出土した鉄斧状遺物（以下鉄斧と称する）について金属学的調査を行なった。

この鉄斧は弥生時代中期末から後期前半のもので、板状鉄製品と推定されている。なお、同遺跡から前漢後葉～後漢中葉の漢鏡の一部が発見されており、この周辺のごく近い地点に当時の首長の住居が存在したのではないかとみられている。

本調査は愛媛大学埋蔵文化財調査室の依頼により実施した。

1 資料の外観と供試財の採取

資料の外観を図版44-3に示す。

資料サイズは約 $25 \times 40 \times 40$ mmで表面は粘土混りの鉄錫で厚く覆われており、破面に元の鉄部分の輪郭が認められるが、これも錆化している。

図121のように、マイクロカッターで乾式切断後、一部を化学分析、他の一部を顕微鏡組織検査に供した。まずイーロ面で切断時、図版45-1に示すように金属部分の残存が認められたので、イーロ切面を顕微鏡組織観察用に用い、次にハーニ面を切断し、その部分より、赤錫部（粘土質と錫の結合した部分）、黒錫部（鉄質の錆化した部分）及び金属質部を分けて粉碎し、化学分析を行った。

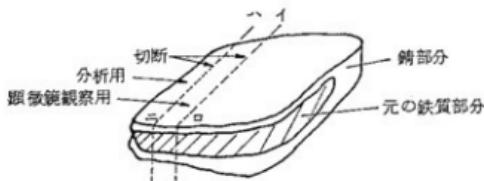


図121 資料の分析方法

文京遺跡第10次調査出土板状鉄製品

区分	C	Si	Mn	P	S	Ni	Cr	W	Mo	V	Co	Cu
	炭素	珪素	マンガン	磷	硫黄	ニッケル	コバルト	タンゲステン	モリブデン	バナジウム	コバルト	銅
金属鉄部	4.06	0.66	0.031	0.13	0.062	0.011	0.024	0.001	0.001	0.0317	0.004	0.0037
黒錆部	2.02	11.34	0.024	0.22	0.099	0.009	0.023	0.001	0.001	0.0261	0.004	0.0022
赤錆部	0.57	33.56	0.28	0.49	0.017	0.006	0.012	0.001	0.001	0.0211	0.003	0.0019

区分	Al	Ti	Zr	Ca	Mg	Fe(残り)
	アルミニウム	チタン	ジルコニア	カルシウム	マグネシウム	鉄
金属鉄部	0.090	0.0060	0.006	0.002	0.008	94.87
黒錆部	4.09	0.0928	0.006	0.219	0.292	81.53
赤錆部	11.45	0.328	0.008	0.715	0.539	52.00

表8 試料の化学組成(重量%)

2 化学組成の分析

化学組成のうち、炭素及び硫黄は堀場製作所製EMIA-1200型CS同時定量装置による赤外線吸収法により、その他の元素は、試料を混酸中で加圧溶解後、島津製作所製高周波誘導結合プラズマ発光分析装置(ICP-AES) (ICPV-1012型)により分析した。結果を表8に示す。

金属鉄部分の炭素量は、4.06%あり、鍛鉄に相当する組成である。磷は0.13%と高目であるが、その他の不純物は微量である。ただし、金属鉄中に含まれるバナジウム量が0.03%と比較的の高目であるのが注目される。鉱石系原料を用いたものでは、バナジウム0.01%以下が普通である。チタンも砂鉄中に多く含まれる元素であるが、これは0.006%と少ない。チタンは精錬中に大部分鉄滓中にに入るため、鉄中に残存する量は0.02%以下の場合が多い。金属鉄部、黒錆部、赤錆部に分けて分析した結果、外周になるに従って、Si・Al量が急速に増加することが分かる。すなわち、粘土中に含まれる元素が富化する。外側になるに従い富化する元素と、逆に減少傾向を示す元素、変わらない元素を示すと表9の通りである。

通常の埋蔵鉄器の場合、金属鉄は存在せず、殆んど黒錆または赤錆状態まで腐食が進行している。従って、これらの錆化状態から、金属鉄の化学組成を推定する必要があり、表9のデータはそのような場合の参考になる。

祝谷鉄斧との比較

区分	元素名と富化率(または減少率)
富化元素	Ca (357.5), Al (127.2), Mg (67.4), Ti (54.7), Si (50.8), Mn (9.0), P (3.8)
減少元素	C (7.1), S (3.6), Cr (2.0), Cu (1.9), Ni (1.8), Fe (1.8), V (1.5)
変わらない元素	W, Mo, Co, Zr

(注) 富化率 = 赤錆中の含有量 (%) / 鉄中の含有量 (%)

減少率 = 鉄中の含有量 (%) / 赤錆中の含有量 (%)

表9 金属→黒錆→赤錆に従う各元素の含有量変化の挙動

3 顕微鏡組織

試料の切断面をダイヤモンドペーストで研磨後、ナイタール (5%) で腐食し、光学顕微鏡及び走査型電子顕微鏡により組織観察した。

図版45-3は資料切断面の光学顕微鏡組織で外周部は腐食が進行しているが、内部は金属質が残存している。写真中白色のネットワークを形成しているのがセメンタイト (Fe_3C) で、外周腐食部にも残っている。このセメンタイトネットワークの形状が塑性加工によって変形していないことから、本資料が鋳造品であることは明確である。

図版45-2に金属質部分を拡大観察した光学顕微鏡組織、図版45-4は同じく金属質部分を走査型電子顕微鏡により、さらに拡大観察した組織を示す。

セメンタイトに取り囲まれた基地部分は微細なパーライト組織(鉄とセメンタイトの層状組織)からなり、一部粒状のセメンタイトを有する。鍛鉄に特有のレーデブライ特組織(鉄とセメンタイトの共晶組織)は認められない。

この金属組織から予想される炭素量は2%以下であり、分析値の約4%と比較するとかなり低い。サンプリング位置の問題かもしれない。なお、本資料には保存処理は施されていない。

4 祝谷鉄斧との比較

松山市道後温泉北西部の祝谷遺跡より出土し板状鉄斧について、さきに調査したが、その結果と本資料を比較対比してみる。化学組成を表10に示す。

本資料と祝谷鉄斧で明確に異なるのはCu, Tiである。Tiは製錬方法により変化するが、Cuは鉄原料によって決定されるので、祝谷鉄斧が銅製品との同時遺存によるCu汚染がない限り、本資料と祝谷鉄斧は鉄源を異にすると判断せざるを得ない。

さきに祝谷鉄斧はCu量も多いことから、磁鐵鉱系鉄源を用いたと推定したが、本資

資料	C	Si	Mn	P	S	Ni	Cr	V	Cu + Al	Ti	Ca	Mg	Zr	推定年代
祝谷(1)	3.92	0.42	0.05	0.19	0.135	0.010	0.013	0.029	0.050	0.009	0.025	<0.01	<0.01	弥生中期 小葉
祝谷(2)	4.17	0.31	0.02	0.16	0.040	0.010	0.012	0.024	0.041	0.015	0.021	<0.01	<0.01	弥生中期 後葉
本資料	4.06	0.66	0.03	0.13	0.062	0.011	0.024	0.032	0.004	0.090	0.006	0.002	0.008	0.006 弥生中期末 ～後期前半

表10 祝谷遺跡鉄斧と本資料の化学組成の比較（重量%）

料の場合は Cu が少なく、また Ni, Co などの不純物も少なく、一方 V 量が多い点から砂鉄を鉄源として用いた可能性が十分考えられる。

金属組織の面からは祝谷鉄斧がレーデブライ特徴をもつこと、周辺部に脱炭層をもつこと、有袋鉄斧と推定されること、などの点で本資料と異なっている。

5 結 言

以上、文京遺跡出土鉄斧について金属学的調査を行った結果を要約すると次の通りである。

- (1) 炭素量約 4 % を有する鉄製品である。
- (2) バナジウム量が 0.03% と高く、銅その他金属系不純物量が少ないとから、砂鉄系原料を鉄源として用いた可能性が大きい。
- (3) 金属組織はネット状セメントタイトとパラライト組織からなり、焼入れ等の熱処理をした形跡ではなく、鋳造後徐冷されたものである。また、祝谷遺跡鉄斧のごとく表面の脱炭層は認められない。
- (4) 分析炭素量と金属組織から判定される炭素量（約 2 %）の差はサンプリング場所の違いによるものであろう。
- (5) 金属質部分と鉄化部分（黒鉛層、赤鉛層）の化学分析を実施し、鉄化による化学組織の変動を調査した。

その結果、鋳中では Ca, Al, Mg, Ti, Si, Mn, P が富化し、C, S, Cr, Cu, Ni, Fe, V は減少した。W, Mo, Co, Zr には差がなかった。

参考文献

清水欣吾：祝谷遺跡出土板状鉄斧の調査（松山市教育委員会文化教育課提出）平成元年 2月 28日

2 文京遺跡第10次調査出土ガラス塊

苅谷道郎

1) 試料

- a 白褐色多孔質塊 (571, 図版43)
- b 黒色塊 (572, 図版43)

2) 実体顕微鏡による観察

- a, bともにガラス化部分がある。多孔質でありガラス化反応の初期状態に相当する。ともに石英粒あるいは長石粒が多量に存在する。
- bには幅3.5mmで底部が半円形断面の溝状の圧痕が存在する。

3) 蛍光X線分析結果

- a, bともにSi, K, Na, Ca, Mg, Al, Tiが%以上のオーダーで存在する(酸化物として)。
- bにはFe, Mn, Srが十分の~%のオーダーで存在する。

4) 考察

- a, bともに岡山県百間川出土のいわゆる“ガラスさい”と良く似ている。人工的に加熱され、取り扱われた痕跡がある。しかし多量の石英粒あるいは長石粒を含み、さらに長時間加熱しても製品としてのガラスを得ることは困難であり、何らかの工程での副成物の可能性が高い。
- bは百間川出土の“ガラスさい”よりも鉄の含有量が高く、鉄さいの可能性もあるが、鉄さいとしては鉄の含有量が低く、鉄さいと考えにくい。

REPORT UPON ARCHAEOLOGICAL RESEARCH
ON THE CAMPUS OF THE EHIME UNIVERSITY, VOL. III

THE 10TH RESEARCH OF BUNKYO SITE

Editor : MIYAMOTO Kazuo

Contributors : KURAKAZU Nobuaki

SHIMIZU Kingo

KARIYA Michio

contents

- Chapter I Research progress
II Stratum
III Archaeological features and Archaeological remains
IV Chronology of Yayoi Pottery found at Bunkyo Site
V Progress of Stone reaping knife in the Dogo plains
VI Location of the settlement in Bunkyo Site
VII Conclusion
- Appendix I Investigation of Iron implement found at Bunkyo Site
II A lump of Glass found at Bunkyo Site
English Summary

March 1991

Research group for Archaeological Sites
at Ehime University
Ehime University, Japan

SUMMARY

Bunkyo site is located between Mt. Miyukiji and Mt. Katsuyama north of Matsuyama city in Ehime prefecture, Japan. This site is situated on the alluvial fan of the Ishite River. It is well-known that this site contains the settlement from the middle to the late Yayoi period.

Two round pit houses, two square pit houses, two raised floor buildings, eight ditches and six earthen pits were found at the 10th research of Bunkyo site. We can create the chronology of Yayoi pottery from the latter half of the middle Yayoi period to the first half of the late Yayoi period by means of the assemblages of Yayoi pottery found at this research. According to this chronology of Yayoi pottery, we can divide the structural remains of this research into five stages. The first stage shows that two round houses accompanied two raised floor buildings were existed. The distance of two round pit houses is about 20 meter. This distance is ordinary in comparing with the result of the first and second researches at Bunkyo site. It is thought that the iron implements were diffused to use in those days because every round pit house of this stage has iron implements. This stage belongs the latter half of the middle Yayoi period, about the first half of the first century. The late Yayoi period starts at the second stage. We found a square house, three earthen pits and a ditch in the second stage. The plan of the pit house was beginning to change from the round to the square. The pottery of the third stage was almost changed in the style of the late Yayoi pottery. The round religious structural remain and a pit house skirted by the ditch were found at the third stage. The round religious structural remain gave us a mass of pottery. The assemblage of these pottery become a basis of the chronology of Yayoi pottery in this area. The ditch skirting pit houses which showed the square of the plan implied the progress of the class system. The pit houses skirted by the ditch within the settlement are those of a class of a head. It was found a ditch at the 4th stage. The structural remains decrease from this stage around the location of this research. Next the 5th stage shows only one ditch. Bunkyo site declines from this

stage. The 4th and the 5th stage belong the middle of the late Yayoi period, about the second century.

Yayoi people increases to use iron implements from the last of the middle Yayoi period in the Dogo plains. The use of iron implements promotes the innovation of the cultivation and the enlargement of the productivity. Therefore the class system was encouraged. A fragment of the chinese mirror and a cylindrical bead found at this research means the existence of a head within Bunkyo site. Ri-guang 日光 mirror found at Wakakusacho site, which is thought a same settlement with Bunkyo site, and this chinese mirror of this research implied that Bunkyo site is a chief head of villages of Yayoi period in the Dogo plains. Because possessing a chinese mirror means a symbol of the dignity in those days.

Bunkyo site declined at the middle of the late Yayoi period. We think this decline was caused by the move of a rice field. The innovation of the cultivation promoted a wide and intensive agriculture. Therefore Yayoi people sought a wider rice field toward a lower land. It is thought that the settlement of Bunkyo site moved toward a lower land according to this situation.

We expected to confirm this hypothesis with materials from new excavation in the area in the near future.

(Kazuo Miyamoto)

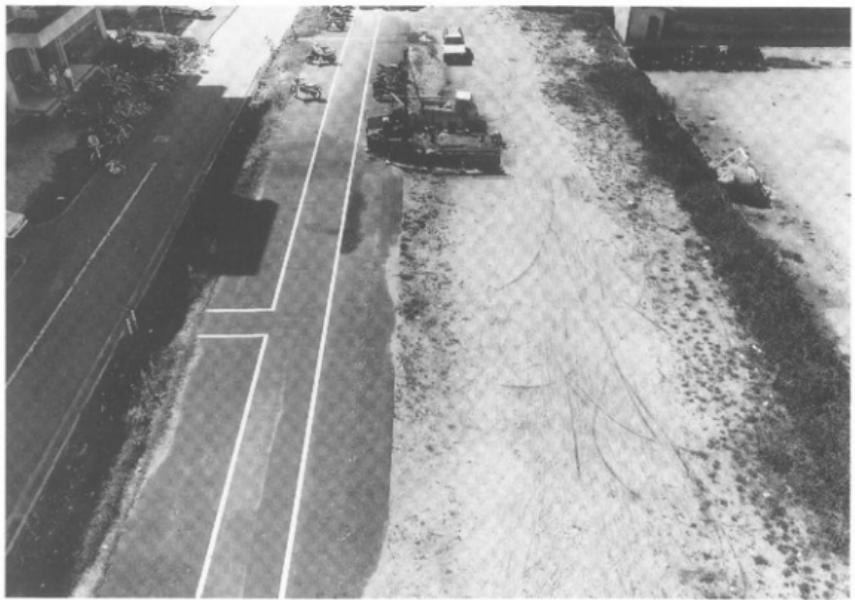
図 版

文京遺跡第10次調査

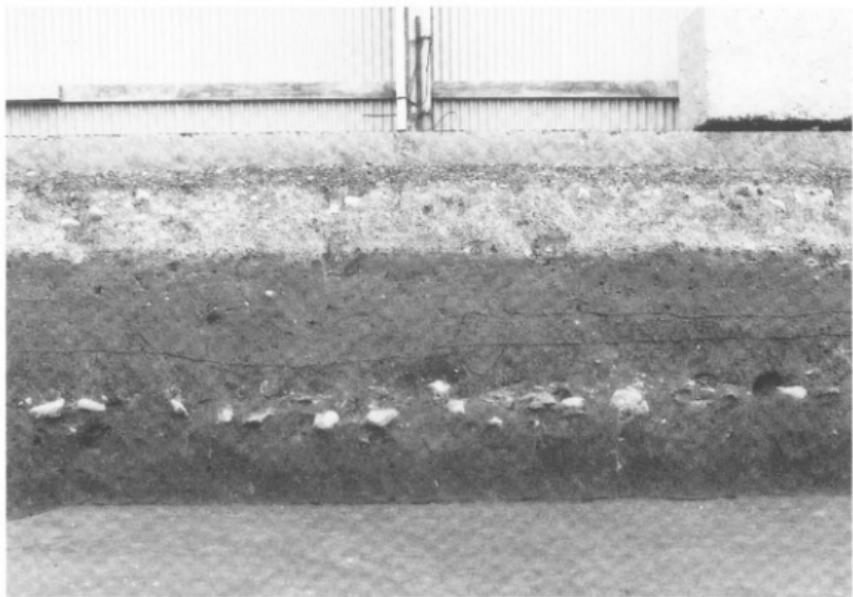
——文京遺跡における弥生時代遺跡の調査——



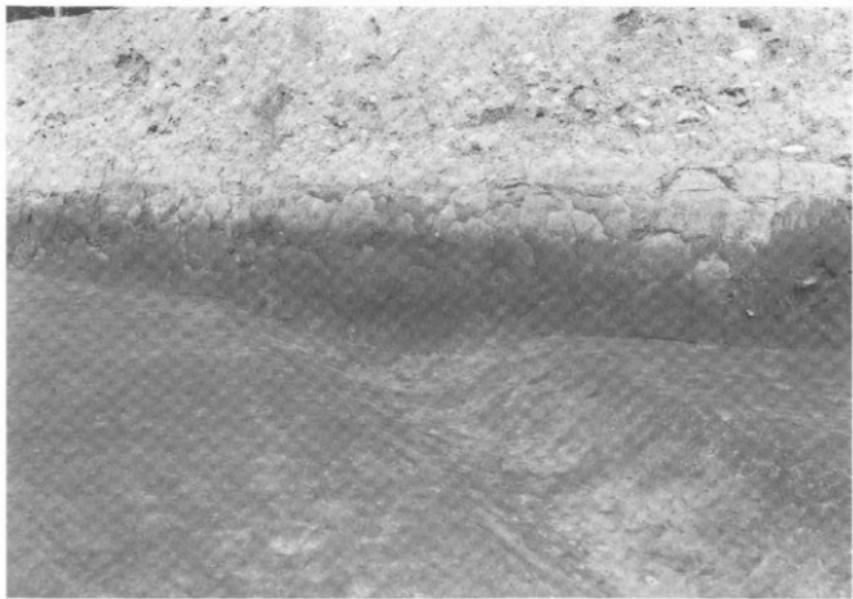
1 調査位置遠景（北東から）



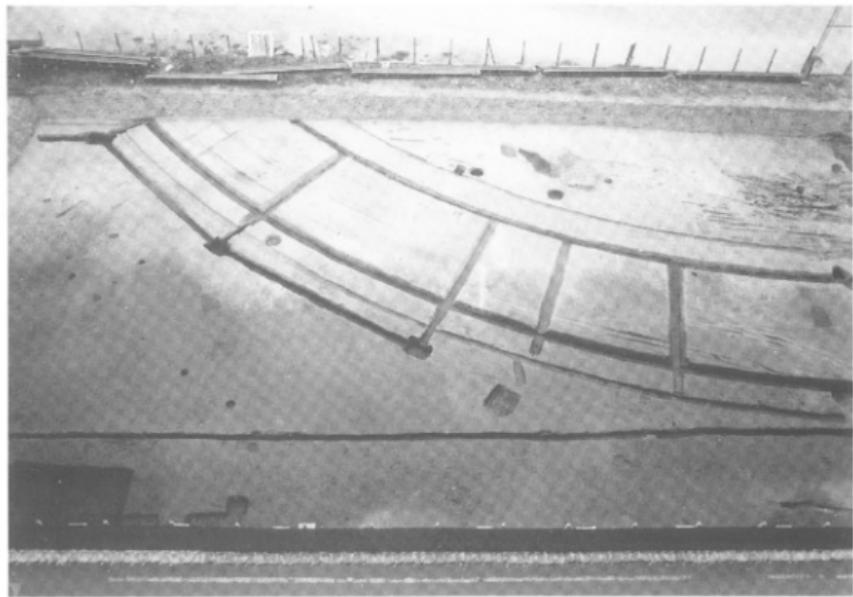
2 調査前の風景（東から）



1 調査区南壁の層位（北から）



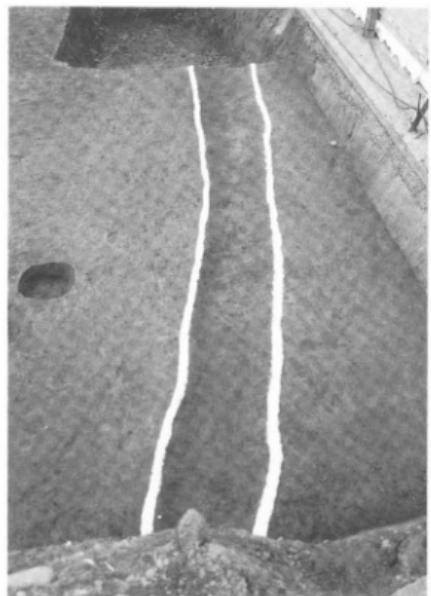
2 調査区北壁の層位（南東から）



1 表土壌削後全景（南から）



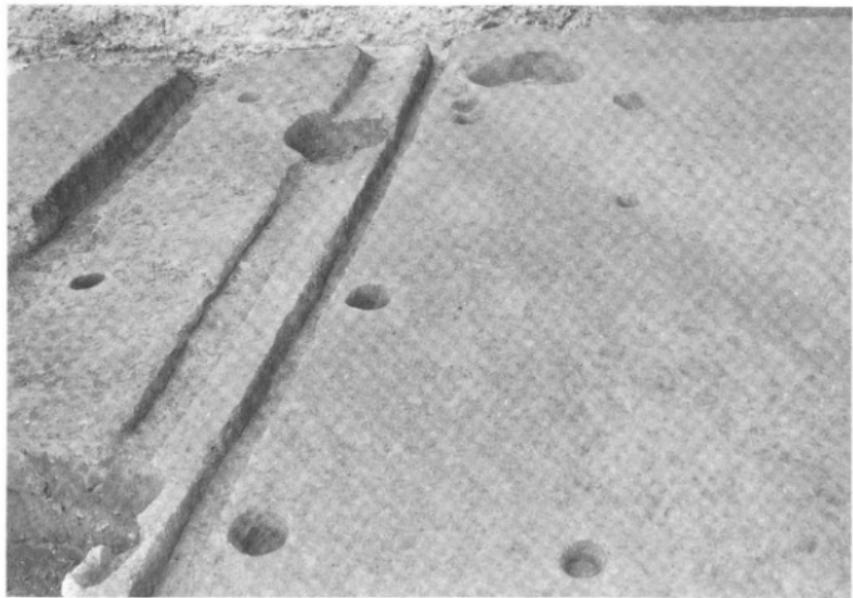
2 暗茶褐色土上面の遺構（東から）



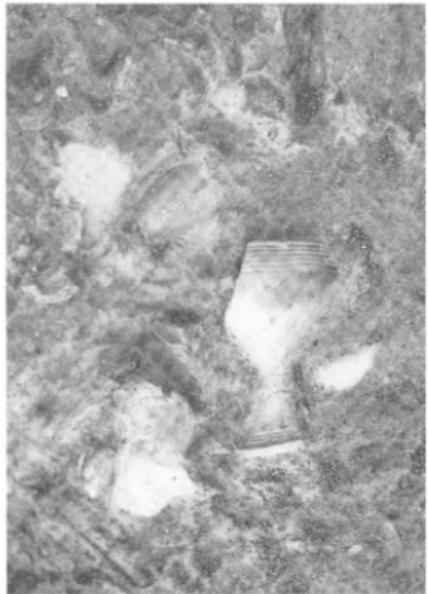
1 溝 S D 1 (西から)



2 溝 S D 2・3 (西から)



3 挖立柱建物跡 S B 7 (西から)



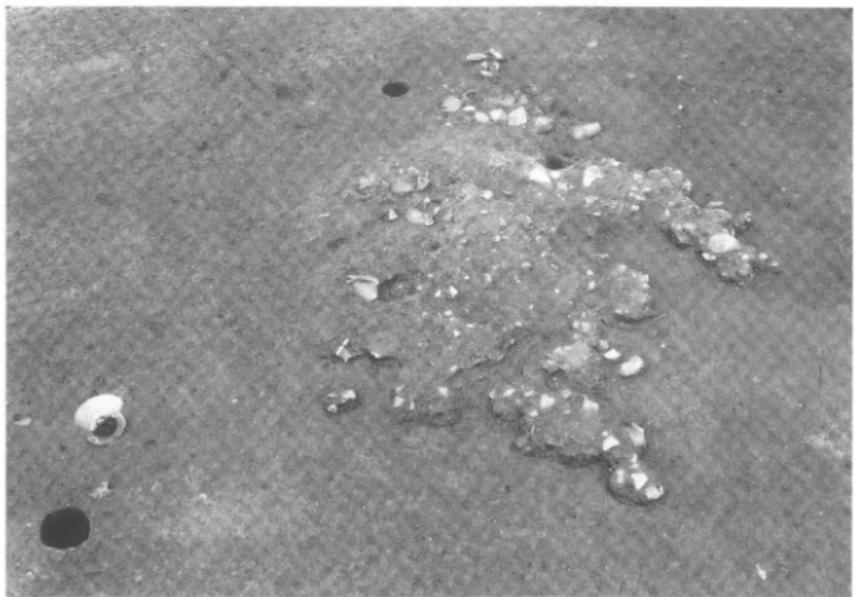
1 遺物集中地点 S X 1 (北から)



2 遺物集中地点 S X 2 (西から)



3 遺物集中地点 S X 3 (東から)



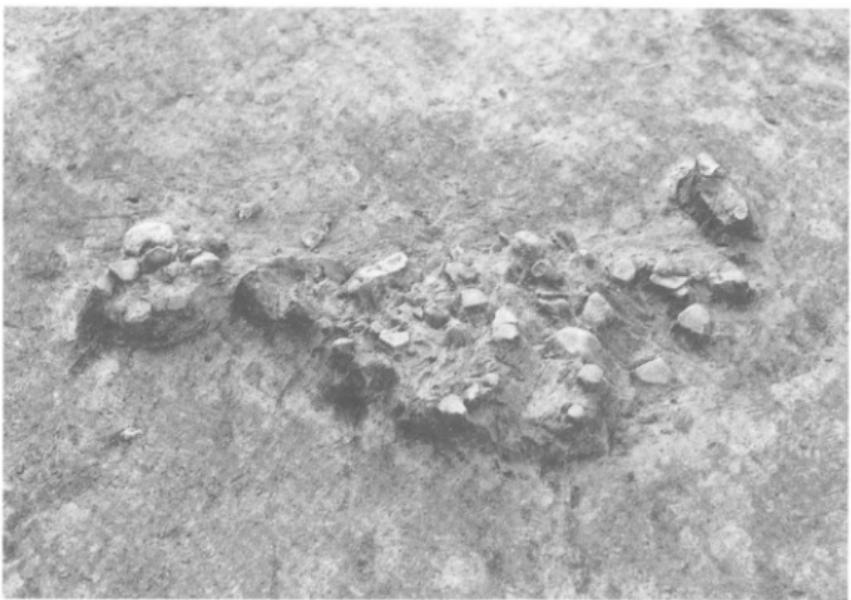
1 遺物集中地点SX 3～SX 5（北西から）



2 遺物集中地点SX 11（北から）



1 遺物集中地点 S X12 (北から)



2 遺物集中地点 S X13 (東から)



1 破鏡出土状況（東から）



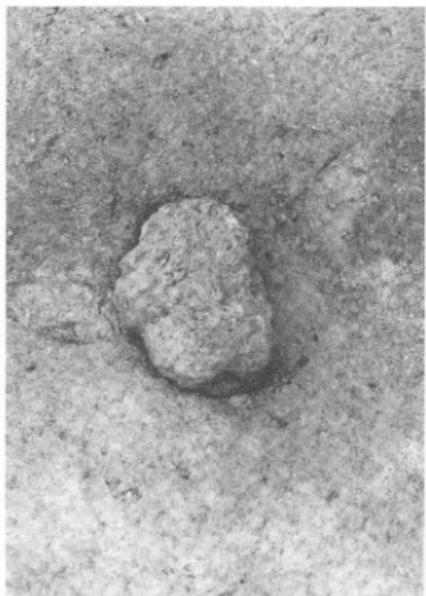
2 管玉出土状況（東から）



3 土錘出土状況（東から）



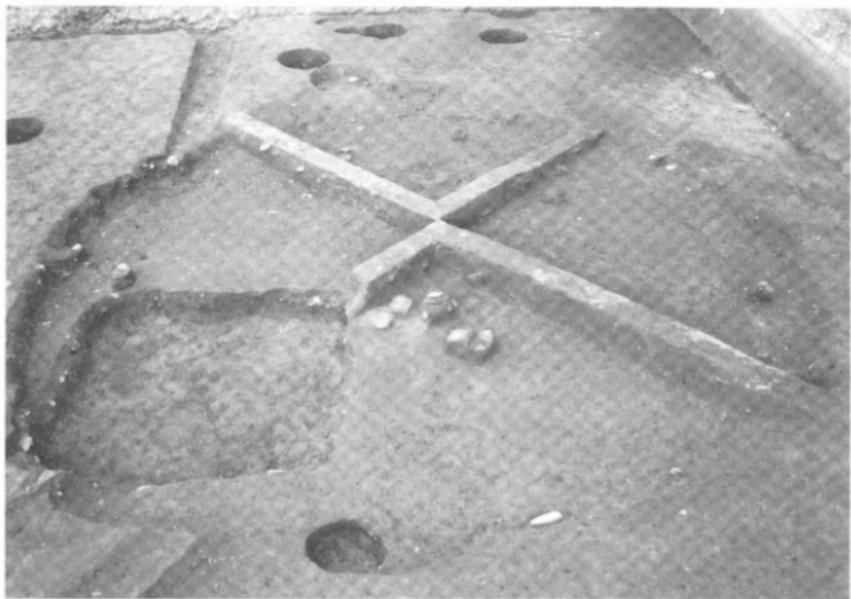
4 土偶状土製品出土状況（東から）



1 板状鉄製品出土状況（西から）



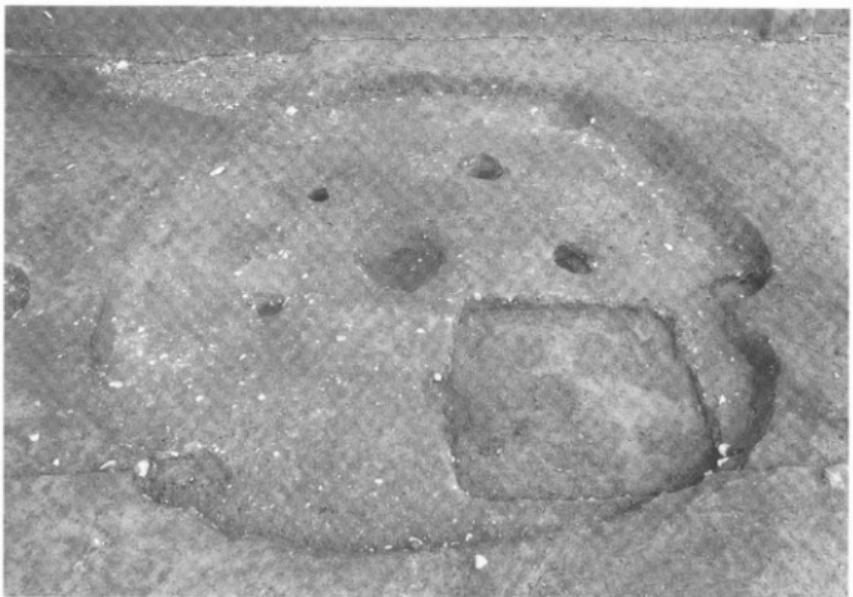
2 鉄鏃出土状況（北から）



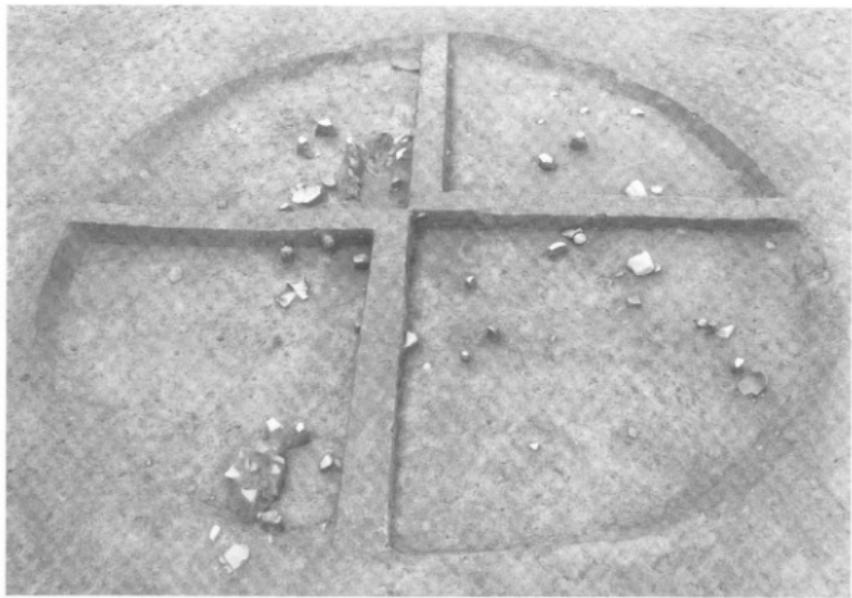
3 備穴住居SB1遺物出土状況（西から）



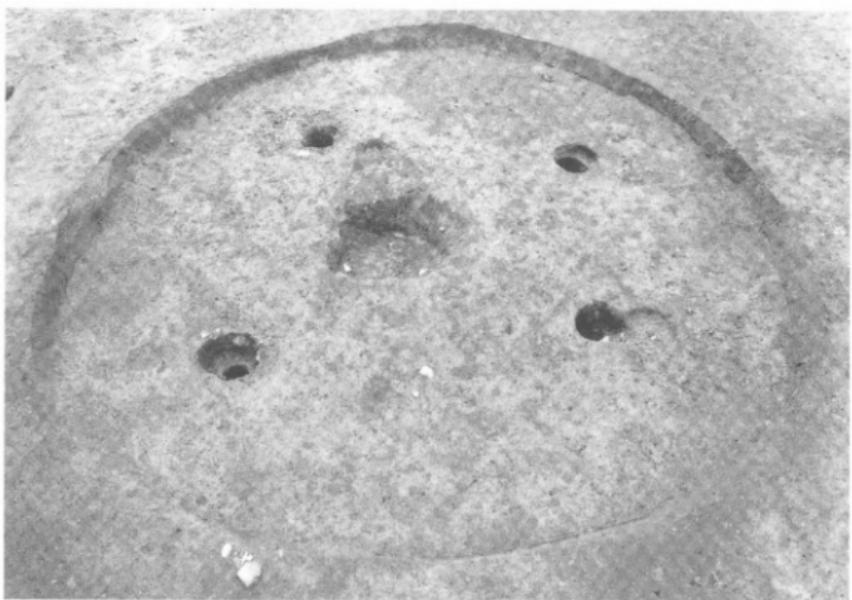
1 壺穴住居 SB 1 (西から)



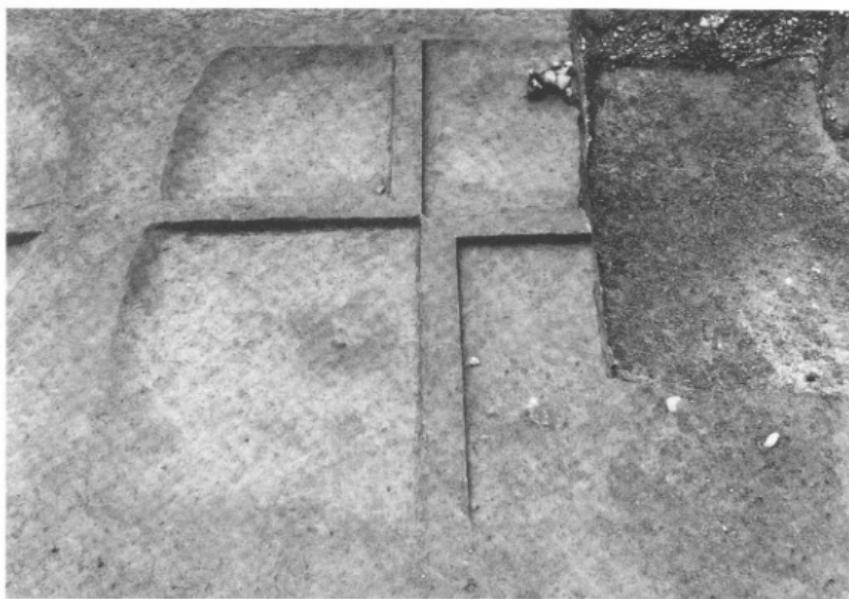
2 壺穴住居 SB 1 (北から)



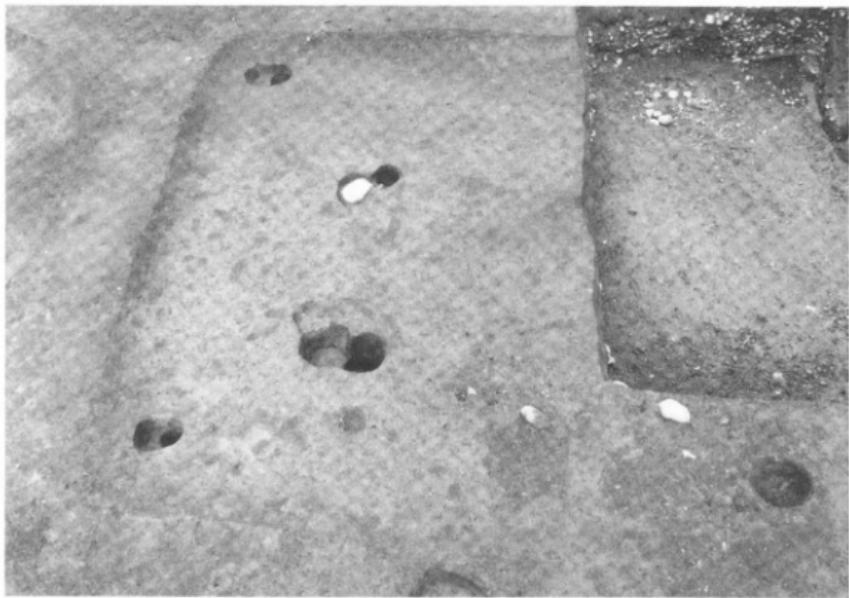
1 堪穴住居 S B 3 遺物出土状況（東から）



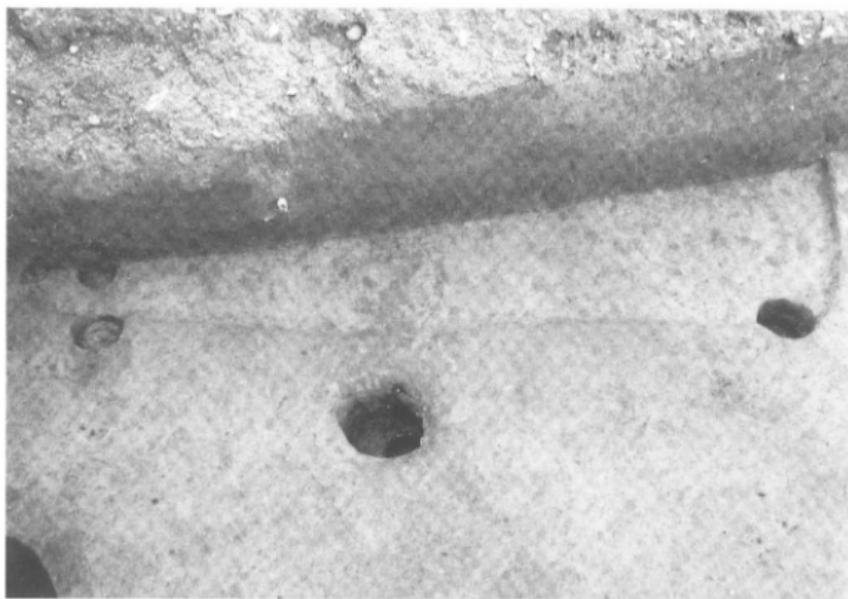
2 堪穴住居 S B 3（東から）



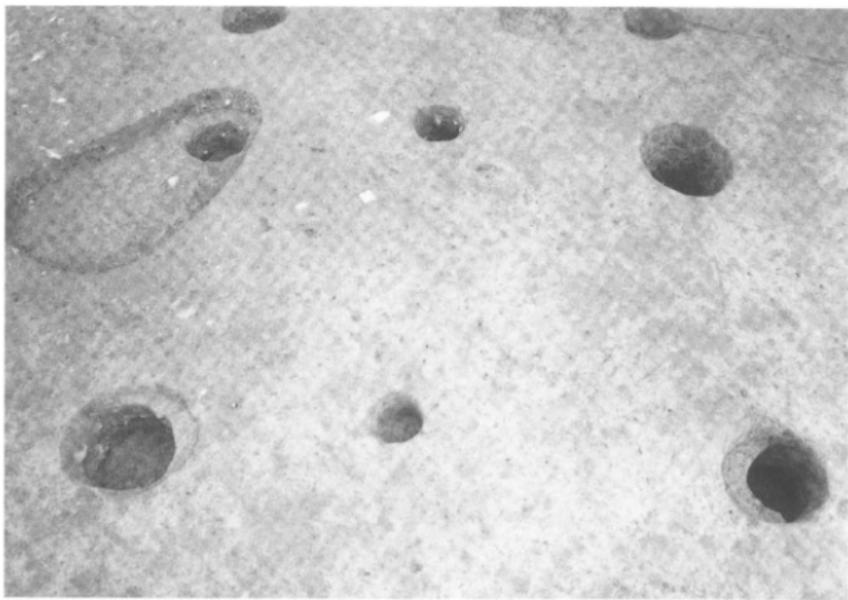
1 壇穴住居 SB 2 遺物出土状況（西から）



2 壇穴住居 SB 2（西から）



1 壁穴住居 S B 4 (東から)



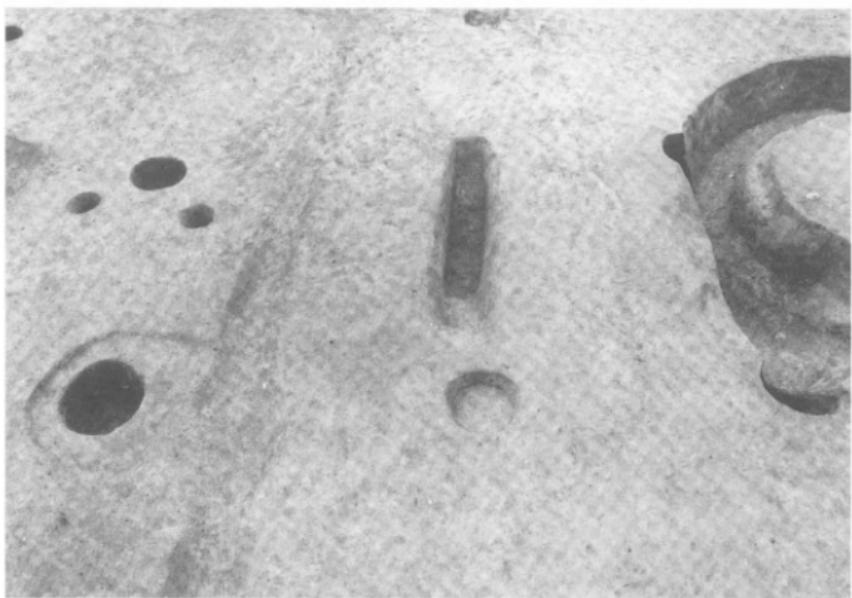
2 掘立柱建物跡 S B 5 (北西から)



1 摂立柱建物跡 S B 6、S P 107遺物出土状況（東から）



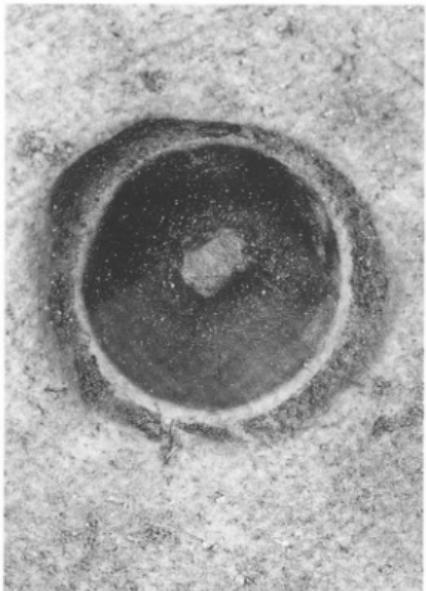
2 摂立柱建物跡 S B 6、S P 114遺物出土状況（東から）



1 挖立柱建物跡 S B 6 (南から)



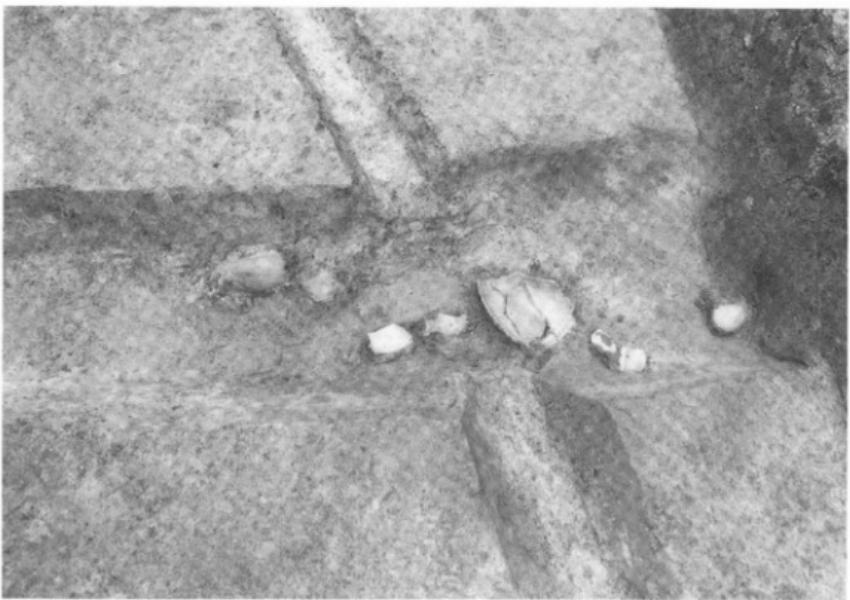
2 柱穴 S P 117 (西から)



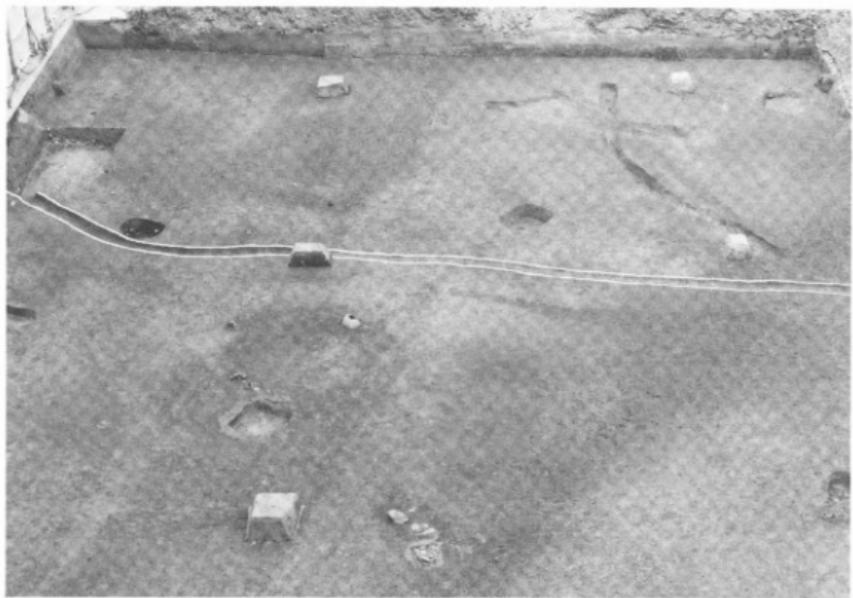
1 柱穴 S P 101 遺物出土状況（北から）



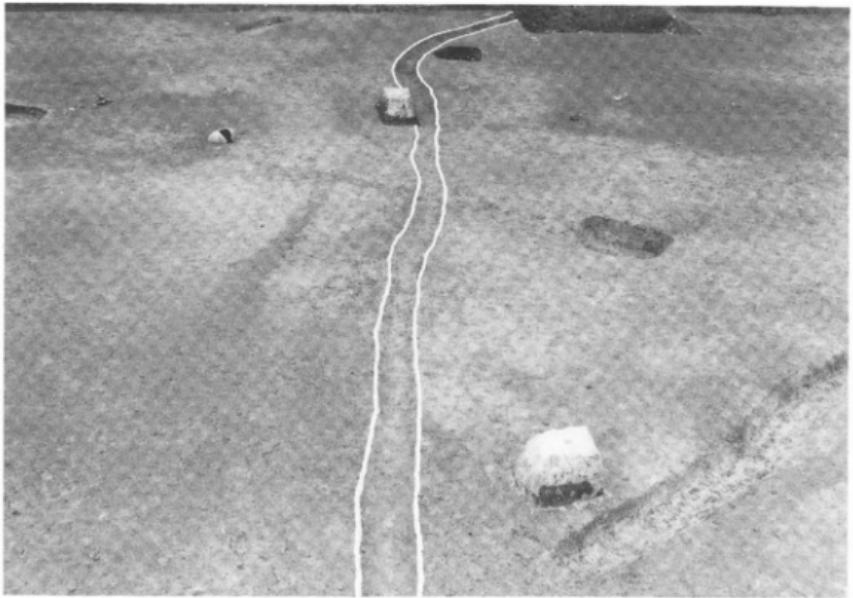
2 溝 S D 7 (南から)



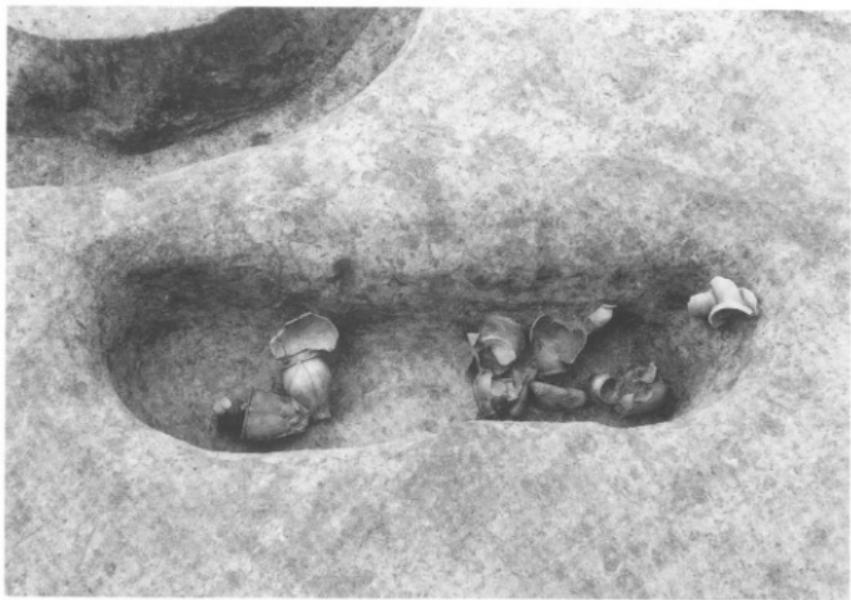
3 溝 S D 7 (東から)



1 溝SD4（東から）



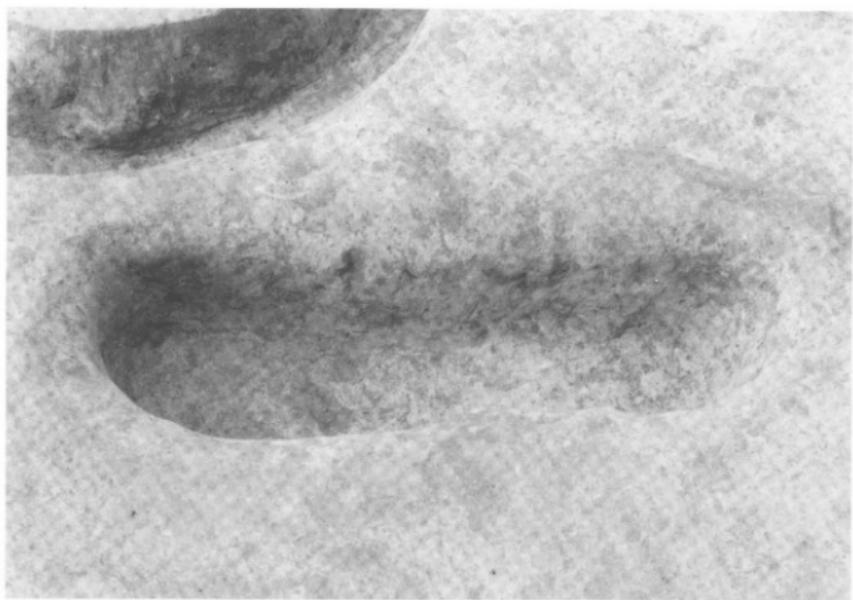
2 溝SD4（北から）



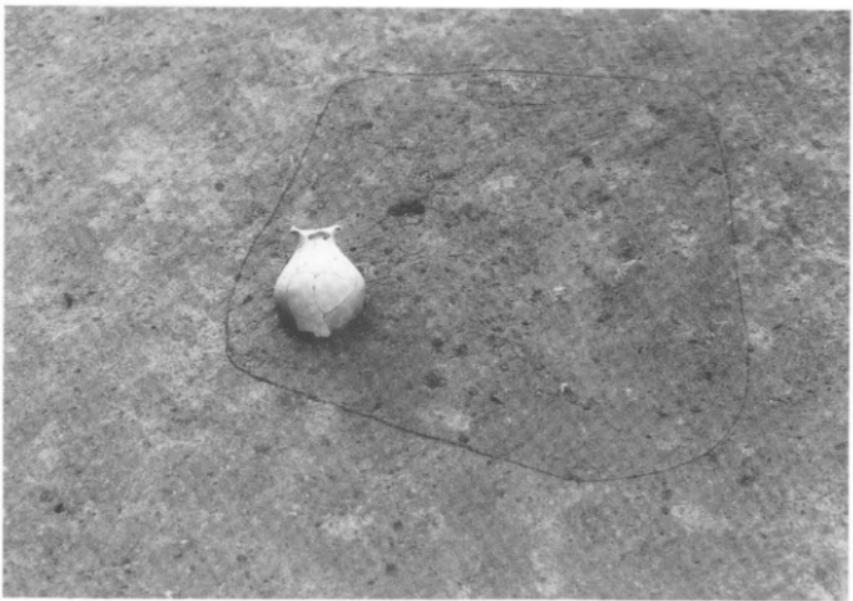
1 土坑SK15 遺物出土状況（南から）



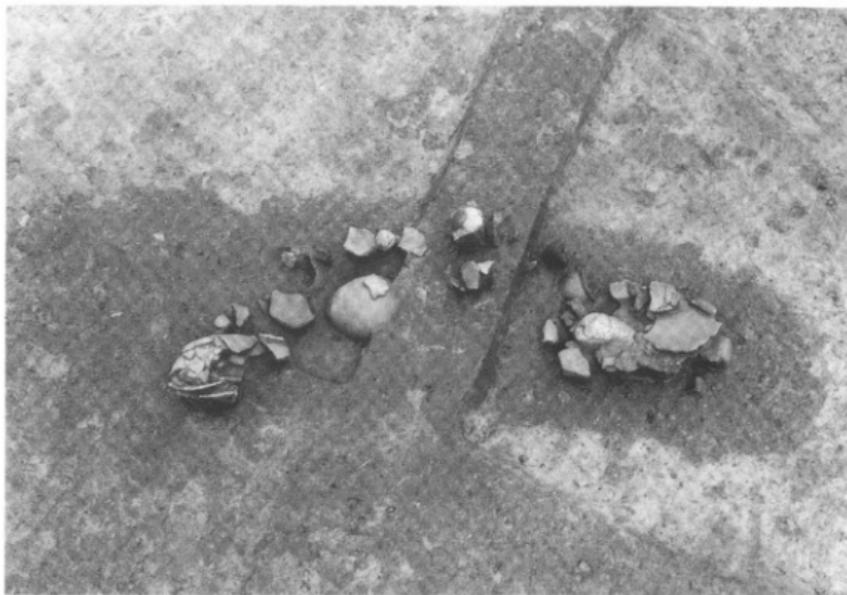
2 土坑SK15 断面（西から）



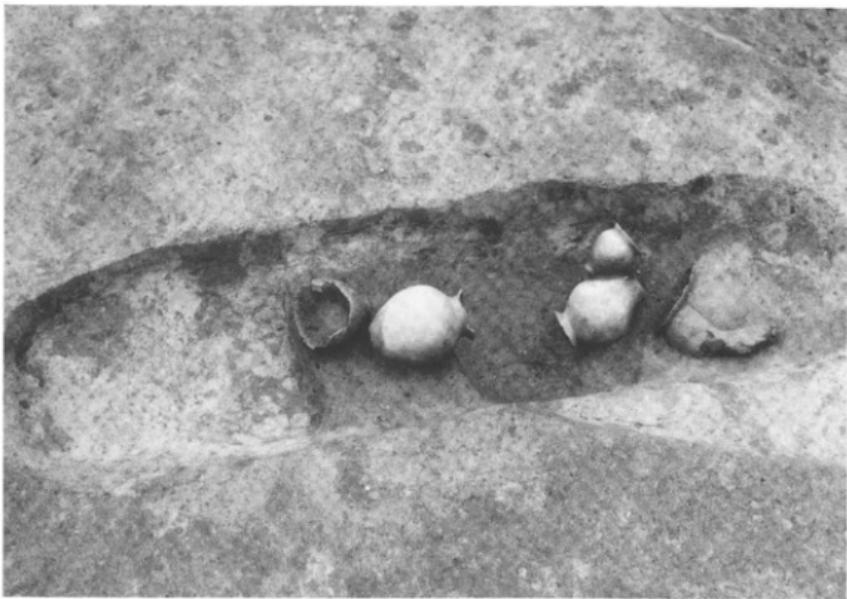
1 土坑SK15（南から）



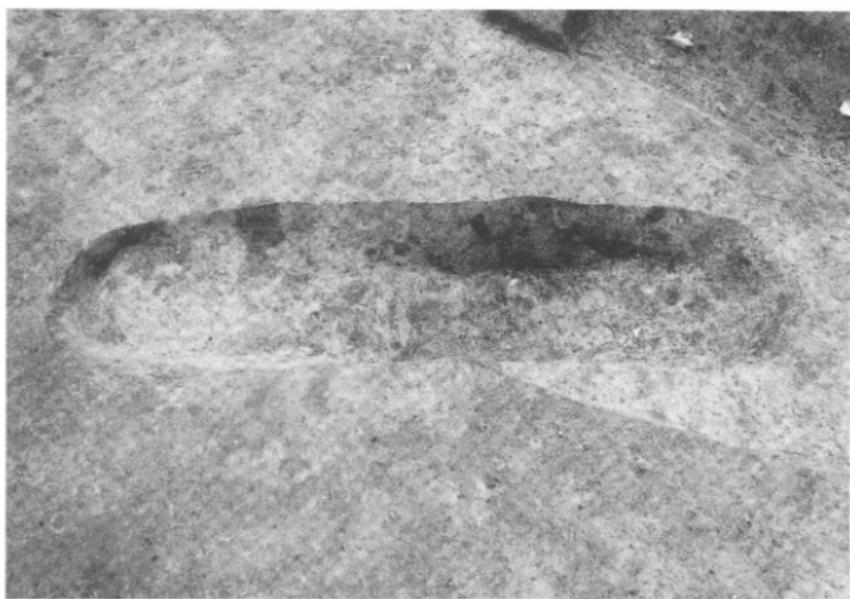
2 土坑SK4検出状況（南東から）



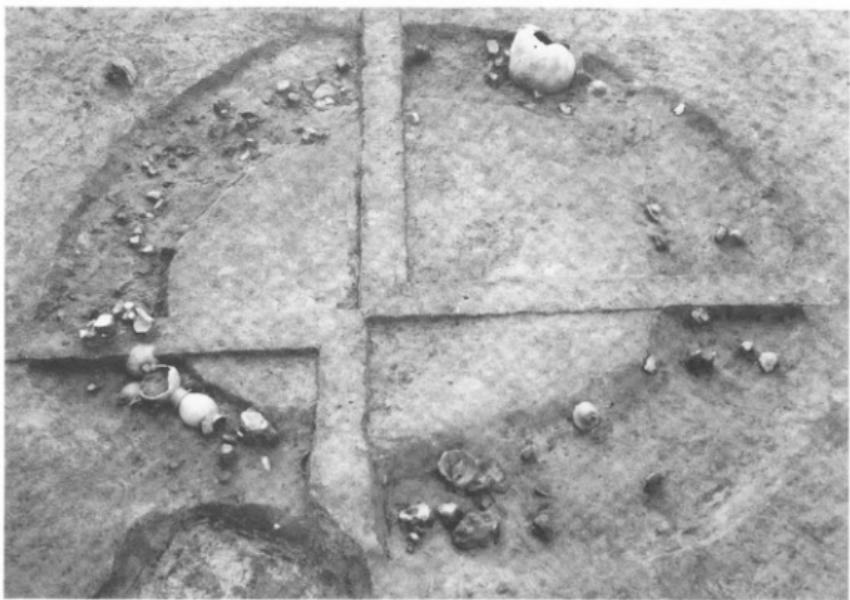
1 土坑S K11検出状況（南から）



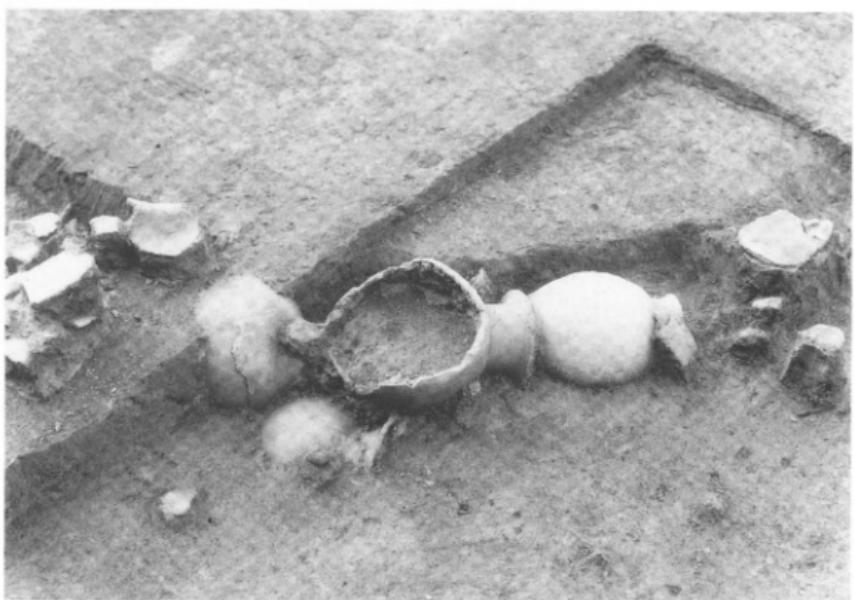
2 土坑S K11 遺物出土状況（南から）



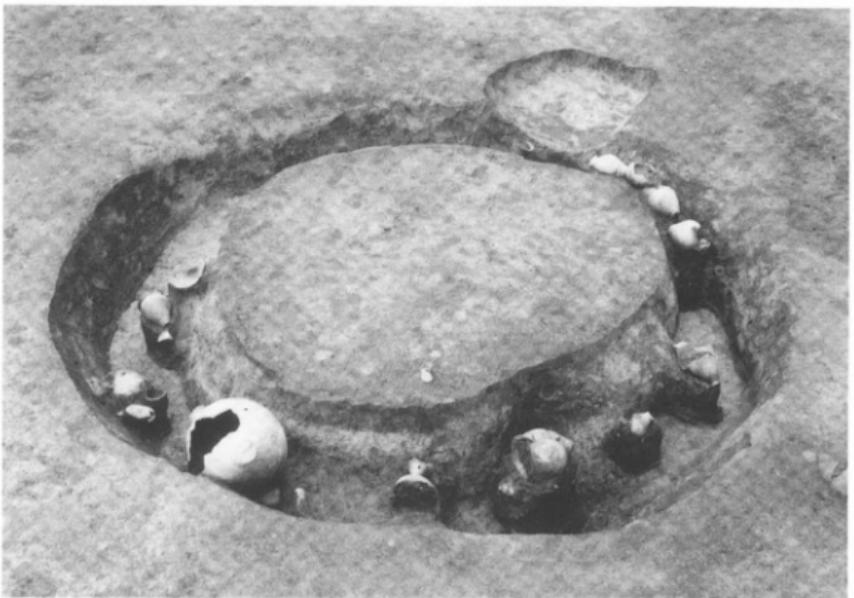
1 土坑SK11（南から）



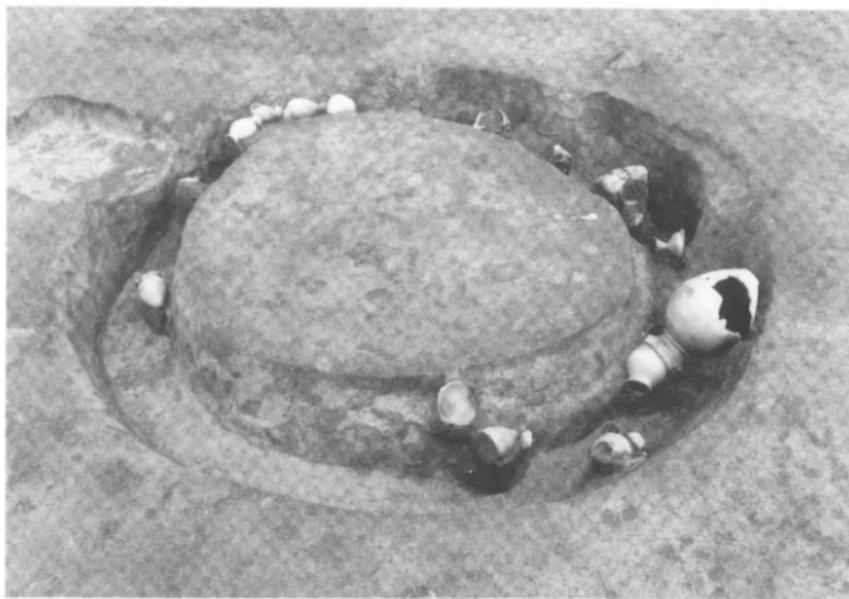
2 円形周溝状遺構SX14検出状況（東から）



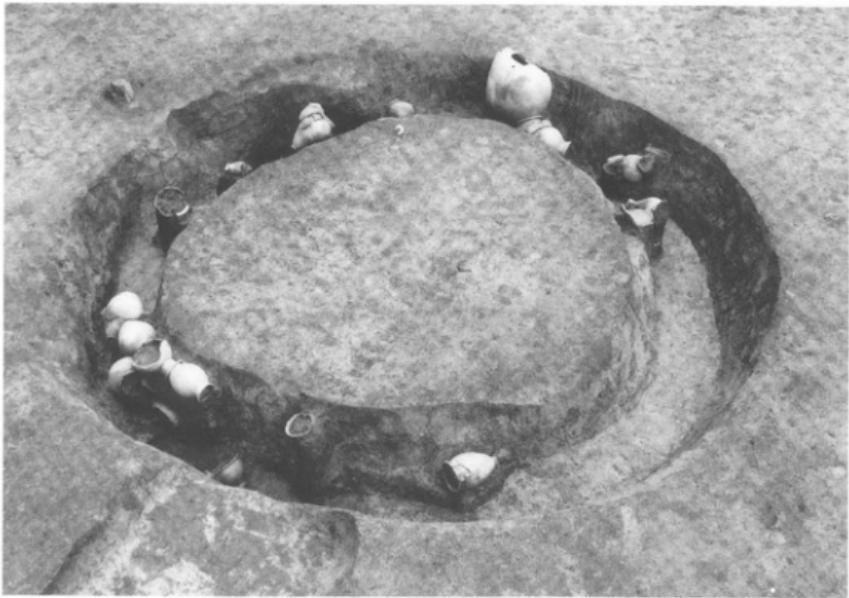
1 円形周溝状遺構 S X14南東部（南東から）



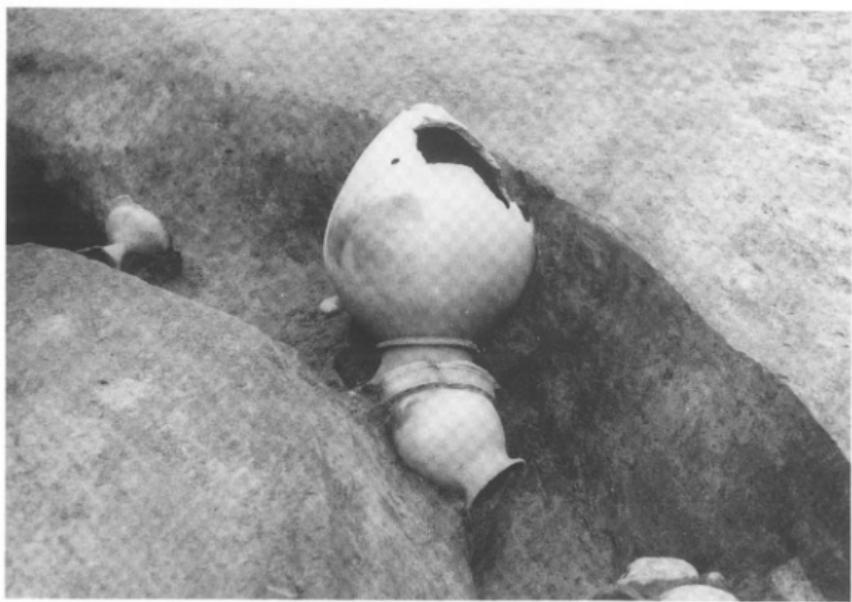
2 円形周溝状遺構 S X14遺物出土状況（西から）



1 凸形周溝状遺構 S X14遺物出土状況（北から）



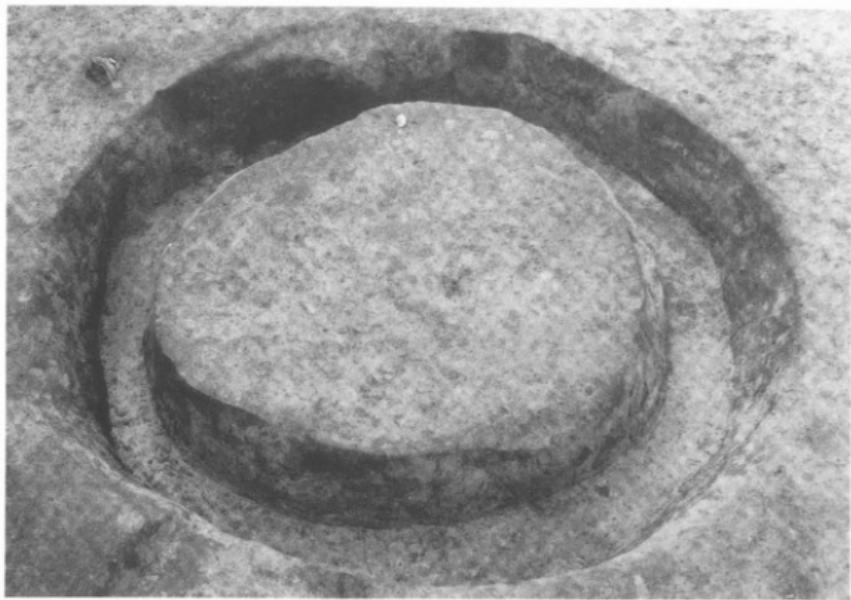
2 凸形周溝状遺構 S X14遺物出土状況（東から）



1 円形周溝状遺構 S X14北西部（東から）



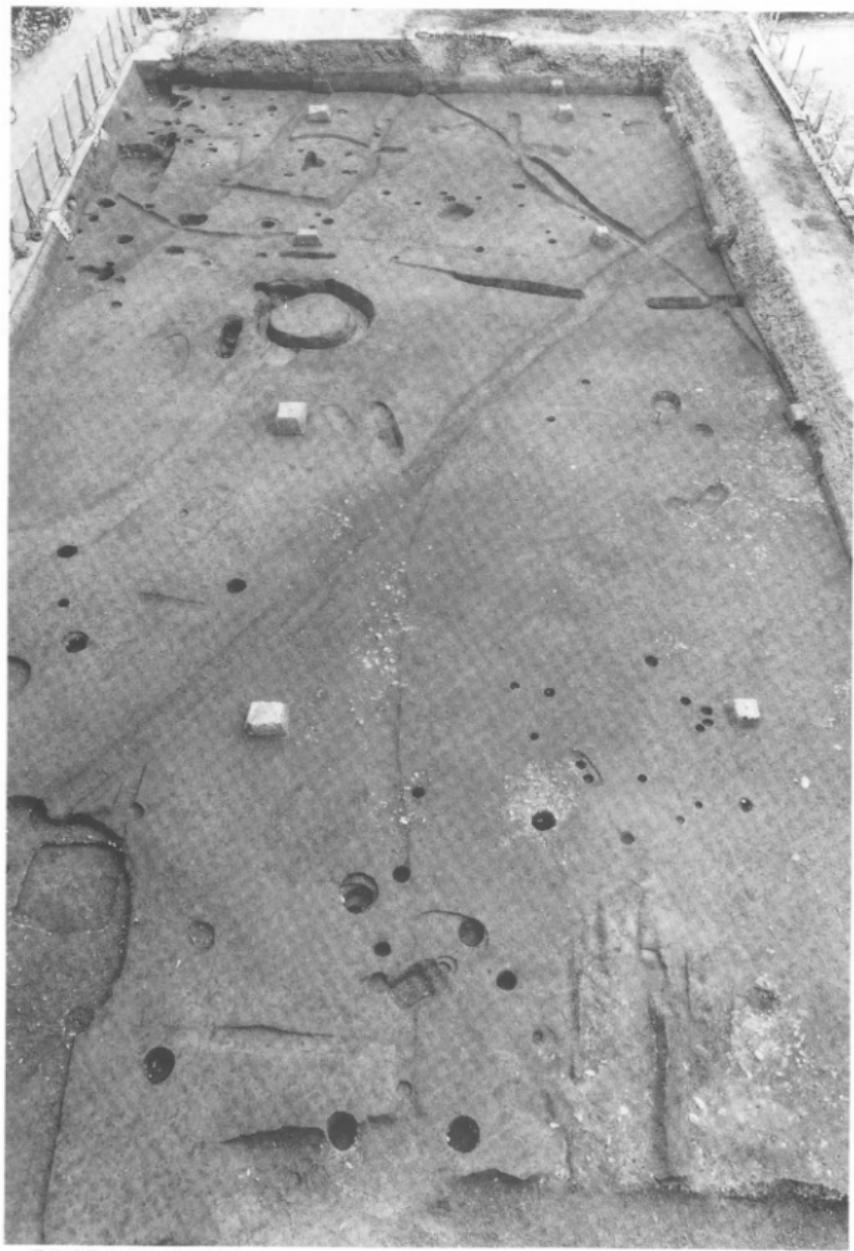
2 円形周溝状遺構 S X14 断面（東から）



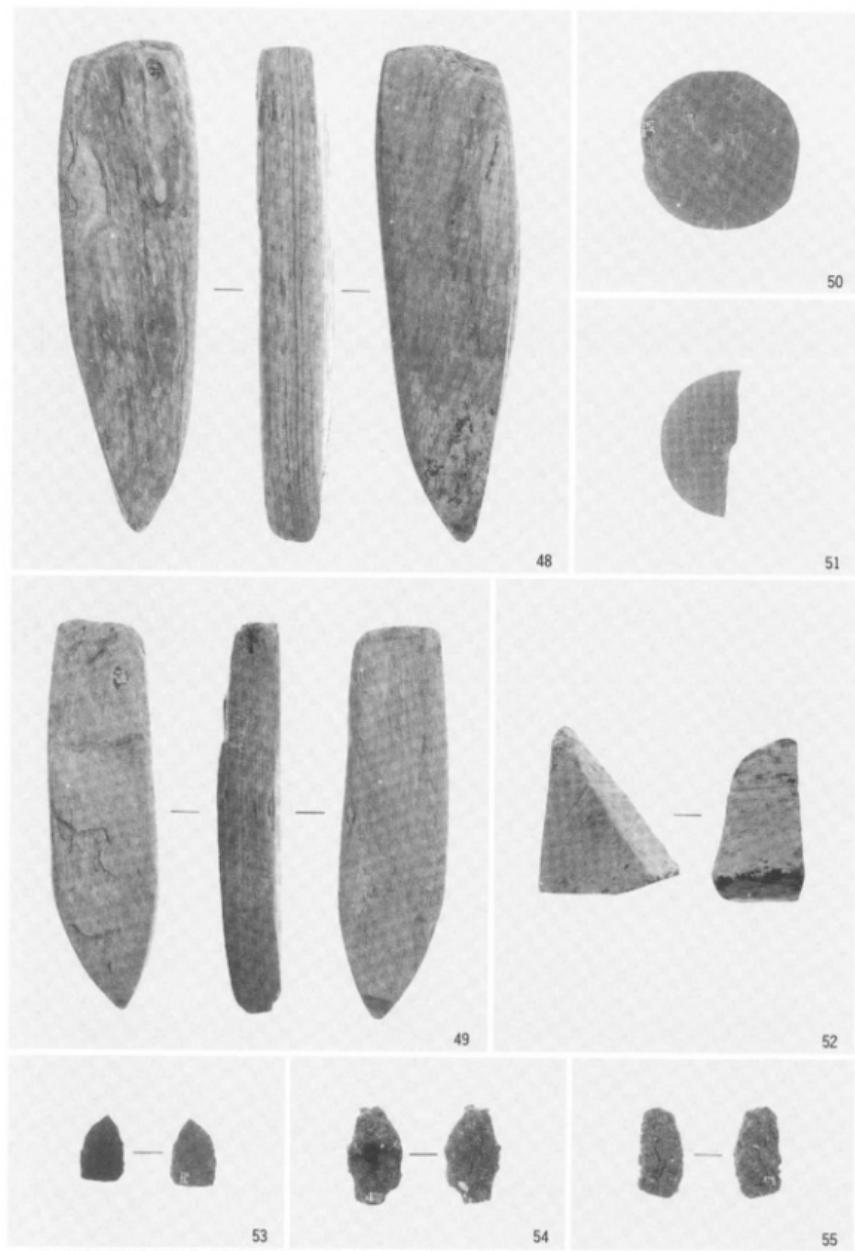
1 円形周溝状遺構 S X14（東から）



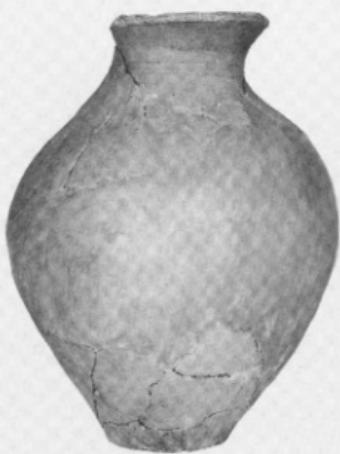
2 弥生時代の遺構（西から）



弥生時代の遺構（東から）



S B 1 出土遺物 (48・49柱狀片刃石斧, 50・51石製紡錘車, 52砥石, 53打製石鎌, 54・55鐵製品) 縮尺 $\frac{1}{2}$



56



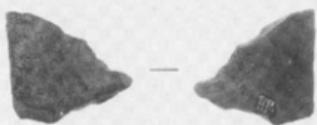
65



66



74



75

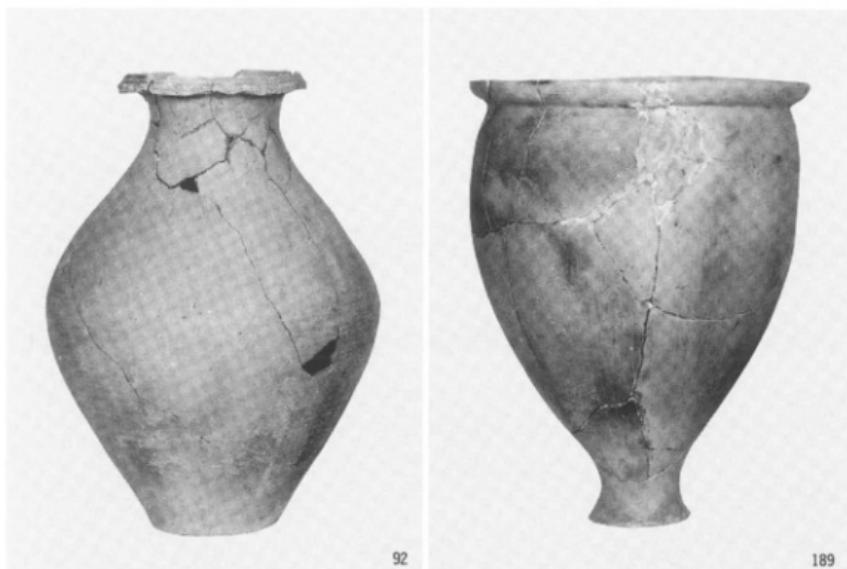


76



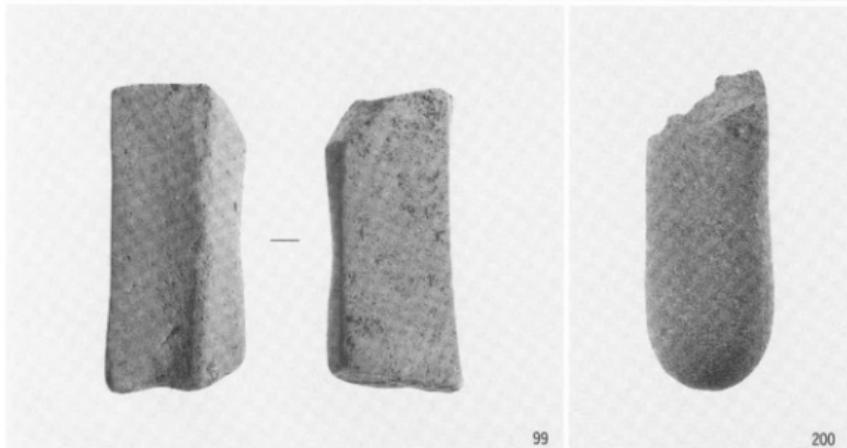
67

S B 3 出土遺物 (56・65~67弥生土器, 74剝片, 75砥石, 76鉄製品) 74~76のみ縮尺½



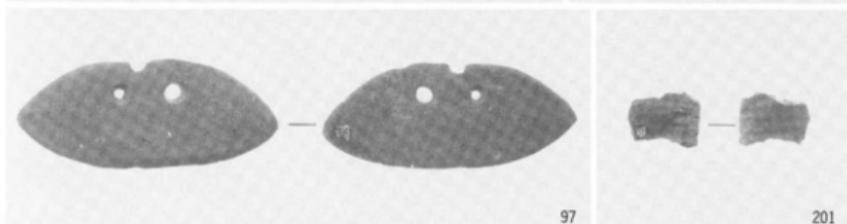
92

189



99

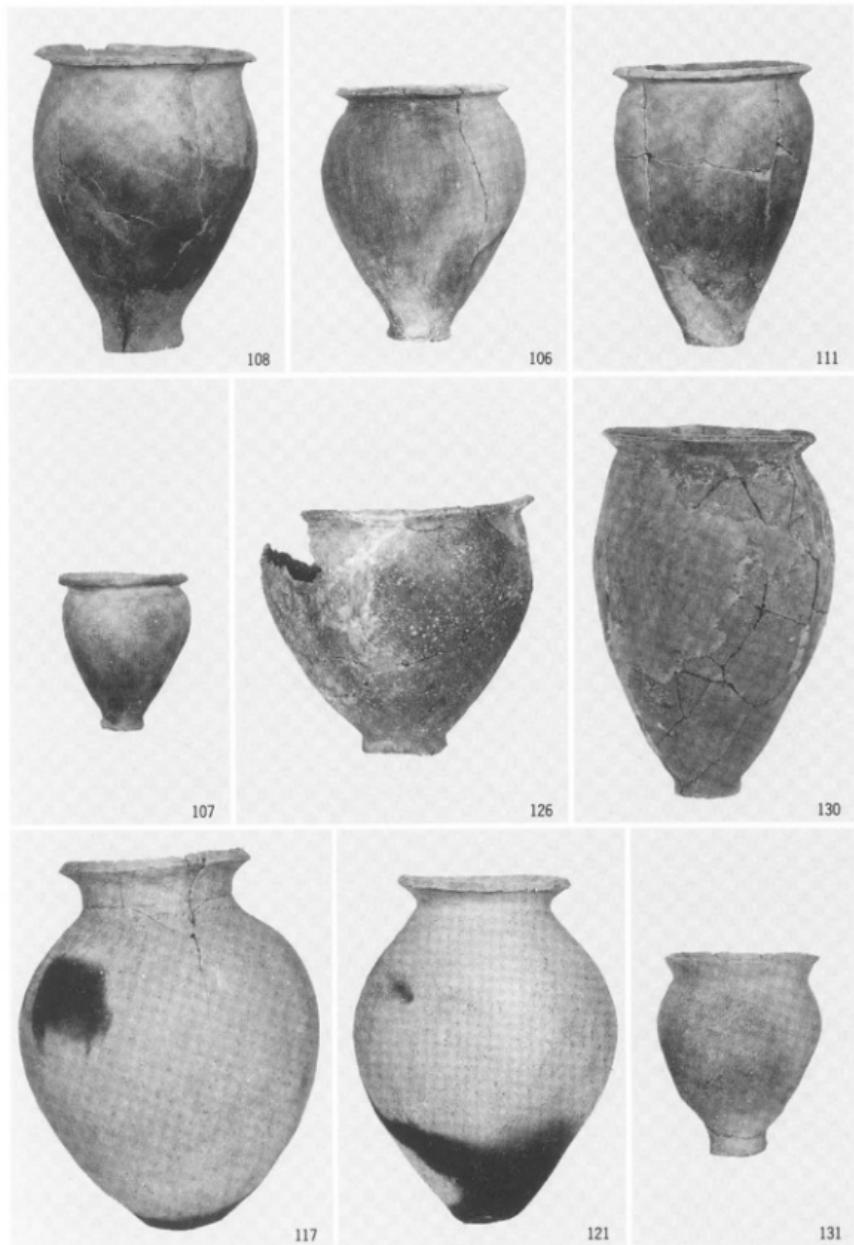
200



97

201

S K 4 出土遺物 (92弥生土器), S K 6 出土遺物 (97石包丁), S K13出土遺物 (99砥石), S D 7 出土遺物 (189弥生土器), S D 13出土遺物 (200砥石, 201剝片) 97・99・200・201のみ縮尺½



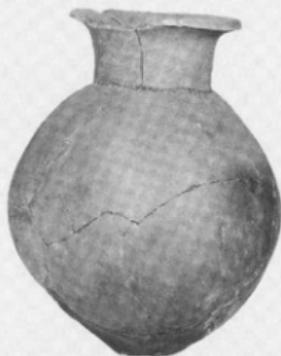
S K15出土遺物 (106~108・111弥生土器), S K11出土遺物 (117・121・126・130・131弥生土器)



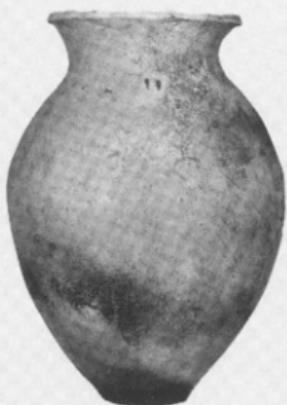
135



136



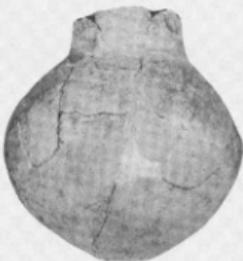
138



137

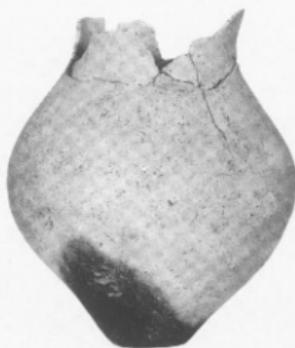


139



141

S X 14出土遺物 (135~139・141弥生土器)



140



156



172



173



174

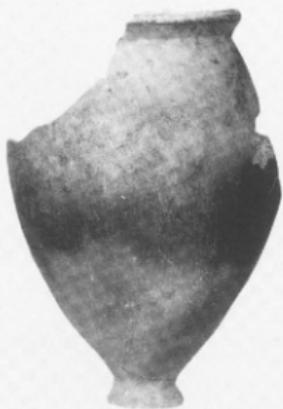


176



171

S×14 出土遺物 (140・156・171~174・176 弥生土器) 156のみ縮尺½



159



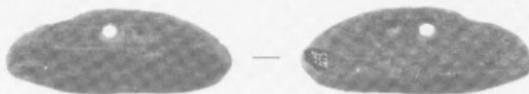
161



160



162

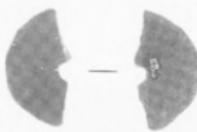


181

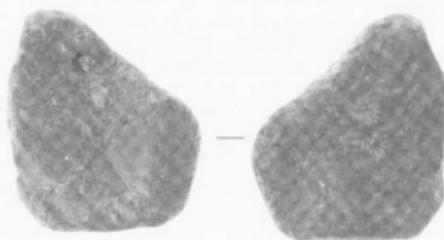
S X14出土遺物 (159~162弥生土器, 181石包丁) 181のみ縮尺½



182



183



184



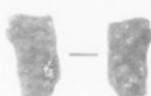
185



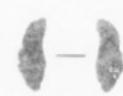
82



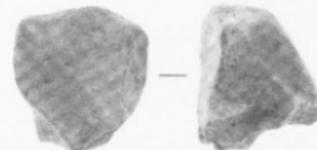
248



228



251



250

S X14出土遺物 (182剝片, 183土製紡錘車, 184砥石, 185鉄製品), S P 107出土遺物 (82弥生土器),
S P 101出土遺物 (248弥生土器), S P 117出土遺物 (250不明石製品), S P 174出土遺物 (251鉄製品),
S D 4出土遺物 (228鉄製品) 82・248以外縮尺%



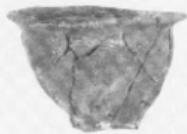
271



273



281



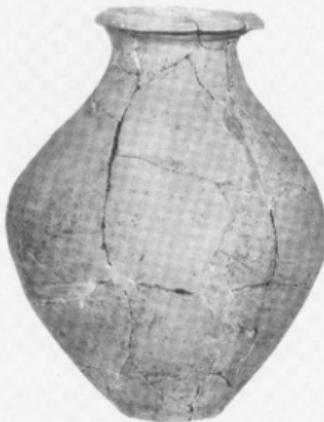
280



278



277



316



318

S X 1 出土遺物 (271・273・277・278・280・281弥生土器), S X 3 出土遺物 (316・318弥生土器)



315



324



352



351



330

S X 3 出土遺物 (315・324・330・351・352 弥生土器)